Informatica®
10.1.1 HotFix 2

リリースガイド

Informatica リリースガイド
10.1.1 HotFix 2
2017 年 10 月

© 著作権 Informatica LLC 2003, 2018

本ソフトウェアおよびマニュアルは、使用および開示の制限を定めた個別の使用許諾契約のもとでのみ提供されています。本マニュアルのいかなる部分も、いかなる手段（電子的複写、写真複写、録音など）によっても、Informatica LLC の事前の承諾なしに複製または転載することは禁じられています。

米政府の権利プログラム、ソフトウェア、データベース、および関連文書や技術データは、米国政府の顧客に配信され、「商用コンピュータソフトウェア」または「商業技術データ」は、該当する連邦政府の取得規制と代理店固有の補足規定に基づきます。このように、使用、複製、開示、変更、および適応は、適用される政府の契約に規定されている制限およびライセンス条項に従うものとし、政府契約の条項によって適当な範囲において、FAR 52.227-19、商用コンピュータソフトウェアライセンスの追加権利を規定します。

Informatica、Informatica ロゴ、PowerCenter、PowerExchange、Big Data Management、および Live Data Map は、米国およびその他の国における Informatica LLC の商標または登録商標です。Informatica の商標の最新リストは、Web（https://www.informatica.com/trademarks.html ）にあります。その他の企業名および製品名は、それぞれの企業の商標または登録商標です。

本ソフトウェアまたはドキュメンテーション（あるいはその両方）の一部は、第三者が保有する著作権の対象となります。必要な第三者の通知は、製品に含まれています。

本マニュアルの情報は、予告なしに変更されることがあります。このドキュメントで問題が見つかった場合は、infa_documentation@informatica.com までご報告ください。

Informatica 製品は、それらが提供される契約の条件に従って保証されます。Informatica は、商品性、特定目的への適合性、非侵害性の保証等を含めて、明示的または黙示的ないかなる種類の保証をせず、本マニュアルの情報を「現状のまま」提供するものとします。

発行日: 2018-07-02

目次

序文 19

Informatica のリソース 19

Informatica Network 19

Informatica ナレッジベース 19

Informatica マニュアル 19

Informatica 製品可用性マトリックス 20

Informatica Velocity 20

Informatica Marketplace 20

Informatica グローバルカスタマサポート 20

第 I 部 : バージョン 10.1.1 21

第 1 章 : 新機能、変更、リリースタスク（10.1.1 HotFix 2） 22

アップグレードサポート 22

新機能（10.1.1 HotFix 2） 22

コマンドラインプログラム（10.1.1 HF2） 22

Informatica トランスフォーメーション 23

PowerExchange アダプタ 26

変更内容（10.1.1 HotFix 2） 27

サポートの変更 27

Informatica トランスフォーメーション 27

第 2 章 : 新機能、変更、リリースタスク（10.1.1 HotFix 1） 29

新製品（10.1.1 HotFix 1） 29

PowerExchange for Cloud Applications 29

新機能（10.1.1 HotFix 1） 29

コマンドラインプログラム 29

Informatica Analyst 30

PowerCenter 31

PowerExchange アダプタ 31

変更内容（10.1.1 HotFix 1） 33

サポートの変更 33

第 3 章 : 新機能、変更、リリースタスク（10.1.1 Update 2） 34

新製品（10.1.1 Update 2） 34

PowerExchange for MapR-DB 34

新機能（10.1.1 Update 2） 34

Big Data Management 35

Enterprise Information Catalog 37

Intelligent Data Lake 37

PowerExchange Adapters for Informatica. 38
変更（10.1.1 Update 2）. 38
サポートの変更. 38
Big Data Management. 39
Enterprise Information Catalog. 40
PowerExchange Adapters for Informatica. 41

第 4 章 : 新機能、変更、リリースタスク（10.1.1 Update 1）. 42
新機能（10.1.1 Update 1）. 42
Big Data Management. 42
変更（10.1.1 Update 1）. 42
PowerExchange Adapters for Informatica. 43
リリースタスク（10.1.1 Update 1）. 43
PowerExchange Adapters for Informatica. 43

第 5 章 : 新製品（10.1.1）. 44
インテリジェントストリーミング. 44
PowerExchange アダプタ. 46
Informatica 用 PowerExchange アダプタ. 46

第 6 章 : 新機能（10.1.1）. 47
アプリケーションサービス. 47
アナリストサービス. 47
Big Data. 48
Blaze エンジン. 48
インストールと環境設定. 49
Spark エンジン. 50
セキュリティ. 51
Sqoop. 52
Business Glossary 52
リッチテキストをプレーンテキストとしてエクスポート. 52
競合しているアセットの場合リッチテキストコンテンツを含める. 53
コマンドラインプログラム. 53
infacmd as コマンド. 53
infacmd dis コマンド. 54
infacmd mrs コマンド. 54
pmrep コマンド. 54
Enterprise Information Catalog. 55
Business Glossary の統合. 55
カラム類似度プロファイリング. 55
データドメインおよびデータドメイングループ. 56
リネージュおよび影響分析. 56
ユーザーおよびユーザーグループの権限. 57

新しいリソースタイプ. 57
シノニム定義ファイル. 57
ユニバーサル接続フレームワーク. 57
Informatica Analyst. 57
プロファイル. 58
Informatica のインストール. 58
Informatica Upgrade Advisor. 58
Intelligent Data Lake. 58
外部ソース内のテーブルのデータプレビュー. 58
外部ソースのテーブルからのデータのインポート. 58
外部ターゲットへのデータのエクスポート. 59
データ準備のためのサンプリング条件の設定. 59
ワークシートでのルックアップの実行. 59
TDE ファイルとしてダウンロードする. 59
Sentry と Ranger のサポート. 59
マッピング 59
Informatica マッピング. 60
Metadata Manager. 60
Cloudera Navigator リソースのデータセットの抽出. 60
Informatica Platform リソースのマッピングの抽出. 60
PowerExchange アダプタ. 60
PowerExchange® Adapters for Informatica. 61
PowerCenter®用 PowerExchange アダプタ. 61
セキュリティ. 63
カスタム Kerberos ライブラリ. 63
Kerberos 対応ドメインでのスケジューラサービスのサポート. 63
Informatica Web アプリケーションへのシングルサインオン. 63
トランスフォーメーション. 63
Informatica トランスフォーメーション. 63
Web サービス 67
Informatica Web サービス 67
ワークフロー. 67
Informatica ワークフロー. 67

第 7 章 : 変更内容（10.1.1） 70

サポートの変更. 70
Big Data Management Hive エンジン. 70
サポートの変更 - Big Data Management の Hadoop ディストリビューション. 71
Big Data Management Spark のサポート. 72
Data Analyzer. 72
オペレーティングシステム. 72
PowerExchange for SAP NetWeaver. 72
レポートおよびダッシュボードサービス. 72

レポートサービス. 72
Big Data. 73
Hadoop 環境でサポートされる関数. 73
Hadoop 設定マネージャ. 74
Business Glossary 74
ファイルのエクスポートに関する制限. 74
データ統合サービス. 75
データ タイプ. 75
Informatica のデータ型. 75
Informatica Analyst. 75
プロファイル. 76
Informatica Developer. 76
プロファイル. 76
マッピング. 76
Informatica マッピング. 76
Enterprise information Catalog. 77
HDFS スキャナの機能強化. 77
［リレーション］ビュー. 77
Metadata Manager. 77
Cloudera Navigator リソース. 77
Netezza リソース. 78
PowerExchange アダプタ. 78
Informatica 用 PowerExchange アダプタ 78
PowerCenter 用 PowerExchange アダプタ 79
トランスフォーメーション. 80
Informatica トランスフォーメーション. 80
ワークフロー. 80
Informatica ワークフロー. 80
マニュアル. 81
Metadata Manager マニュアル. 81
PowerExchange for SAP NetWeaver マニュアル. 81

第 8 章 : リリースタスク（10.1.1） 82
Metadata Manager. 82
ビジネスインテリジェンスリソース. 82
Cloudera Navigator リソース. 82
Tableau リソース. 83

第 II 部 : バージョン 10.1. 84

第 9 章 : 新製品（10.1） 85
Intelligent Data Lake. 85
PowerExchange アダプタ. 88

Informatica 用 PowerExchange アダプタ. 88

第 10 章 : 新機能（10.1）. 89

アプリケーションサービス. 89
システムサービス. 90
Big Data. 90
Hadoop エコシステム. 90
Hadoop セキュリティシステム. 90
Spark ランタイムエンジン. 91
リレーショナルソースとリレーショナルターゲットの Sqoop 接続. 91
Blaze エンジンでのトランスフォーメーションサポート. 91
Business Glossary. 92
すべてのアセットへの用語集コンテンツ管理者の継承. 92
双方向のカスタムリレーション. 92
リレーションビュー図のカスタムカラー. 92
接続性. 93
IBM DB2 接続のスキーマ名. 93
コマンドラインプログラム 93
マニュアル. 98
例外管理. 99
Informatica Administrator. 99
ドメインビュー. 99
監視. 99
Informatica Analyst. 100
プロファイル. 101
Informatica Developer. 101
ソースファイル名の生成. 101
PowerCenter からのインポート. 102
Excel と Developer tool の間でのテキストのコピー. 102
論理データオブジェクト読み取りおよび書き込みマッピングの編集. 102
DDL クエリ. 102
プロファイル. 102
Informatica Development Platform. 103
Live Data Map. 104
電子メール通知. 104
キーワード検索. 104
プロファイリング. 105
スキャナ. 105
マッピング. 105
Informatica マッピング. 105
Metadata Manager. 106
ユニバーサルリソース. 106
Oracle および Teradata リソースの増分ロード. 106

サマリビューでのリソースの非表示. 106
複数のパッケージファイルからの SQL Server 統合サービスリソースの作成. 107
Metadata Manager コマンドラインプログラム. 107
アプリケーションのプロパティ. 107
Business Glossary の監査証跡履歴およびテクニカルメタデータへのリンクの移行. 108
PowerCenter. 108
PowerExchange アダプタ. 108
Informatica 用 PowerExchange アダプタ. 108
PowerExchange Adapters for PowerCenter. 109
セキュリティ. 109
トランスフォーメーション. 110
Informatica トランスフォーメーション. 110
ワークフロー. 112
PowerCenter ワークフロー. 112

第 11 章 : 変更内容（10.1）. 113

サポートの変更 113
アプリケーションサービス. 114
システムサービス. 114
Big Data. 115
Business Glossary. 115
カスタムリレーション. 115
双方向のデフォルトリレーション. 115
管理者リレーション. 115
用語集のワークスペース. 115
Business Glossary Desktop. 116
Business Glossary コマンドプログラムの Kerberos 認証. 116
コマンドラインプログラム. 116
例外管理. 117
Informatica Developer. 117
Live Data Map. 117
Enterprise Information Catalog. 118
Live Data Map Administrator ホームページ. 118
Metadata Manager. 118
Microsoft SQL Server Integration Services リソース. 118
コマンドラインプログラムの証明書検証. 119
PowerCenter. 119
セキュリティ. 119
トランスフォーメーション. 120
Informatica トランスフォーメーション. 120
ワークフロー. 121
Informatica ワークフロー. 121

第 12 章 : リリースタスク（10.1） 123
Metadata Manager 123
Informatica Platform リソース 123
コマンドラインプログラムのトラストストアファイルの検証 123
セキュリティ 124
権限 124

第 III 部 : バージョン 10.0 125

第 13 章 : 新製品（10.0） 126
PowerExchange アダプタ 126
Informatica 用 PowerExchange アダプタ 126

第 14 章 : 新機能（10.0） 128
アプリケーションサービス 128
アプリケーションサービスの無効化とリサイクル 129
データ統合サービス 129
モデルリポジトリサービス 130
システムサービス 131
Big Data 132
Big Data Management 設定ユーティリティ 132
Hadoop 接続 132
Hadoop エコシステム 132
Big Data のパラメータ 133
ランタイムおよび検証環境 133
Business Glossary 134
承認ワークフロー 134
用語集アセットの添付ファイル 134
Long String データ型 135
リッチテキストのサポート 135
インポートとエクスポートの機能拡張 135
電子メール通知 135
リレーションビュー図の改良点 135
Analyst ツール特権 136
ビジネス用語のリンク 136
用語集のセキュリティ 136
アセットビュー 136
デフォルトの承認者 137
コマンドラインプログラム 137
接続性 145
PowerCenter の接続性 145
接続の切り替え 145

データ型. 146
Informatica のデータ型. 146
マニュアル. 148
ドメイン. 148
ノード. 149
Informatica Administrator. 149
［管理］タブ. 149
依存関係グラフ. 151
監視. 151
Informatica Analyst. 154
アセットのバージョン管理. 154
プロファイル. 154
Informatica Developer. 155
DDL の生成と実行. 155
実行時のリレーショナルメタデータおよびフラットファイルメタデータの生成. 155
PowerCenter からのインポート. 156
Monitoring ツール. 156
オブジェクトのバージョン管理. 157
アプリケーションの物理データオブジェクト. 158
プロファイル. 158
Informatica Development Platform. 159
マッピング. 160
Informatica マッピング. 160
Metadata Manager. 165
Tableau リソース. 166
データリネージュの改良点. 166
メタデータカタログビュー. 167
Cloudera Navigator リソースの Impala クエリ. 167
Informatica Platform リソースのパラメータ. 167
最近の履歴. 167
関連するカタログオブジェクトおよび影響のサマリのフィルタおよびソート. 167
影響のサマリ内のセッションタスクインスタンス. 167
アプリケーションおよびデータリネージュプロパティ. 168
PowerCenter. 168
PowerExchange アダプタ. 169
Informatica 用 PowerExchange アダプタ. 169
参照データ. 171
ルール仕様. 171
セキュリティ. 173
グループ. 173
特権. 173
ロール. 173

トランスフォーメーション言語関数. 174
Informatica 関数. 174
トランスフォーメーション. 174
Informatica トランスフォーメーション. 174
ワークフロー. 179
Informatica ワークフロー. 179

第 15 章 : 変更内容（10.0）. 181

インストール. 181
サポートの変更. 182
アプリケーションサービス. 182
アナリストサービス. 182
データ統合サービス. 182
モデルリポジトリサービス. 186
SAP BW サービス. 186
Big Data. 188
Business Glossary. 188
リレーションビュー. 188
アセットのフェーズ. 188
［ライブラリ］ワークスペース. 189
インポートおよびエクスポート. 189
コマンドラインプログラム. 189
ドメイン. 190
ログ. 190
Informatica Administrator. 190
［ドメイン］タブ. 190
監視. 192
Informatica Analyst. 192
プロファイル. 192
スコアカード. 194
Informatica Developer. 194
アプリケーションデプロイメントの変更内容. 194
フラットファイルデータオブジェクト. 195
Microsoft SQL Server の変更内容. 195
論理データオブジェクトの編集. 196
ODBC のソースとターゲットに対するプッシュダウンの最適化. 196
マッピング. 196
パラメータファイル. 196
パーティション化されたマッピング. 197
プッシュダウンの最適化 198
ランタイムプロパティ. 198
Metadata Manager. 198
Informix リソースの ODBC 接続. 198

Microsoft SQL Server リソースの ODBC 接続. 199
PowerCenter オブジェクトの影響のサマリ. 199
最大同時リソースロード. 200
検索. 200
Metadata Manager ログファイルの変更内容. 200
Business Glossary モデル. 201
プロファイリング. 201
PowerCenter. 201
Informix ネイティブ接続. 201
pmrep の変更. 201
PowerCenter データプロファイリング. 202
PowerExchange アダプタ. 202
PowerExchange Adapters for Informatica 202
参照データ. 204
ルール仕様. 205
セキュリティ. 205
認証. 205
ソースおよびターゲット. 206
PowerCenter のソースとターゲット. 206
トランスフォーメーション. 206
Informatica トランスフォーメーション. 206
ワークフロー. 209
Informatica ワークフロー. 209

第 16 章 : リリースタスク（10.0） 213
マッピング. 213
パラメータの精度 213

第 IV 部 : バージョン 9.6.1. 214

第 17 章 : 新機能、変更、リリースタスク（9.6.1 HotFix 4） 215
新機能（9.6.1 HotFix 4）. 215
コマンドラインプログラム. 216
接続性. 217
例外管理. 218
Informatica ドメイン 218
Informatica トランスフォーメーション. 218
Metadata Manager. 219
PowerExchange アダプタ. 220
セキュリティ 221
変更内容（9.6.1 HotFix 4）. 221
バージョン 9.6.1 HotFix 4 のサポートの変更内容. 221
アプリケーションサービス. 221

Informatica ドメイン. 222
Informatica のインストール. 222
Informatica トランスフォーメーション. 222
Metadata Manager. 223
セキュリティの変更内容. 223
リリースタスク（9.6.1 HotFix 4）. 223
Metadata Manager. 224

第 18 章 : 新機能、変更、リリースタスク（9.6.1 HotFix 3）. 225
新機能（9.6.1 HotFix 3）. 225
Business Glossary. 225
Informatica Data Services. 226
Informatica トランスフォーメーション. 226
Metadata Manager. 227
PowerExchange Adapters for PowerCenter. 228
変更内容（9.6.1 HotFix 3）. 229
Business Glossary. 229
Informatica トランスフォーメーション. 230
Metadata Manager. 230
セキュリティ. 232
リリースタスク（9.6.1 HotFix 3）. 232
Metadata Manager. 232

第 19 章 : 新機能、変更、リリースタスク（9.6.1 HotFix 2）. 234
新機能（9.6.1 HotFix 2）. 234
Big Data. 234
Business Glossary. 236
コマンドラインプログラム. 237
Data Quality アクセラレータ. 237
Informatica Developer. 237
Informatica ドメイン. 237
Informatica トランスフォーメーション. 238
Metadata Manager. 240
PowerCenter. 241
PowerExchange 242
PowerExchange アダプタ. 242
ワークフロー. 245
変更内容（9.6.1 HotFix 2）. 245
接続性. 245
Informatica Analyst. 246
Informatica トランスフォーメーション. 246
Metadata Manager. 247
PowerExchange アダプタ. 250

リリースタスク（9.6.1 HotFix 2）. 250
Metadata Manager. 250

第 20 章 : 新機能、変更、およびリリースタスク（9.6.1 HotFix 1）. . . . 251

新機能（9.6.1 HotFix 1）. 251
Big Data. 251
Business Glossary. 252
コマンドラインプログラム. 253
接続性. 253
Data Quality アクセラレータ. 253
マニュアル. 254
Informatica Developer. 254
Informatica ドメイン. 255
Informatica トランスフォーメーション. 255
マッピング. 255
Metadata Manager. 256
PowerCenter. 256
PowerExchange アダプタ. 257
参照データ. 258
ルール仕様. 259
変更内容（9.6.1 HotFix 1）. 259
アプリケーションサービス. 259
Business Glossary. 259
Informatica トランスフォーメーション. 260
Metadata Manager. 260
PowerCenter トランスフォーメーション. 261
PowerExchange. 261
PowerExchange アダプタ. 261
参照データ. 262
リリースタスク（9.6.1 HotFix 1）. 262
PowerExchange アダプタ. 262
Informatica Web クライアントアプリケーション. 263

第 21 章 : 新機能（9.6.1）. 264

アプリケーションサービス. 264
コンテンツ管理サービス. 264
Big Data. 265
Business Glossary. 266
コマンドラインプログラム. 267
マニュアル. 270
Informatica Administrator. 271
Informatica Developer. 272
Informatica Development Platform. 272

Informatica トランスフォーメーション. 272
アドレスバリデータトランスフォーメーション. 272
データプロセッサトランスフォーメーション. 274
一致トランスフォーメーション. 275
SQL トランスフォーメーション. 275
インストーラ. 275
マッピング. 276
Informatica マッピング. 276
Metadata Manager. 276
PowerExchange. 278
リスナサービス. 278
infacmd pwx コマンド. 278
PowerExchange アダプタ. 279
Informatica アダプタ. 279
PowerCenter アダプタ. 280
プロファイルおよびスコアカード. 281
参照データ. 281
ルール仕様. 281
ソースおよびターゲット. 282
Informatica ソースおよびターゲット. 282
PowerCenter のソースとターゲット. 282
トランスフォーメーション言語関数. 282
Informatica 関数. 283

第 22 章 : 変更内容（9.6.1）. 284

Big Data. 284
ドメイン. 284
Informatica トランスフォーメーション. 285
アドレスバリデータトランスフォーメーション. 285
データマスキングトランスフォーメーション. 285
データプロセッサトランスフォーメーション. 285
マッピング. 286
Informatica マッピング. 286
Metadata Manager. 286
PowerCenter トランスフォーメーション. 287
データマスキングトランスフォーメーション. 287
PowerExchange アダプタ. 288
PowerExchange Adapters for PowerCenter. 288
プロファイルおよびスコアカード. 289
ルール仕様. 289
セキュリティ. 289

第 V 部 : バージョン 9.6.0 291

第 23 章 : 新機能と改良点（9.6.0） 292

バージョン 9.6.0 292

Informatica Analyst 292

Informatica インストーラ 293

Informatica Data Explorer 294

Informatica Data Quality 295

Informatica Data Services 299

Informatica Data Transformation 302

Informatica Developer 303

Informatica Development Platform 304

Informatica ドメイン 305

Informatica ドメインのセキュリティ 306

コマンドラインプログラム 308

PowerCenter 311

PowerCenter Big Data Edition 311

PowerCenter Advanced Edition 312

Metadata Manager 312

PowerCenter 用 PowerExchange アダプタ 313

Informatica 用 PowerExchange アダプタ 315

Informatica のマニュアル 317

第 24 章 : Informatica Data Explorer（9.6.0）の変更内容 319

エンタープライズ検出 319

プロファイル結果の確認 319

ルール 320

スコアカード 320

第 25 章 : Informatica Data Quality （9.6.0）の変更内容 321

アドレスバリデータトランスフォーメーション 321

例外レコード管理 321

Informatica Data Director for Data Quality 322

Java トランスフォーメーション 322

マッピングパラメータ 322

一致トランスフォーメーション 323

Microsoft SQL Server へのネイティブ接続 323

ポート対ポートのデータ変換 323

プロファイル結果の確認 323

参照テーブル 324

ルール 324

スコアカード 324

第 26 章 : Informatica Data Services（9.6.0）の変更内容 325
Java トランスフォーメーション 325
Microsoft SQL Server へのネイティブ接続 325
ポート対ポートのデータ変換 326
プロファイル結果の確認 326
ルール 326
スコアカード 326

第 27 章 : Informatica Data Transformation（9.6.0）の変更内容 327
PowerCenter へのマッピングのエクスポート 327
無効な CMConfig ファイル 327

第 28 章 : Informatica ドメイン（9.6.0）の変更内容 328
Informatica サービス 328
アナリストサービス 329
コンテンツ管理サービス 329
データ統合サービス 329
データディレクタサービス 329
Test Data Manager サービス 330
モデルリポジトリサービス特権 330
ドメインセキュリティ 330
サポートされているプラットフォームに変更 331

第 29 章 : PowerCenter（9.6.0）の変更内容 332
Microsoft SQL Server へのネイティブ接続 332
ODBC のソースとターゲットに対するプッシュダウンの最適化 332
リポジトリ接続ファイルのデフォルトの場所 332
リポジトリ接続ファイル 333
オペレーティングシステムのプロファイル用の umask の設定 333

第 30 章 : PowerCenter Big Data Edition（9.6.0）の変更内容 334
Hadoop 環境プロパティファイル 334
ネイティブ環境でのマッピング 334

第 31 章 : Metadata Manager（9.6.0）の変更内容 335
ブラウザサポート 335
Metadata Manager Agent 335
Metadata Manager ビジネス用語集 336
Metadata Manager ドキュメント 336
mmcmd の変更内容 336
Microsoft SQL Server へのネイティブ接続 337
リソースのパスワード変更 338

第 32 章 : Adapters for PowerCenter（9.6.0）の変更内容 339
PowerExchange for Facebook 339
PowerExchange for Hadoop. 339
PowerExchange for LinkedIn. 340
PowerExchange for Microsoft Dynamics CRM. 340
PowerExchange for SAP NetWeaver. 340
PowerExchange for Twitter. 341
PowerExchange for Web Services. 342

第 33 章 : Adapters for Informatica（9.6.0）の変更内容 343
PowerExchange for DataSift. 343
PowerExchange for Facebook 343
PowerExchange for LinkedIn. 344
PowerExchange for Salesforce 344
PowerExchange for SAP NetWeaver. 344
PowerExchange for Twitter. 344
PowerExchange for Web Content-Kapow Katalyst 344

序文

『*Informatica リリースガイド*』では、新機能と拡張機能、バージョン間での動作の変更、および以前のバージョンからアップグレードした後に実行する必要のあるタスクについて説明します。『*Informatica リリースガイド*』は新機能と変更された動作に関心を持つすべてのユーザーを対象として書かれています。 このガイドは、読者が使用する機能について知識があることを前提としています。

Informatica のリソース

Informatica Network

Informatica Network は、 Informatica グローバルカスタマサポート、Informatica ナレッジベースなどの製品リソースをホストします。Informatica Network には、https://network.informatica.com からアクセスしてください。

メンバーは以下の操作を行うことができます。

- 1 つの場所からすべての Informatica のリソースにアクセスできます。
- ドキュメント、FAQ、ベストプラクティスなどの製品リソースをナレッジベースで検索できます。
- 製品の提供情報を表示できます。
- 自分のサポート事例を確認できます。
- 最寄りの Informatica ユーザーグループネットワークを検索して、他のユーザーと共同作業を行えます。

Informatica ナレッジベース

ドキュメント、ハウツー記事、ベストプラクティス、PAM などの製品リソースを Informatica Network で検索するには、Informatica ナレッジベースを使用します。

ナレッジベースには、https://kb.informatica.com からアクセスしてください。ナレッジベースに関する質問、コメント、ご意見の連絡先は、Informatica ナレッジベースチーム（KB_Feedback@informatica.com）です。

Informatica マニュアル

使用している製品の最新のドキュメントを取得するには、https://kb.informatica.com/_layouts/ProductDocumentation/Page/ProductDocumentSearch.aspx にある Informatica ナレッジベースを参照してください。

このマニュアルに関する質問、コメント、ご意見の電子メールの送付先は、Informatica マニュアルチーム（infa_documentation@informatica.com）です。

Informatica 製品可用性マトリックス

製品可用性マトリックス（PAM）には、製品リリースでサポートされるオペレーティングシステム、データベースなどのデータソースおよびターゲットが示されています。Informatica Network メンバである場合は、PAM（https://network.informatica.com/community/informatica-network/product-availability-matrices）にアクセスできます。

Informatica Velocity

Informatica Velocity は、Informatica プロフェッショナルサービスによって開発されたヒントおよびベストプラクティスのコレクションです。数多くのデータ管理プロジェクトの経験から開発された Informatica Velocity には、世界中の組織と協力して優れたデータ管理ソリューションの計画、開発、展開、および維持を行ってきた弊社コンサルタントの知識が集約されています。

Informatica Network メンバである場合は、Informatica Velocity リソース（http://velocity.informatica.com）にアクセスできます。

Informatica Velocity についての質問、コメント、またはアイデアがある場合は、ips@informatica.com から Informatica プロフェッショナルサービスにお問い合わせください。

Informatica Marketplace

Informatica Marketplace は、お使いの Informatica 製品を強化したり拡張したりするソリューションを検索できるフォーラムです。Informatica の開発者およびパートナーの何百ものソリューションを利用して、プロジェクトで実装にかかる時間を短縮したり、生産性を向上させたりできます。Informatica Marketplace には、https://marketplace.informatica.com からアクセスできます。

Informatica グローバルカスタマサポート

Informatica Network の電話またはオンラインサポートからグローバルカスタマサポートに連絡できます。

各地域の Informatica グローバルカスタマサポートの電話番号は、Informatica Web サイト（http://www.informatica.com/us/services-and-training/support-services/global-support-centers）を参照してください。

Informatica Network メンバである場合は、オンラインサポート（http://network.informatica.com）を使用できます。

パート I: バージョン 10.1.1

この部には、以下の章があります。

- 新機能、変更、リリースタスク（10.1.1 HotFix 2）, 22 ページ
- 新機能、変更、リリースタスク（10.1.1 HotFix 1）, 29 ページ
- 新機能、変更、リリースタスク（10.1.1 Update 2）, 34 ページ
- 新機能、変更、リリースタスク（10.1.1 Update 1）, 42 ページ
- 新製品（10.1.1）, 44 ページ
- 新機能（10.1.1）, 47 ページ
- 変更内容（10.1.1）, 70 ページ
- リリースタスク（10.1.1）, 82 ページ

第 1 章

新機能、変更、リリースタスク（10.1.1 HotFix 2）

この章では、以下の項目について説明します。

- アップグレードサポート, 22 ページ
- 新機能（10.1.1 HotFix 2）, 22 ページ
- 変更内容（10.1.1 HotFix 2）, 27 ページ

アップグレードサポート

バージョン 10.1.1 HotFix 2 では、PowerCenter や Data Quality などの、従来の Informatica 製品でのアップグレードのみがサポートされます。

ビッグデータ製品を実行するドメインに、HotFix を適用することはできません。ビッグデータ製品には、Big Data Management、Big Data Quality、Enterprise Information Catalog、Intelligent Data Lake、Big Data Parser、および Intelligent Streaming があります。

従来の製品とビッグデータ製品を同じドメイン内で実行する場合は、HotFix を適用する前にドメインを分割する必要があります。ドメインを分割する場合、ビッグデータ製品と従来の製品を個別のドメインで実行できるようにするために、ドメインのコピーを作成します。ドメイン内の各マシン上でノードを複製します。また、従来の製品とビッグデータ製品の両方に共通するサービスも複製します。ドメインの分割後、従来の製品を実行するドメインに Hotfix を適用できます。

注: モデルリポジトリがサードパーティのバージョン管理システムと統合されている場合は、ドメインを分割できません。

注: Informatica のビッグデータ製品は 10.1.1 HotFix 2 でサポートされませんが、ドキュメントには、Hadoop とその他のビッグデータ用語への参照が含まれます。

新機能（10.1.1 HotFix 2）

ここでは、バージョン 10.1.1 HotFix 2 の新しい機能について説明します。

コマンドラインプログラム（10.1.1 HF2）

ここでは、バージョン 10.1.1 HotFix 2 の新しいコマンドについて説明します。

infasetup コマンド（10.1.1 HF2）

次の表に、新しい infasetup コマンドの説明を示します。

コマンド	説明
updateDomainName	ドメイン名を変更します。

詳細については、 *『Informatica 10.1.1 HotFix 2 コマンドリファレンス』の「infasetup コマンドリファレンス」の章を参照してください。*

Informatica トランスフォーメーション

ここでは、バージョン 10.1.1 HotFix 2 の新しいトランスフォーメーション機能について説明します。

アドレスバリデータトランスフォーメーション

ここでは、アドレスバリデータトランスフォーメーションの新機能について説明します。

アドレスバリデータトランスフォーメーションでは、次の国について住所機能が追加されました。

オーストリア

バージョン 10.1.1 HotFix 2 では、アドレスバリデータトランスフォーメーションを設定して、2 つの有効な所在地住所があるメールボックスの郵便アドレスコード識別子を返すことができます。例えば、2 つの道路の交差点にある建物は、両方の道路の住所を持つ場合があります。その建物は、いずれかの住所でメールを受け取るようにすることができます。もう 1 つのアドレスは、有効なままですが、郵便事業者はメールの配達に使用しません。

オーストリアポストは、両方の住所に郵便アドレスコードを割り当てます。オーストリアポストは、さらに、メールを受け取らない住所に郵便アドレスコード識別子を割り当てます。郵便アドレスコード識別子は、優先アドレスの郵便アドレスコードと同じです。郵便アドレスコード識別子を使用して、アドレスバリデータトランスフォーメーションの優先アドレスを検索できます。

オーストリアの住所の郵便アドレスコード識別子を検索するには、郵便アドレスコード識別子 AT 出力ポートを選択します。このポートは［AT 補足］ポートグループにあります。

郵便アドレス識別子が表す住所を検索するには、郵便アドレスコード識別子 AT 入力ポートを選択します。このポートは［個別］ポートグループにあります。

チェコ共和国

バージョン 10.1.1 HotFix 2 では、有効なチェコ共和国に RUIAN ID 値を追加するように、アドレスバリデータトランスフォーメーションを設定できます。

次の RUIAN ID 値があります。

- RUIANAM_ID。配達場所を一意に識別します。
  配達場所を一意に識別する RUIAN ID 値を検索するには、RUIAN 配達場所識別子出力ポートを選択します。
- RUIANSO_ID。建物レベルに対する住所を識別します。
  建物レベルに対する住所を識別する RUIAN ID 値を検索するには、RUIAN 建物識別子出力ポートを選択します。
- RUIANTEA_ID。建物の入口を識別します。
  建物への入口を識別する RUIAN ID 値を検索するには、RUIAN 建物入口識別出力ポートを選択します。

これらのポートは［CZ 補足］ポートグループにあります。

香港

アドレスバリデータトランスフォーメーションには、香港に関する次の機能が含まれています。

香港の住所の多言語サポート

バージョン 10.1.1 HotFix 2 では、アドレスバリデータトランスフォーメーションは、中国語または英語で香港の住所の読み取りおよび書き込みをすることができます。

トランスフォーメーションによって返されるアドレスに優先される言語を選択するには、[優先される言語] プロパティを使用します。デフォルトの言語は中国語です。香港の住所を英語で返すには、プロパティを英語に更新します。

アドレスデータに優先される文字セットを選択するには、[優先されるスクリプト] プロパティを使用します。デフォルトの文字セットは、繁体字です。香港の住所をラテン文字で返すには、プロパティをラテンまたは ASCII オプションに更新します。ラテン語スクリプトを選択すると、アドレス検証によってアドレスデータがピンイン式に変換されます。

提案リストモードでの単一行アドレス検証

バージョン 10.1.1 HotFix 2 では、単一行に入力した香港の住所に対して有効な提案を返すように、アドレスバリデータトランスフォーメーションを設定できます。提案を返すには、提案リストモードで実行するようにトランスフォーメーションを設定します。

ネイティブの中国語および繁体字スクリプトで住所を入力します。アドレスバリデータトランスフォーメーションは、繁体字スクリプトで住所を読み取り、繁体字スクリプトで住所提案を返します。

香港の住所を次の形式で入力します。

[地域] [市区町村] [通り] [住居番号] [建物 1] [建物 2] [建物内]

住所の一部を入力すると、トランスフォーメーションにより、入力した住所に対する住所提案が 1 つ以上返されます。完全な住所またはほぼ完全な住所を入力すると、トランスフォーメーションは、入力する住所に対する提案を 1 つ返します。

1 行の住所を確認するには、[住所の正式表記] ポートを使用します。

マカオ

バリデータトランスフォーメーショントランスフォーメーションには、マカオに関する次の機能が含まれています。

マカオの住所の多言語サポート

バージョン 10.1.1 HotFix 2 では、アドレスバリデータトランスフォーメーションは、中国語またはポルトガル語でマカオの住所の読み取りおよび書き込みをすることができます。

トランスフォーメーションによって返されるアドレスに優先される言語を選択するには、[優先される言語] プロパティを使用します。デフォルトの言語は中国語です。ポルトガル語でマカオの住所を返すには、プロパティを ALTERNATIVE_2 に更新します。

アドレスデータに優先される文字セットを選択するには、[優先されるスクリプト] プロパティを使用します。デフォルトの文字セットは、繁体字です。マカオの住所をラテン文字で返すには、プロパティをラテンまたは ASCII オプションに更新します。

注: デフォルトの優先言語オプションを使用してラテン語スクリプトを選択すると、アドレス検証によって中国語の住所データが広東語または繁体北京語に変換されます。ALTERNATIVE_2 優先言語オプションを使用してラテン語スクリプトを選択すると、アドレス検証はポルトガル語で住所を返します。

提案リストモードのネイティブのマカオの住所に対する単一行のアドレス検証

バージョン 10.1.1 HotFix 2 では、提案リストモードで単一行に入力したマカオの住所に対して有効な提案を返すように、アドレスバリデータトランスフォーメーションを設定できます。住所の一部を提案リストモードに入力すると、トランスフォーメーションにより、入力した住所に対する住所提案が 1 つ以上返さ

れます。中国語および繁体字スクリプトで住所を送信します。トランスフォーメーションは、中国語および繁体字スクリプトの住所提案を返します。マカオの住所を次の形式で入力します。

［市区町村］［通り］［住居番号］［建物］

［優先される言語］プロパティを使用して、住所に優先される言語を選択します。デフォルトの優先される言語は中国語です。アドレスデータに優先される文字セットを選択するには、［優先されるスクリプト］プロパティを使用します。デフォルトの優先されるスクリプトは、繁体字です。単一行の住所を確認するには、［住所の正式表記］ポートに住所を入力します。

台湾

バージョン 10.1.1 HotFix 2 では、中国語または英語で台湾の住所を返すようにアドレスバリデータトランスフォーメーションを設定できます。

トランスフォーメーションによって返されるアドレスに優先される言語を選択するには、［優先される言語］プロパティを使用します。デフォルトの言語は繁体字中国語です。英語で台湾の住所を返すには、プロパティを英語に更新します。

アドレスデータに優先される文字セットを選択するには、［優先されるスクリプト］プロパティを使用します。デフォルトの文字セットは、繁体字です。台湾の住所をラテン文字で返すには、プロパティをラテンまたは ASCII オプションに更新します。

注: ネイティブスクリプトの台湾アドレス構造により、すべてのアドレス要素が単一行で一覧表示されます。住所は、［フォーマットされたアドレス行］ポートに 1 つの文字列として入力できます。

入力住所を書式設定する場合は、次の順序で住所に要素を入力します。

郵便番号、市区町村、従属する市区町村、町名、下位の町名、住宅または建物の番号、建物名、棟名

米国

アドレスバリデータトランスフォーメーションには、米国に関する次の機能が含まれています。

セキュアなハッシュアルゴリズムに準拠したバージョンの CASS **データファイルのサポート**

バージョン 10.1.1 HotFix 2 では、アドレスバリデータトランスフォーメーションは、SHA-256 標準に準拠した CASS 認証データファイルを読み取ります。

現在の CASS 認証ファイルの番号は、 USA5C101.MD から USA5C126.MD までです。認定モードの米国の住所を確認するには、現在のファイルを使用する必要があります。

注: SHA-256 準拠ファイルは、古いバージョンの Informatica と互換性がありません。

認証モードで Do Not Accessible（DNA）**の住所のサポート**

バージョン 10.1.1 HotFix 2 では、郵便事業者にドアまたはエントリポイントを提供しない米国の住所を識別するために、アドレスバリデータトランスフォーメーションを設定することができます。郵便事業者は、その住所に大きなアイテムを配達できない場合があります。

米国郵政公社では、メールボックスにアクセス可能ではあるが、物理的な入口に到達できない住所のリストを保持します。例えば、住宅がロックされたゲートの外側または地方集配路線にメールボックスを置いていることがあります。アドレス参照データには、USPS が認識するアクセスできない住所のリストが含まれています。アドレス検証は、認証モードで住所を確認するときに、住所のアクセス可能な状態を返すことができます。

DNA の住所を識別するには、［配達場所検証（DNA）］ポートを選択します。このポートは［米国特有］ポートグループにあります。

認証モードでのセキュアでない場所の住所のサポート

バージョン 10.1.1 HotFix 2 では、メールのセキュアなメールボックスまたは受信ポイントを提供しない米国のアドレスを識別するために、アドレスバリデータトランスフォーメーションを設定できます。郵便事業者は、その住所に大きなアイテムを配達できない場合があります。

米国郵便サービスは、メールボックスがセキュアでない住所の一覧を保持します。例えば、郵便事業者がストアに入ることができてもメールを受け取るメールボックスや従業員を見つけることができない場合、小売店はセキュアな場所ではありません。住所参照データには、USPS が認識するセキュアでない住所のリストが含まれています。アドレス検証は、認証モードで住所を確認するときに、住所のセキュアでない状態を返すことができます。

DNA の住所を識別するには、[配達場所検証（セキュアでない住所）] ポートを選択します。このポートは [米国特有] ポートグループにあります。

私書箱のみの配達ゾーンのサポート

バージョン 10.1.1 HotFix 2 では、私書箱のみでその他の住所がない郵便番号を識別するように、アドレスバリデータトランスフォーメーションを設定することができます。郵便番号内のすべての住所が私書箱の住所である場合、郵便番号は私書箱のみの配達ゾーンを表します。

アドレスバリデータトランスフォーメーションは、値 Y を住所に追加して、私書箱のみの配達ゾーンの郵便番号が含まれていることを示します。この値により、郵便事業者はメールをより簡単にソートすることができます。例えば、私書箱のみの配達ゾーン内のメールボックスは、1 つ郵便局のビルに存在する場合があります。郵便事業者は、1 回ですべての郵便物を私書箱のみの配達ゾーンに届けることができます。

私書箱のみの配達ゾーンを識別するには、[私書箱配達ゾーンインジケータ] ポートを選択します。このポートは [米国特有] ポートグループにあります。

詳細については、 *『Informatica 10.1.1 HotFix 2 Developer トランスフォーメーションガイド』* および *『Informatica 10.1.1 HotFix 2 アドレスバリデータポートリファレンス』* を参照してください。

PowerExchange アダプタ

ここでは、バージョン 10.1.1 の新しい PowerExchange アダプタ機能について説明します。HotFix 2

PowerExchange Adapters for PowerCenter(R)

ここでは、バージョン 10.1.1 HotFix 2 の新しい PowerCenter アダプタ機能について説明します。

PowerExchange for Amazon S3

ここでは、バージョン 10.1.1 HotFix 2 の新しい PowerExchange for Amazon S3 機能について説明します。

- Amazon S3 からデータを読み取る際にヘッダとして使用する行を指定できます。ソースセッションプロパティの **［ヘッダ行番号］** プロパティで行番号を指定できます。
- PowerCenter 統合サービスでデータを読み取る場所から行番号を指定できます。ソースセッションプロパティで **［行からデータをインポート］** プロパティを設定できます。

詳細については、 *『Informatica PowerExchange for Amazon S3 10.1.1 HotFix 2 ユーザーガイド（PowerCenter 用）』* を参照してください。

PowerExchange for Microsoft Dynamics CRM

ここでは、バージョン 10.1.1 HotFix 2 の新しい PowerExchange for Microsoft Dynamics CRM 機能について説明します。

- Microsoft Dynamics CRM からレコードを削除するための代替キーを指定できます。
- Lookup、Customer、Owner、および PartyList の各データ型の参照として代替キーを使用できます。

詳細については、 *『Informatica PowerExchange for Microsoft Dynamics CRM 10.1.1 HotFix 2 ユーザーガイド（PowerCenter 用）』* を参照してください。

変更内容（10.1.1 HotFix 2）

ここでは、バージョン 10.1.1 HotFix 2 の変更内容について説明します。

サポートの変更

ここでは、バージョン 10.1.1 HotFix 2 の変更内容について説明します。

オペレーティングシステム

バージョン 10.1.1 HotFix 2 以降、次のオペレーティングシステムサポートの変更が実装されます。

オペレーティングシステム	サポートの変更
Microsoft Windows Server 2016	サポートの追加
AIX 7.2	サポートの追加
AIX 6.1	サポートの終了

Informatica トランスフォーメーション

ここでは、10.1.1 HotFix 2 で変更されたトランスフォーメーションの動作について説明します。

アドレスバリデータトランスフォーメーション

ここでは、アドレスバリデータトランスフォーメーションの変更内容について説明します。

アドレスバリデータトランスフォーメーションには、アドレス機能についての次の更新が含まれます。

すべての国

バージョン 10.1.1 HotFix 2 では、アドレスバリデータトランスフォーメーションは、バージョン 5.11.0 の Informatica アドレス検証ソフトウェアエンジンを使用します。このエンジンによって、バージョン 10.1.1 HotFix 2 のアドレスバリデータトランスフォーメーションに追加された機能が有効になります。

以前に、トランスフォーメーションではバージョン 5.9.0 の Informatica アドレス検証ソフトウェアエンジンを使用していました。

日本

バージョン 10.1.1 HotFix 2 では、1 つのマッピングを設定して、日本の現在の住所の町名字コードを返すことができます。コードを返すには、現在の町名字コード JP ポートを選択します。このコードを使用して、日本郵便が認識している従来の住所の現在のバージョンを見つけることができます。

以前は、新しい町名字コード JP ポートを使用して、住所の町名字コードに増分変更を返していました。トランスフォーメーションには、現在の町名字コード JP ポートは含まれていませんでした。現在の町名字コードと対応する住所を確認するために、2 つ以上のマッピングを設定する必要がありました。

英国

バージョン 10.1.1 HotFix 2 では、アドレスバリデータトランスフォーメーションを設定して、英国王立郵便局の郵便番号ファイルから郵便、行政、および従来のカウンティ情報を返すことができます。トランスフォーメーションは、州ポートの情報を返します。

以前は、トランスフォーメーションは、情報が郵送に関連している場合に郵便カウンティ情報を返していました。

以下の表に、各情報タイプに対して選択できるポートを示します。

カウンティの情報タイプ	アドレス要素
郵便	州 1
行政	州 2
従来	州 3

複数国で更新された認証基準

バージョン 10.1.1 HotFix 2 では、アドレス検証ソフトウェアの次の認証基準をサポートしています。

- オーストラリア郵政公社からの Address Matching Approval System（AMAS）。サイクル 2017 に更新されました。
- ニュージーランド郵政公社からの SendRight 認証。サイクル 2017 に更新されました。
- カナダ郵政省からの Software Evaluation and Recognition Program（SERP）。サイクル 2017 に更新されました。

Informatica では、米国郵政公社からの Coding Accuracy Support System（CASS）基準とフランス郵政公社からの Service National de L'Adresse（SNA）基準の現在のバージョンを引き続きサポートしています。

詳細については、 *『Informatica 10.1.1 HotFix 2 Developer トランスフォーメーションガイド』* および *『Informatica 10.1.1 HotFix 2 アドレスバリデータポートリファレンス』* を参照してください。

Informatica アドレス検証ソフトウェアエンジンのバージョン 5.9.0 からバージョン 5.11.0 への更新に関する包括的な情報については、 *『Informatica アドレス検証 5.11.0 リリースガイド』を参照してください。*

第 2 章

新機能、変更、リリースタスク（10.1.1 HotFix 1）

この章では、以下の項目について説明します。

- 新製品（10.1.1 HotFix 1）, 29 ページ
- 新機能（10.1.1 HotFix 1）, 29 ページ
- 変更内容（10.1.1 HotFix 1）, 33 ページ

新製品（10.1.1 HotFix 1）

ここでは、バージョン 10.1.1 HotFix 1 の新製品について説明します。

PowerExchange for Cloud Applications

バージョン 10.1.1 HotFix 1 では、PowerExchange for Cloud Applications を使用して、PowerCenter から Informatica Cloud に接続できます。Informatica Cloud で使用可能な接続のデータソースに対してデータの読み取りまたは書き込みを行うことができます。PowerCenter では、それぞれのクラウドアプリケーションに対して PowerExchange を持つ必要はありません。

詳細については、『*Informatica PowerExchange for Cloud Applications 10.1.1 HotFix 1 ユーザーガイド*』を参照してください。

新機能（10.1.1 HotFix 1）

ここでは、バージョン 10.1.1 HotFix 1 の新しい機能について説明します。

コマンドラインプログラム

ここでは、バージョン 10.1.1 HotFix 1 の新しいコマンドについて説明します。

infacmd dis コマンド（10.1.1 HF1）

以下の表に、新しい infacmd dis コマンドの説明を示します。

コマンド	説明
disableMappingValidationEnvironment	データ統合サービスにデプロイされたマッピングのマッピング検証環境を無効にします。
enableMappingValidationEnvironment	データ統合サービスにデプロイされたマッピングのマッピング検証環境を有効にします。
setMappingExecutionEnvironment	データ統合サービスにデプロイされたマッピングのマッピング実行環境を指定します。

詳細については、『*Informatica 10.1.1 HotFix1 コマンドリファレンス*』の「infacmd dis コマンドリファレンス」の章を参照してください。

infacmd mrs コマンド（10.1.1 HF1）

以下の表に、新しい infacmd mrs コマンドの説明を示します。

コマンド	説明
disableMappingValidationEnvironment	Developer tool で実行したマッピングのマッピング検証環境を無効にします。
enableMappingValidationEnvironment	Developer tool で実行したマッピングのマッピング検証環境を有効にします。
setMappingExecutionEnvironment	Developer tool で実行したマッピングのマッピング実行環境を指定します。

詳細については、『*Informatica 10.1.1 HotFix1 コマンドリファレンス*』の「infacmd mrs コマンドリファレンス」の章を参照してください。

infacmd ps コマンド

以下の表に、新しい infacmd ps コマンドの説明を示します。

コマンド	説明
restoreProfilesAndScorecards	プロファイルとスコアカードを以前のバージョンからバージョン 10.1.1 HotFix 1 にリストアします。

詳細については、『Informatica 10.1.1 HotFix 1 コマンドリファレンス』の「infacmd ps コマンドリファレンス」の章を参照してください。

Informatica Analyst

ここでは、バージョン 10.1.1 HotFix 1 の新しい Analyst ツール機能について説明します。

プロファイルおよびスコアカード

ここでは、プロファイルおよびスコアカードで使用できる Analyst ツールの新機能について説明します。

無効な行のワークシート

バージョン 10.1.1 HotFix1 では、**［ファイルにデータをエクスポートする］**ダイアログボックスで**［データ］** > **［すべて］**オプションを選択すると、スコアカードのエクスポート結果に無効なソース行が含まれます。

スコアカードの詳細については、『*Informatica 10.1.1 HotFix1 データ検出ガイド*』の「Informatica Analyst のスコアカード」の章を参照してください。

PowerCenter

ここでは、バージョン 10.1.1 HotFix 1 の新しい PowerCenter 機能について説明します。

Greenplum のプッシュダウンの最適化

バージョン 10.1.1 HotFix 1 では、接続タイプが ODBC の場合、PowerCenter 統合サービスは、ソース側および完全なプッシュダウンの最適化を使用して、TRUNC(DATE)、CONCAT()、TO_CHAR(DATE)関数を Greenplum にプッシュできます。

詳細については、『*Informatica PowerCenter 10.1.1 HotFix 1 上級ワークフローガイド*』を参照してください。

Microsoft Azure SQL Data Warehouse のプッシュダウンの最適化

バージョン 10.1.1 HotFix 1 では、接続タイプが ODBC の場合は、ソース側または完全なプッシュダウンの最適化を設定して、トランスフォーメーションロジックを Microsoft Azure SQL データウェアハウスにプッシュすることができます。

詳細については、『*Informatica PowerCenter 10.1.1 HotFix 1 上級ワークフローガイド*』を参照してください。

PowerExchange アダプタ

ここでは、バージョン 10.1.1 HotFix 1 の新しい PowerExchange アダプタ機能について説明します。

PowerCenter(R)用 PowerExchange アダプタ

ここでは、バージョン 10.1.1 HotFix 1 の新しい PowerCenter アダプタ機能について説明します。

PowerExchange for Amazon Redshift

ここでは、バージョン 10.1.1 HotFix 1 の新しい PowerExchange for Amazon Redshift 機能について説明します。

- 次のリージョンに対してデータを読み取りおよび書き込みできます。
  - アジアパシフィック（ムンバイ）
  - カナダ（中部）
  - 米国東部（オハイオ）
- PowerExchange for Amazon Redshift はアスタリスクのプッシュダウン演算子（*）をサポートします。この演算子は、ソース側、ターゲット側、または完全なプッシュダウンの最適化を使用して Amazon Redshift データベースにプッシュできます。
- クライアント側およびサーバー側の暗号化用に、接続の AWS キー管理サービス（AWS KMS）によって生成される顧客マスタキー ID を設定できます。

詳細については、『*Informatica 10.1.1 HotFix 1 PowerExchange for Amazon Redshift PowerCenter 用ユーザーガイド*』を参照してください。

PowerExchange for Amazon S3

ここでは、バージョン 10.1.1 HotFix 1 の新しい PowerExchange for Amazon S3 機能について説明します。

- 次のリージョンに対してデータを読み取りおよび書き込みできます。
  - アジアパシフィック（ムンバイ）
  - カナダ（中部）
  - 米国東部（オハイオ）
- クライアント側およびサーバー側の暗号化用に、接続の AWS キー管理サービス（AWS KMS）によって生成される顧客マスタキー ID を設定できます。
- Amazon S3 バケットにデータを書き込む際、データを GZIP 形式で圧縮できます。
- マッピングの実行時に Amazon S3 フォルダパスを上書きできます。

詳細については、*『Informatica PowerExchange for Amazon S3 10.1.1 HotFix 1 PowerCenter 用ユーザーガイド』*を参照してください。

PowerExchange for Microsoft Azure Blob Storage

バージョン 10.1.1 HotFix 1 では、追加 Blob タイプのターゲットセッションプロパティを使用して、Microsoft Azure Blob Storage にデータを書き込むことができます。

詳細については、*『Informatica PowerExchange for Microsoft Azure Blob Storage 10.1.1 HotFix 1 ユーザーガイド』*を参照してください。

PowerExchange for Microsoft Azure SQL Data Warehouse

PowerExchange for Microsoft Azure SQL Data Warehouse バージョン 10.1.1 HotFix 1 では、次のターゲットセッションプロパティを使用できます。

- 更新時に更新。PowerCenter 統合サービスは、すべての行を更新時に更新します。
- 更新しない場合は挿入。PowerCenter 統合サービスは、既存の行を更新し、他の行は挿入対象としてマークされているかのように挿入します。
- 削除。PowerCenter 統合サービスは、指定されたレコードを Microsoft Azure SQL Data Warehouse から削除します。

詳細については、*『Informatica PowerExchange for Microsoft Azure SQL Data Warehouse 10.1.1 HotFix 1 PowerCenter 用ユーザーガイド』*を参照してください。

PowerExchange for Microsoft Dynamics CRM

PowerExchange for Microsoft Dynamics CRM バージョン 10.1.1 HotFix 1 では、次のターゲットセッションプロパティを使用できます。

- 行の拒否の理由を追加。行の拒否の理由を拒否ファイルに含める場合に選択します。
- 代替キー名。列がエンティティの代替キーであるかどうかを示します。代替キーの名前を指定。更新操作および更新/挿入操作で代替キーを使用できます。

詳細については、*『Informatica PowerExchange for Microsoft Dynamics CRM 10.1.1 HotFix 1 PowerCenter 用ユーザーガイド』*を参照してください。

PowerExchange for SAP NetWeaver

PowerExchange for SAP NetWeaver バージョン 10.1.1 HotFix 1 では、ABAP を使用した SAP テーブルからのデータの読み取り時に SSTRING データ型をサポートします。PowerCenter では、SSTRING データ型は SSTR と表されます。

詳細については、*『Informatica PowerExchange for SAP NetWeaver 10.1.1 HotFix 1 ユーザーガイド』*を参照してください。

変更内容（10.1.1 HotFix 1）

ここでは、バージョン 10.1.1 HotFix 1 の変更内容について説明します。

サポートの変更

バージョン 10.1.1 HF1 では、サードパーティのプラットフォームおよびシステムに対する Informatica のサポートに次の変更が適用されます。

Big Data Management Hadoop ディストリビューション

次の表に、サポートされている Hadoop ディストリビューションのバージョンと 10.1.1 HotFix 1 の変更点を示します。

配布率	サポートされるバージョン	10.1.1 HotFix 1 の変更
Amazon EMR	5.4	Amazon EMR 5.4 のサポートを有効にするには、EBF-9585 を Big Data Management 10.1.1 Hot Fix 1 に適用します。 Big Data Management バージョン 10.1.1 Update 2 は Amazon EMR 5.0 をサポートします。
Azure HDInsight	3.5	バージョン 3.5 で追加されたサポート。
Cloudera CDH	5.8、5.9、5.10、5.11	バージョン 5.10、5.11 で追加されたサポート。
Hortonworks HDP	2.3、2.4、2.5、2.6	バージョン 2.6 で追加されたサポート。
IBM BigInsights	4.2	変更なし
MapR	5.2.0 MEP バイナリ v. 1.0	変更なし

サポートされるバージョンの最新リストを確認するには、次の Informatica カスタマポータルの製品可用性マトリックスを参照してください。
https://network.informatica.com/community/informatica-network/product-availability-matrices。

第 3 章

新機能、変更、リリースタスク（10.1.1 Update 2）

この章では、以下の項目について説明します。

- 新製品（10.1.1 Update 2）, 34 ページ
- 新機能（10.1.1 Update 2）, 34 ページ
- 変更（10.1.1 Update 2）, 38 ページ

新製品（10.1.1 Update 2）

ここでは、バージョン 10.1.1Update 2 の新製品について説明します。

PowerExchange for MapR-DB

バージョン 10.1.1 Update 2 では、PowerExchange for MapR-DB を使用して、MapR-DB バイナリテーブルに対してデータの読み取りおよび書き込みを行うことができます。

PowerExchange for MapR-DB は、HBase API を使用して MapR-DB に接続します。MapR-DB テーブルに接続するには、MapR-DB としてデータベースタイプを指定する必要がある HBase 接続を作成する必要があります。HBase データオブジェクトの読み取りまたは書き込み操作を作成し、データを読み書きするためのマッピングに追加する必要があります。

マッピングの検証と実行は、ネイティブ環境で行うことも、Hadoop 環境の Blaze エンジンで行うこともできます。

詳細については、『*Informatica PowerExchange for MapR-DB 10.1.1 Update 2 ユーザーガイド*』を参照してください。

新機能（10.1.1 Update 2）

ここでは、バージョン 10.1.1Update 2 の新しい機能について説明します。

Big Data Management

このセクションでは、バージョン 10.1.1 Update 2 の新しい Big Data 機能について説明します。

Blaze **ランタイムエンジンを使用するマッピングで** Hive **テーブルパーティションを切り捨てる**

バージョン 10.1.1 Update 2 では、Blaze ランタイムエンジンを使用するマッピングで Hive テーブルパーティションを切り捨てることができます。

Hive ターゲットのパーティションの切り捨ての詳細については、『*Informatica 10.1.1 Update 2 Big Data Management ユーザーガイド*』を参照してください。

Blaze **エンジンでパーティション化されたカラムのフィルタ**

バージョン 10.1.1 Update 2 では、Blaze エンジンは、パーティション化されたカラムのフィルタを Hive ソースにプッシュダウンし、パフォーマンスを向上させることができます。

Hive ソースのパーティション化されたカラムでのフィルタトランスフォーメーションがマッピングに含まれている場合、Blaze エンジンはフィルタ条件を満たすデータを持つパーティションのみを読み取ります。Blaze エンジンが特定のパーティションを読み取れるようにするには、フィルタトランスフォーメーションがマッピング内のソースの次のトランスフォーメーションである必要があります。

詳細については、『*Informatica 10.1.1 Upd te 2 Big Data Management ユーザーガイド*』を参照してください。

Spark **エンジンでの** OraOop **のサポート**

バージョン 10.1.1 Update 2 では、Spark エンジンで Sqoop マッピングを実行するように OraOop を構成できます。Oracle に対してデータの読み書きを行う場合、直接引数を設定して、Sqoop が OraOop を使用できるようにすることができます。

OraOop は、ネイティブプロトコルを使用して Oracle データベースに接続する Oracle 用の特殊な Sqoop プラグインです。OraOop を構成すると、パフォーマンスが向上します。

詳細については、『*Informatica 10.1.1 Upd te 2 Big Data Management ユーザーガイド*』を参照してください。

Cloudera **クラスタにおけるネイティブ** Teradata **マッピングの** Sqoop **サポート**

バージョン 10.1.1 Update 2 では、Teradata PT 接続を使用して Cloudera クラスタおよび Blaze エンジンでマッピングを実行すると、データ統合サービスが実行時に Cloudera Connector Powered by Teradata を呼び出します。次に、データ統合サービスは Sqoop を通じてマッピングを実行します。

詳細については、『*Informatica 10.1.1 Update 2 PowerExchange for Teradata Parallel Transporter API ユーザーガイド*』を参照してください。

Blaze **エンジンと** Spark **エンジンでのスケジューラのサポート**

バージョン 10.1.1 Update 2 では、Blaze エンジンと Spark エンジンの両方で、Hadoop ディストリビューションに対して次のスケジューラが有効です。

- フェアスケジューラ。すべてのジョブが時間の経過と共に平均して等しいリソースの共有を受け取れるように、リソースをジョブに割り当てます。
- キャパシティースケジューラ。Hadoop アプリケーションを共有のマルチテナントクラスタとして実行するように設計されています。キャパシティースケジューラは、ノードラベリングの有無にかかわらず構成できます。ノードラベルは、同様の特性を持つノードをグループ化する方法です。

詳細については、『*Informatica 10.1.1 Update 2 Big Data Management ユーザーガイド*』の「Hadoop 環境でのマッピング」の章を参照してください。

Blaze エンジンと Spark エンジンでの YARN キューのサポート

バージョン 10.1.1 Update 2 では、Blaze ジョブと Spark ジョブを特定の YARN スケジューラキューに向けることができます。キューを使用すると、複数のテナントがクラスタを共有できます。アプリケーションを YARN に送信すると、スケジューラによってそれらがキューに割り当てられます。Hadoop 接続プロパティで、YARN キューを構成します。

詳細については、『*Informatica 10.1.1 Update 2 Big Data Management ユーザーガイド*』の「Hadoop 環境でのマッピング」の章を参照してください。

IBM BigInsights 4.2 での Hadoop セキュリティ機能

バージョン 10.1.1 Update 2 では、IBM BigInsights 4.2 Hadoop ディストリビューションで次の Hadoop セキュリティ機能を使用できます。

- Apache Knox
- Apache Ranger
- HDFS Transparent Encryption

詳細については、『*Informatica 10.1.1 Upd te 2 Big Data Management セキュリティガイド*』を参照してください。

SSL/TLS セキュリティモード

バージョン 10.1.1 Update 2 では、Cloudera および HortonWorks Hadoop ディストリビューションで、SSL と TLS のセキュリティモードを使用できます。次のセキュリティメソッドとプラグインが含まれます。

- Kerberos 認証
- Apache Ranger
- Apache Sentry
- ネームノードの高可用性
- リソースマネージャの高可用性

詳細については、『*Informatica 10.1.1 Update 2 Big Data Management インストール & 環境設定ガイド*』を参照してください。

Amazon S3 の Hive ソースとターゲット

バージョン 10.1.1 Update 2 では、Big Data Management は、次の Hadoop ディストリビューションで構成されたクラスタの Amazon S3 バケット上の Hive への読み書きをサポートします。

- Amazon EMR
- Cloudera
- HortonWorks
- MapR
- BigInsights

詳細については、『*Informatica 10.1.1 Upd te 2 Big Data Management ユーザーガイド*』を参照してください。

Enterprise Information Catalog

ここでは、Enterprise Information Catalog バージョン 10.1.1 Update 2 の新機能について説明します。

ファイルシステムリソース

バージョン 10.1.1 Update 2 では、**ファイルシステム**リソースを作成して、Windows および Linux のファイルシステムのファイルからメタデータをインポートできます。

詳細については、『*Informatica 10.1.1 Update 2 Live Data Map Administrator ガイド*』を参照してください。

Apache Ranger **対応クラスタ**

バージョン 10.1.1 Update 2 では、Apache Ranger 対応クラスタに Enterprise Information Catalog をデプロイできます。Apache Ranger は、クラスタのセキュリティを管理するためのセキュリティフレームワークを提供します。

Informatica **クラスタサービスをデプロイするための** SSH **サポートの強化**

バージョン 10.1.1 Update 2 では、Centrify が有効になっているホストに Informatica クラスタサービスをデプロイすることができます。Centrify は既存の Active Directory インフラストラクチャと統合して、リモート Linux ホストでのユーザー認証を管理します。

Intelligent Data Lake

ここでは、バージョン 10.1.1 Update 2 の新しい Intelligent Data Lake 機能について説明します。

Hadoop **エコシステム**

バージョン 10.1.1 Update 2 では、次の Hadoop ディストリビューションを Hadoop データレイクとして使用できます。

- Cloudera CDH 5.9
- Hortonworks HDP 2.3、2.4、および 2.5
- Azure HDInsight 3.5
- Amazon EMR 5.0
- IBM BigInsights 4.2

データ準備サービスに MariaDB **を使用する**

バージョン 10.1.1 Update 2 では、データ準備サービスリポジトリに MariaDB 10.0.28 を使用できます。

カラムレベルの系列の表示

バージョン 10.1.1 Update 2 では、データアナリストは、データアセットのコピー、インポート、エクスポート、パブリケーション、アップロードなどのアクティビティに対応するテーブル内の個々のカラムの系列を表示できます。

SSL/TLS **のサポート**

バージョン 10.1.1 Update 2 では、Intelligent Data Lake と SSL/TLS を有効にした Cloudera 5.9 クラスタを統合できます。

PowerExchange Adapters for Informatica

ここでは、バージョン 10.1.1 Update 2 の新しい Informatica アダプタ機能について説明します。

PowerExchange for Amazon Redshift

バージョン 10.1.1 Update 2 では、Amazon Redshift オブジェクトに対して複数のスキーマを選択できます。

詳細については、『*Informatica 10.1.1 Update 2 PowerExchange for Amazon Redshift ユーザーガイド*』を参照してください。

変更（10.1.1 Update 2）

ここでは、バージョン 10.1.1 Update 2 の変更内容について説明します。

サポートの変更

Big Data Management のディストリビューションサポートの変更点

次の表に、サポートされている Hadoop ディストリビューションのバージョンと 10.1.1 Update 2 の変更点を示します。

配布率	**サポートされるバージョン**	**10.1.1 Update 2 の変更点**
Amazon EMR	5.0.0	変更なし
Azure HDInsight	3.5 *	バージョン 3.5 で追加されたサポート バージョン 3.4 で削除されたサポート
Cloudera CDH	5.8、5.9、5.10 *	バージョン 5.10 で追加されたサポート。
Hortonworks HDP	2.3、2.4、2.5	バージョン 2.3 および 2.4 で追加されたサポート。
IBM BigInsights	4.2	変更なし
MapR	5.2	復帰したサポート。 バージョン 5.2 で追加されたサポート。 バージョン 5.1 で削除されたサポート。
**Azure HDInsight 3.5 および Cloudera CDH 5.10 は、テクニカルプレビュー用に用意されています。テクニカルプレビュー機能はサポートされていますが、本番環境には対応していません。非本番環境でのみ使用することをお勧めします。*		

Hadoop サポートの完全な一覧については、次の Informatica Network で製品可用性マトリックスを参照してください。
https://network.informatica.com/community/informatica-network/product-availability-matrices

Blaze **エンジンでの** Teradata Connector for Hadoop（TDCH）**および** Teradata PT **オブジェクトの削除されたサポート**

バージョン 10.1.1 Update 2 では、Blaze エンジンでの Teradata Connector for Hadoop（TDCH）のサポートが削除されました。10.1.1 Update 2 での Sqoop 接続の構成は、Hadoop ディストリビューションによって異なります。

IBM BigInsights **と** MapR

JDBC 接続を介して Sqoop 接続を構成することができます。JDBC 接続を介して Sqoop 接続を構成する方法については、*『Informatica 10.1.1 Update 2 Big Data Management ユーザーガイド』を参照してください。*

Cloudera CDH

Teradata PT 接続および Cloudera Connector Powered by Teradata を介して Sqoop 接続を構成できます。

1. Cloudera Connector Powered by Teradata の.jar ファイルをダウンロードして、それをデータ統合サービスが実行されているノードにコピーします。詳細については、*『Informatica 10.1.1 Update 2 PowerExchange for Teradata Parallel Transporter API ユーザーガイド』を参照してください。*
2. `InfaTDCHConfig.txt` ファイルで定義した設定パラメータを **Teradata PT 接続の［Sqoop の追加の引数］** フィールドに移動させます。指定できる引数の一覧については、Cloudera Connector Powered by Teradata のマニュアルを参照してください。

Hortonworks HDP

Teradata PT 接続および Hortonworks Connector for Teradata を介して Sqoop 接続を構成できます。

1. Hortonworks Connector for Teradata の.jar ファイルをダウンロードして、それをデータ統合サービスが実行されているノードにコピーします。詳細については、*『Informatica 10.1.1 Update 2 PowerExchange for Teradata Parallel Transporter API ユーザーガイド』を参照してください。*
2. `InfaTDCHConfig.txt` ファイルで定義した設定パラメータを Teradata PT 接続の **［Sqoop の追加の引数］** フィールドに移動させます。指定できる引数の一覧については、Hortonworks Connector for Teradata のマニュアルを参照してください。

注: Teradata PT 接続を介して Hive エンジンで引き続き TDCH を使用できます。

Teradata PT **データオブジェクトと** Teradata PT **接続を介した** Sqoop **接続の廃止されたサポート**

バージョン 10.1.1 Update 2 では、Cloudera CDH および Hortonworks の Teradata PT データオブジェクトと Teradata PT 接続を介した Sqoop 接続が廃止されました。将来のリリースではサポートは削除される予定です。

TDCH および Sqoop を使用してデータの読み書きを行うには、JDBC 接続とリレーショナルデータオブジェクトを介して Sqoop 接続を構成することをお勧めします。

Big Data Management

ここでは、バージョン 10.1.1 Update 2 の Big Data への変更内容について説明します。

Sqoop

バージョン 10.1.1 Update 2 では、--username 引数および--password 引数を使用して、Sqoop マッピングでユーザー名とパスワードを上書きすることはできません。Sqoop では、JDBC 接続の **［ユーザー名］** と **［パスワード］** の各フィールドで設定した値が使用されます。

詳細については、『*Informatica 10.1.1 Upd te 2 Big Data Management ユーザーガイド*』を参照してください。

Enterprise Information Catalog

このセクションでは、バージョン 10.1.1 Update 2 の Enterprise Information Catalog の変更点について説明します。

アセットパス

バージョン 10.1.1 Update 2 では、［アセットの詳細］ビューでアセットへのパスと、そのアセットに関するその他の一般的な情報を表示できます。

詳細については、『*Informatica 10.1.1 Update 2 Enterprise Information Catalog ユーザーガイド*』を参照してください。

［プロファイル結果］セクションのビジネス用語

バージョン 10.1.1 Update 2 では、表形式アセットの［プロファイル結果］セクションにビジネス用語も含まれるようになりました。以前は、［プロファイル結果］セクションには、カラム名、データ型、およびデータドメインが含まれていました。

詳細については、『*Informatica 10.1.1 Update 2 Enterprise Information Catalog ユーザーガイド*』を参照してください。

属性値としての URL

バージョン 10.1.1 Update 2 では、属性値として URL を入力できるようにカスタム属性を設定していた場合は、属性値として複数の URL をテクニカルアセットに割り当てることができます。

詳細については、『*Informatica 10.1.1 Update 2 Enterprise Information Catalog ユーザーガイド*』を参照してください。

CSV **ファイルヘッダーの検出**

バージョン 10.1.1 Update 2 では、次のリソースを構成して、メタデータを抽出する CSV ファイルのヘッダーを自動的に検出することができます。

- Amazon S3
- HDFS
- ファイルシステム

詳細については、『*Informatica 10.1.1 Update 2 Live Data Map Administrator ガイド*』を参照してください。

Amazon Redshift **リソース**

バージョン 10.1.1 Update 2 では、Amazon Redshift リソースの複数のスキーマをインポートすることができます。

詳細については、『*Informatica 10.1.1 Update 2 Live Data Map Administrator ガイド*』を参照してください。

データ統合サービスにおける Hive **リソースのプロファイリング**

バージョン 10.1.1 Update 2 では、データ統合サービスで Hive リソースをプロファイリング用に実行できます。

詳細については、『*Informatica 10.1.1 Update 2 Live Data Map Administrator ガイド*』を参照してください。

PowerExchange Adapters for Informatica

ここでは、バージョン 10.1.1 Update 2 の Informatica アダプタの変更内容について説明します。

PowerExchange for Amazon Redshift

バージョン 10.1.1 Update 2 では、Amazon Redshift オブジェクトに対して複数のスキーマを選択できます。複数のスキーマを選択するには、接続プロパティで **[スキーマ]** フィールドを空白のままにします。以前のリリースでは、スキーマの選択は必須で、1 つのスキーマしか選択できませんでした。

バージョン 10.1.1 Update 2 にアップグレードする場合、以前のバージョンで作成された PowerExchange for Redshift マッピングには、接続プロパティに関連スキーマ名が必要です。ない場合、バージョン 10.1.1 Update 2 でそれらを実行すると、マッピングが失敗します。

詳細については、『*Informatica 10.1.1 Update 2 PowerExchange for Amazon Redshift ユーザーガイド*』を参照してください。

第 4 章

新機能、変更、リリースタスク（10.1.1 Update 1）

この章では、以下の項目について説明します。

- 新機能（10.1.1 Update 1）, 42 ページ
- 変更（10.1.1 Update 1）, 42 ページ
- リリースタスク（10.1.1 Update 1）, 43 ページ

新機能（10.1.1 Update 1）

ここでは、バージョン 10.1.1 Update 1 の新しい機能について説明します。

Big Data Management

このセクションでは、バージョン 10.1.1 Update 1 の新しい Big Data 機能について説明します。

ネイティブ Teradata マッピングの Sqoop サポート

バージョン 10.1.1 Update 1 では、Teradata PT 接続を使用して Hortonworks クラスタおよび Blaze エンジンでマッピングを実行すると、データ統合サービスが実行時に Hortonworks Connector for Teradata を呼び出します。次に、データ統合サービスは Sqoop を通じてマッピングを実行します。

詳細については、『*Informatica 10.1.1 Update 1 PowerExchange for Teradata Parallel Transporter API ユーザーガイド*』を参照してください。

ネイティブ Teradata マッピングの SQL オーバーライドのサポート

バージョン 10.1.1 Update 1 では、Teradata PT 接続を使用して Hortonworks クラスタおよび Blaze エンジンでマッピングを実行すると、SQL オーバーライドクエリを構成できます。SQL オーバーライドクエリをパラメータ化することもできます。

詳細については、『*Informatica 10.1.1 Update 1 PowerExchange for Teradata Parallel Transporter API ユーザーガイド*』を参照してください。

変更（10.1.1 Update 1）

ここでは、バージョン 10.1.1 Update 1 の変更内容について説明します。

PowerExchange Adapters for Informatica

ここでは、バージョン 10.1.1 Update 1 における PowerExchange アダプタの変更内容について説明します。

PowerExchange for Amazon S3

バージョン 10.1.1 Update 1 では、PowerExchange for Amazon S3 に、Amazon S3 データオブジェクトの読み書き操作に関する次の詳細プロパティがあります。

- フォルダパス
- S3 ファイルの分割ダウンロード
- 一時領域ディレクトリ

以前は、Amazon S3 データオブジェクトの読み書き操作の詳細プロパティに次のプロパティがありました。

- S3 フォルダパス
- S3 ファイルの分割ダウンロードの有効化
- ローカル一時フォルダのパス

詳細については、『*Informatica 10.1.1 Update 1 PowerExchange for Amazon S3 ユーザーガイド*』を参照してください。

リリースタスク（10.1.1 Update 1）

このセクションでは、バージョン 10.1.1 Update 1 のリリースタスクについて説明します。

PowerExchange Adapters for Informatica

このセクションでは、バージョン 10.1.1 Update 1 の PowerExchange アダプタリリースタスクについて説明します。

PowerExchange for Teradata Parallel Transporter API

バージョン 10.1.1 Update 1 では、Teradata PT 接続を使用して Hortonworks クラスタおよび Blaze エンジンでマッピングを実行すると、データ統合サービスが実行時に Hortonworks Connector for Teradata を呼び出します。次に、データ統合サービスは Sqoop を通じてマッピングを実行します。

Teradata Connector for Hadoop（TDCH）を Blaze エンジンで Teradata マッピングを実行するように構成しており、10.1.1 Update 1 をインストールしている場合は、データ統合サービスは TDCH 構成を無視します。次のアップグレードタスクを実行して、Blaze エンジンで Teradata マッピングを実行する必要があります。

1. 10.1.1 Update 1 をインストールします。
2. Hortonworks Connector for Teradata の JAR ファイルをダウンロードします。
3. `InfaTDCHConfig.txt` ファイルで定義した設定パラメータを、Teradata PT 接続の **[追加の Sqoop 引数]** フィールドに移動します。指定できる引数の一覧については、Hortonworks for Teradata Connector のマニュアルを参照してください。

注: TDCH を Blaze エンジンおよび Hortonworks 以外のディストリビューションで Teradata マッピングを実行するように構成している場合は、10.1.1 Update 1 をインストールしないでください。バージョン 10.1.1 を引き続き使用して、TDCH によるマッピングを Blaze エンジンおよび Hortonworks 以外のディストリビューションで実行できます。

詳細については、『*Informatica 10.1.1 Update 1 PowerExchange for Teradata Parallel Transporter API ユーザーガイド*』を参照してください。

第 5 章

新製品（10.1.1）

この章では、以下の項目について説明します。

- インテリジェントストリーミング, 44 ページ
- PowerExchange アダプタ, 46 ページ

インテリジェントストリーミング

ビッグデータ技術の出現に伴い、組織はデータをすぐに取得して処理し、リアルタイムに活用する、迅速なデータ処理によるメリットを最大限に引き出すことに注力しています。リアルタイムストリーミング機能を追加すると、待ち時間が短縮されます。これを活用して、最新の完全な顧客ビューを作成し、オペレーショナルインテリジェンスをリアルタイムに顧客に提供できます。また、不正検出率を改善し、セキュリティリスクを低減することができます。物理的なアセットの管理も容易になり、総合的なカスタマエクスペリエンスが向上します。これにより多くの場合、意思決定プロセスが大幅に改善されます。

Informatica 10.1.1 では、データストリーミング、データ処理、および重要なビジネス値の抽出をほぼリアルタイムで実行できる新製品、インテリジェントストリーミングが導入されました。これにより、IT は、リアルタイムクエリから最大限の価値を得ることができます。顧客は、Web サイトのログファイルデータ、センサから取得されるデータ、メッセージバスデータ、マシンデータなど、従来とは異なるソースから得られるさまざまなタイプのデータをリアルタイムかつ高い精度で処理できます。

インテリジェントストリーミングは、Informatica のインテリジェントデータプラットフォームの機能拡張として構築されています。これにより、IT は、次のことが可能になります。

- ストリーミング（連続処理）マッピングの作成および実行。
- Apache Kafka や JMS などのリアルタイムキューからのイベント収集。
- データ変換、変換データに対するビジネスルールの作成、リアルタイムパターンの検出、自動応答または自動アラートの起動。
- 実行時のストリームの管理および監視。
- at-least-once 配信の提供。
- 処理した行数または実行時間に基づいた、ライフサイクルのきめ細かい制御。
- バッチマッピングなどのイベント処理ロジックの再利用および保持（いくつかの修正後）。

インテリジェントストリーミングの機能を次に示します。

ストリームデータの収集および転送

Kafka や JMS などのソースから、JSON、XML、または Avro の形式で次のタイプのデータをストリーミングできます。

- アプリケーションおよびインフラストラクチャのログデータ
- リレーショナルデータベースからの変更データキャプチャ（CDC）
- Web サーバーからのクリックストリーム
- ソーシャルメディアイベントストリーム
- IoT デバイスからの時系列データ
- メッセージバスデータ
- プログラマブルロジックコントローラ（PLC）データ
- デバイスからの POS データ

また、Informatica のお客様は、Informatica の Vibe Data Stream（別途ライセンスが必要）を活用することにより、センサやマシンログなどからデータをリアルタイムで収集し、Kafka キューに送信できます。このデータをインテリジェントストリームで処理することが可能です。

ストリームデータの絞り込み、リッチ化、分析、および処理

基盤となる処理プラットフォームを使用して、次に示す複雑なデータトランスフォーメーションをリアルタイムで実行します。コーディングやスクリプト作成は不要です。

- スライディングウィンドウとタンブリングウィンドウのオプションを使用した、ストリーミング用のウィンドウトランスフォーメーションのユースケース。
- フィルタ、式、共有体、ルータ、集計、ジョイナ、ルックアップ、Java、およびソータトランスフォーメーションがストリーミングマッピングで使用可能。これらは、Spark ストリーミングで実行されます。
- ルックアップトランスフォーメーションがフラットファイル、HDFS、Sqoop、および Hive で使用可能。

データのパブリッシュ

Kafka、HDFS、NoSQL データベース、エンタープライズメッセージングシステムなど、さまざまなタイプのターゲットにデータをストリーミングできます。

インテリジェントストリーミングは、Informatica Big Data Platform プラットフォームをベースに構築されており、ストリーミング機能を利用できるように拡張されています。インテリジェントストリーミングは、Spark ストリーミングを使用してストリームデータを処理し、YARN を使用して Spark クラスタのリソースをより効率的に管理します。また、サードパーティディストリビューションを使用して Hadoop 環境に接続し、ジョブ処理をプッシュします。

ストリーミングマッピングを作成するには、Informatica Developer（Developer tool）を使用します。マッピングを実行するには、Hadoop ランタイム環境と Spark エンジンを使用します。Hadoop クラスタでストリーミングマッピングを実行するように高可用性を設定できます。

インテリジェントストリーミングの詳細については、*『Informatica インテリジェントストリーミングユーザーガイド』*を参照してください。

PowerExchange アダプタ

Informatica 用 PowerExchange アダプタ

ここでは、バージョン 10.1.1 の新しい Informatica アダプタについて説明します。

PowerExchange for Amazon S3

バージョン 10.1.1 では、Amazon S3 接続を作成し、データオブジェクトに含める Amazon S3 ソースおよびターゲットの場所を指定できます。Amazon S3 接続は、データオブジェクトの読み取り操作と書き込み操作で使用できます。マッピングの検証と実行は、ネイティブ環境で行うことも、Hadoop 環境の Blaze エンジンで行うこともできます。

詳細については、*『Informatica PowerExchange for Amazon S3 10.1.1 ユーザーガイド』*を参照してください。

第 6 章

新機能（10.1.1）

この章では、以下の項目について説明します。

- アプリケーションサービス, 47 ページ
- Big Data, 48 ページ
- Business Glossary , 52 ページ
- コマンドラインプログラム, 53 ページ
- Enterprise Information Catalog, 55 ページ
- Informatica Analyst, 57 ページ
- Informatica のインストール, 58 ページ
- Intelligent Data Lake, 58 ページ
- マッピング , 59 ページ
- Metadata Manager, 60 ページ
- PowerExchange アダプタ, 60 ページ
- セキュリティ, 63 ページ
- トランスフォーメーション, 63 ページ
- Web サービス , 67 ページ
- ワークフロー, 67 ページ

アプリケーションサービス

ここでは、バージョン 10.1.1 の新しいアプリケーションサービス機能について説明します。

アナリストサービス

バージョン 10.1.1 では、例外管理タスクのすべての監査データを単一のデータベースに保存するように、アナリストサービスを設定できます。このデータベースには、アナリストサービスで指定された Analyst ツールでユーザーがヒューマンタスクインスタンスに対して実行した作業の記録が保存されます。

Administrator ツールを使用して、アナリストサービスのヒューマンタスクのプロパティで、データベース接続と、監査テーブルのスキーマを設定します。接続とスキーマを指定したら、Administrator ツールの **[アクション]** メニューオプションを使用して、監査データベースのコンテンツを作成します。infacmd as コマンドでデータベースとスキーマを設定して、監査データベースのコンテンツを作成することもできます。データベースとスキーマを設定するには、infacmd as updateServiceOptions を実行します。データベースコンテンツを作成するには、infacmd as createExceptionAuditTables を実行します

接続とスキーマを指定しない場合、アナリストサービスは、タスクインスタンスデータを格納するデータベースに各タスクインスタンスの監査テーブルを作成します。

詳細については、*『Informatica 10.1.1 アプリケーションサービスガイド』*および*『Informatica 10.1.1 コマンドリファレンス』*を参照してください。

Big Data

ここでは、バージョン 10.1.1 の新しい Big Data 機能について説明します。

Blaze エンジン

バージョン 10.1.1 では、Blaze エンジンは次の新機能を備えています。

Blaze エンジン上の Hive ソースおよびターゲット

バージョン 10.1.1 では、Blaze エンジン上の Hive ソースおよびターゲットで、以下が新たにサポートされます。

- 精度 38 の Hive 10 進データ型の値
- Hive テーブル名、カラム名、およびスキーマ名での引用識別子
- ターゲットとしてパーティション化された Hive テーブル
- ソースおよびターゲットとしてバケット化された Hive テーブル
- Hive ソースに対する SQL オーバーライド
- Hive ソースおよびターゲットに対するテーブルロック
- Hive ターゲット用のターゲットテーブルの作成または置換
- Hive ターゲット用のターゲットテーブルと Hive パーティション化テーブルの切り詰め

詳細については、*『Informatica Big Data Management® 10.1.1 ユーザーガイド』*の「Hadoop 環境でのマッピングオブジェクト」の章を参照してください。

Blaze エンジンでのトランスフォーメーションサポート

バージョン 10.1.1 になり、トランスフォーメーションは、Blaze エンジン上で新たに以下をサポートするようになりました。

- ルックアップトランスフォーメーション。Hive ルックアップソースに対して、SQL オーバーライドとフィルタクエリを使用できます。
- ソータートランスフォーメーション。ソータートランスフォーメーションがフラットファイルターゲットに接続されるときは、グローバルソートがサポートされます。グローバルソートの順序を維持するには、フラットファイルターゲットの［行順序を保持］プロパティを有効にする必要があります。ソータートランスフォーメーションがマッピングのミッドストリームの場合、行はローカルでソートされます。
- アップデートストラテジトランスフォーメーション。アップデートストラテジトランスフォーメーションが制限付きでサポートされています。

詳細については、*『Informatica Big Data Management 10.1.1 ユーザーガイド』*の「Hadoop 環境でのマッピングオブジェクト」の章を参照してください。

Blaze エンジンの監視

バージョン 10.1.1 では、マッピングジョブに関するより詳細な統計が Blaze 集計レポートに表示されます。Blaze ジョブ監視では、成功したグリッドタスク名の隣に緑の集計レポートボタンが表示されます。このボタンをクリックすると、Blaze 集計レポートが開きます。

Blaze 集計レポートには、マッピングジョブに関する次の情報が含まれています。

- 個々のセグメントで費やされる時間。グリッドタスク内のセグメントの円グラフ。
- マッピングプロパティ。テーブルには、マッピングジョブに関する基本的な情報が含まれています。
- タスクレットの実行時間。選択したセグメント内のすべてのタスクレットの時系列グラフ。
- 選択したタスクレットの情報。個々のタスクレットのソースおよびターゲットの行数とキャッシュ情報。

注: Blaze 集計レポートは、ベータ版です。主要な機能のほとんどが含まれていますが、まだ完全ではありません。

Blaze エンジンのログ

バージョン 10.1.1 では、Blaze エンジンのエラーロギングが次のように強化されています。

- ログトレースレベルを［詳細 - 初期化］または［詳細 - データ］に設定すると、実行統計が LDTM ログに記録されます。ログには、マッピング実行に関する次の詳細情報が含まれています。
  - 各タスクの開始時刻、終了時刻、および状態
  - Blaze ジョブ監視の URL
  - タスクレット総数、成功したタスクレット数、失敗したタスクレット数、およびキャンセルされたタスクレット数
  - ソースおよびターゲットの処理された行数と拒否された行数
  - 実行された各セグメントのトランスフォーメーションのデータエラー。データエラーが発生した場合に含まれます
- LDTM ログには、次のトランスフォーメーション統計が含まれています。
  - ソースおよびターゲットの出力行数
  - ソースおよびターゲットのエラー行数
- セッションログには、グリッドタスク内のすべてのセグメントのリストと、Blaze ジョブ監視への対応するリンクも表示されます。リンクをクリックすると、そのセグメントの実行の詳細が表示されます。

詳細については、*『Informatica Big Data Management 10.1.1 ユーザーガイド』*の「Hadoop 環境でのマッピングの監視」の章を参照してください。

インストールと環境設定

ここでは、Big Data のインストールと環境設定に関する新機能について説明します。

アドレス参照データのインストール

バージョン 10.1.1 では、Informatica Big Data Management とともにインストールされるシェルスクリプトを使用して、アドレス参照データファイルをインストールできます。このスクリプトにより、参照データファイルは、指定した計算ノードにインストールされます。

Hadoop 環境でアドレス検証マッピングを実行するときは、マッピングを実行する各計算ノードに参照データファイルが存在している必要があります。スクリプトを使用すると、1 回の操作で複数のノードに参照データファイルをインストールできます。

このシェルスクリプトの名前は、`copyRefDataToComputeNodes.sh` です。

このスクリプトは、Informatica Big Data Management インストール済み環境の次のディレクトリに含まれています。

```
[Informatica installation directory]/tools/dq/av
```

スクリプトを実行するときは、次の情報を入力します。

- 参照データファイルの現在の場所。
- スクリプトがファイルをインストールするディレクトリ。
- 計算ノード名が含まれているファイルの場所。
- スクリプトを実行するユーザーの名前。

これらの情報を入力しない場合は、一連のデフォルト値を使用して、ファイルの場所とユーザー名が指定されます。

詳細については、*『Informatica Big Data Management 10.1.1 インストール&環境設定ガイド』*を参照してください。

サイレントモードでの Hadoop 設定マネージャ

バージョン 10.1.1 では、Hadoop 設定マネージャをサイレントモードで使用して、Big Data Mangement を設定できます。

サイレントモードで Big Data Management を設定する方法の詳細については、*『Informatica Big Data Management 10.1.1 インストール&環境設定ガイド』*を参照してください。

Ambari スタックへのインストール

バージョン 10.1.1 では、Ambari コンフィギュレーションマネージャを使用して、Big Data Management をサービスとして Ambari スタックにインストールできます。

Big Data Management を Ambari スタックにインストールする方法の詳細については、*『Informatica 10.1.1 Big Data Management インストール&環境設定ガイド』*を参照してください。

HDInsight クラスタの HDFS にデータを取り込むためのスクリプト

バージョン 10.1.1 では、Big Data Management 用にクラスタを設定すると、スクリプトを使用して Azure HDInsight クラスタの HDFS ファイルシステムにデータを取り込むことができます。

スクリプトを使用して HDFS ファイルシステムにデータを設定する方法の詳細については、*『Informatica Big Data Management 10.1.1 インストール&環境設定ガイド』*を参照してください。

Spark エンジン

バージョン 10.1.1 では、Spark エンジンは次の新機能を備えています。

バイナリデータタイプ

バージョン 10.1.1 では、Spark エンジンは、次の関数でバイナリデータ型をサポートします。

- DEC_BASE64
- ENC_BASE64
- MD5
- UUID4
- UUID_UNPARSE

- CRC32
- COMPRESS
- DECOMPRESS（精度は無視）
- AES 暗号化
- AES 復号化

注: Spark エンジンは、結合条件およびルックアップ条件では、バイナリデータ型をサポートしていません。

詳細については、*『Informatica Big Data Management 10.1.1 ユーザーガイド』*の「関数リファレンス」の章を参照してください。

Spark エンジンでのトランスフォーメーションサポート

バージョン 10.1.1 になり、トランスフォーメーションは、Spark エンジン上で新たに以下をサポートするようになりました。

- Java トランスフォーメーションが制限付きでサポートされています。
- ルックアップトランスフォーメーションで、Hive ルックアップソースにアクセスできます。

詳細については、*『Informatica Big Data Management 10.1.1 ユーザーガイド』*の「Hadoop 環境でのマッピングオブジェクト」の章を参照してください。

Spark エンジンでジョブを実行した場合の実行時の統計

バージョン 10.1.1 では、Spark エンジンで実行されたマッピングジョブのサマリ統計と詳細統計を表示できます。

[サマリ統計] ビューには、次の Spark サマリ統計が表示されます。

- ソース。マッピングソースファイルの名前。
- ターゲット。ターゲットファイルの名前。
- 行。 読み取られたソースおよびターゲットの行数。

[詳細統計] ビューには、Spark エンジンでジョブを実行したときの行数のグラフが表示されます。

詳細については、*『Informatica Big Data Management 10.1.1 ユーザーガイド』*の「Hadoop 環境でのマッピングオブジェクト」の章を参照してください。

セキュリティ

ここでは、バージョン 10.1.1 の新しい Big Data セキュリティ機能について説明します。

Hive ソースに対する厳密に定義された SQL 認証のサポート

バージョン 10.1.1 では、厳密に定義された SQL 認証が Hive ソーステーブルで使用されているときは、このレベルの SQL 認証に従うように Hive 接続を設定できます。Hive 接続の **[厳密に定義された SQL 認証に従う]** オプションを有効にすると、Hive テーブルおよびビューに対して設定された行レベルおよびカラムレベルの制限に従うことができます。

詳細については、*『Informatica 10.1.1 Big Data Management セキュリティガイド』*の「Big Data Management のセキュリティの概要」の章を参照してください。

Spark エンジンのセキュリティに関するサポート

バージョン 10.1.1 では、Spark エンジンは、次のセキュリティシステムを追加でサポートするようになりました。

- Cloudera CDH クラスタの Apache Sentry
- Hortonworks HDP クラスタの Apache Ranger
- Spark エンジンでサポートされる Hadoop ディストリビューションの HDFS トランスポート暗号化
- Spark エンジンでサポートされる Hadoop ディストリビューションのオペレーティングシステムプロファイル

詳細については、*『Informatica Big Data Management 10.1.1 セキュリティガイド』*の「Big Data Management のセキュリティの概要」を参照してください。

Sqoop

バージョン 10.1.1 では、Sqoop を設定すると次の新機能を使用できます。

- Blaze エンジンで Sqoop マッピングを実行できます。
- Spark エンジンで Sqoop マッピングを実行し、Oracle データベースに対してデータの読み取りや書き込みが可能です。
- Blaze エンジンと Spark エンジンで Sqoop マッピングを実行するときに、パーティション化を設定できます。Kerberos 認証を使用する Hadoop クラスタでマッピングを実行することもできます。
- Blaze エンジンで Sqoop マッピングを実行し、Teradata に対してデータの読み取りや書き込みを行うときは、次の専用のコネクタを使用します。

  - Cloudera Connector Powered by Teradata

  - Hortonworks Connector for Teradata

  これらの専用コネクタは、ネイティブプロトコルを使用して、Teradata データベースに接続します。

詳細については、*『Informatica 10.1.1 Big Data Management ユーザーガイド』*を参照してください。

Business Glossary

ここでは、バージョン 10.1.1 の新しい Business Glossary 機能について説明します。

リッチテキストをプレーンテキストとしてエクスポート

バージョン 10.1.1 では、リッチテキストの用語集コンテンツをプレーンテキストとしてエクスポートできます。用語集のエクスポートウィザードとコマンドラインプログラムで、エクスポートオプションを使用することが可能です。

詳細については、*『Informatica 10.1.1 Business Glossary ガイド』*の「用語集の管理」を参照してください。

競合しているアセットの場合リッチテキストコンテンツを含める

バージョン 10.1.1 では、Analyst ツールがアセットの競合を検出した場合は、インポートファイルから、リッチテキストとしてフォーマットされているプロパティ、または Long String データ型のプロパティをインポートすることを選択できます。

用語集のインポートウィザードとコマンドラインプログラムで、インポートオプションを使用することが可能です。

詳細については、*『Informatica 10.1.1 Business Glossary ガイド』*の「用語集の管理」を参照してください。

コマンドラインプログラム

ここでは、バージョン 10.1.1 の新しいコマンドについて説明します。

infacmd as コマンド

次の表に、新しい infacmd as コマンドの説明を示します。

コマンド	説明
CreateExceptionAuditTables	アナリストサービスが指定したヒューマンタスクインスタンスの監査テーブルを作成します。
DeleteExceptionAuditTables	アナリストサービスが指定したヒューマンタスクインスタンスの監査テーブルを削除します。

次の表に、infacmd as コマンドの新しいオプションの説明を示します。

コマンド	説明
UpdateServiceOptions	- HumanTaskDataIntegrationService.exceptionDbName 例外管理タスクの監査証跡テーブルを保存するデータベースを指定します。 - HumanTaskDataIntegrationService.exceptionSchemaName 例外管理タスクの監査証跡テーブルを保存するスキーマを指定します。

詳細については、*『Informatica 10.1.1 コマンドリファレンス』*の「Infacmd as コマンドリファレンス」の章を参照してください。

infacmd dis コマンド

次の表に、新しい infacmd dis コマンドの説明を示します。

コマンド	説明
replaceMappingHadoopRuntimeConnections	デプロイされたアプリケーションのすべてのマッピングの Hadoop 接続を別の Hadoop 接続に置き換えます。Hadoop 環境では、データ統合サービスは、Hadoop 接続を使用して Hadoop クラスタに接続し、マッピングを実行します。

詳細については、*『Informatica 10.1.1 コマンドリファレンス』*の「infacmd dis コマンドリファレンス」の章を参照してください。

infacmd mrs コマンド

次の表に、新しい infacmd mrs コマンドの説明を示します。

コマンド	説明
replaceMappingHadoopRuntimeConnections	リポジトリ内のすべてのマッピングの Hadoop 接続を別の Hadoop 接続に置き換えます。Hadoop 環境では、データ統合サービスは、Hadoop 接続を使用して Hadoop クラスタに接続し、マッピングを実行します。

詳細については、*『Informatica 10.1.1 コマンドリファレンス』*の「infacmd mrs コマンドリファレンス」の章を参照してください。

pmrep コマンド

次の表に、pmrep コマンドの更新されたオプションの説明を示します。

コマンド	説明
検証	以下の更新されたオプションが含まれます。 -n (object_name)。必須。検査するオブジェクトの名前。-i 引数を使用している場合はこのオプションを使用しないでください。 再利用不可能なセッションを検証する場合は、ワークフロー名を含めます。ワークフロー名とセッション名を以下の形式で入力します。 <ワークフロー名>.<セッションインスタンス名> 再利用不可能なワークレットの再利用不可能なセッションを検証する場合は、次の形式で、ワークフロー名、ワークレット名、およびセッション名を入力します。 <ワークフロー名>.<ワークレット名>.<セッションインスタンス名>

詳細については、*『Informatica 10.1.1 コマンドリファレンス』*の「pmrep コマンドリファレンス」の章を参照してください。

Enterprise Information Catalog

ここでは、Enterprise Information Catalog バージョン 10.1.1 の新機能について説明します。

Business Glossary の統合

バージョン 10.1.1 では、Analyst ツールのビジネス用語集が Enterprise Information Catalog に完全に統合されました。

ビジネス用語集アセットに対しては、次のタスクを実行できます。

ビジネス用語集アセットをカタログで表示する。

Enterprise Information Catalog で、ビジネス用語、カテゴリ、またはポリシーを検索して、そのすべての詳細を表示できます。ビジネス用語の詳細を表示する場合、Enterprise Information Catalog には、用語集アセットやテクニカルアセットのほか、そのビジネス用語が関係するその他のアセット（Metadata Manager オブジェクトなど）も表示されます。

カタログでビジネス用語集アセットを表示したときは、Analyst ツールのビジネス用語集でアセットを開き、詳細な分析を行うことが可能です。

ビジネス用語にアセットを関連付ける。

テクニカルアセットにビジネス用語を関連付けると、カタログでアセットを容易に理解および確認できます。例えば、「mv_dt.」という名前のリレーショナルテーブルにビジネス用語「Movie Details」を関連付けます。この場合、Enterprise Information Catalog では、検索結果、［アセットの詳細］ビュー、状況によってはリネージュおよび影響図のアセット名の隣に、「Movie Details」という用語が表示されます。

アセットに用語を関連付ける場合、Enterprise Information Catalog は、データドメイン検出に基づいて、関連付けに対するインテリジェントな推奨事項を提供します。

ビジネス用語集アセットの詳細については、*『Informatica 10.1.1 Enterprise Information Catalog ユーザーガイド』*の「アセットの表示」の章を参照してください。

カラム類似度プロファイリング

バージョン 10.1.1 では、カラム類似度プロファイリングの設定および実行が可能です。カラム類似度プロファイリングは、データソースから抽出したメタデータを準備して、エンタープライズデータの類似カラムを検出することを意味します。類似カラムにデータドメインを添付すると、Enterprise Information Catalog で類似データをより高速かつ効率的に検索できます。

Enterprise Information Catalog は、次のリソーススキャナについて、カラム類似度プロファイリングをサポートしています。

- Amazon Redshift
- Amazon S3
- Salesforce
- HDFS
- Hive
- IBM DB2
- IBM DB2 for z/OS
- IBM Netezza
- JDBC

- Microsoft SQL Server
- Oracle
- Sybase
- Teradata
- SAP

データドメインおよびデータドメイングループ

バージョン 10.1.1 では、Enterprise Information Catalog でデータドメインとデータドメイングループを作成できます。データドメイングループ内では、論理データドメインをグループ化できます。

データドメインは、カラムデータまたはカラム名のセマンティクスに基づいた、定義済みまたはユーザー定義のモデルリポジトリオブジェクトです。例として、社会保障番号、電話番号、クレジットカード番号などがあります。

データドメインは、Informatica Analyst ツールまたは Informatica Developer tool で定義されたデータルールまたはカラム名ルールに基づいて作成できます。また、カタログの既存のカラムに基づいて作成することもできます。近接ルールを定義して、カタログで設定された既存のデータドメインから、新しいデータドメインの推測を設定できます。

リネージュおよび影響分析

バージョン 10.1.1 では、リネージュおよび影響図の機能が強化されました。[リネージュおよび影響] ビューには影響のサマリも表示され、調査対象アセットに影響を与えるアセットと調査対象アセットの影響を受けるアセットが一覧表示されます。

[リネージュおよび影響] ビューは、次のように強化されています。

図の強化

リネージュおよび影響図は、次のように強化されています。

- デフォルトでは、リネージュおよび影響図には、基点、調査対象アセット、およびデータの宛先が表示されます。スライダコントロールを使用して、シードアセットからの距離に基づき中間アセットを 1 つずつ表示することも、図を完全に展開することもできます。また、特定のデータフローパス内のアセットをすべて展開することもできます。
- 調査対象アセットの子アセットをカラムレベルまたはフィールドレベルで表示できます。アセットに対してドリルダウンを実行すると、選択した子アセットと、子アセットのリンク先のアセットが図に表示されます。
- 図には、テクニカルアセットに関連付けられたビジネス用語を表示できます。
- 図は、印刷したり、Scalable Vector Graphics（.svg）ファイルにエクスポートしたりできます。

影響分析

アセットの [リネージュおよび影響] ビューを開いたとき、図表示から表形式のアセットのサマリに切り替えることができます。表形式のアセットのサマリには、調査対象アセットに影響を与えるアセットと、調査対象アセットの影響を受けるアセットのすべてが一覧表示されます。アセットのサマリを Microsoft Excel ファイルにエクスポートして、レポートを作成したり、データを詳細に分析したりできます。

リネージュおよび影響分析の詳細については、*『Informatica 10.1.1 Enterprise Information Catalog ユーザーガイド』* の「リネージュおよび影響の表示」の章を参照してください。

ユーザーおよびユーザーグループの権限

バージョン 10.1.1 では、Enterprise Information Catalog で設定されたリソースに対するユーザーおよびユーザーグループの権限を設定できます。Enterprise Information Catalog でリソースメタデータを表示する権限、または Enterprise Information Catalog でリソースメタデータを表示およびリッチ化する権限を指定できます。また、特定のユーザーおよびユーザーグループについて、Enterprise Information Catalog でリソースメタデータを表示またはリッチ化する権限を拒否することもできます。

新しいリソースタイプ

バージョン 10.1.1 では、次のタイプのデータソース用のリソースを作成できます。

Oracle Business Intelligence

分析機能とレポート機能を備えた Oracle の Business Intelligence ツールからメタデータを抽出します。

Informatica Master Data Management

Informatica Master Data Management から組織内の重要な情報に関するメタデータを抽出します。

Microsoft SQL Server **統合サービス**

Microsoft SQL Server 統合サービスからデータ統合およびワークフローアプリケーションに関するメタデータを抽出します。

SAP

複数のビジネスアプリケーションおよびソリューションを統合する SAP アプリケーションプラットフォームからメタデータを抽出します。

Hive **と** Amazon Elastic MapReduce

Hive リソースを使用して Amazon Elastic MapReduce 内のファイルからメタデータを抽出します。

Hive **と** Azure HDInsight

Hive リソースを使用して Azure HDInsight 内のファイルからメタデータを抽出します。

シノニム定義ファイル

バージョン 10.1.1 では、シノニム定義ファイルを Enterprise Information Catalog にアップロードできます。シノニム定義ファイルには、カタログのテーブル名、カラム名、データドメイン、およびその他のアセットに定義されたシノニムが含まれています。定義されたシノニムを使用して、Enterprise Information Catalog のアセットを検索できます。

ユニバーサル接続フレームワーク

バージョン 10.1.1 では、Enterprise Information Catalog にユニバーサル接続フレームワークが採用されています。このフレームワークを使用してカスタムリソースを構築し、MITI でサポートされるさまざまなデータソースからメタデータを抽出できます。

Informatica Analyst

ここでは、バージョン 10.1.1 の新しい Analyst ツール機能について説明します。

プロファイル

ここでは、プロファイルおよびスコアカードで使用できる Analyst ツールの新機能について説明します。

スコアカードでのドリルダウン

バージョン 10.1.1 では、スコアカードダッシュボードでデータ系列またはデータポイントをクリックすると、そのデータ系列またはデータポイントにマッピングするスコアカードがアセットリストペインに表示されます。

スコアカードの詳細については、*『Informatica 10.1.1 データ検出ガイド』*の「Informatica Analyst のスコアカード」の章を参照してください。

Informatica のインストール

ここでは、バージョン 10.1.1 の新しいインストール機能について説明します。

Informatica Upgrade Advisor

バージョン 10.1.1 では、アップグレードを実行する前に、Informatica Upgrade Advisor を実行し、ドメイン内に競合するサービスや廃止されたサービスがないか確認できます。

Upgrade Advisor の詳細については、*『Informatica アップグレードガイド』*を参照してください。

Intelligent Data Lake

ここでは、バージョン 10.1.1 の新しい Intelligent Data Lake 機能について説明します。

外部ソース内のテーブルのデータプレビュー

バージョン 10.1.1 では、外部（Hadoop データレイク外）テーブルのサンプルデータをプレビューできます（これらのソースがカタログ化されている場合）。管理者は、Sqoop との JDBC 接続を構成してアナリストに必要な権限を提供する必要があります。アナリストは、これらの接続を使用してデータソースに接続し、データレイクにないアセットからデータを表示できます。

詳細については、*『10.1.1 Intelligent Data Lake ユーザーガイド』*の「データの検出」の章を参照してください。

外部ソースのテーブルからのデータのインポート

バージョン 10.1.1 では、Oracle や Teradata などの外部ソース（Hadoop データレイク外）のテーブルからデータをデータレイクにインポートできます（これらのソースがすでにカタログ化されている場合）。管理者は、外部ソースへの Sqoop と JDBC 接続を構成して、アナリストへのアクセスを提供する必要があります。アナリストは、これらの接続を使用してデータアセットをプレビューし、ニーズに基づいてレイクにインポートできます。

詳細については、*『10.1.1 Intelligent Data Lake ユーザーガイド』*の「データの検出」の章を参照してください。

外部ターゲットへのデータのエクスポート

バージョン 10.1.1 では、Oracle や Teradata などの外部ターゲット（Hadoop データレイク外）にデータアセットまたはパブリケーションをエクスポートできます。管理者は、外部ソースへの Sqoop と JDBC 接続を構成して、アナリストへのアクセスを提供する必要があります。アナリストはこれらの接続を使用して、データアセットを外部データベースにエクスポートできます。

詳細については、『*10.1.1 Intelligent Data Lake ユーザーガイド*』の「データの検出」の章を参照してください。

データ準備のためのサンプリング条件の設定

バージョン 10.1.1 では、特定のデータアセットに対するデータ準備のニーズに最適なサンプリング条件を指定できます。準備中にいくつかのカラムのみを含めるように選択し、データをフィルタ処理して、サンプルする行数を選択し、サンプルとしてランダムまたは最初の N 行を選択できます。

詳細については、『*10.1.1 Intelligent Data Lake ユーザーガイド*』の「データの準備」の章を参照してください。

ワークシートでのルックアップの実行

バージョン 10.1.1 では、ルックアップを実行できます。ルックアップ関数を使用して、別のシート内のキーカラムを検索し、そのルックアップ先のシート内の対応する他のカラムの値をフェッチします。

詳細については、『*10.1.1 Intelligent Data Lake ユーザーガイド*』の「データの準備」の章を参照してください。

TDE ファイルとしてダウンロードする

バージョン 10.1.1 では、データレイクアセットのデータを TDE ファイルとしてダウンロードできます。Tableau でダウンロードしたファイルを直接開くことができます。任意のデータアセットを検索し、CSV ファイルまたは TDE ファイルとしてダウンロードできます。

詳細については、『*10.1.1 Intelligent Data Lake ユーザーガイド*』の「データの検出」の章を参照してください。

Sentry と Ranger のサポート

バージョン 10.1.1 では、Intelligent Data Lake は Cloudera および Hortonworks で Sentry と Ranger をサポートします。Ranger と Sentry は、Cloudera および Hortonworks できめ細かいレベルのアクセス制御を管理するための一元的なセキュリティフレームワークを提供します。データのアクセスを制御するための認証規則またはポリシーを作成できます。Sentry と Ranger は、SQL ベースのデータレイクアセットの承認をサポートします。

マッピング

ここでは、バージョン 10.1.1 の新しいマッピング機能について説明します。

Informatica マッピング

ここでは、バージョン 10.1.1 の新しい Informatica マッピング機能について説明します。

パラメータファイルへのパラメータのエクスポート

Developer tool から、マッピングパラメータファイルまたはワークフローパラメータファイルをエクスポートできます。Developer tool で定義したマッピングパラメータやワークフローパラメータを含むパラメータファイルをエクスポートできます。Developer tool では、パラメータファイルは.xml 形式で作成されます。パラメータは、マッピングの **[パラメータ]** タブまたはワークフローの **[パラメータ]** タブからエクスポートします。デプロイされたマッピングまたはワークフローを実行するときは、パラメータファイルを使用します。

詳細については、*『Informatica Developer 10.1.1 マッピングガイド』*の「マッピングパラメータ」の章、または *『Informatica Developer 10.1.1 ワークフローガイド』*の「ワークフローパラメータ」の章を参照してください。

Metadata Manager

ここでは、バージョン 10.1.1 の新しい Metadata Manager 機能について説明します。

Cloudera Navigator リソースのデータセットの抽出

バージョン 10.1.1 では、Metadata Manager は、Cloudera Navigator から HDFS データセットを抽出できます。Metadata Manager には、HDFS データセット論理グループ内にあるメタデータカタログのデータセットが表示されます。

Cloudera Navigator リソースの設定の詳細については、*『Informatica 10.1.1 Metadata Manager 管理者ガイド』*の「データベース管理リソース」の章を参照してください。

Informatica Platform リソースのマッピングの抽出

バージョン 10.1.1 では、Informatica Platform リソースは、デプロイされたワークフローのマッピングのメタデータを抽出できます。

バージョン 10.1.1 アプリケーションをベースにした Informatica Platform リソースは、アプリケーションに直接デプロイされたマッピングのメタデータのほか、デプロイされたワークフローのマッピングのメタデータも抽出できます。

Metadata Manager は、デプロイされたワークフローのマッピングを抽出するときに、ワークフロー名とマッピングタスク名をプレフィックスとしてマッピング名に追加します。Metadata Manager には、マッピング論理グループ内にあるメタデータカタログのマッピングが表示されます。

Informatica Platform リソースの詳細については、*『Informatica 10.1.1 Metadata Manager 管理者ガイド』*の章「データ統合リソース」を参照してください。

PowerExchange アダプタ

ここでは、バージョン 10.1.1 の新しい PowerExchange アダプタ機能について説明します。

PowerExchange® Adapters for Informatica

ここでは、バージョン 10.1.1 の新しい Informatica アダプタ機能について説明します。

PowerExchange for Amazon Redshift

バージョン 10.1.1 では、PowerExchange for Amazon Redshift を使用して、Blaze エンジン上でマッピングを実行できます。マッピングを実行すると、データ統合サービスによってマッピングが Hadoop クラスタにプッシュされ、Blaze エンジン上でマッピングが処理されて、パフォーマンスが大幅に向上します。

詳細については、『*Informatica PowerExchange for Amazon Redshift 10.1.1 ユーザーガイド*』を参照してください。

PowerExchange for Cassandra

バージョン 10.1.1 では、PowerExchange for Cassandra は、次の機能をサポートします。

- PowerExchange for Cassandra で使用できる高度な ODBC ドライバ設定を次に示します。
  - 負荷分散ポリシー。指定した DC 認識ポリシーまたはラウンドロビンポリシーに基づいて、Cassandra クラスタのノードにクエリを分散する方法を決定します。
  - フィルタリング。ドライバの接続先を事前定義済みの一連のホストに制限します。
- ODBC ドライバで次の引数を有効にすると、パフォーマンスを最適化できます。
  - トークン認識。クエリの待ち時間を短縮し、Cassandra ノードの負荷を低減します。
  - 待ち時間認識。クエリを送信している間、パフォーマンスが低い Cassandra ノードを無視します。
  - NULL 値挿入。INSERT 文で NULL 値を指定できるようにします。
  - 大文字小文字の区別。大文字と小文字を区別して、スキーマ、テーブル、およびカラムの名前を指定できるようにします。
- date、smallint、tinyint の各データ型を含む Cassandra のソースおよびターゲットを処理できます

詳細については、『*Informatica PowerExchange for Cassandra 10.1.1 ユーザーガイド*』を参照してください。

PowerExchange for HBase

バージョン 10.1.1 では、PowerExchange for HBase を使用して、Blaze エンジンまたは Spark エンジン上でマッピングを実行できます。マッピングを実行すると、データ統合サービスによってマッピングが Hadoop クラスタにプッシュされ、選択したエンジン上でマッピングが処理されて、パフォーマンスが大幅に向上します。

詳細については、『*Informatica PowerExchange for HBase 10.1.1 ユーザーガイド*』を参照してください。

PowerExchange for Hive

バージョン 10.1.1 では、ネイティブ環境のマッピングで、Hive データオブジェクトに対するルックアップトランスフォーメーションを設定できます。

詳細については、『*Informatica PowerExchange for Hive 10.1.1 ユーザーガイド*』を参照してください。

PowerCenter®用 PowerExchange アダプタ

ここでは、バージョン 10.1.1 の PowerCenter アダプタの新機能について説明します。

PowerExchange for Amazon Redshift

バージョン 10.1.1 では、PowerExchange for Amazon Redshift で次のタスクを実行できます。

- Amazon Redshift のソースおよびターゲットに対してパーティション化を設定できます。パーティション情報を設定し、実行時に作成するパーティションの数を PowerCenter 統合サービスで判別できるようにします。

- マッピングにパイプラインルックアップトランスフォーメーションを含めることができます。
- 接続タイプが ODBC で、Redshift として ODBC サブタイプが選択されている場合、PowerCenter 統合サービスは、式、アグリゲータ、演算子、共有体、ソータ、およびフィルタの各機能を Amazon Redshift のソースおよびターゲットにプッシュできます。
- マッピングで詳細フィルタプロパティを設定できます。
- マッピングのソースオブジェクトとターゲットオブジェクトに対して、Pre-SQL クエリと Post-SQL クエリを設定できます。
- Amazon Redshift テーブルから個別の行を選択してデータをソートするように、ソーストランスフォーメーションを設定できます。
- マッピングでソーステーブルとターゲットテーブルの名前をパラメータ化して、テーブル名を上書きできます。
- マッピングのソースオブジェクトとターゲットオブジェクトに対して SQL クエリを定義し、デフォルトクエリを上書きできます。Amazon Redshift データベースでサポートされている SQL 文を入力できます。

詳細については、*『Informatica 10.1.1 PowerExchange for Amazon Redshift PowerCenter 用ユーザーガイド』*を参照してください。

PowerExchange for Cassandra

バージョン 10.1.1 では、PowerExchange for Cassandra は、次の機能をサポートします。

- PowerExchange for Cassandra で使用できる高度な ODBC ドライバ設定を次に示します。
  - 負荷分散ポリシー。指定した DC 認識ポリシーまたはラウンドロビンポリシーに基づいて、Cassandra クラスタのノードにクエリを分散する方法を決定します。
  - フィルタリング。ドライバの接続先を事前定義済みの一連のホストに制限します。
- ODBC ドライバで次の引数を有効にすると、パフォーマンスを最適化できます。
  - トークン認識。クエリの待ち時間を短縮し、Cassandra ノードの負荷を低減します。
  - 待ち時間認識。クエリを送信している間、パフォーマンスが低い Cassandra ノードを無視します。
  - NULL 値挿入。INSERT 文で NULL 値を指定できるようにします。
  - 大文字小文字の区別。大文字と小文字を区別して、スキーマ、テーブル、およびカラムの名前を指定できるようにします。
- date、smallint、tinyint の各データ型を含む Cassandra のソースおよびターゲットを処理できます。

詳細については、*『Informatica PowerExchange for Cassandra 10.1.1 PowerCenter 用ユーザーガイド』*を参照してください。

PowerExchange for Vertica

バージョン 10.1.1 では、PowerExchange for Vertica は、GZIP 形式の圧縮データをサポートしています。バルクモードを使用して大量のデータを Vertica ターゲットに書き込むとき、ステージングファイルを作成するようにセッションを構成することができます。UNIX オペレーティングシステムで、ファイルステージングを有効にするとき、GZIP 形式でデータを圧縮することもできます。データを圧縮することで、ネットワークで転送するデータのサイズを減らし、セッションのパフォーマンスを上げることができます。

データを圧縮するには、PowerExchange for Vertica プラグインを PowerCenter リポジトリに再登録する必要があります。

詳細については、*『Informatica PowerExchange for Vertica 10.1.1 PowerCenter 用ユーザーガイド』*を参照してください。

セキュリティ

ここでは、バージョン 10.1.1 の新しいセキュリティ機能について説明します。

カスタム Kerberos ライブラリ

バージョン 10.1.1 では、Informatica が使用するデフォルト Kerberos ライブラリではなく、カスタム Kerberos ライブラリを使用するように、Informatica ドメイン内のカスタムまたはネイティブのデータベースクライアントおよび Informatica プロセスを設定できます。

詳細については、*『Informatica 10.1.1 セキュリティガイド』*の「Kerberos 認証のセットアップ」を参照してください。

Kerberos 対応ドメインでのスケジューラサービスのサポート

バージョン 10.1.1 では、Kerberos 認証が使用されるドメインで、スケジューラサービスを使用して、マッピング、ワークフロー、プロファイル、およびスコアカードを実行できます。

Informatica Web アプリケーションへのシングルサインオン

バージョン 10.1.1 では、Security Assertion Markup Language（SAML）を使用するシングルサインオン（SSO）を設定して、Administrator ツール、Analyst ツール、および Monitoring ツールにログインできます。

Security Assertion Markup Language は、サービスプロバイダと ID プロバイダ間で認証情報と承認情報を交換するための XML ベースのデータ形式です。Informatica ドメインでは、Informatica Web アプリケーションがサービスプロバイダです。ID プロバイダは、Microsoft Active Directory Federation Services（AD FS）2.0 です。このプロバイダは、組織の LDAP または Active Directory ID ストアを使用して、Web アプリケーションユーザーを認証します。

詳細については、*『Informatica 10.1.1 セキュリティガイド』*の「Informatica Web アプリケーションへのシングルサインオン」の章を参照してください。

トランスフォーメーション

ここでは、バージョン 10.1.1 の新しいトランスフォーメーション機能について説明します。

Informatica トランスフォーメーション

ここでは、バージョン 10.1.1 の Informatica トランスフォーメーションの新しい機能について説明します。

アドレスバリデータトランスフォーメーション

ここでは、アドレスバリデータトランスフォーメーションの新機能について説明します。

アドレスバリデータトランスフォーメーションでは、次の国について住所機能が追加されました。

すべての国

バージョン 10.1.1 では、出力住所に［カウント数］ポートを追加できます。［カウント数］ポートの値は、トランスフォーメーションが対話モードまたは提案リストモードで返す一連の提案に含まれる各住所の位置を示します。

例えば、［カウント数］ポートは一連の住所候補の最初の住所に対して 1 を返します。2 番目の住所に対しては、2 を返します。アドレス検証が返す住所ごとに、数値が 1 ずつ増えます。

［カウント数］ポートは、［ステータス情報］ポートグループにあります。

中国

複数言語の住所の解析および検証

バージョン 10.1.1 では、有効な中国の住所の道路名と方位情報を、文字変換されたラテン語スクリプト（ピンイン式）または英語で返すように、アドレスバリデータトランスフォーメーションを設定できます。このトランスフォーメーションでは、繁体字スクリプトの住所の他の要素が返されます。

出力言語を指定するには、トランスフォーメーションで［優先される言語］詳細プロパティを設定します。

提案リストモードでの中国の住所に対する単一行の検証

バージョン 10.1.1 では、高速完了モードで単一行に入力した中国の住所に対して有効な提案を返すように、アドレスバリデータトランスフォーメーションを設定できます。単一行に住所を入力するには、［複数行］ポートグループから［住所の正式表記］ポートを選択します。繁体字スクリプトに住所を入力します。

住所の一部を入力すると、トランスフォーメーションにより、入力した住所に対する住所提案が 1 つ以上返されます。有効な住所を完全に入力すると、トランスフォーメーションにより、参照データベースから有効なバージョンの住所が返されます。

アイルランド

複数言語の住所の解析および検証

バージョン 10.1.1 では、アイルランドの住所の番地、市区町村、国の情報を、アイルランド語で読み取りおよび書き込みするように、アドレスバリデータトランスフォーメーションを設定できます。

アイルランドの郵便サービスである An Post は、英語の住所だけではなく、アイルランド語の情報も管理しています。入力住所にアイルランド語の番地、市区町村、国の情報を含めたり、有効な英語バージョンの住所を取得したりできます。英語の住所を入力して、アイルランド語の番地、市区町村、国の情報を含む住所を取得できます。アドレス検証では、他のすべての情報は英語で返されます。

出力言語を指定するには、トランスフォーメーションで［優先される言語］詳細プロパティを設定します。

アイルランドの住所のルーフトップ地理座標

バージョン 10.1.1 では、アイルランドの住所のルーフトップ地理座標を返すように、アドレスバリデータトランスフォーメーションを設定できます。

地理座標を返すには、［ジオコーディングの正式表記］ポートを出力住所に追加します。［ジオコーディングの正式表記］ポートは、［ジオコーディング］ポートグループにあります。ルーフトップ地理座標を指定するには、トランスフォーメーションで［Geocode データ型］詳細プロパティを設定します。

アイルランドの住所の優先記述子のサポート

バージョン 10.1.1 では、英語の次の要素を短い形式または長い形式で返すように、アドレスバリデータトランスフォーメーションを設定できます。

- 番地記述子
- 方向値

要素の設定を指定するには、トランスフォーメーションで［グローバル優先記述子］詳細プロパティを設定します。

注: アドレスバリデータトランスフォーメーションにより、すべての番地情報がアイルランド語の住所の［番地名］フィールドに書き込まれます。

イタリア

バージョン 10.1.1 では、有効なイタリアの住所に ISTAT コードを追加するように、アドレスバリデータトランスフォーメーションを設定できます。ISTAT コードには、住所が属する都道府県、市区町村、地域を特定する文字が含まれています。ISTAT コードは、イタリア国家統計局（ISTAT）が管理しています。

ISTAT コードを住所に追加するには、［ISTAT コード］ポートを選択します。［ISTAT コード］ポートは、［IT 補足］ポートグループにあります。

日本

日本の住所のジオコーディング補足

バージョン 10.1.1 では、日本の住所の標準地理座標を返すように、アドレスバリデータトランスフォーメーションを設定できます。

トランスフォーメーションでは、複数の精度レベルで地理座標を返すことができます。有効な住所に番レベルの情報が含まれている場合は、トランスフォーメーションにより、住宅番号レベルの地理座標が返されます。有効な住所に丁目レベルの情報が含まれている場合は、トランスフォーメーションにより、番地レベルの地理座標が返されます。住所に番または丁目の情報が含まれていない場合は、アドレス検証により、市区町村レベルの地理座標が返されます。

地理座標を返すには、［ジオコーディングの正式表記］ポートを出力住所に追加します。［ジオコーディングの正式表記］ポートは、［ジオコーディング］ポートグループにあります。

提案リストモードでの日本の住所の単一行の検証

バージョン 10.1.1 では、提案リストモードで単一行に入力した日本の住所に対して有効な提案を返すように、アドレスバリデータトランスフォーメーションを設定できます。また、漢字スクリプトまたはカナスクリプトに入力した住所に対する提案を取得できます。単一行に住所を入力するには、［複数行］ポートグループから［住所の正式表記］ポートを選択します。

住所の一部を入力すると、トランスフォーメーションにより、入力した住所に対する住所提案が 1 つ以上返されます。有効な住所を完全に入力すると、トランスフォーメーションにより、参照データベースから有効なバージョンの住所が返されます。

韓国

韓国の住所の改訂済みローマ字化文字変換のサポート

バージョン 10.1.1 では、アドレスバリデータトランスフォーメーションで改訂済みローマ字化システムを使用して、ハングル文字セットとラテン文字セット間で住所を変換できます。韓国の出力住所の文字セットを指定するには、［優先されるスクリプト］詳細プロパティを使用します。

韓国の住所の郵便番号検証の更新

バージョン 10.1.1 では、アドレスバリデータトランスフォーメーションにより、郵便番号を含まない完全な有効入力住所に 5 桁の郵便番号が追加されます。5 桁の郵便番号は、韓国で現在使用されている郵便番号の形式です。トランスフォーメーションでは、完全な有効区画ベース住所と完全な有効番地ベース住所に 5 桁の郵便番号を追加できます。

以前の区画ベース形式の住所を検証するには、［拡張アーカイブのマッチング］詳細プロパティを使用します。

スペイン

バージョン 10.1.1 では、有効なスペインの住所に INE コードを追加するように、アドレスバリデータトランスフォーメーションを設定できます。INE コードには、住所の都道府県、市区町村、および番地を特定する文字が含まれています。INE コードは、スペイン統計局（INE）が管理しています。

INE コードを住所に追加するには、次のポートを 1 つ以上選択します。

- INE 市区町村コード
- INE 都道府県コード
- INE 番地コード

［INE コード］ポートは、［ES 補足］ポートグループにあります。

米国

CASS Cycle O **要件のサポート**

バージョン 10.1.1 では、アドレスバリデータトランスフォーメーションにより、Coding Accuracy Support System（CASS）Cycle O 標準の提案要件をサポートする機能が追加されます。

Cycle O 標準に対応するために、トランスフォーメーションには、次の機能が含まれています。

- 私書箱および私設私書箱の識別

  米国郵政公社は、Cycle O の私書箱（PMB）の住所および私設私書箱（CMRA）の住所に対する CASS 要件を更新しました。Cycle O 標準に対応するため、アドレスバリデータトランスフォーメーションでは、CMRA の住所の私書箱番号の前に、プレフィックスとして PMB が追加されます。住所の私書箱番号の前にポンド記号（#）が付いている場合は、トランスフォーメーションにより、ポンド記号が PMB に変換されます。Cycle O 標準に準拠するため、トランスフォーメーションでは、住所の Delivery Point Validation（DPV）データを検証する際に PMB 番号は使用されません。

- 私書箱番地住所（PBSA）を識別するための［DPV PBSA インジケータ］ポート

  米国郵政公社は、私書箱の住所を番地住所の形式で認識できます。住所セットの PBSA 住所を特定するには、［DPV PBSA インジケータ］ポートを使用します。［DPV PBSA インジケータ］ポートは、［米国特有］ポートグループにあります。

  例えば、次の住所は、South Center Street の郵便局の私書箱番号 3094 を示しています。

  ```
  131 S Center St Unit 3094
  Collierville TN 38027-0419
  ```

- Form 3553 作成用の［DPV 郵便番号検証］ポート

  ［DPV 郵便番号検証］ポートは、住所が有効で、CASS Form 3553 の住所総数に含められるかどうかを示します。Delivery Point Validation に合格しても、配達可能な ZIP+4 コードが含まれていない住所は、住所総数に含めることができません。［DPV 郵便番号検証］ポートは、［米国特有］ポートグループにあります。

米国の住所の非標準の先頭行データに対する解析の改善

バージョン 10.1.1 では、アドレスバリデータトランスフォーメーションにより、非標準の郵便箱データが解析され、棟要素が作成されます。非標準データにより、大学構内の郵便箱や裁判所の法廷が識別される場合があります。

米国の住所でのグローバル優先記述子のサポート

バージョン 10.1.1 では、米国の住所の次の要素を短い形式または長い形式で返すことができます。

- 番地記述子
- 方向値
- 棟の記述子

トランスフォーメーションで返される要素の形式を指定するには、トランスフォーメーションで［グローバル優先記述子］詳細プロパティを設定します。

詳細については、*『Informatica 10.1.1 Developer トランスフォーメーションガイド』*および*『Informatica 10.1.1 アドレスバリデータポートリファレンス』*を参照してください。

書き込みトランスフォーメーション

バージョン 10.1.1 では、マッピングの既存のトランスフォーメーションから書き込みトランスフォーメーションを作成するときに、書き込みトランスフォーメーションの入力ポートのリンクのタイプを指定できます。

ポートは名前でリンクできます。また動的マッピングでは、ポートを名前でリンクすること、マッピングフローに基づいて動的ポートを作成すること、リンクポリシーに基づいて実行時にポートをリンクすることができます。

詳細については、*『Informatica 10.1.1 Developer トランスフォーメーションガイド』*の「書き込みトランスフォーメーション」の章を参照してください。

Web サービス

ここでは、バージョン 10.1.1 の新しい Web Services 機能について説明します。

Informatica Web サービス

ここでは、バージョン 10.1.1 の新しい Informatica Web サービス機能について説明します。

REST Web サービス

JSON 形式または XML 形式で Web サービスクライアントにデータを返す Informatica REST Web サービスを作成できます。

Informatica REST Web サービスは、HTTP 要求を受信して GET 操作が実行される Web サービスです。GET 操作により、データが取得されます。REST 要求は、インターネットブラウザから送信される単純な URI 文字列です。クライアントは、URI にフィルタパラメータを追加して、Web サービスの出力データを制限します。

Developer tool で、REST Web サービスリソースを定義します。REST Web サービスリソースでは、REST Web サービスリソースの応答メッセージと、応答を返すマッピングが定義されています。Informatica REST Web サービスを作成するときは、データオブジェクトからリソースを定義することも、手動でリソースを定義することもできます。

ワークフロー

このセクションでは、バージョン 10.1.1 の新しいワークフロー機能について説明します。

Informatica ワークフロー

ここでは、バージョン 10.1.1 の Informatica ワークフローの新しい機能について説明します。

終結イベント

バージョン 10.1.1 では、ワークフローに終結イベントを追加できます。終結イベントでは、終了イベントの前のワークフローが終了できるポイントを定義します。ワークフローには、終結イベントを 1 つ以上含めることができます。

ワークフローが終了するのは、タスクまたはゲートウェイが終結イベントに接続されており、タスク出力がシーケンスフローの条件を満たした場合です。終結イベントは、ワークフローの後続タスクが実行される前にワークフローを強制終了します。

後続タスクを実行する必要がないポイントにワークフローデータが到達する可能性がある場合、ワークフローに終結イベントを追加します。例えば、マッピングタスクとヒューマンタスクを含むワークフローを終了するために、終結イベントを追加する場合があります。マッピングタスクを排他ゲートウェイに接続してから、そのゲートウェイをヒューマンタスクと終結イベントに接続します。マッピングタスクでヒューマンタスクの例外レコードデータが生成される場合、ワークフローは、ヒューマンタスクのシーケンスフローに従います。マッピングタスクで例外レコードデータが生成されない場合、ワークフローは、終結イベントのシーケンスフローに従います。

詳細については、*『Informatica 10.1.1 Developer ワークフローガイド』*を参照してください。

ヒューマンタスクに対するユーザー権限

バージョン 10.1.1 では、ヒューマンタスクのデータに対するユーザー権限を設定できます。Analyst ツールでユーザーが表示できるヒューマンタスクインスタンスのデータと、実行可能なアクションのタイプは、権限によって指定されます。権限は、ワークフローを設計するときに、ヒューマンタスクのステップ内で設定できます。権限は、ステップで定義されたタスクインスタンスの表示または編集が可能なすべてのユーザーに適用されます。

デフォルトでは、Analyst ツールのユーザーは、作業対象タスクインスタンスのすべてのデータを表示し、すべてのアクションを実行できます。

表示権限と編集権限を設定できます。表示権限では、ステップで定義されたタスクインスタンスに関して Analyst ツールに表示されるデータを定義します。編集権限では、タスクインスタンスデータを更新するためにユーザーが実行できるアクションを定義します。表示権限は、編集権限よりも優先されます。あるカラムに対して編集権限を付与しても、表示権限は付与しなかった場合、Analyst ツールのユーザーは、そのカラムのデータを編集できません。

詳細については、*『Informatica 10.1.1 Developer ワークフローガイド』*を参照してください。

ヒューマンタスクインスタンス通知のワークフロー変数

バージョン 10.1.1 では、ワークフロー変数を使用して、ヒューマンタスクインスタンスに関する情報を電子メール通知に書き込めます。ユーザーがタスクインスタンスを完了、エスカレート、または再割り当てすると、この変数にタスクインスタンスに関する情報が記録されます。

変数のリストを表示するには、ヒューマンタスクを開き、ヒューマンタスクインスタンスが定義されているステップを選択します。**[通知]** ビューで、電子メール通知のメッセージ本文を選択し、 $+CTRL+SPACE キーを押します。

通知には、以下の変数が表示されます。

$taskEvent.eventTime

ワークフローエンジンがユーザーの指示を実行して、タスクインスタンスをエスカレート、再割り当て、または完了したときの時刻。

$taskEvent.startOwner

ワークフローエンジンがタスクをエスカレートまたは完了した時点でのタスクインスタンスの所有者。または、エンジンがタスクインスタンスを再割り当てした後のタスクインスタンスの所有者。

$taskEvent.status

エンジンがユーザーの指示を実行して、タスクインスタンスをエスカレート、再割り当て、または完了した後のタスクインスタンスのステータス。ステータスの名前は、READY および IN_PROGRESS です。

$taskEvent.taskEventType

エンジンが実行する指示のタイプ。変数の値は、escalate、reassign、complete です。

$taskEvent.taskId

Analyst ツールが表示するタスクインスタンス ID。

詳細については、*『Informatica 10.1.1 Developer ワークフローガイド』*を参照してください。

第 7 章

変更内容（10.1.1）

この章では、以下の項目について説明します。

- サポートの変更, 70 ページ
- Big Data, 73 ページ
- Business Glossary , 74 ページ
- データ統合サービス, 75 ページ
- データ タイプ, 75 ページ
- Informatica Analyst, 75 ページ
- Informatica Developer, 76 ページ
- マッピング, 76 ページ
- Enterprise information Catalog, 77 ページ
- Metadata Manager, 77 ページ
- PowerExchange アダプタ, 78 ページ
- トランスフォーメーション, 80 ページ
- ワークフロー, 80 ページ
- マニュアル, 81 ページ

サポートの変更

この節では、バージョン 10.1.1 のサポートの変更点について説明します。

Big Data Management Hive エンジン

バージョン 10.1.1 では、Informatica は Hive エンジンがマッピングを実行するために使用する HiveServer2 サポートを削除しました。

以前は、Hive エンジンで、Hadoop 環境でマッピングを実行するために Hive ドライバと HiveServer2 がサポートされていました。HiveServer2 と Hive ドライバは、HiveQL クエリを Hadoop クラスタで処理される MapReduce または Tez ジョブに変換します。

Big Data Management 10.1.1 をインストールまたはバージョン 10.1.1 にアップグレードする場合、Hive エンジンはマッピングを実行するときに Hive ドライバを使用します。Hive エンジンは、Hadoop 環境でマッピングを実行するために HiveServer2 をサポートしなくなりました。Hadoop クラスタで HiveServer2 サービスを使用する Hive ソースとターゲットは、引き続きサポートされます。

Hadoop 環境でマッピングを実行するには、すべてのランタイムエンジンを選択することをお勧めします。データ統合サービスは、独自のルールベースの方法を使用して、マッピングを実行する最適なエンジンを決定します。

Hadoop ディストリビューション用にランタイムエンジンを設定する方法については、『*Informatica Big Data Management 10.1.1 インストールおよび設定ガイド*』を参照してください。ランタイムエンジンでサポートされるマッピングオブジェクトについては、『*Informatica Big Data Management 10.1.1 ユーザーガイド*』を参照してください。

サポートの変更 - Big Data Management の Hadoop ディストリビューション

次の表に、サポートされている Hadoop ディストリビューションのバージョンと Big Data Management 10.1.1 の変更点を示します。

リリース日の時点で、バージョン 10.1.1 では、次の Hadoop ディストリビューションがサポートされています。

- Azure HDInsight v. 3.4
- Cloudera CDH v. 5.8
- IBM BigInsights v. 4.2
- Hortonworks HDP v. 2.5
- Amazon EMR v. 5.0

サポートされるバージョンの最新リストを確認するには、次の Informatica カスタマポータルの製品可用性マトリックスを参照してください。 https://network.informatica.com/community/informatica-network/product-availability-matrices。

MapR のサポート

バージョン 10.1.1 では、MapR クラスタでの Big Data Management のサポートが保留になっています。MapR クラスタでマッピングを実行するには、Big Data Management 10.1 を使用してください。将来のリリースでは、サポートが再開する予定です。

ドキュメントには、MapR に関する内容を例として残してあります。これらの例の構造を Hadoop ディストリビューションに適用してください。

Amazon EMR のサポート

バージョン 10.1.1 では、Big Data Management を Amazon EMR 環境にインストールできます。インストール方法は、次から選択できます。

- RPM パッケージをダウンロードして、このパッケージからインストールする。Big Data Management を Amazon EMR 環境にインストールするときは、Big Data Management の要素をローカルマシンにインストールし、モデルリポジトリサービスやデータ統合サービスなどのサービスを実行します。
- Informatica インスタンスを Amazon クラウド環境にインストールする。Amazon クラウドで Big Data Management の実装を作成するときは、Big Data Management をインストールして実行する仮想マシンをオンラインにします。

Big Data Management を Amazon EMR にインストールして設定する方法の詳細については、 *『Informatica Big Data Management インストールおよび設定ガイド』を参照してください。*

Big Data Management Spark のサポート

バージョン 10.1.1 から、サポートされるすべての Hadoop ディストリビューションで Spark エンジンを設定できるようになりました。使用する Hadoop ディストリビューションに基づいて、以下の Spark バージョンのいずれかを使用するように Big Data Management を設定できます。

- Cloudera cdh5u8 ディストリビューション向けの Cloudera Spark 1.6 および Apache Spark 2.0.1。
- すべての Hadoop ディストリビューション向けの Apache Spark 2.0.1。

詳細については、*『Informatica Big Data Management 10.1.1 インストール&環境設定ガイド』*を参照してください。

Data Analyzer

バージョン 10.1.1 では、Data Analyzer のサポートが廃止されました。Informatica では、サードパーティのレポートツールを使用して、PowerCenter と Metadata Manager のレポートを実行することを推奨しています。推奨されている SQL クエリを使用して、以前の PowerCenter バージョンに付属のすべてのレポートを構築できます。

オペレーティングシステム

バージョン 10.1.1 では、次のオペレーティングシステムのサポートが追加されました。

Solaris 11

Windows 10（Informatica クライアント）

PowerExchange for SAP NetWeaver

バージョン 10.1.1 では、PowerExchange for SAP NetWeaver のサポートで、次の変更が行われました。

サポートの変更	サポートレベル	コメント
Analytic Business Components	サポートの終了	バージョン 10.1.1 では、Analytic Business Components（ABC）機能のサポートが廃止されました。ABC リポジトリのオブジェクトを使用して、SAP データの読み取りと変換を行うことはできません。Informatica は、ABC トランスポートファイルを提供しません。
SAP R/3 バージョン 4.7	サポートの終了	バージョン 10.1.1 では、SAP R/3 4.7 システムのサポートが廃止されました。 SAP ECC バージョン 5.0 以降にアップグレードしてください。

レポートおよびダッシュボードサービス

バージョン 10.1.1 では、レポートおよびダッシュボードサービスのサポートが廃止されました。Informatica では、サードパーティのレポートツールを使用して、PowerCenter と Metadata Manager のレポートを実行することを推奨しています。推奨されている SQL クエリを使用して、以前の PowerCenter バージョンに付属のすべてのレポートを構築できます。

レポートサービス

バージョン 10.1.1 では、レポートサービスのサポートが廃止されました。Informatica では、サードパーティのレポートツールを使用して、PowerCenter と Metadata Manager のレポートを実行することを推奨してい

ます。推奨されている SQL クエリを使用して、以前の PowerCenter バージョンに付属のすべてのレポートを構築できます。

Big Data

ここでは、バージョン 10.1.1 の Big Data への変更内容について説明します。

Hadoop 環境でサポートされる関数

10.1.1 では、次のサポートの変更は、Hadoop 環境の関数に影響します。

機能	説明	変更内容
AES_DECRYPT	復号化されたデータを文字列形式に返します。	Spark エンジンでサポートされます。 以前は Blaze と Hive エンジンでのみサポートされていました。
AES_ENCRYPT	暗号化されたフォーマットでデータを返します。	Spark エンジンでサポートされます。 以前は Blaze と Hive エンジンでのみサポートされていました。
COMPRESS	zlib 1.2.1 圧縮アルゴリズムを使用してデータを圧縮します。	Spark エンジンでサポートされます。 以前は Blaze と Hive エンジンでのみサポートされていました。
CRC32	32 ビット Cyclic Redundancy Check（CRC32）の値を返します。	Spark エンジンでサポートされます。 以前は Blaze と Hive エンジンでのみサポートされていました。
DECOMPRESS	zlib 1.2.1 圧縮アルゴリズムを使用してデータを解凍します。	Spark エンジンの制限付きでサポートされます。 以前は Blaze と Hive エンジンでのみサポートされていました。
DEC_BASE64	Base64 のエンコードされた値をデコードし、データを表すバイナリデータと文字列を返します。	Spark エンジンでサポートされます。 以前は Blaze と Hive エンジンでのみサポートされていました。
ENC_BASE64	データのエンコードは、MIME（Multipurpose Internet Mail Extensions）エンコードを使用してバイナリデータを文字列データに変換します。	Spark エンジンでサポートされます。 以前は Blaze と Hive エンジンでのみサポートされていました。
MD5	入力値のチェックサムを計算します。この関数は、MD5（Message-Digest アルゴリズム 5）を使用しています。	Spark エンジンでサポートされます。 以前は Blaze と Hive エンジンでのみサポートされていました。

機能	説明	変更内容
UUID4	RFC 4122 の UUID 仕様のバリアント 4 に基づき、無作為に生成された 16 バイトのバイナリ値を返します。	制限なしの Spark エンジンでサポートされます。 以前は制限なしの Blaze エンジンと制限付きの Spark と Hive エンジンでサポートされていました。
UUID_UNPARSE	RFC 4122 に基づき、16 バイトのバイナリ値を 36 文字の文字列表現に変換します。	制限なしの Spark エンジンでサポートされます。 以前は制限なしの Blaze エンジンと制限付きの Spark と Hive エンジンでサポートされていました。

Hadoop 設定マネージャ

バージョン 10.1.1 では、Big Data Management 設定ユーティリティが次のように変更されました。

- ユーティリティの名前が Hadoop 設定マネージャに変更されました。
- Hadoop 設定マネージャは、Azure HDInsight クラスタやその他の Hadoop クラスタでの Big Data Management の設定をサポートしています。

Hadoop 設定マネージャの詳細については、 *『Informatica Big Data Management 10.1.1 インストール & 環境設定ガイド』* を参照してください。

Business Glossary

ここでは、バージョン 10.1.1 の Business Glossary への変更内容について説明します。

ファイルのエクスポートに関する制限

バージョン 10.1.1 では、Analyst ツールおよびコマンドラインで Business Glossary をエクスポートする際の動作が次のように変更されました。

Microsoft Excel **エクスポートファイルのセル内の文字の切り捨て**

用語集アセットをエクスポートするときに、Microsoft Excel の 1 つのセルに 32,767 を超える文字が含まれている場合は、Analyst ツールがセル内の文字を自動的に切り捨てて、文字数を 32,763 未満にします。

Microsoft Excel では、1 つのセルでサポートされるのは 32,767 文字までです。以前は、用語集をエクスポートした場合、1 つのセル内の文字数が 32,767 を超える長いテキストプロパティは切り捨てられ、警告なしにデータが消失しました。

エクスポートとインポートの詳細については、*『Informatica 10.1.1 Business Glossary ガイド』* の「用語集の管理」の章を参照してください。

データ統合サービス

ここでは、バージョン 10.1.1 のデータ統合サービスの変更点について説明します。

データ統合プロパティの実行オプション

バージョン 10.1.1 では、データ統合サービスの次のプロパティを編集したときに、データ統合サービスを再起動する必要がなくなりました。

- キャッシュディレクトリ
- ホームディレクトリ
- 最大並行処理
- 拒否されたファイルディレクトリ
- ソースディレクトリ
- 状態ストア
- ターゲットディレクトリ
- 一時ディレクトリ

以前は、これらのプロパティを編集した場合、データ統合サービスの再起動が必要でした。

データ タイプ

ここでは、バージョン 10.1.1 でのデータ型の変更内容について説明します。

Informatica のデータ型

ここでは、Developer tool でのトランスフォーメーションデータタイプへの変更について説明します。

倍精度浮動小数点型のデータ型

バージョン 10.1.1 では、2 つのデータ型の精度と縮尺を編集できます。スケールは精度以下にする必要があります。

以前は、精度は 15 に設定され、スケールは 0 に設定されていました。

詳細については、*『Informatica 10.1.1 Developer Tool ガイド』*の付録「データ型リファレンス」を参照してください。

Informatica Analyst

ここでは、バージョン 10.1.1 の Analyst ツールへの変更内容について説明します。

プロファイル

ここでは、プロファイルで使用できる Analyst ツールの新機能について説明します。

ランタイム環境

バージョン 10.1.1 では、ランタイム環境として Hive オプションを選択した後、Hadoop 接続を選択してプロファイルを実行します。

以前は、ランタイム環境として Hive オプションを選択した後、Hive 接続を選択してプロファイルを実行しました。

ランタイム環境の詳細については、*『Informatica 10.1.1 データ検出ガイド』*の「Informatica Analyst のカラムプロファイル」の章を参照してください。

Informatica Developer

ここでは、バージョン 10.1.1 の Developer tool への変更内容について説明します。

プロファイル

ここでは、プロファイルで使用できる Developer tool の新機能について説明します。

ランタイム環境

バージョン 10.1.1 では、ランタイム環境として Hive オプションを選択した後、Hadoop 接続を選択してプロファイルを実行します。

以前は、ランタイム環境として Hive オプションを選択した後、Hive 接続を選択してプロファイルを実行しました。

ランタイム環境の詳細については、*『Informatica 10.1.1 データ検出ガイド』*の「データオブジェクトプロファイル」の章を参照してください。

マッピング

ここでは、バージョン 10.1.1 のマッピングへの変更内容について説明します。

Informatica マッピング

ここでは、バージョン 10.1.1 の Informatica マッピングの変更内容について説明します。

動的ポートでの生成されたポートの順序変更

バージョン 10.1.1 では、次のオプションに基づいて、生成されたポートの順序を変更できます。

- グループ内のポートの順序、またはアップストリームトランスフォーメーションの動的ポートの順序。
- 動的ポートの入力ルールの順序。
- 静的ポートを使用する最も近いトランスフォーメーションのポートの順序。

デフォルトでは、アップストリームトランスフォーメーションのポートに基づいて、順序変更が行われます。

以前は、動的ポートの入力ルールの順序に基づいて、生成されたポートを順序変更できました。

詳細については、『*Informatica 10.1.1 Developer マッピングガイド*』の「動的マッピング」を参照してください。

Enterprise information Catalog

ここでは、バージョン 10.1.1 の Enterprise information Catalog への変更内容について説明します。

HDFS スキャナの機能強化

バージョン 10.1.1 では、HDFS リソーススキャナを使用して、フラットファイルタイプからメタデータを抽出できます。

［リレーション］ビュー

バージョン 10.1.1 では、選択したアセットのビジネス用語、関連する用語集アセット、関連するテクニカルアセット、および類似カラムを表示できます。

以前は、カラム、データドメイン、テーブル、ビューなどのアセットリレーションを表示できました。

［リレーション］ビューの詳細については、『*Informatica 10.1.1 Enterprise information Catalog ユーザーガイド*』の「リレーションの表示」を参照してください。

Metadata Manager

ここでは、バージョン 10.1.1 の Metadata Manager への変更内容について説明します。

Cloudera Navigator リソース

バージョン 10.1.1 では、Cloudera Navigator リソースの動作が次のように変更されました。

増分ロードの変更

Cloudera Navigator リソースの増分ロードがデフォルトで無効になりました。以前は、増分ロードがデフォルトで有効でした。

増分ロードが有効の場合、前回のメタデータロードが成功した後に、Cloudera 管理者が Cloudera Navigator でパージ操作を呼び出すと、Metadata Manager は完全なメタデータロードを実行します。

また、増分ロードを無効にした方がよい場合を説明する新しいガイドラインが用意されました。

検索クエリの変更

検索クエリを使用して、メタデータロードから、HDFS エンティティ以外のエンティティタイプも除外できます。例えば、検索クエリを使用して、YARN ジョブ実行や Oozie ジョブ実行を除外できます。

データリネージュの変更

データリネージュ図をより簡潔にするために、Metadata Manager が次のように変更されました。

- Metadata Manager は、Hive クエリテンプレートパーツのデータリネージュを表示しなくなりました。代わりに、Hive クエリテンプレートでデータリネージュ分析を実行できます。
- Hive テーブルがパーティション化されている場合、Metadata Manager は、テーブル内の各カラムと、関連する HDFS エンティティを含む親ディレクトリ間のデータリネージュを表示します。以前は、Metadata Manager は、各カラムと、関連する各 HDFS エンティティ間のデータリネージュリンクを表示しました。

Cloudera Navigator リソースの詳細については、*『Informatica 10.1.1 Metadata Manager 管理者ガイド』*の「データベース管理リソース」の章を参照してください。

Netezza リソース

バージョン 10.1.1 では、Metadata Manager で Netezza リソースの複数のスキーマがサポートされます。

Netezza リソースの以下の動作が変更されました。

- Netezza リソースを作成または編集するときは、メタデータを抽出するスキーマを選択します。スキーマは、1 つ以上選択できます。
- Metadata Manager は、メタデータカタログの Netezza オブジェクトをスキーマで再編成します。メタデータカタログにデータベースは表示されません。
- Netezza への接続の割り当てを設定するときは、接続を割り当てるスキーマを選択します。

これらの変更により、Netezza リソースは、他のタイプのリレーショナルリソースと同じように動作します。

以前は、Netezza リソースを作成または編集するときは、メタデータを抽出するスキーマを選択できませんでした。複数のスキーマを含む Netezza データベースからリソースを作成した場合、Metadata Manager は、スキーマの情報を無視しました。Metadata Manager は、メタデータカタログの Netezza オブジェクトをデータベース別に編成しました。Netezza への接続の割り当てを設定したときは、接続を割り当てるデータベースを選択しました。

Netezza リソースの詳細については、*『Informatica 10.1.1 Metadata Manager 管理者ガイド』*の「データベース管理リソース」の章を参照してください。

PowerExchange アダプタ

ここでは、バージョン 10.1.1 の PowerExchange アダプタの変更内容について説明します。

Informatica 用 PowerExchange アダプタ

ここでは、バージョン 10.1.1 の Informatica アダプタの変更内容について説明します。

PowerExchange for Hive

バージョン 10.1.1 では、PowerExchange for Hive は、次の接続モードで Hive 接続を行います。

- ソースまたはターゲットとして、Hive にアクセス
- Hive を使用して Hadoop クラスタでマッピングを実行

以前の接続モードを次に示します。

- HiveServer2 にアクセスしてマッピングを実行
- Hive CLI にアクセスしてマッピングを実行

詳細については、*『Informatica 10.1.1 PowerExchange for Hive ユーザーガイド』*を参照してください。

PowerExchange for Tableau

バージョン 10.1.1 では、PowerExchange for Tableau が次のように変更されました。

- PowerExchange for Tableau は、Informatica 10.1.1 とともにインストールされます。
  以前は、PowerExchange for Tableau を別のインストーラでインストールする必要がありました。
- Tableau Data Extract（TDE）ファイルをパブリッシュするようにターゲット操作を設定する場合、詳細プロパティの付加操作を使用して、Tableau Server および Tableau Online の既存の TDE ファイルにデータを追加できます。
  以前は、付加操作の設定では、TDE ファイルを Tableau デスクトップにしかパブリッシュできませんでした。

詳細については、*『Informatica 10.1.1 PowerExchange for Tableau ユーザーガイド』*を参照してください。

PowerCenter 用 PowerExchange アダプタ

ここでは、バージョン 10.1.1 の PowerCenter アダプタへの変更内容について説明します。

PowerExchange for Essbase

バージョン 10.1.1 では、PowerExchange for Essbase は、PowerCenter とともにインストールされます。

以前は、PowerExchange for Essbase に別のインストーラが使用されました。

詳細については、*『Informatica 10.1.1 PowerExchange for Essbase - PowerCenter 用ユーザーガイド』*を参照してください。

PowerExchange for Greenplum

バージョン 10.1.1 では、PowerExchange for Greenplum は、PowerCenter とともにインストールされます。

以前は、PowerExchange for Greenplum に別のインストーラが使用されました。

詳細については、*『Informatica 10.1.1 PowerExchange for Greenplum - PowerCenter 用ユーザーガイド』*を参照してください。

PowerExchange for Microsoft Dynamics CRM

バージョン 10.1.1 では、PowerExchange for Microsoft Dynamics CRM は、PowerCenter とともにインストールされます。

以前は、PowerExchange for Microsoft Dynamics CRM に別のインストーラが使用されました。

詳細については、*『Informatica 10.1.1 PowerExchange for Microsoft Dynamics CRM - PowerCenter 用ユーザーガイド』*を参照してください。

PowerExchange for Tableau

バージョン 10.1.1 では、PowerExchange for Tableau が次のように変更されました。

- PowerExchange for Tableau は、PowerCenter とともにインストールされます。
  以前は、PowerExchange for Tableau を別のインストーラでインストールする必要がありました。

- Tableau Data Extract（TDE）ファイルをパブリッシュするようにターゲット操作を設定する場合、Tableau Server および Tableau Online の既存の TDE ファイルにデータを追加するようにセッションプロパティの付加操作を設定できます。
  以前は、付加操作の設定では、TDE ファイルを Tableau デスクトップにしかパブリッシュできませんでした。

詳細については、*『Informatica 10.1.1 PowerExchange for Tableau - PowerCenter 用ユーザーガイド』*を参照してください。

トランスフォーメーション

ここでは、バージョン 10.1.1 で変更されたトランスフォーメーションの動作について説明します。

Informatica トランスフォーメーション

ここでは、バージョン 10.1.1 の Informatica トランスフォーメーションの変更内容について説明します。

アドレスバリデータトランスフォーメーション

バージョン 10.1.1 では、アドレスバリデータトランスフォーメーションでバージョン 5.9.0 の Informatica アドレス検証ソフトウェアエンジンが使用されます。このエンジンによって、バージョン 10.1.1 のアドレスバリデータトランスフォーメーションに追加された機能が有効になります。

以前は、このトランスフォーメーションでは、バージョン 5.8.1 のエンジンが使用されていました。

詳細については、*『Informatica 10.1.1 Developer トランスフォーメーションガイド』*および*『Informatica 10.1.1 アドレスバリデータポートリファレンス』*を参照してください。

ワークフロー

ここでは、バージョン 10.1.1 で変更されたワークフローの動作について説明します。

Informatica ワークフロー

ここでは、バージョン 10.1.1 の Informatica ワークフロー動作の変更点について説明します。

ネストされた包含ゲートウェイ

バージョン 10.1.1 では、2 つの包含ゲートウェイ間または 2 つ排他ゲートウェイ間のシーケンスフローにゲートウェイのペアを 1 つ以上追加できます。

以前は、2 つの包含ゲートウェイ間のシーケンスフローにゲートウェイのペアを追加した場合、ワークフローを無効にしました。

詳細については、*『Informatica 10.1.1 Developer ワークフローガイド』*を参照してください。

マニュアル

ここでは、バージョン 10.1.1 のマニュアルの変更点について説明します。

Metadata Manager マニュアル

レポートおよびダッシュボードサービスと JasperReports Server のサポートが終了したため、バージョン 10.1.1 では、*『Informatica Metadata Manager リポジトリレポートリファレンス』*は使用されません。

PowerExchange for SAP NetWeaver マニュアル

Analytic Business Components 機能のサポートが終了したため、バージョン 10.1.1 では、次のガイドは使用されません。

- *Informatica PowerExchange for SAP NetWeaver Analytic Business Components ガイド*
- *Informatica PowerExchange for SAP NetWeaver Analytic Business Components トランスポートバージョンのインストールの注意*

第 8 章

リリースタスク（10.1.1）

- Metadata Manager, 82 ページ

Metadata Manager

ここでは、バージョン 10.1.1 の Metadata Manager のリリースタスクについて説明します。

ビジネスインテリジェンスリソース

バージョン 10.1.1 では、一部のビジネスインテリジェンスリソースの **［ワーカースレッド］** 設定プロパティが、**［マルチスレッド］** 設定プロパティに置き換えられています。以前のバージョンの Metadata Manager で［ワーカースレッド］プロパティを設定していた場合は、アップグレード後に［マルチスレッド］プロパティを同じ値に設定してください。

［マルチスレッド］プロパティの値を更新するのは、次のリソースです。

- Business Objects
- Cognos
- Oracle Business Intelligence Enterprise Edition
- Tableau

［マルチスレッド］設定プロパティは、Metadata Manager Agent がメタデータを非同期で抽出する際に使用するワーカースレッドの数を制御します。アップグレード後に［マルチスレッド］プロパティを更新しない場合は、Metadata Manager Agent がワーカースレッドの数を計算します。Metadata Manager Agent は、Metadata Manager Agent を実行しているマシンの JVM アーキテクチャと有効な CPU コアの数に基づいて、1-6 個のスレッドを割り当てます。

［マルチスレッド］設定プロパティの詳細については、*『Informatica 10.1.1 Metadata Manager 管理者ガイド』* の「ビジネスインテリジェンスリソース」の章を参照してください。

Cloudera Navigator リソース

バージョン 10.1 では、Cloudera Navigator サーバーの Java ヒープサイズと、Metadata Manager サービスの最大ヒープサイズを設定する必要があります。ヒープサイズの設定が適切でないと、メタデータのロードが失敗する場合があります。

Cloudera Navigator サーバーの Java ヒープサイズは、2 GB 以上に設定します。ヒープサイズが十分でないと、リソースのロードが失敗し、接続が拒否されたというエラーが表示されます。

Metadata Manager サービスの最大ヒープサイズは、4 GB 以上に設定します。複数のリソースロードを同時に実行する場合は、最大ヒープサイズをリソースロードごとに 1 GB 以上大きくします。例えば、2 つの Cloudera Navigator リソースを同時にロードする場合は、最大ヒープサイズを 2 GB 大きくします。したがって、Metadata Manager サービスの **[最大ヒープサイズ]** プロパティは、6144 MB（6 GB）以上に設定します。最大ヒープサイズが十分でないと、ロードが失敗し、メモリ不足エラーが発生します。

Cloudera Navigator リソースの詳細については、*『Informatica 10.1.1 Metadata Manager 管理者ガイド』*の「データベース管理リソース」の章を参照してください。

Tableau リソース

バージョン 10.1.1 では、Tableau モデルに小さな変更点があります。したがって、アップグレード後に、Tableau リソースをパージおよびリロードする必要があります。

Tableau リソースの詳細については、*『Informatica 10.1.1 Metadata Manager 管理者ガイド』*の「ビジネスインテリジェンスリソース」の章を参照してください。

パート II: バージョン 10.1

この部には、以下の章があります。

- 新製品（10.1）, 85 ページ
- 新機能（10.1）, 89 ページ
- 変更内容（10.1）, 113 ページ
- リリースタスク（10.1）, 123 ページ

第 9 章

新製品（10.1）

この章では、以下の項目について説明します。

- Intelligent Data Lake, 85 ページ
- PowerExchange アダプタ, 88 ページ

Intelligent Data Lake

ビッグデータ技術の広がりを受け、多くの組織が、データ管理の問題を解決するために、データレイクと呼ばれる新しい情報ストレージモデルを採用するようになりました。データレイクモデルは、ビジネスインテリジェンス、分析、法規制への適合、不正検出など、さまざまなケースで採用されつつあります。

データレイクとは、各種のソースから送信された Raw データやエンタープライズデータを保存する共有リポジトリのことです。多くの場合、データレイクは、分散 Hadoop クラスタ上に構築され、経済性と拡張性を備えたパーシスタンスおよびコンピュートレイヤとして機能します。Hadoop を使用すると、組織の内外にある各種エンタープライズシステムからの膨大な構造化データおよび非構造化データを保存できるようになります。レイクには、Raw データ、絞り込み済みデータ、マスタデータ、トランザクションデータ、ログファイル、マシンデータなどを含めることができます。

組織は、さまざまなタイプのユーザーが、すべてのエンタープライズデータや、Hadoop データレイク内部のデータ、外部のデータにアクセスし、操作できるようにする手段を提供することにも関心があります。例えば、基盤技術の複雑さを意識したり、コーディングスキルを習得したりせずに、データアナリストやデータサイエンティストが、データレイクを使用して特定目的のセルフサービス分析を行い、事業の技術革新を推し進められるようにしたいと考えています。IT およびデータガバナンススタッフは、企業内でのデータ関連のユーザーアクティビティを監視する必要があります。インテリジェンスを備えた強力なデータ管理およびガバナンス基盤がなければ、データレイクは単なるデータのたまり場になってしまいます。

バージョン 10.1 では、Intelligent Data Lake が導入されました。これは、Hadoop ベースのデータレイクからより高い価値を引き出し、組織のすべてのユーザーがデータを利用できるようにするための新製品です。

Intelligent Data Lake は、データアナリストやデータサイエンティスト向けに開発された、ビッグデータの検出および準備を行うための共同セルフサービスソリューションです。この製品により、アナリストは、Raw データを迅速に検出して洞察を得ることができ、IT は、品質、可視性、およびガバナンスを確保することができます。Intelligent Data Lake を使用すると、アナリストは、データの検出や準備に費やす時間を削減して、分析にかける時間を増やすことができます。

Intelligent Data Lake には、次の利点があります。

- データアナリストは、セマンティック検索やスマートレコメンデーション機能を使用して、データレイクの内部および外部にある信頼できるデータアセットを迅速かつ簡単に検索したり、調査したりできます。

- データアナリストは、コーディングスキルを身に付けなくても、Excel のようなスプレッドシートのインターフェイスを使用して、セルフサービス方式でデータレイク内のデータを変換、クレンジング、およびリッチ化できます。
- データアナリストは、データをパブリッシュしたり、コミュニティの他のメンバと知識を共有したり、自分で選んだ BI などの分析ツールを使ってデータを分析したりできます。
- IT およびガバナンススタッフは、レイクのデータ使用に関するユーザーアクティビティを監視できます。
- IT は、データリネージュを追跡することにより、データが正しいソースから提供され、正しいターゲットに送信されることを確認できます。
- IT は、データレイクに対して適切なセキュリティとガバナンスを実施できます。
- IT は、データアナリストが実行する作業をデータ配信プロセスとして操作化し、その作業を反復したり、スケジュール設定したりできます。

Intelligent Data Lake は、次の機能を備えています。

検索

- スマート検索や推論ベースの結果を使用して、レイクや他のエンタープライズシステム内のデータを検索できます。
- システム属性およびカスタム定義分類を使用して、動的ファセットに基づきアセットをフィルタリングできます。

エクスプローラ

- アセットの概要、例えば、カスタム属性、データ品質のプロファイリング統計、ビジネスコンテンツのデータドメイン、使用情報などを確認できます。
- クラウドソーシングメタデータの強化およびタギングにより、ビジネスコンテキスト情報を追加できます。
- ユーザーの資格情報に基づいて、サンプルデータをプレビューし、データアセットを把握できます。
- アセットのリネージュを取得して、データの出所と行先を理解し、データの信頼性を確保できます。
- 他のテーブルやビュー、ユーザー、レポート、データドメインとの関連付けに基づき、データアセットが企業内の他のアセットとどのような関係があるのかを把握できます。
- リネージュビューとリレーションビューを使用して、その他のアセットを段階的に検出できます。

取得

- ウィザードベースのインターフェイスを使用して、パーソナル区切りファイルをレイクにアップロードできます。
  アップロード用の Hive テーブルは、最適な形式で自動的に作成されます。
- アップロードされたデータについて、アセットを作成、追加、上書きできます。

連携

- プロジェクトにデータアセットを追加して、作業を編成できます。
- さまざまなロール（共同所有者、編集者、観察者など）およびさまざまな特権が設定されたプロジェクトにコラボレータを追加できます。

推奨事項

- 他のユーザーの行動と共有知識に基づく推奨事項を使用して、生産性を高めることができます。
- プロジェクトで使用可能な代替アセットに関する推奨事項を取得できます。
- プロジェクトで使用可能な追加アセットに関する推奨事項を取得できます。
- 推奨事項は、プロジェクトの内容に応じて変化します。

準備

- Excel に似た環境で、サンプルデータを使用して、トランスフォーメーションを対話式に指定できます。
- シートレベルおよびカラムレベルの概要（値の分布や数値と日付の分布など）を確認できます。
- トランスフォーメーションをレシピステップの形式で追加し、シート上で直ちに結果を確認できます。
- 文字列演算、数値演算、日付演算、論理演算を使用して、カラムレベルのデータクレンジングおよびデータトランスフォーメーションを実行できます。
- シートレベルの演算を実行し、データの結合、マージ、集計、またはフィルタリングを行えます。
- 基礎となるテーブルのデータが変更された場合に、ワークシートのサンプルが更新されます。
- 既存のシートからシートを派生させ、親シートが変更されたときにアラートを受け取ることができます。
- トランスフォーメーションのステップは、すべてレシピに保存されます。これらのステップは、対話式に再生できます。

パブリッシュ

- 基盤となる Hadoop システムの処理能力を利用して、大規模なデータトランスフォーメーションを実行できます。コーディングやスクリプト作成は不要です。
- レイク内に実際にある巨大なデータセットに対してデータ準備ステップを実行し、新しいデータアセットを作成できます。
- レイク内のデータを目的のデータベースの Hive テーブルとしてパブリッシュできます。
- パブリッシュされたデータについて、アセットを作成、追加、上書きできます。

データアセットの操作

- レイクから CSV ファイルにデータをエクスポートできます。
- データを別のデータベースまたはテーブルにコピーできます。
- ユーザーの資格情報で許可されている場合は、データアセットを削除できます。

マイアクティビティ

- アップロードアクティビティとそのステータスを追跡できます。
- パブリケーションとそのステータスを追跡できます。
- エラーが発生した場合にログファイルを表示し、必要に応じて IT 管理者と情報を共有できます。

IT **監視**

- 監査データベースに加えてレポートを作成することにより、ユーザー、データアセット、およびプロジェクトアクティビティを追跡できます。
- 上位のアクティブユーザー、サイズを基準にした上位のデータセット、以前の更新、最も再利用されたアセット、最もアクティブなプロジェクトなどの情報を確認できます。

IT **運用化**

- アナリストが実行した特定目的の作業を運用可能にすることができます。
- Informatica Developer を使用して、アナリストが作成したレシピから変換された Informatica Big Data 管理マッピングをカスタマイズおよび最適化できます。
- データアセットが適切なタイミングで適切な宛先に提供されるように、Informatica Big Data 管理マッピングをデプロイ、スケジュール、および監視できます。
- データレイク内の各種のデータベースとテーブルにアクセスするために、エンタイトルメントをセキュリティポリシーに確実に準拠させることができます。

PowerExchange アダプタ

Informatica 用 PowerExchange アダプタ

ここでは、バージョン 10.1 の新しい Informatica アダプタについて説明します。

PowerExchange for Amazon Redshift

バージョン 10.1 では、PowerExchange for Amazon Redshift を使用して、Amazon Redshift との間でデータの読み取り/書き込みを行うことができるようになりました。Amazon Redshift ビジネスエンティティを読み取り/書き込みデータオブジェクトとしてインポートして、マッピングを作成して実行し、Amazon Redshift エンティティとの間でデータを抽出またはロードすることができます。

詳細については、『*Informatica PowerExchange for Amazon Redshift 10.1 ユーザーガイド*』を参照してください。

PowerExchange for Microsoft Azure Blob Storage

バージョン 10.1 では、PowerExchange for Microsoft Azure Blob Storage を使用して、Microsoft Azure Blob Storage との間でデータの読み取り/書き込みを行うことができるようになりました。Microsoft Azure Blob Storage 接続を作成し、Microsoft Azure Blob Storage データオブジェクトとの間で Microsoft Azure Blob Storage データの読み取り/書き込みを行うことができます。マッピングは、ネイティブ環境と Hadoop 環境で検証および実行することができます。

詳細については、『*Informatica PowerExchange for Microsoft Azure Blob Storage 10.1 ユーザーガイド*』を参照してください。

PowerExchange for Microsoft Azure SQL Data Warehouse

バージョン 10.1 では、PowerExchange for Microsoft Azure SQL Data Warehouse を使用して、Microsoft Azure SQL Data Warehouse との間でデータの読み取り/書き込みを行うことができるようになりました。マッピングは、ネイティブ環境と Hadoop 環境で検証および実行することができます。

詳細については、『*Informatica PowerExchange for Microsoft Azure SQL Data Warehouse 10.1 ユーザーガイド*』を参照してください。

第 10 章

新機能（10.1）

この章では、以下の項目について説明します。

- アプリケーションサービス, 89 ページ
- Big Data, 90 ページ
- Business Glossary, 92 ページ
- 接続性, 93 ページ
- コマンドラインプログラム , 93 ページ
- マニュアル, 98 ページ
- 例外管理, 99 ページ
- Informatica Administrator, 99 ページ
- Informatica Analyst, 100 ページ
- Informatica Developer, 101 ページ
- Informatica Development Platform, 103 ページ
- Live Data Map, 104 ページ
- マッピング, 105 ページ
- Metadata Manager, 106 ページ
- PowerCenter, 108 ページ
- PowerExchange アダプタ, 108 ページ
- セキュリティ, 109 ページ
- トランスフォーメーション, 110 ページ
- ワークフロー, 112 ページ

アプリケーションサービス

ここでは、バージョン 10.1 の新しいアプリケーションサービスについて説明します。

システムサービス

ここでは、バージョン 10.1 の新しいシステムサービス機能について説明します。

プロファイルおよびスコアカードのスケジューラサービス

バージョン 10.1 では、スケジューラサービスを使用して、プロファイルおよびスコアカードが特定の時間または間隔で実行されるようにスケジュールすることができます。

スケジュールの詳細については、*『Informatica 10.1 管理者ガイド』*の「スケジュール」の章を参照してください。

スケジュールのタイムゾーンの設定

バージョン 10.1 では、スケジュールを実行する日付および時刻を選択するとき、タイムゾーンも選択します。タイムゾーンを設定するときは、データ統合サービスが実行されている場所にかかわらず、希望する時間にジョブが実行されるようにします。

スケジュールの詳細については、*『Informatica 10.1 管理者ガイド』*の「スケジュール」の章を参照してください。

Big Data

ここでは、バージョン 10.1 の新しい Big Data 機能について説明します。

Hadoop エコシステム

Big Data Management 10.1 でのサポート

バージョン 10.1 では、次の Hadoop ディストリビューションの更新バージョンをサポートしています。

- Azure HDInsight 3.3
- Cloudera CDH 5.5
- MapR 5.1

Big Data Management 10.1 でサポートされるすべての Hadoop ディストリビューションを示したリストについては、*『Informatica Big Data Management 10.1 インストール&環境設定ガイド』*を参照してください。

Hadoop セキュリティシステム

バージョン 10.1 では、Informatica で Hadoop エコシステムの次のセキュリティシステムがサポートされるようになりました。

- Apache Knox
- Apache Ranger
- Apache Sentry
- HDFS Transparent Encryption

セキュリティシステムと Hadoop 配布プラットフォームの組み合わせによっては、制限事項が適用されます。Informatica によるこれらのテクノロジーのサポートの詳細については、*『Informatica Big Data Management 10.1 セキュリティガイド』*を参照してください。

Spark ランタイムエンジン

バージョン 10.1 では、Hadoop 環境の Apache Spark エンジンにマッピングをプッシュできます。

Spark は、Hadoop クラスタでマッピングを実行できるランタイムエンジンを備えた Apache プロジェクトです。Spark エンジンに固有の Hadoop 接続プロパティを設定します。マッピングを作成したら、Blaze および Hive エンジンと同じ方法で、マッピングを検証し実行プランを表示できます。

マッピングロジックを Spark エンジンにプッシュすると、データ統合サービスは Scala プログラムを生成し、それをアプリケーションにパッケージ化します。そのアプリケーションはデータ統合サービスにより Spark 実行者に送信され、そこから Hadoop クラスタのリソースマネージャにサブミットされます。リソースマネージャは、アプリケーションを実行するリソースを特定します。ジョブは Administrator ツールで監視できます。

Spark を使用したマッピングの実行の詳細については、*『Informatica Big Data Management 10.1 ユーザーガイド』* を参照してください。

リレーショナルソースとリレーショナルターゲットの Sqoop 接続

バージョン 10.1 では、Sqoop を使用して、リレーショナルデータベースと HDFS 間のデータを MapReduce を介して処理できます。Sqoop を使用してデータをインポートおよびエクスポートできます。Sqoop を使用するときは、Hadoop クラスタのノードにリレーショナルデータベースのクライアントおよびソフトウェアをインストールする必要はありません。

Sqoop を使用するには、JDBC 接続で Sqoop プロパティを設定し、Hadoop 環境でマッピングを実行する必要があります。JDBC 準拠のデータベースに基づくリレーショナルデータオブジェクト、カスタマイズされたデータオブジェクト、および論理データオブジェクトに Sqoop 接続を設定できます。例えば、次のデータベースに対して、Sqoop 接続を設定できます。

- Aurora
- IBM DB2
- IBM DB2 for z/OS
- Greenplum
- Microsoft SQL Server
- Netezza
- Oracle
- Teradata

Hive ランタイム環境で Sqoop を使用するデータオブジェクトに対してプロファイルを実行することもできます。

詳細については、*『Informatica 10.1 Big Data Management ユーザーガイド』* を参照してください。

Blaze エンジンでのトランスフォーメーションサポート

バージョン 10.1 では、次のトランスフォーメーションが Blaze エンジンでサポートされています。

- アドレスバリデータ
- 大文字小文字変換プログラム
- 比較
- 統合
- データプロセッサ
- ディシジョン

- キージェネレータ
- ラベラ
- 一致
- マージ
- ノーマライザ
- パーサー
- シーケンスジェネレータ
- 標準化
- 加重平均

アドレスバリデータ、コンソリデーション、データプロセッサ、一致、およびシーケンスジェネレータトランスフォーメーションが、制限付きでサポートされています。

バージョン 10.1 では、次のトランスフォーメーションが Blaze エンジンで追加でサポートされています。

- アグリゲータ。パススルーポートをサポートします。
- ルックアップ。接続されていないルックアップトランスフォーメーションをサポートします。

詳細については、*『Informatica Big Data Management 10.1 ユーザーガイド』*の「Hadoop 環境でのマッピングオブジェクト」の章を参照してください。

Business Glossary

ここでは、バージョン 10.1 の新しい Business Glossary 機能について説明します。

すべてのアセットへの用語集コンテンツ管理者の継承

バージョン 10.1 では、用語集に割り当てたデータスチュワードおよび所有者が、Analyst ツールによって、その用語集内のすべてのアセットに割り当てられます。

詳細については、*『Informatica 10.1 Business Glossary ガイド』*の「用語集のコンテンツ管理」を参照してください。

双方向のカスタムリレーション

バージョン 10.1 では、双方向のカスタムリレーションを作成できます。関連付けられたアセットの方向は、リレーションビュー図で参照できます。双方向のカスタムリレーションでは、それぞれの方向にリレーションの名前を付けます。

詳細については、*『Informatica 10.1 Business Glossary ガイド』*の「用語集コンテンツの検索」を参照してください。

リレーションビュー図のカスタムカラー

バージョン 10.1 では、リレーションビュー図内で、関連付けられたアセットを接続する線の色を定義できます。

詳細については、*『Informatica 10.1 Business Glossary ガイド』*の「用語集の管理」を参照してください。

接続性

ここでは、バージョン 10.1 の新しい接続機能について説明します。

IBM DB2 接続のスキーマ名

バージョン 10.1 では、IBM DB2 接続を使用して Developer tool または Analyst ツールでテーブルをインポートする場合、テーブルのインポート元としてスキーマ名を 1 つ以上指定できます。メタデータ接続文字列の URL に ischemaname 属性を使用してスキーマ名を指定します。スキーマ名が複数の場合はパイプ（|）文字を使用して区切ります。

例えば、メタデータ接続文字列の URL に次の構文を入力します。

```
jdbc:informatica:db2://<host name>:<port>;DatabaseName=<database name>;ischemaname=<schema_name1>|<schema_name2>|<schema_name3>
```

この機能は、9.6.1 HotFix 4 でも利用可能です。10.0 では利用できません。

詳細については、*『Informatica 10.1 Developer tool』*および*『Informatica 10.1 Analyst ツールガイド』*を参照してください。

コマンドラインプログラム

ここでは、バージョン 10.1 の新しいコマンドについて説明します。

infacmd bg コマンド

以下の表に、新しい infacmd bg コマンドの説明を示します。

コマンド	説明
listGlossary	Analyst ツールでビジネス用語集を一覧表示します。
exportGlossary	Analyst ツールで利用可能なビジネス用語集をエクスポートします。
importGlossary	Analyst ツールからエクスポートされた、.xlsx または.zip ファイルからビジネス用語集をインポートします。

infacmd dis コマンド

以下の表に、新しい infacmd dis コマンドの説明を示します。

コマンド	説明
ListApplicationPermissions	ユーザーまたはグループが持つアプリケーションに対する権限を一覧表示します。
ListApplicationObjectPermissions	ユーザーまたはグループが持つマッピングやワークフローなどのアプリケーションオブジェクトに対する権限を一覧表示します。

コマンド	説明
SetApplicationPermissions	アプリケーションに対する権限をユーザーまたはグループに割り当てます。
SetApplicationObjectPermissions	ユーザーまたはグループに、マッピングやワークフローなどのアプリケーションオブジェクトに対する権限を割り当てます。

詳細については、*『Informatica 10.1 コマンドリファレンス』*の「infacmd dis コマンドリファレンス」の章を参照してください。

infacmd ihs コマンド

以下の表に、新しい infacmd ihs コマンドの説明を示します。

コマンド	説明
BackupData	内部 Hadoop クラスタの HDFS データを.zip ファイルにバックアップします。
UpgradeClusterService	Informatica クラスタサービスの設定をアップグレードします。
removeSnapshot	HDFS データをバックアップするために、既存の HDFS スナップショットを削除して、infacmd ihs BackupData コマンドを正常に実行できるようにします。

詳細については、*『Informatica 10.1 コマンドリファレンス』*の「infacmd ihs コマンドリファレンス」の章を参照してください。

infacmd isp コマンド

以下の表に、新しい infacmd isp コマンドの説明を示します。

コマンド	説明
AssignDefaultOSProfile	デフォルトのオペレーティングシステムプロファイルをユーザーまたはグループに割り当てます。
ListDefaultOSProfiles	ユーザーまたはグループのデフォルトのオペレーティングシステムプロファイルを一覧表示します。

コマンド	説明
ListDomainCiphers	Informatica ドメインまたはゲートウェイノードで使用される次の 1 つ以上の暗号スイートを表示します。 **ブラックリスト** Informatica ドメインがブロックする暗号スイートのユーザー指定リストです。 **デフォルトリスト** デフォルトでサポートされる暗号スイートのリストです。 **有効リスト** infasetup updateDomainCiphers コマンドで設定した後に Informatica ドメインが使用する暗号スイートのリストです。有効リストでは、デフォルトリストおよびホワイトリストの暗号スイートがサポートされますが、ブラックリストの暗号スイートはブロックされます。 **ホワイトリスト** デフォルトリストの他に Informatica ドメインが使用できる暗号スイートのユーザー指定リストです。 表示するリストを指定できます。
UnassignDefaultOSProfile	ユーザーまたはグループに割り当てられているデフォルトのオペレーティングシステムプロファイルを削除します。

以下の表に、infacmd isp コマンドの新しいオプションの説明を示します。

コマンド	説明
CreateOSProfile	次のオプションが追加されました。 - -DISProcessVariables - -DISEnvironmentVariables - -HadoopImpersonationUser - -HadoopImpersonationProperties - -UseLoggedInUserAsProxy - -ProductExtensionName - -ProductOptions これらのオプションは、データ統合サービス用のオペレーティングシステムのプロファイルのプロパティを設定するために使用します。
UpdateOSProfile	次のオプションが追加されました。 - -DISProcessVariables - -DISEnvironmentVariables - -HadoopImpersonationUser - -HadoopImpersonationProperties - -UseLoggedInUserAsProxy - -ProductExtensionName - -ProductOptions これらのオプションは、データ統合サービス用のオペレーティングシステムのプロファイルのプロパティを設定するために使用します。

詳細については、*『Informatica 10.1 コマンドリファレンス』*の「infacmd isp コマンドリファレンス」の章を参照してください。

infacmd ldm コマンド

以下の表に、新しい infacmd ldm コマンドの説明を示します。

コマンド	説明
backupData	HDFS ディレクトリのスナップショットを取得し、ローカルマシンでスナップショットの.zip ファイルを作成します。
restoreData	HDFS データのバックアップ.zip ファイルをローカルシステムから取得し、データを HDFS ディレクトリで復元します。
removeSnapshot	HDFS ディレクトリからスナップショットを削除します。
アップグレード	カタログサービスをアップグレードします。

詳細については、*『Informatica 10.1 コマンドリファレンス』*の「infacmd ldm コマンドリファレンス」の章を参照してください。

infacmd ms コマンド

次の表に、infacmd ms コマンドの新しいオプションの説明を示します。

コマンド	説明
RunMapping	このコマンドには次の新しいオプションがあります。 - -osp。オペレーティングシステムのプロファイルの名前（データ統合サービスがオペレーティングシステムのプロファイルを使用できるように有効化されている場合）。

詳細については、*『Informatica 10.1 コマンドリファレンス』*の「infacmd ms コマンドリファレンス」の章を参照してください。

infacmd ps コマンド

以下の表に、infacmd ps コマンドの新しいオプションの説明を示します。

コマンド	説明
- Execute - executeProfile	これらのコマンドには、次の新しいオプションがあります。 - -ospn。オペレーティングシステムのプロファイルの名前（データ統合サービスがオペレーティングシステムのプロファイルを使用できるように有効化されている場合）。

詳細については、*『Informatica 10.1 コマンドリファレンス』*の「infacmd ps コマンドリファレンス」の章を参照してください。

infacmd sch コマンド

以下の表に、infacmd sch コマンドの新しいオプションの説明を示します。

コマンド	説明
CreateSchedule	以下の引数が-RunnableObjects オプションに追加されます。 - -osProfileName。オペレーティングシステムのプロファイルの名前（データ統合サービスがオペレーティングシステムのプロファイルを使用できるように有効化されている場合）。
UpdateSchedule	以下の引数が-AddRunnableObjects オプションに追加されます。 - -osProfileName。オペレーティングシステムのプロファイルの名前（データ統合サービスがオペレーティングシステムのプロファイルを使用できるように有効化されている場合）。

詳細については、*『Informatica 10.1 コマンドリファレンス』* の「infacmd sch コマンドリファレンス」の章を参照してください。

infasetup コマンド

次の表に、新しい infasetup コマンドの説明を示します。

コマンド	説明
ListDomainCiphers	Informatica ドメインまたはゲートウェイノードで使用される次の 1 つ以上の暗号スイートを表示します。 **ブラックリスト** Informatica ドメインがブロックする暗号スイートのユーザー指定リストです。 **デフォルトリスト** デフォルトでサポートされる暗号スイートのリストです。 **有効リスト** infasetup updateDomainCiphers コマンドで設定した後に Informatica ドメインが使用する暗号スイートのリストです。有効リストでは、デフォルトリストおよびホワイトリストの暗号スイートがサポートされますが、ブラックリストの暗号スイートはブロックされます。 **ホワイトリスト** Informatica ドメインが使用できる暗号スイートのユーザー指定リストです。 表示するリストを指定できます。
updateDomainCiphers	Informatica ドメインが新しい有効リストで使用できる暗号スイートを更新します。

次の表に、infasetup コマンドの更新されたオプションの説明を示します。

コマンド	説明
- DefineDomain - DefineGatewayNode - DefineWorkerNode - UpdateGatewayNode - UpdateWorkerNode	これらのコマンドには、次の新しいオプションがあります。 - cipherWhiteList |-cwl - cipherWhiteListFile |-cwlf - cipherBlackList |-cbl - cipherBlackListFile |-cblf これらのオプションを使用して、ドメイン内の安全な通信または Web アプリケーションサービスへの安全な接続を使用する Informatica ドメインの暗号スイートを設定できます。

詳細については、*『Informatica 10.1 コマンドリファレンス』*の「infasetup コマンドリファレンス」の章を参照してください。

pmrep コマンド

以下の表に、新しい pmrep コマンドの説明を示します。

コマンド	説明
AssignIntegrationService	PowerCenter 統合サービスを指定されたワークフローに割り当てます。

次の表に、pmrep コマンドの更新されたオプションの説明を示します。

コマンド	説明
CreateConnection	このコマンドには次の新しいオプションがあります。 - -s。接続タイプのリストに FTP を含めます。

詳細については、*『Informatica 10.1 コマンドリファレンス』*の「pmrep コマンドリファレンス」の章を参照してください。

マニュアル

ここでは、バージョン 10.1 の Informatica のマニュアルで追加または更新されたガイドについて説明します。

Informatica のマニュアルには次の新しいガイドが付属しています。

Metadata Manager **コマンドリファレンス**

バージョン 10.1 では、Metadata Manager コマンドラインプログラムに関するすべての情報が *『Metadata Manager コマンドリファレンス』*に収められています。*『Metadata Manager コマンドリファレンス』*は、Metadata Manager のオンラインヘルプに含まれています。以前は、Metadata Manager コマンドラインプログラムに関する情報は *『Metadata Manager 管理者ガイド』*に記載されていました。

詳細については、*『Informatica 10.1 Metadata Manager コマンドリファレンス』*を参照してください。

Live Data Map®**用** Informatica Administrator **リファレンス**

Live Data Map バージョン 2.0 では、*『Live Data Map 用 Informatica Administrator リファレンス』*に、Live Data Map を実行するために必要な Informatica Administrator のタスクに関する情報が記載されて

います。『*Live Data Map 用 Informatica Administrator リファレンス*』は、Informatica Administrator のオンラインヘルプに含まれています。

詳細については、『*Informatica 2.0 Live Data Map 用 Informatica Administrator リファレンス*』を参照してください。

例外管理

ここでは、バージョン 10.1 の新しい例外管理機能について説明します。

データ型に基づくデータ値の検索および置換

バージョン 10.1 では、例外タスクのオプションを設定し、データ型に基づいてデータ値を検索および置換できます。このオプションを設定して、日付、文字列、または数値データを含むカラムのデータを検索および置換できます。

データ型を指定すると、Analyst ツールにより、そのデータ型を使用するすべてのカラムで入力した値が検索されます。文字列データカラムに含まれる値を検索および置換できます。文字列データでは、大文字と小文字を区別して検索を実行できます。検索値と文字列データカラムのフィールドの内容の間で部分一致または完全一致を検索できます。

この機能は、9.6.1 HotFix 4 でも利用可能です。10.0 では利用できません。

詳細については、『*Informatica 10.1 例外管理ガイド*』の「例外レコード」の章を参照してください。

Informatica Administrator

ここでは、バージョン 10.1 の新しい Administrator ツール機能について説明します。

ドメインビュー

10.1 では、ドメイン内の CPU 使用量とメモリ使用量の履歴統計を表示できるようになりました。

CPU とメモリの使用量について、直前の 60 分間の統計情報を表示できます。現在の統計情報と直前の 60 分間の統計情報を切り替えることができます。**［ドメイン］**ビューの**［CPU 使用量］**パネルまたは**［メモリ使用量］**パネルで、**［アクション］** > **［現在］**または**［アクション］** > **［最新の傾向］**を選択します。

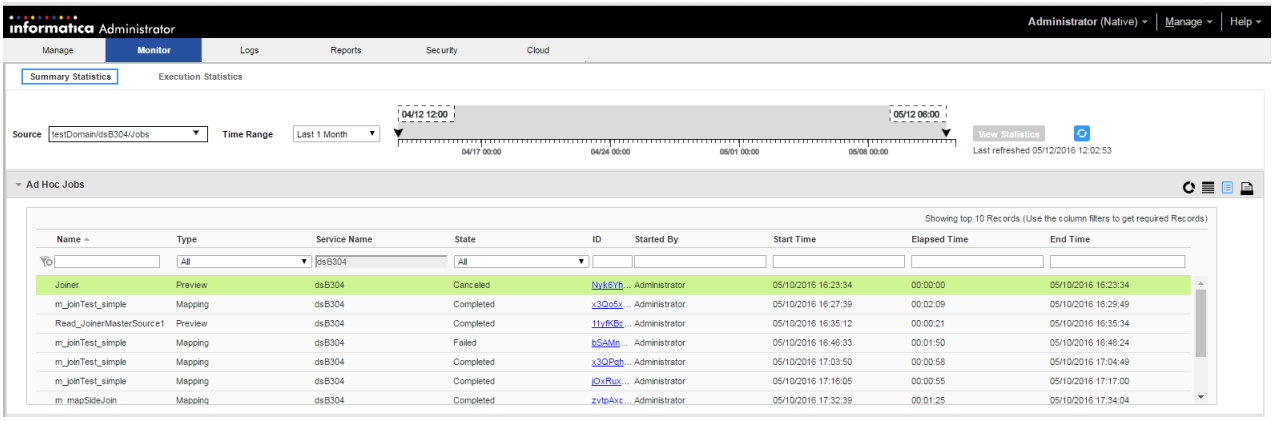
監視

バージョン 10.1 では、Administrator ツールの［モニタ］タブに次の機能が追加されました。

［サマリ統計］ビューの［詳細］ビュー

［サマリ統計］ビューには**［詳細］**ビューが表示されます。**［実行統計］**ビューでは、ジョブに関する情報を表示し、リストを.csv ファイルにエクスポートし、ジョブにリンクすることができます。［詳細］ビューにアクセスするには、**［詳細の表示］**をクリックします。

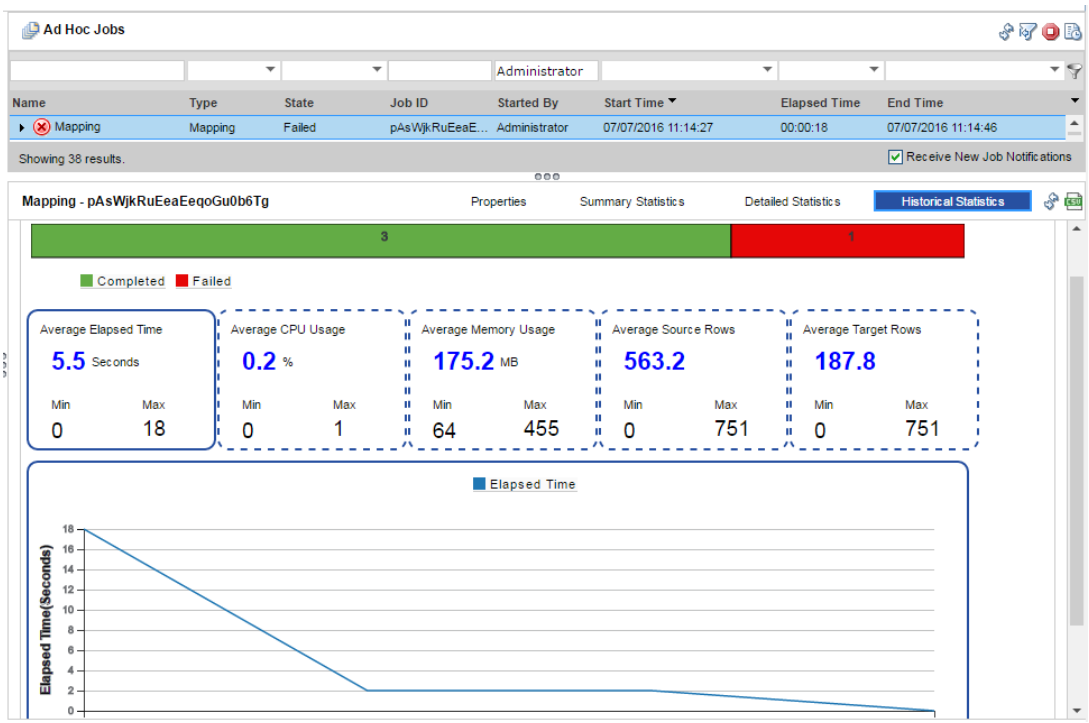
次の画像は［**詳細**］ビューを示しています。



［履歴統計］ビュー。

［モニタ］タブの**［コンテンツ］**パネルでアドホックまたはデプロイされたマッピングジョブを選択すると、**［詳細］**パネルに**［履歴統計］**ビューが表示されます。**［履歴統計］**ビューには、特定のジョブを複数回実行して得られたデータの平均値が表示されます。例えば、マッピングジョブの最短継続時間、最長継続時間、および平均継続時間を表示することができます。ジョブが実行されるときに消費される CPU の平均使用量を表示できます。

次の画像は、**［履歴統計］**ビューを示しています。



Informatica Analyst

ここでは、バージョン 10.1 の新しい Analyst ツール機能について説明します。

プロファイル

ここでは、プロファイルおよびスコアカードで使用できる Analyst ツールの新機能について説明します。

適合条件

バージョン 10.1 では、データドメイン検出の適合条件として、最小数の適合する行を選択できるようになりました。

適合条件の詳細については、『*Informatica 10.1 データ検出ガイド*』の「Informatica Analyst でのデータドメイン検出」の章を参照してください。

データドメイン検出での NULL の除外

バージョン 10.1 では、データソースでデータドメイン検出を実行する場合に、データセットから NULL 値を除外できるようになりました。NULL 値の除外オプションで最小割合の行を選択する場合、適合割合は、カラムの NULL 値を除外して一致行の数を合計行数で除算した比率です。

データドメイン検出オプションからの NULL 値の除外の詳細については、『*Informatica 10.1 データ検出ガイド*』の「Informatica Analyst でのデータドメイン検出」の章を参照してください。·

ランタイム環境

バージョン 10.1 では、カラムプロファイル、データドメイン検出プロファイル、エンタープライズ検出プロファイル、またはスコアカードを作成または編集する場合に、Hadoop オプションをランタイム環境として選択できるようになりました。Hadoop オプションを選択すると、データ統合サービスによりプロファイルロジックが Hadoop クラスタの Blaze エンジンにプッシュされ、プロファイルが実行されます。

ランタイム環境の詳細については、『*Informatica 10.1 データ検出ガイド*』の「データオブジェクトプロファイル」の章を参照してください。

スコアカードダッシュボード

バージョン 10.1 では、スコアカードダッシュボードで次のスコアカードの詳細を表示できるようになりました。

- プロジェクトのスコアカードの合計数
- 過去 6 か月のスコアカード実行傾向
- データオブジェクトの合計数、およびスコアカードを含むデータオブジェクトの数
- 過去 6 か月の累積メトリック傾向

スコアカードダッシュボードの詳細については、『*Informatica 10.1 データ検出ガイド*』の「Informatica Analyst のスコアカード」の章を参照してください。

Informatica Developer

ここでは、バージョン 10.1 の新しい Informatica Developer 機能について説明します。

ソースファイル名の生成

10.1 では、ファイル名カラムオプションを使用して、ソースファイル名を返すことができます。また、ソースファイル名を各ソース行に書き込むようにマッピングを設定することもできます。

詳細については、『*Informatica 10.1 Developer tool ガイド*』を参照してください。

PowerCenter からのインポート

バージョン 10.1 では、Netezza および Teradata オブジェクトを含むマッピングを PowerCenter から Developer tool にインポートし、ネイティブまたは Hadoop ランタイム環境でそのマッピングを実行できるようになりました。

詳細については、*『Informatica 10.1 Developer マッピングガイド』* を参照してください。

Excel と Developer tool の間でのテキストのコピー

バージョン 10.1 では、テキストを Excel から Developer tool にコピーするか、Developer tool から Excel にコピーすることができます。メタデータをトランスフォーメーションに提供するには、テキストを Excel から Developer tool にコピーします。例えば、Excel でマッピングを設計しているとします。それにはすべてのトランスフォーメーションとそれらのポート名、データ型、およびトランスフォーメーションの論理などが含まれています。Developer tool では、Excel のフィールドを空のトランスフォーメーションのポートへコピーできます。同様に、トランスフォーメーションポートを Developer tool から Excel にコピーできます。

論理データオブジェクト読み取りおよび書き込みマッピングの編集

Informatica 10.1 では、論理データオブジェクトエディタを使用して、論理データオブジェクト読み取りおよび書き込みマッピングのメタデータを編集および変更できます。詳細については、*『Informatica 10.1 Developer tool ガイド』* の「データの論理ビュー」を参照してください。

DDL クエリ

バージョン 10.1 で、実行時にターゲットを作成または置換することを選択する場合、データ統合サービスがターゲットテーブルを作成または置換するときに基準とする DDL クエリを定義できます。DDL クエリは、リレーショナルターゲットおよび Hive ターゲットに対して定義できます。

DDL クエリにはプレースホルダを入力できます。データ統合サービスにより、実行時にプレースホルダが実際の値に置き換えられます。例えば、テーブルに 50 個のカラムが含まれている場合、DDL クエリにすべてのカラム名を入力する代わりに、プレースホルダを入力できます。

DDL クエリには、次のプレースホルダを入力できます。

- INFA_TABLE_NAME
- INFA_COLUMN_LIST
- INFA_PORT_SELECTOR

DDL クエリには、パラメータを入力することもできます。

詳細については、*『Informatica 10.1 Developer マッピングガイド』* を参照してください。

プロファイル

ここでは、プロファイルおよびスコアカードで使用できる Developer tool の新機能について説明します。

Avro および Parquet データソースを使用したカラムプロファイル

バージョン 10.1 では、HDFS の Avro または Parquet データソースでカラムプロファイルを作成できるようになりました。

Avro および Parquet データソースでのカラムプロファイルの詳細については、*『Informatica 10.1 データ検出ガイド』* の「半構造化データソースのカラムプロファイル」の章を参照してください。

適合条件

バージョン 10.1 では、データドメイン検出の適合条件として、最小数の適合する行を選択できるようになりました。

適合条件の詳細については、*『Informatica 10.1 データ検出ガイド』*の「Informatica Developer でのデータドメイン検出」の章を参照してください。

データドメイン検出での NULL の除外

バージョン 10.1 では、データソースでデータドメイン検出を実行する場合に、データセットから NULL 値を除外できるようになりました。NULL 値の除外オプションで最小割合の行を選択する場合、適合割合は、カラムの NULL 値を除外して一致行の数を合計行数で除算した比率です。

データドメイン検出オプションからの NULL 値の除外の詳細については、*『Informatica 10.1 データ検出ガイド』*の「Informatica Developer でのデータドメイン検出」の章を参照してください。

ランタイム環境

バージョン 10.1 では、カラムプロファイル、データドメイン検出プロファイル、エンタープライズ検出プロファイル、またはスコアカードを作成または編集する場合に、Hadoop オプションをランタイム環境として選択できるようになりました。Hadoop オプションを選択すると、データ統合サービスによりプロファイルロジックが Hadoop クラスタの Blaze エンジンにプッシュされ、プロファイルが実行されます。

ランタイム環境の詳細については、*『Informatica 10.1 データ検出ガイド』*の「データオブジェクトプロファイル」の章を参照してください。

Informatica Development Platform

ここでは、Informatica Development Platform の新機能および改良点について説明します。

Informatica コネクタツールキット

バージョン 10.1 では、Informatica コネクタツールキットの次の機能を使用できます。

事前定義型システム

REST API を使用してデータソースに接続するコネクタを作成する場合には、事前定義されたデータ型を使用できます。Informatica Platform の次のデータ型を使用できます。

- string
- 整数
- bigInteger
- decimal
- double
- binary
- date

手順のパターン

Informatica Cloud 用のコネクタを作成する場合は、データソースでのプロシージャのためにネイティブのメタデータオブジェクトを定義できます。次のオプションを使用して、プロシージャのネイティブメタデータオブジェクトを定義することができます。

ネイティブメタデータオブジェクトの手動作成

ネイティブメタデータオブジェクトを手動で定義する場合は、次の詳細な設定を指定できます。

メタデータコンポーネント	説明
プロシージャ拡張	プロシージャに対して指定できる追加のメタデータ情報。
パラメータ拡張	パラメータに対して指定できる追加のメタデータ情報。
呼び出し機能属性	プロシージャに対する読み取りまたは書き込み呼び出しを作成するために指定できる追加のメタデータ情報。

Swagger **仕様の使用**

Swagger 仕様を使用してネイティブメタデータオブジェクトを定義する場合は、既存の Swagger 仕様を使用するか、REST エンドポイントをサンプリングすることによって Swagger 仕様を生成することができます。

共通メタデータの編集

スキーマ名や外部キー名などの、Informatica Cloud コネクタの共通メタデータ情報を指定できます。

Informatica Cloud **のコネクタファイルのエクスポート**

コネクタコンポーネントを設計して実装した後は、プラグイン ID とプラグインバージョンを指定することによって、Informatica Cloud のコネクタファイルをエクスポートすることができます。

PowerCenter **のコネクタファイルのエクスポート**

コネクタコンポーネントを設計して実装した後は、PowerCenter バージョンを指定することによって、PowerCenter のコネクタファイルをエクスポートすることができます。

Live Data Map

ここでは、バージョン 10.1 の新しい Live Data Map の機能について説明します。

電子メール通知

バージョン 10.1 では、カタログサービスのステータスについての電子メール通知を受信するように設定して常に監視し、アプリケーションサービスの問題をトラブルシューティングすることができるようになりました。電子メールサービスとそれに関連付けられたモデルリポジトリサービスを使用して、電子メール通知を送信します。

詳細については、*『Live Data Map 用 Informatica Administrator リファレンス』*を参照してください。

キーワード検索

バージョン 10.1 では、次のキーワードを使用して、特定タイプのアセットのみが検索結果に含まれるように制限できます。

- テーブル
- カラム

- ファイル
- レポート

例えば、「customer」という語を含むすべてのテーブルを検索する場合は、［検索］ボックスに「tables with customer」と入力します。すべてのテーブルのうち、テーブル名に「customer」という検索語を含むものが Enterprise Information Catalog に表示されます。

詳細については、*『Informatica 10.1 Enterprise Information Catalog ユーザーガイド』*を参照してください。

プロファイリング

バージョン 10.1 では、Live Data Map は Hadoop 環境でプロファイルを実行できます。Hadoop 接続を選択すると、データ統合サービスがプロファイルロジックを Hadoop クラスタの Blaze エンジンにプッシュして、プロファイルを実行します。

詳細については、*『Informatica 10.1 Live Data Map Administrator ガイド』*を参照してください。

スキャナ

バージョン 10.1 では、次のソースからメタデータを抽出できます。

- Amazon Redshift
- Amazon S3
- カスタムリネージュ
- HDFS
- Hive
- Informatica Cloud
- MicroStrategy

詳細については、*『Informatica 10.1 Live Data Map Administrator ガイド』*を参照してください。

マッピング

ここでは、バージョン 10.1 の新しいマッピング機能について説明します。

Informatica マッピング

ここでは、バージョン 10.1 の Informatica マッピングの新しい機能について説明します。

接続されたトランスフォーメーションからのマップレットの生成

バージョン 10.1 では、マッピング中の接続されたトランスフォーメーションのグループからマップレットを生成できるようになりました。マップレットをテンプレートとして使用して、異なるソースおよびターゲットに接続する複数のマッピングに追加します。

SQL クエリからのマッピングまたは論理データオブジェクトの生成

バージョン 10.1 では、Developer tool での SQL クエリからマッピングまたは論理データオブジェクトを生成できるようになりました。

SQL クエリからマッピングまたは論理データオブジェクトを生成するには、**［ファイル］** > **［新規作成］** > **［SQL クエリからのマッピング］** をクリックします。SQL クエリを入力するか、マッピングに変換する SQL クエリが書き込まれているテキストファイルの場所を選択します。論理データオブジェクトは、SELECT 文のみが含まれる SQL クエリから生成することもできます。

SQL クエリからのマッピングまたは論理データオブジェクトの生成の詳細については、*『Informatica 10.1 Developer マッピングガイド』* を参照してください。

Metadata Manager

ここでは、バージョン 10.1 の新しい Metadata Manager 機能について説明します。

ユニバーサルリソース

バージョン 10.1 では、ユニバーサルリソースを使用して、Metadata Manager がモデルをパッケージ化しない一部のメタデータソースからメタデータを抽出できます。例えば、ユニバーサルリソースを使用して、Apache Hadoop Hive サーバー、QlikView、または Talend のメタデータソースからメタデータを抽出できます。

これらのソースからメタデータを抽出するには、最初に、メタデータソースタイプを表す XConnect を作成します。XConnect には、メタデータソースのモデルが含まれます。そのモデルに基づいて、1 つ以上のリソースを作成します。作成したユニバーサルリソースは、Metadata Manager でパッケージ化されたリソースのように動作します。

ユニバーサルリソースの詳細については、*『Informatica 10.1 Metadata Manager 管理者ガイド』* の「ユニバーサルリソース」の章を参照してください。

Oracle および Teradata リソースの増分ロード

バージョン 10.1 では、Oracle リソースと Teradata リソースの増分ロードを有効にできるようになりました。増分ロードの場合、Metadata Manager は、メタデータ全体をロードする代わりに、メタデータに対する最近の変更点をロードします。増分ロードにより、リソースのロードにかかる時間が短縮されます。

Oracle リソースまたは Teradata リソースの増分ロードを有効にするには、リソース設定プロパティで **［増分ロード］** オプションを有効にします。このオプションはデフォルトで無効になっています。

Oracle および Teradata リソースの増分ロードの詳細については、*『Informatica 10.1 Metadata Manager 管理者ガイド』* の「データベース管理リソース」の章を参照してください。

サマリビューでのリソースの非表示

バージョン 10.1 では、データリネージュ図にリソースとその子オブジェクトが表示されないようにすることができるようになりました。リソースを非表示にするには、リソース設定プロパティの **［プロパティ］** ページで **［サマリリネージュで非表示］** オプションを有効にします。このオプションは、すべてのリソースタイプで有効にすることができます。このオプションはデフォルトで無効になっています。

ステージングデータベースなどのオブジェクトは、データリネージュ図に表示されないようにすることができます。非表示のオブジェクトを表示する場合は、タスクバーでサマリビューから詳細ビューに切り替えることができます。

データリネージュ図のサマリビューの詳細については、*『Informatica 10.1 Metadata Manager ユーザーガイド』*の「データリネージュに関する作業」を参照してください。

複数のパッケージファイルからの SQL Server 統合サービスリソースの作成

バージョン 10.1 では、個別のパッケージ（.dtsx）ファイルのパッケージからメタデータを抽出する Microsoft SQL Server 統合サービスリソースを作成できます。パッケージファイルは、同じディレクトリに入っている必要があります。

別のパッケージファイルのパッケージからメタデータを抽出するリソースを作成するには、そのパッケージファイルを含むディレクトリを **［ディレクトリ］** リソース設定プロパティで指定します。

Microsoft SQL Server 統合サービスリソースの作成および設定の詳細については、*『Informatica 10.1.1 Metadata Manager 管理者ガイド』*の「データベース管理リソース」の章を参照してください。

Metadata Manager コマンドラインプログラム

バージョン 10.1 では、Metadata Manager に新しいコマンドラインプログラムが追加されています。mmXConPluginUtil コマンドラインプログラムは、画像マッピング情報またはユニバーサル XConnect のプラグインを生成します。

以下の表に、mmXConPluginUtil コマンドの説明を示します。

コマンド名	説明
generateImageMapping	ユニバーサル XConnect の画像マッピング情報を生成します。
generatePlugin	ユニバーサル XConnect のプラグインを生成します。

mmXConPluginUtil コマンドラインプログラムの詳細については、*『Informatica 10.1 Metadata Manager コマンドリファレンス』*の「mmXConPluginUtil」の章を参照してください。

アプリケーションのプロパティ

バージョン 10.1 では、新しいアプリケーションプロパティを Metadata Manager imm.properties ファイルで設定できます。この機能は、9.6.1 HotFix 4 でも利用可能です。10.0 では利用できません。

以下の表に、imm.properties に含まれている新しい Metadata Manager アプリケーションプロパティを示します。

プロパティ	説明
xconnect.custom.failLoadOnErrorCount	カスタムリソースのロード時に Metadata Manager サービスで許容される最大エラー数。この数を超えるエラーが発生すると、リソースのロードに失敗します。
xconnect.io.print.batch.errors	カスタムリソースのロード時に Metadata Manager サービスが 1 回のバッチでメモリキャッシュおよび mm.log ファイルに書き込むエラーの数。

imm.properties ファイルの詳細については、*『Informatica 10.1 Metadata Manager 管理者ガイド』*の付録「Metadata Manager のプロパティファイル」を参照してください。

Business Glossary の監査証跡履歴およびテクニカルメタデータへのリンクの移行

バージョン 10.1 では、ビジネス用語集をエクスポートするときに監査証跡履歴およびテクニカルメタデータへのリンクを移行できます。Analyst ツールで監査証跡およびリンクをインポートできます。

この機能は、9.6.1 HotFix 4 でも利用可能です。10.0 では利用できません。

詳細については、*『Informatica 10.1 バージョン 9.5.1 からのアップグレードガイド』*を参照してください。

PowerCenter

ここでは、バージョン 10.1 の新しい PowerCenter 機能について説明します。

ターゲット定義からのソース定義の作成

バージョン 10.1 では、ターゲット定義からソース定義を作成できるようになりました。ターゲット定義を Source Analyzer にドラッグしてソース定義を作成することができます。

詳細については、*『Informatica 10.1 PowerCenter Designer ガイド』*を参照してください。

コマンドラインからの FTP 接続タイプの作成

バージョン 10.1 では、*pmrep CreateConnection* コマンドを使用して FTP 接続を作成できるようになりました。

詳細については、*『Informatica 10.1 コマンドリファレンス』*の「pmrep コマンドリファレンス」の章を参照してください。

Greenplum のプッシュダウンの最適化

バージョン 10.1 では、接続タイプが ODBC の場合、PowerCenter 統合サービスでトランスフォーメーションロジックを Greenplum のソースとターゲットにプッシュできるようになりました。

詳細については、*『Informatica PowerCenter 10.1 上級ワークフローガイド』*を参照してください。

PowerExchange アダプタ

ここでは、バージョン 10.1 の新しい PowerExchange アダプタ機能について説明します。

Informatica 用 PowerExchange アダプタ

ここでは、バージョン 10.1 の新しい Informatica アダプタ機能について説明します。

PowerExchange for HDFS

バージョン 10.1 では、PowerExchange for HDFS を使用し、データプロセッサトランスフォーメーションを使用せずに、HDFS とローカルファイルシステムとの間で Avro および Parquet データファイルの読み取り/書き込みを行うことができるようになりました。

詳細については、*『Informatica PowerExchange for HDFS 10.1 ユーザーガイド』*を参照してください。

PowerExchange for Hive

バージョン 10.1 では、マッピングで char データ型および varchar データ型を使用できます。また、データオブジェクトとマッピングを作成するときに別々の Hive データベースを選択することもできます。

詳細については、*『Informatica PowerExchange for Hive 10.1 ユーザーガイド』*を参照してください。

PowerExchange for Teradata Parallel Transporter API

バージョン 10.1 では、Teradata Connector for Hadoop（TDCH）を有効にして、Blaze エンジンで Teradata マッピングを実行できるようになりました。マッピングを実行すると、データ統合サービスによってマッピングが Hadoop クラスタにプッシュされ、Blaze エンジンでマッピングが処理されて、パフォーマンスが著しく向上します。

詳細については、*『Informatica PowerExchange for Teradata Parallel Transporter API 10.1 ユーザーガイド』*を参照してください。

PowerExchange Adapters for PowerCenter

ここでは、バージョン 10.1 の PowerCenter アダプタの新機能について説明します。

PowerExchange for Greenplum

バージョン 10.1 では、ネイティブ Greenplum 接続で Kerberos 認証を設定できるようになりました。

この機能は、9.6.1 HotFix 4 でも利用可能です。10.0 では利用できません。

詳細については、*『Informatica 10.1 PowerExchange for Greenplum PowerCenter ユーザーガイド』*の Greenplum セッションとワークフローに関する章を参照してください。

セキュリティ

ここでは、バージョン 10.1 の新しいセキュリティ機能について説明します。

カスタム暗号スイート

バージョン 10.1 では、ドメイン内の安全な通信および Web アプリケーションサービスへの安全な接続で Informatica ドメインが使用する暗号スイートをカスタマイズできます。ホワイトリストおよびブラックリストを作成して、特定の暗号スイートを有効化またはブロックできます。この機能は、9.6.1 HotFix 4 でも利用可能です。10.0 では利用できません。

Informatica ドメインでは、暗号スイートの有効リストが使用されます。有効リストでは、デフォルトリストおよびホワイトリストの暗号スイートが使用され、ブラックリストの暗号スイートがブロックされます。

詳細については、*『Informatica 10.1 セキュリティガイド』*の「ドメインのセキュリティ」を参照してください。

オペレーティングシステムのプロファイル

バージョン 10.1 では、データ統合サービスが UNIX または Linux 上で実行されている場合、オペレーティングシステムのプロファイルを作成して、オペレーティングシステムのプロファイルを使用するようにデータ統合サービスを設定できます。オペレーティングシステムのプロファイルを使用すると、Big Data Management、Data Quality、Intelligent Data Lake などの Informatica 製品で、セキュリティの向上とランタイムユーザー環境の分離を行うことができます。

データ統合サービスは、オペレーティングシステムのプロファイルを使用して、マッピング、プロファイル、スコアカード、およびワークフローを実行します。オペレーティングシステムプロファイルには、オペレーテ

ィングシステムユーザー名、サービスプロセス変数、Hadoop 偽装のプロパティ、アナリストサービスのプロパティ、環境変数、および権限が含まれています。データ統合サービスは、オペレーティングシステムユーザーのシステム権限およびオペレーティングシステムのプロファイルに定義されたプロパティに基づいて、マッピング、プロファイル、スコアカード、またはワークフローを実行します。

オペレーティングシステムのプロファイルの詳細については、*『Informatica 10.1 セキュリティガイド』*の「ユーザーおよびグループ」の章を参照してください。

アプリケーションおよびアプリケーションオブジェクトの権限

バージョン 10.1 では、アプリケーションとアプリケーションオブジェクト（マッピング、ワークフローなど）に対してユーザーまたはグループが所有するアクセスレベルを管理するための権限を割り当てることができます。

アプリケーションおよびアプリケーションオブジェクトの権限の詳細については、*『Informatica 10.1 セキュリティガイド』*の「権限」の章を参照してください。

トランスフォーメーション

ここでは、バージョン 10.1 の新しいトランスフォーメーション機能について説明します。

Informatica トランスフォーメーション

ここでは、バージョン 10.1 の Informatica トランスフォーメーションの新しい機能について説明します。

アドレスバリデータトランスフォーメーション

ここでは、アドレスバリデータトランスフォーメーションの新機能について説明します。

アドレスバリデータトランスフォーメーションでは、次の国について住所機能が追加されました。

アイルランド

バージョン 10.1 では、アイルランドの住所の Eircode を返すことができます。Eircode はアイルランドの住所を一意に識別する 7 文字のコードです。アパートの住所、地方の区画地を含め、すべての住居、公共建物、および事業所が Eircode の対象となります。

住所に対応する Eircode を返すには、［郵便番号］ポートまたは［郵便番号の正式表記］ポートを選択します。

フランス

10.1 では、アドレス検証で National Address Management Service の Hexaligne 3 リポジトリを使用してフランスの住所を SNA 基準で認定します。

Hexaligne 3 データセットには、棟の詳細（建物名、住宅名など）を含め、納入場所の住所に関する追加の情報が含まれます。

ドイツ

バージョン 10.1 では、*輸送コード*の 3 桁の番地コードを、ドイツの有効な住所の補足として取得できます。この番地コードにより住所内の番地が識別されます。

確認したドイツの住所の補足として番地コードを取得するには、［番地コード DE］ポートを選択します。このポートは［DE 補足］ポートグループにあります。

［番地コード DE］ポートはバージョン 10.1 で追加されます。

韓国

10.1 では、地番に基づく韓国の旧住所および 6 桁の旧郵便番号を持つ住所を確認できます。現在の形式、旧型式、および現在の形式と旧型式の組み合わせを確認し、更新できます。韓国の現在の住所形式は道路名に基づいており、5 桁の郵便番号が含まれます。以前の住所形式は地番に基づいており、6 桁の郵便番号が含まれます。

古い形式で韓国の住所を検証して、その情報を別の形式に変更する場合は住所識別子 KR ポートを使用します。住所情報は 2 段階で更新します。まず、バッチモードまたは対話モードでアドレス検証マッピングを実行して［住所識別子 KR］出力ポートを選択します。次に、住所コードルックアップモードでアドレス検証マッピングを実行して［住所識別子 KR］入力ポートを選択します。［住所識別子 KR］入力ポートは［個別］ポートグループにあります。［住所識別子 KR］出力ポートは［KR 補足］ポートグループにあります。

アドレスバリデータトランスフォーメーションで住所データの読み取りおよび書き込みができることを確認するには、トランスフォーメーションに［補足 KR ステータス］ポートを追加します。

［住所識別子 KR］ポート、［補足 KR ステータス］ポート、および［KR 補足］ポートグループは、バージョン 10.1 で追加されます。

バージョン 10.1 では、韓国の住所データをハングル文字とラテン文字で取得できます。

英国

バージョン 10.1 では、英国の住所について、納入場所タイプのデータと組織キーのデータを取得できます。納入場所タイプは、住所が、住居、小規模な組織、大規模な組織のどれを指しているかを示す 1 文字のコードです。組織キーは、Royal Mail が小規模な組織に割り当てる 8 桁のコードです。

英国の住所に納入場所タイプを追加するには、［納入場所タイプ GB］ポートを使用します。英国の住所に組織キーを追加するには、［組織キー GB］ポートを使用します。これらのポートは［UK 補足］ポートグループにあります。アドレスバリデータトランスフォーメーションでデータの読み取りおよび書き込みができることを確認するには、トランスフォーメーションに［補足 UK ステータス］ポートを追加します。

［納入場所タイプ GB］ポートおよび［組織キー GB］ポートは、バージョン 10.1 で追加されます。

これらの機能は、9.6.1 HotFix 4 でも利用可能です。10.0 では利用できません。

詳細については、『*Informatica 10.1 アドレスバリデータポートリファレンス*』を参照してください。

データプロセッサトランスフォーメーション

ここでは、新しいデータプロセッサトランスフォーメーションの機能について説明します。

REST API

アプリケーションでは、Data Transformation REST API を呼び出して、Data Transformation サービスを実行できます。

詳細については、『*Informatica 10.1 Data Transformation REST API ユーザーガイド*』を参照してください。

XmlToDocument_45 Document Processor

XmlToDocument_45 ドキュメントプロセッサは、XML データを PDF や Excel などのドキュメント形式に変換します。このコンポーネントは、**Business Intelligence and Reporting Tool**（BIRT）バージョン 4.5 Eclipse アドオンを使用します。古いバージョンの BIRT 用のドキュメントプロセッサも利用できます。

詳細については、『*Informatica 10.1 Data Transformation ユーザーガイド*』を参照してください。

リレーショナルから階層型のトランスフォーメーション

ここでは、Developer tool で作成するリレーショナルから階層型へのトランスフォーメーションについて説明します。

リレーショナルから階層型へのトランスフォーメーションは、バージョン 10.1 で導入された最適化済みのトランスフォーメーションで、リレーショナル入力を階層出力に変換します。

詳細については、*『Informatica 10.1 Developer トランスフォーメーションガイド』*を参照してください。

ワークフロー

このセクションでは、バージョン 10.1 の新しいワークフロー機能について説明します。

PowerCenter ワークフロー

ここでは、バージョン 10.1 の PowerCenter ワークフローの新しい機能について説明します。

PowerCenter 統合サービスへのワークフローの割り当て

バージョン 10.1 では、*pmrep AssignIntegrationService* コマンドを使って PowerCenter 統合サービスにワークフローを割り当てることができます。

詳細については、*『Informatica 10.1 コマンドリファレンス』*の「pmrep コマンドリファレンス」の章を参照してください。

第 11 章

変更内容（10.1）

この章では、以下の項目について説明します。

- サポートの変更 , 113 ページ
- アプリケーションサービス, 114 ページ
- Big Data, 115 ページ
- Business Glossary, 115 ページ
- コマンドラインプログラム, 116 ページ
- 例外管理, 117 ページ
- Informatica Developer, 117 ページ
- Live Data Map, 117 ページ
- Metadata Manager, 118 ページ
- PowerCenter, 119 ページ
- セキュリティ, 119 ページ
- トランスフォーメーション, 120 ページ
- ワークフロー, 121 ページ

サポートの変更

バージョン 10.1 では、次のサポートが変更されます。

Informatica のインストール

バージョン 10.1 では、オペレーティングシステムについて、次のような変更が実装されました。

サポートの変更	サポートレベル	コメント
SUSE 11	サポートの追加	バージョン 10.1 では、SUSE Linux Enterprise Server 11 のサポートが追加されました。

レポートサービス（廃止）

バージョン 10.1 では、レポートサービスが廃止されました。今後のリリースでは、レポートサービスがサポートされなくなります。レポートサービスのカスタムロールは廃止されています。

バージョン 10.1 にアップグレードしても、レポートサービスは引き続き使用できます。Data Analyzer を引き続き使用できます。Informatica では、サポートが廃止される前にサードパーティのレポートツールの使用を

開始することを推奨しています。推奨されている SQL クエリを使用して、以前の PowerCenter バージョンに付属のすべてのレポートを構築できます。

バージョン 10.1 をインストールする場合、レポートサービスを作成することはできません。Data Analyzer を使用できません。PowerCenter および Metadata Manager レポートを実行するには、サードパーティのレポートツールを使用する必要があります。

PowerCenter レポートについては、*『Informatica PowerCenter/PowerCenter レポート使用ガイド』*を参照してください。PowerCenter リポジトリビューについては、*『Informatica PowerCenter リポジトリガイド』*を参照してください。Metadata Manager リポジトリビューの詳細については、*『Informatica Metadata Manager ビューリファレンス』*を参照してください。

レポートおよびダッシュボードサービス（廃止）

バージョン 10.1 では、レポートおよびダッシュボードサービスが廃止されました。今後のリリースでは、レポートおよびダッシュボードサービスがサポートされなくなります。

バージョン 10.1 にアップグレードしても、レポートおよびダッシュボードサービスは引き続き使用できます。Informatica では、サポートが廃止される前にサードパーティのレポートツールの使用を開始することを推奨しています。推奨されている SQL クエリを使用して、以前の PowerCenter バージョンに付属のすべてのレポートを構築できます。

バージョン 10.1 をインストールする場合、レポートおよびダッシュボードサービスを作成することはできません。PowerCenter および Metadata Manager レポートを実行するには、サードパーティのレポートツールを使用する必要があります。

PowerCenter レポートについては、*『Informatica PowerCenter/PowerCenter レポート使用ガイド』*を参照してください。PowerCenter リポジトリビューについては、*『Informatica PowerCenter リポジトリガイド』*を参照してください。Metadata Manager リポジトリビューの詳細については、*『Informatica Metadata Manager ビューリファレンス』*を参照してください。

アプリケーションサービス

ここでは、バージョン 10.1 のアプリケーションサービスの変更内容について説明します。

システムサービス

ここでは、バージョン 10.1 のシステムサービスの変更内容について説明します。

スコアカード通知の電子メールサービス

バージョン 10.1 では、スコアカード通知に電子メールサービスで設定した電子メールサーバーを使用します。

以前のスコアカード通知では、ドメインで設定した電子メールサーバーを使用していました。

電子メールサービスの詳細については、*『Informatica 10.1 アプリケーションサービスガイド』*の「システムサービス」の章を参照してください。

Big Data

このセクションでは、Big Data 機能の変更点について説明します。

JCE ポリシーファイルのインストール

バージョン 10.1 では、Informatica Big Data Management に JCE ポリシーファイルが付属しています。このファイルは、インストーラを実行するとインストールされます。

以前は、AES 暗号化に対応するには、JCE ポリシーファイルをダウンロードして、手動でインストールする必要がありました。

Business Glossary

ここでは、バージョン 10.1 の Business Glossary への変更内容について説明します。

カスタムリレーション

バージョン 10.1 では、**[用語集リレーションの管理]** ワークスペースでカスタムリレーションを作成できます。**[管理]** で **[用語集リレーション]** をクリックし、**[用語集リレーションの管理]** ワークスペースを開きます。

以前は、カスタムリレーションを作成するために用語集テンプレートを編集する必要がありました。

詳細については、*『Informatica 10.1 Business Glossary ガイド』* の「用語集の管理」を参照してください。

双方向のデフォルトリレーション

バージョン 10.1 では、デフォルトのビジネス用語のリレーションは双方向です。

以前は、デフォルトのリレーションは単方向でした。

詳細については、*『Informatica 10.1 Business Glossary ガイド』* の「用語集コンテンツの検索」を参照してください。

管理者リレーション

バージョン 10.1 では、用語間の「管理者」リレーションを作成する必要がなくりました。「管理者」リレーションは、ポリシーと用語の間でのみ使用できます。

以前は、用語間の「管理者」リレーションを作成することができました。

詳細については、*『Informatica 10.1 Business Glossary ガイド』* を参照してください。

用語集のワークスペース

バージョン 10.1 では、Analyst ツールの **[用語集]** ワークスペースに、複数の用語集アセットが別々のタブを使用して表示されるようになりました。

以前は、Analyst ツールの **[用語集]** ワークスペースには、用語集アセットが 1 つだけ表示されました。

詳細については、*『Informatica 10.1 Business Glossary ガイド』* の「用語集コンテンツの検索」を参照してください。

Business Glossary Desktop

バージョン 10.1 では、Business Glossary Desktop を OS X オペレーティングシステムにインストールできます。

以前は、Business Glossary Desktop を利用できるのは Windows のみでした。

詳細については、『*Informatica 10.1 Business Glossary デスクトップのインストール＆環境設定ガイド*』を参照してください。

Business Glossary コマンドプログラムの Kerberos 認証

バージョン 10.1 では、Business Glossary コマンドプログラムが、Kerberos 認証を使用するドメインでサポートされます。

以前は、Business Glossary コマンドプログラムは、Kerberos 認証を使用するドメインでサポートされていませんでした。

詳細については、『*Informatica 10.1 コマンドリファレンス*』の「Infacmd bg コマンドリファレンス」の章を参照してください。

コマンドラインプログラム

ここでは、バージョン 10.1 のコマンドの変更内容について説明します。

infacmd isp コマンド

以下の表に、廃止された infacmd isp コマンドの説明を示します。

コマンド	説明
BackupDARepositoryContents	バイナリファイルに Data Analyzer リポジトリのコンテンツをバックアップします。コンテンツをバックアップするとき、レポートサービスではリポジトリオブジェクト、接続情報、およびコードページ情報を含む Data Analyzer リポジトリを保存します。
CreateDARepositoryContents	Data Analyzer リポジトリのコンテンツを作成します。レポートサービスの作成、またはリポジトリコンテンツの削除時に、リポジトリコンテンツを追加します。リポジトリにすでにコンテンツが含まれる場合、そのコンテンツを作成することはできません。
CreateReportingService	ドメインにレポートサービスを作成します。
DeleteDARepositoryContents	Data Analyzer リポジトリからリポジトリのコンテンツを削除します。リポジトリのコンテンツを削除すると、レポートサービスのユーザーに割り当てられている特権および役割もすべて削除されます。
RestoreDARepositoryContents	バイナリファイルから Data Analyzer リポジトリのコンテンツをリストアします。メタデータをリポジトリバックアップファイルからデータベースへリストアできます。既存のデータベースでバックアップファイルをリストアする場合、既存のコンテンツが上書きされます。
UpdateReportingService	レポートサービスのサービスオプションとリネージュオプションを更新または作成します。

コマンド	説明
UpgradeDARepositoryContents	Data Analyzer リポジトリのコンテンツをアップグレードします。
UpgradeDARepositoryUsers	Data Analyzer リポジトリ内のユーザーおよびグループをアップグレードします。Data Analyzer リポジトリのユーザーとグループをアップグレードした場合、サービスマネージャによって、そのユーザーおよびグループは Informatica ドメインへ移動されます。

詳細については、*『Informatica 10.1 コマンドリファレンス』*の「infacmd isp コマンドリファレンス」の章を参照してください。

例外管理

ここでは、バージョン 10.1 で例外管理に加えられた変更点について説明します。

例外タスクでのデフォルトの検索と置換操作

バージョン 10.1 では、例外タスクでオプションを設定し、1 つ以上のカラムのデータ値を検索および置換することができるようになりました。カラムを 1 つ指定するか、string、date、または numeric データ型を使用する任意のカラムを指定することができます。検索と置換の操作は、デフォルトで、string データが含まれるすべてのカラムに適用されます。

以前は、デフォルトで、タスク内のデータすべてに対して検索と置換の操作が実行されました。バージョン 10.1 では、タスク内のすべてのタスクで実行されるように検索と置換の操作を設定できません。

詳細については、*『Informatica 10.1 例外管理ガイド』*の「例外レコード」の章を参照してください。

Informatica Developer

ここでは、バージョン 10.1 の Developer tool への変更内容について説明します。

キーボードショートカット

バージョン 10.1 では、ショートカットキーで次の領域を選択するには、**CTRL + Tab** を押した後、**Tab** ボタンを 3 回押します。

以前のショートカットキーは、Ctrl+Tab を押した後、Ctrl+Tab を押すというものでした。

詳細については、*『Informatica 10.1.1 Developer tool ガイド』*の付録「キーボードショートカット」を参照してください。

Live Data Map

ここでは、バージョン 10.1 での Live Data Map への変更内容について説明します。

Enterprise Information Catalog

ここでは、Enterprise Information Catalog に加えられた変更点について説明します。

ホームページ

バージョン 10.1 では、トレンド検索、上位 50 件のアセット、および最近表示されたアセットがホームページに表示されるようになりました。トレンド検索では、カタログで先週最も多く検索された用語が参照されます。上位 50 件のアセットでは、カタログの中で他のアセットとのリレーションの数が最も多いアセットが参照されます。

以前は、Enterprise Information Catalog のホームページには、検索フィールド、Live Data Map がメタデータをスキャンしたときの対象リソースの数、カタログ内のアセットの総数が表示されました。

Enterprise Information Catalog のホームページの詳細については、*『Informatica 10.1 Enterprise Information Catalog ユーザーガイド』*の「Informatica Enterprise Information Catalog の基本操作」の章を参照してください。

アセットの概要

バージョン 10.1 では、アセットに関連付けられたスキーマ名を **[概要]** タブで表示できるようになりました。

以前は、関連付けられたスキーマ名はアセットの［概要］タブに表示されませんでした。

Enterprise Information Catalog でのアセットの詳細については、*『Informatica 10.1 Enterprise Information Catalog ユーザーガイド』*を参照してください。

Live Data Map Administrator ホームページ

バージョン 10.1 では、開始ワークスペースに、カタログ内の合計アセット数、未使用のリソース、割り当てられていない接続、およびその他多数の監視の統計値が表示されます。

以前は、Live Data Map Administrator ホームページに、いくつかの監視の統計値が表示されていました。それらは、リソースタイプごとのリソース数、タスク配布、およびジョブのロードの予測値などでした。

Live Data Map Administrator ホームページの詳細については、*『Informatica 10.1 Live Data Map Administrator ガイド』*の「Live Data Map Administrator の使用」を参照してください。

Metadata Manager

ここでは、バージョン 10.1 の Metadata Manager への変更内容について説明します。

Microsoft SQL Server Integration Services リソース

バージョン 10.1 の Metadata Manager のメタデータカタログでは、SQL Server 統合サービスオブジェクトが使用されている接続に従って編成されます。メタデータカタログに、パッケージごとの個別のフォルダはありません。メタデータカタログでテーブルまたは列などのオブジェクトを選択するには、オブジェクトが使用されているソース接続またはターゲット接続からオブジェクトにナビゲートします。

以前の Metadata Manager では、SQL Server 統合サービスオブジェクトが接続別およびパケージ別に編成されていました。メタデータカタログには、各パッケージのフォルダの他に、「接続」フォルダがあります。

SQL Server 統合サービスリソースの詳細については、*『Informatica 10.1 Metadata Manager 管理者ガイド』*の「データ統合リソース」を参照してください。

コマンドラインプログラムの証明書検証

バージョン 10.1 では、Metadata Manager Web アプリケーションにセキュアな接続を設定すると、Metadata Manager コマンドラインプログラムはエラーのあるセキュリティ証明書を受け入れません。エラーのあるセキュリティ証明書をコマンドラインプログラムで受け入れるかどうかを制御するプロパティは廃止されました。この機能は、9.6.1 HotFix 4 でも利用可能です。10.0 では利用できません。

以前は、MMCmdConfig.properties ファイルの Security.Authentication.Level プロパティで mmcmd または mmRepoCmd の証明書検証を制御していました。すべての証明書を受け入れるか、またはエラーのない証明書のみを受け入れるようにプロパティを設定できました。

コマンドラインプログラムでエラーのあるセキュリティ証明書が受け入れられなくなったため、Security.Authentication.Level プロパティは廃止されました。mmcmd または mmRepoCmd の MMCmdConfig.properties ファイルにこのプロパティは表示されなくなりました。

mmcmd および mmRepoCmd の証明書検証の詳細については、『*Informatica 10.1 Metadata Manager 管理者ガイド*』の「Metadata Manager コマンドラインプログラム」の章を参照してください。

PowerCenter

ここでは、バージョン 10.1 の PowerCenter の変更内容について説明します。

オペレーティングシステムのプロファイル

バージョン 10.1 では、Administrator ツールの［セキュリティ］ページの［OS プロファイル］タブの名前が、**［オペレーティングシステムプロファイル］**に変更されました。オペレーティングシステムのプロファイルを作成するには、［セキュリティアクション］メニューに移動し、**［オペレーティングシステムプロファイルの作成］**をクリックします。また、オペレーティングシステムプロファイルの作成時には、デフォルトのオペレーティングシステムプロファイルをユーザーとグループに割り当てることもできます。以前は、［セキュリティアクション］メニューに［オペレーティングシステムプロファイルの設定］オプションが表示されました。

オペレーティングシステムプロファイルの管理の詳細ついては、『*Informatica 10.1 セキュリティガイド*』の「ユーザーおよびグループ」の章を参照してください。

セキュリティ

ここでは、バージョン 10.1 のセキュリティへの変更内容について説明します。

トランスポートレイヤセキュリティ（TLS）

バージョン 10.1 では、TLS v1.1 および v1.2 を使用してトラフィックが暗号化されます。また、TLS v1.0 以下のサポートは無効になりました。

この変更は、Informatica ドメイン内の安全な通信、Web アプリケーションサービスへの安全な接続、および Informatica ドメインと外部接続先の間の接続に影響します。

この機能は、9.6.1 HotFix 4 でも利用可能です。10.0 では利用できません。

権限

バージョン 10.1 では、次のモデルリポジトリオブジェクトの権限が変更されています。

- アプリケーション、マッピング、およびワークフロー。ドメイン内のすべてのユーザーには、すべての権限が付与されます。

- SQL データサービスと Web サービス。有効な権限を持つユーザーには直接権限が割り当てられます。

この変更は、ユーザーおよびグループのこれらのオブジェクトに対するアクセスレベルに影響します。

アップグレード後、ユーザーにオブジェクトへの適切な権限を与えるために、権限を確認および変更しなければならない場合があります。

詳細については、『*Informatica 10.1 セキュリティガイド*』の「権限」の章を参照してください。

トランスフォーメーション

ここでは、バージョン 10.1 で変更されたトランスフォーメーションの動作について説明します。

Informatica トランスフォーメーション

ここでは、バージョン 10.1 の Informatica トランスフォーメーションの変更内容について説明します。

アドレスバリデータトランスフォーメーション

ここでは、アドレスバリデータトランスフォーメーションの変更内容について説明します。

アドレスバリデータトランスフォーメーションには、アドレス機能についての次の更新が含まれます。

アドレス検証エンジンのアップグレード

バージョン 10.1 では、アドレスバリデータトランスフォーメーションでバージョン 5.8.1 の Informatica アドレス検証ソフトウェアエンジンが使用されます。このエンジンによって、バージョン 10.1 のアドレスバリデータトランスフォーメーションに追加された機能が有効になります。

以前は、トランスフォーメーションで Informatica AddressDoctor ソフトウェアエンジンのバージョン 5.7.0 が使用されていました。

製品名の変更

Informatica アドレス検証は Informatica AddressDoctor の新しい名前です。Informatica AddressDoctor はバージョン 5.8.0 で Informatica アドレス検証になりました。

英国の住所のジオコードオプションの変更

バージョン 10.1 では、ジオコードデータプロパティとして［ルーフトップ］を選択し、英国の住所のルーフトップレベルのジオコードを取得できます。

以前は、英国の住所のルーフトップレベルのジオコードを取得するのに［到着点］ジオコードデータプロパティを選択していました。

アドレスバリデータトランスフォーメーションが含まれるリポジトリをアップグレードする場合、［ルーフトップ］ジオコードプロパティを指定するためにトランスフォーメーションを再設定する必要はありません。ルーフトップジオコードを指定し、アドレスバリデータトランスフォーメーションが住所のジオコードを返せない場合、トランスフォーメーションはジオコードデータを返しません。

英国の入力データでの UPRN（地所識別番号）のサポート

バージョン 10.1 では、アドレスバリデータトランスフォーメーションに UPRN GB 入力ポートと UPRN GB 出力ポートが含まれます。

以前は、トランスフォーメーションに UPRN GB 出力ポートが含まれていました。

入力した UPRN（地所識別番号）に対応する英国の住所を取得するには、UPRN GB 入力ポートを使用します。英国の住所に対応する UPRN（地所識別番号）を取得するには、UPRN GB 出力ポートを使用します。

これらの機能は、9.6.1 HotFix 4 でも利用可能です。10.0 では利用できません。

詳細については、『*Informatica 10.1 アドレスバリデータポートリファレンス*』を参照してください。

データプロセッサトランスフォーメーション

ここでは、データプロセッサトランスフォーメーションの変更内容について説明します。

Excel 2013

バージョン 10.1 では、ExcelToXml_03_07_10 ドキュメントプロセッサによって Excel 2013 ファイルを処理できます。データプロセッサトランスフォーメーションのドキュメントプロセッサは、ソースドキュメントの形式をトランスフォーメーション前に変換するプリプロセッサとして使用することができます。

詳細については、『*Informatica 10.1 Data Transformation ユーザーガイド*』を参照してください。

Avro または Parquet 入力によるパフォーマンスの向上

データプロセッサトランスフォーメーションは、複合ファイルリーダーオブジェクトからの Avro または Parquet データ入力を受け取ります。バージョン 10.1 では、複合ファイルリーダーの設定を指定して、Avro または Parquet 入力のパフォーマンスを最適化できます。

詳細については、『*Informatica 10.1 Data Transformation ユーザーガイド*』を参照してください。

Hadoop 環境での COBOL 入力のパフォーマンスの向上

バージョン 10.1 では、複合ファイルリーダーの設定を指定して、Hadoop 環境で大きな COBOL ファイルを処理するときのパフォーマンスを最適化できます。正規表現を使用し、適切な COBOL 入力ファイルに対してレコード処理を分割する方法を定義します。

詳細については、『*Informatica 10.1 Data Transformation ユーザーガイド*』を参照してください。

例外のトランスフォーメーション

バージョン 10.1 では、不良レコードの例外トランスフォーメーションと重複レコードの例外トランスフォーメーションを設定して、デフォルト以外のデータベーススキーマで例外テーブルを作成できます。

以前は、データベースのデフォルトスキーマで例外テーブルが作成されるようにトランスフォーメーションを設定しました。

この機能は、9.6.1 HotFix 4 でも利用可能です。10.0 では利用できません。

詳細については、『*Informatica 10.1 Developer トランスフォーメーションガイド*』を参照してください。

ワークフロー

このセクションでは、バージョン 10.1 で変更されたワークフローの動作について説明します。

Informatica ワークフロー

このセクションでは、バージョン 10.1 における Informatica ワークフロー動作の変更点について説明します。

ヒューマンタスクの並列実行

バージョン 10.1 では、データ統合サービスにより、1 つのワークフロー内の複数のシーケンスフローでヒューマンタスクを並行して実行できるようになりました。並行シーケンスフローを作成するには、Developer tool で包含ゲートウェイをワークフローに追加します。包含ゲートウェイ間の各シーケンスフローにヒューマンタスクを 1 つ以上追加します。

以前は、包含ゲートウェイ間の 1 つのシーケンスフローにヒューマンタスクを 1 つ以上追加しました。

詳細については、*『Informatica 10.1 Developer ワークフローガイド』*を参照してください。

第 12 章

リリースタスク（10.1）

この章では、以下の項目について説明します。

- Metadata Manager , 123 ページ
- セキュリティ, 124 ページ

Metadata Manager

ここでは、バージョン 10.1 の Metadata Manager のリリースタスクについて説明します。

Informatica Platform リソース

バージョン 10.1 では、データ統合サービスに実装された Informatica 10.0 アプリケーションからメタデータを抽出するには、バージョン 10.0 コマンドラインユーティリティをインストールする必要があります。10.1 Metadata Manager サービスからアクセス可能なディレクトリに、コマンドラインユーティリティをインストールします。最高のパフォーマンスを得るには、Metadata Manager サービスを実行するマシン上のディレクトリにファイルを展開します。

リソースを設定するには、さらに［**10.0 コマンドラインユーティリティディレクトリ**］プロパティに、10.0 Informatica コマンドラインユーティリティのインストールディレクトリのファイルパスを入力する必要があります。

Informatica Platform リソースの詳細については、『*Informatica 10.1 Metadata Manager 管理者ガイド*』の章「データ統合リソース」を参照してください。

コマンドラインプログラムのトラストストアファイルの検証

バージョン 10.1 では、Metadata Manager Web アプリケーションにセキュアな接続を設定すると、Metadata Manager コマンドラインプログラムはエラーのあるセキュリティ証明書を受け入れません。エラーのあるセキュリティ証明書をコマンドラインプログラムで受け入れるかどうかを制御するプロパティは廃止されました。この機能は、9.6.1 HotFix 4 でも利用可能です。10.0 では利用できません。

MMCmdConfig.properties ファイルの Security.Authentication.Level プロパティで、mmcmd または mmRepoCmd の証明書検証を制御していました。このプロパティを次のいずれかの値に設定できました。

- NO_AUTH。コマンドラインプログラムは、電子証明書にエラーがあっても電子証明書を受け入れます。
- FULL_AUTH。コマンドラインプログラムは、エラーのあるセキュリティ証明書を受け入れません。

NO_AUTH 設定は無効になりました。コマンドラインプログラムは、エラーのないセキュリティ証明書のみを受け入れるようになりました。

Metadata Manager Web アプリケーションにセキュアな接続を設定していて、以前に Security.Authentication.Level プロパティを NO_AUTH に設定していた場合、トラストストアファイルの設定が必要となります。トラストストアファイルを使用するように mmcmd または mmRepoCmd を設定するには、mmcmd または mmRepoCmd に関連付けられている MMCmdConfig.properties ファイルを編集します。TrustStore.Path プロパティにトラストストアファイルのパスとファイル名を設定します。

mmcmd および mmRepoCmd 用の MMCmdConfig.properties ファイルの詳細については、『*Informatica 10.1 Metadata Manager 管理者ガイド*』の「Metadata Manager コマンドラインプログラム」の章を参照してください。

セキュリティ

ここでは、バージョン 10.1 のセキュリティ機能のリリースタスクについて説明します。

権限

10.1 にアップグレードすると、次のモデルリポジトリオブジェクトの権限が変更されます。

- アプリケーション、マッピング、およびワークフロー。ドメイン内のすべてのユーザーには、すべての権限が付与されます。
- SQL データサービスと Web サービス。有効な権限を持つユーザーには直接権限が割り当てられます。

この変更は、ユーザーおよびグループのこれらのオブジェクトに対するアクセスレベルに影響します。

アップグレードした後は、アプリケーション、マッピング、ワークフロー、SQL データサービス、および Web サービスに対する権限をレビューおよび変更して、ユーザーがオブジェクトに対して適切な権限を持っていることを確認します。

詳細については、『*Informatica 10.1 セキュリティガイド*』の「権限」の章を参照してください。

パート III: バージョン 10.0

この部には、以下の章があります。

- 新製品（10.0）, 126 ページ
- 新機能（10.0）, 128 ページ
- 変更内容（10.0）, 181 ページ
- リリースタスク（10.0）, 213 ページ

第 13 章

新製品（10.0）

- PowerExchange アダプタ, 126 ページ

PowerExchange アダプタ

Informatica 用 PowerExchange アダプタ

ここでは、バージョン 10.0 の新しい Informatica アダプタについて説明します。

PowerExchange for JD Edwards EnterpriseOne

バージョン 10.0 では、PowerExchange for JD Edwards EnterpriseOne を使用して、JD Edwards EnterpriseOne ソースからデータを抽出したり、JD Edwards EnterpriseOne ターゲットにデータを書き込んだりできます。

詳細については、『*Informatica PowerExchange for JD Edwards EnterpriseOne 10.0 ユーザーガイド*』を参照してください。

PowerExchange for LDAP

バージョン 10.0 では、PowerExchange for LDAP を使用して、LDAP ディレクトリサーバーに対してデータの読み取りおよび書き込みを行うことができます。

詳細については、『*Informatica PowerExchange for LDAP 10.0 ユーザーガイド*』を参照してください。

PowerExchange for Microsoft Dynamics CRM

バージョン 10.0 では、PowerExchange for Microsoft Dynamics CRM を使用して、Microsoft Dynamics CRM に対してデータの読み取りおよび書き込みを行うことができます。Microsoft Dynamics CRM ビジネスエンティティを読み取りおよび書き込みデータオブジェクトとしてインポートし、マッピングを作成して実行し、Microsoft Dynamics CRM エンティティに対してデータの抽出またはロードを行うことができます。

詳細については、『*Informatica PowerExchange for Microsoft Dynamics CRM 10.0 ユーザーガイド*』を参照してください。

PowerExchange for Netezza

バージョン 10.0 では、PowerExchange for Netezza で次のタスクを実行できます。

- PowerExchange for Netezza を使用して、Netezza データベースに対してデータの読み取りおよび書き込みを行うことができます。PowerExchange for Netezza を使用して、大量のデータを処理できます。
- Secure Sockets Layer（SSL）プロトコルを使用して、Netezza クライアントと Netezza サーバー間にセキュアな接続を設定できます。

詳細については、『*Informatica PowerExchange for Netezza 10.0 ユーザーガイド*』を参照してください。

PowerExchange for OData

バージョン 10.0 では、PowerExchange for OData を使用して、OData サービスを介してデータを公開する OData プロバイダからデータを読み取ることができます。また、OData データオブジェクトに対してプロファイルを実行することもできます。

詳細については、『*Informatica PowerExchange for OData 10.0 ユーザーガイド*』を参照してください。

第 14 章

新機能（10.0）

この章では、以下の項目について説明します。

- アプリケーションサービス, 128 ページ
- Big Data, 132 ページ
- Business Glossary, 134 ページ
- コマンドラインプログラム, 137 ページ
- 接続性, 145 ページ
- データ型, 146 ページ
- マニュアル, 148 ページ
- ドメイン, 148 ページ
- Informatica Administrator, 149 ページ
- Informatica Analyst, 154 ページ
- Informatica Developer, 155 ページ
- Informatica Development Platform, 159 ページ
- マッピング, 160 ページ
- Metadata Manager, 165 ページ
- PowerCenter, 168 ページ
- PowerExchange アダプタ, 169 ページ
- 参照データ, 171 ページ
- ルール仕様, 171 ページ
- セキュリティ, 173 ページ
- トランスフォーメーション言語関数, 174 ページ
- トランスフォーメーション, 174 ページ
- ワークフロー, 179 ページ

アプリケーションサービス

ここでは、バージョン 10.0 の新しいアプリケーションサービスについて説明します。

アプリケーションサービスの無効化とリサイクル

バージョン 10.0 では、アプリケーションサービスの無効化とリサイクルに次の新機能が追加されました。

計画済みおよび未計画のメモ

Administrator ツールからアプリケーションサービスを無効化またはリサイクルするときに、アクションを計画済みにするか未計画にするかを指定できます。計画済みまたは未計画のメモは、**［管理］**タブの**［ドメイン］**ビューにある**［コマンド履歴］**パネルと**［イベント］**パネルに表示されます。

コメント

Administrator ツールからアプリケーションサービスを無効化またはリサイクルするときに、必要に応じて、アクションに関するコメントを入力できます。コメントは、**［管理］**タブの**［ドメイン］**ビューにある**［コマンド履歴］**パネルと**［イベント］**パネルに表示されます。

詳細については、*『Informatica 10.0 アプリケーションサービスガイド』*を参照してください。

データ統合サービス

ここでは、バージョン 10.0 の新しいデータ統合サービス機能について説明します。

アーキテクチャ

バージョン 10.0 では、データ統合サービスには、次のタイプのコンポーネントが含まれます。

サービスコンポーネント

サービスコンポーネントには、クライアントツールからの要求を管理するモジュール、ジョブを最適化してコンパイルする論理 Data Transformation マネージャ（LDTM）、およびアプリケーションのデプロイメントとキャッシュを管理するマネージャが含まれます。サービスコンポーネントは、データ統合サービスプロセス内で実行されます。データ統合サービスプロセスは、サービスロールのあるノードで実行する必要があります。

計算コンポーネント

データ統合サービスの計算コンポーネントは、実行 Data Transformation マネージャ（DTM）です。DTM は、データの抽出、変換、およびロードを行って、データトランスフォーメーションジョブを完了します。DTM は、計算ロールのあるノードで実行する必要があります。

単一ノードでデータ統合サービスを実行する場合、データ統合サービスのサービスコンポーネントと計算コンポーネントは同じノードで実行されます。ノードには、サービスロールと計算ロールの両方が必要です。

グリッド上でデータ統合サービスを実行する場合、データ統合サービスのサービスコンポーネントと計算コンポーネントは、グリッドおよびノードロールの設定方法に基づいて同じノードまたは異なるノードで実行されます。個別のリモートプロセスでジョブを実行するようにデータ統合サービスのグリッドを設定した場合、グリッド内のノードでは、サービスのみのロール、計算のみのロール、およびサービスと計算の両方のロールを組み合わせることができます。グリッド内の一部のノードをサービスプロセスの実行専用とし、別のノードをマッピングの実行専用とします。

データ統合サービスのコンポーネントの詳細については、*『Informatica 10.0 アプリケーションサービスガイド』*の「データ統合サービスアーキテクチャ」を参照してください。

DTM リソース割り当てポリシー

バージョン 10.0 では、Data Transformation マネージャのリソース割り当てポリシーによって、タスクに CPU リソースを割り当てる方法が決定されます。DTM は、オンデマンドのリソース割り当てポリシーを使用して、CPU リソースを割り当てます。

DTM リソース割り当てポリシーの詳細については、*『Informatica 10.0 アプリケーションサービスガイド』*の「データ統合サービスアーキテクチャ」を参照してください。

ASCII データ移動モード

バージョン 10.0 では、フラットファイルまたはリレーショナルソースから読み取るマッピングで ASCII データ移動モードを使用するか、Unicode データ移動モードを使用するかが、データ統合サービスの論理 Data Transformation マネージャ（LDTM）のコンポーネントによって決定されます。LDTM は、マッピングによって処理される文字セットに基づいて、データ移動モードを決定します。マッピングによって処理されるのがすべて ASCII データの場合、LDTM は ASCII モードを選択します。ASCII モードの場合、データ統合サービスは各文字の格納に 1 バイトを使用するため、マッピングのパフォーマンスが最適化されます。Unicode モードの場合は、各文字の格納に 2 バイトが使用されます。

データ移動モードの詳細については、*『Informatica 10.0 アプリケーションサービスガイド』*の「データ統合サービスアーキテクチャ」を参照してください。

プロファイルの並行処理の最大化

バージョン 10.0 では、パーティション化が可能な場合、データ統合サービスでカラムプロファイルとデータドメイン検出を実行するときに、並行処理を最大化することができます。並行処理を最大化した場合、データ統合サービスは、プロファイリングデータを複数のパーティションに動的に分割し、複数のスレッドを使用してパーティションを同時に処理します。データ統合サービスは、追加のスレッドを使用するときに、プロファイリングのパフォーマンスを最適化できます。

並行処理の最大化の詳細については、*『Informatica 10.0 アプリケーションサービスガイド』*の「データ統合サービス管理」を参照してください。

複数のキャッシュ、ターゲット、および一時ディレクトリ

バージョン 10.0 では、次のデータ統合サービスのプロパティに対して複数のディレクトリを設定できます。

キャッシュディレクトリ

複数のキャッシュディレクトリを設定し、アグリゲータ、ジョイナ、またはランクトランスフォーメーションのキャッシュのパーティション化時のパフォーマンスを最適化します。

ターゲットディレクトリ

複数のターゲットディレクトリを設定し、複数のパーティションでフラットファイルターゲットに書き込むときのパフォーマンスを最適化します。

一時ディレクトリ

複数の一時ディレクトリを設定し、ソータトランスフォーメーションのキャッシュのパーティション化時のパフォーマンスを最適化します。

パーティション化時のキャッシュとターゲットディレクトリの最適化の詳細については、*『Informatica 10.0 アプリケーションサービスガイド』*の「データ統合サービス管理」を参照してください。

モデルリポジトリサービス

ここでは、バージョン 10.0 の新しいモデルリポジトリサービス機能について説明します。

バージョン管理システムサポート

バージョン 10.0 では、サポートされているバージョン管理システムとモデルリポジトリを統合できます。モデルリポジトリがバージョン管理システムと統合されていると、バージョン管理システムによって、開発チームの他のメンバによる上書きからオブジェクトが保護されます。オブジェクトのチェックアウトとチェックイン、オブジェクトのバージョン履歴の表示と取得、チェックアウトの取り消し、チェックアウトされたオブジェクトの他ユーザーへの再割り当てなどのアクションを実行できます。

モデルリポジトリは、次のバージョン管理システムと統合できます。

- Perforce

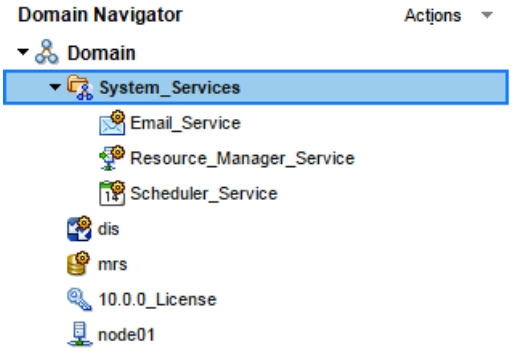
- Subversion

詳細については、*『Informatica 10.0 アプリケーションサービスガイド』*の「モデルリポジトリサービス」を参照してください。

システムサービス

バージョン 10.0 では、ドメインにシステムサービスが含まれます。システムサービスは、ドメイン内で単一のインスタンスを持つことができるアプリケーションサービスです。システムサービスは、ドメインを作成またはアップグレードするときに自動作成されます。システムサービスを有効化、無効化、および設定する操作が可能です。

以下の画像はドメインナビゲータ内のシステムサービスフォルダを示しています。



ドメインには以下のシステムサービスが含まれます。

電子メールサービス

電子メールサービスでは、ビジネス用語集およびワークフロー関連の通知をメール送信します。電子メールサービスを有効にすると、ユーザーが電子メール通知を設定できます。

電子メールサービスは以下の通知を送信します。

- ビジネス用語集通知
- ワークフロー通知ワークフロー通知には、データ統合サービスが実行するワークフローのヒューマンタスクおよび通知タスクからのメールが含まれます。

リソースマネージャサービス

リソースマネージャサービスは、ドメイン内の計算リソースを管理し、ジョブをディスパッチすることで最適なパフォーマンスと拡張性を達成します。リソースマネージャサービスは、計算ロールが指定されたノードに関する情報を収集します。このサービスは、ジョブ要件をリソースの可用性と突き合わせ、そのジョブの実行に最適な計算ノードを特定します。

データ統合サービスグリッドが個別のリモートプロセスでジョブを実行するように設定するときに、リソースマネージャサービスを有効にします。

スケジューラサービス

スケジューラサービスは、ドメイン内のデプロイされたマッピングおよびワークフロージョブのスケジュールを管理します。

スケジュールを作成してジョブを割り当て、スケジュールされたジョブが実行されるように設定するときに、スケジューラサービスを有効にします。

システムサービスについての詳細は、*『Informatica 10.0 アプリケーションサービスガイド』*の「システムサービス」を参照してください。

Big Data

ここでは、バージョン 10.0 の新しい Big Data 機能について説明します。

Big Data Management 設定ユーティリティ

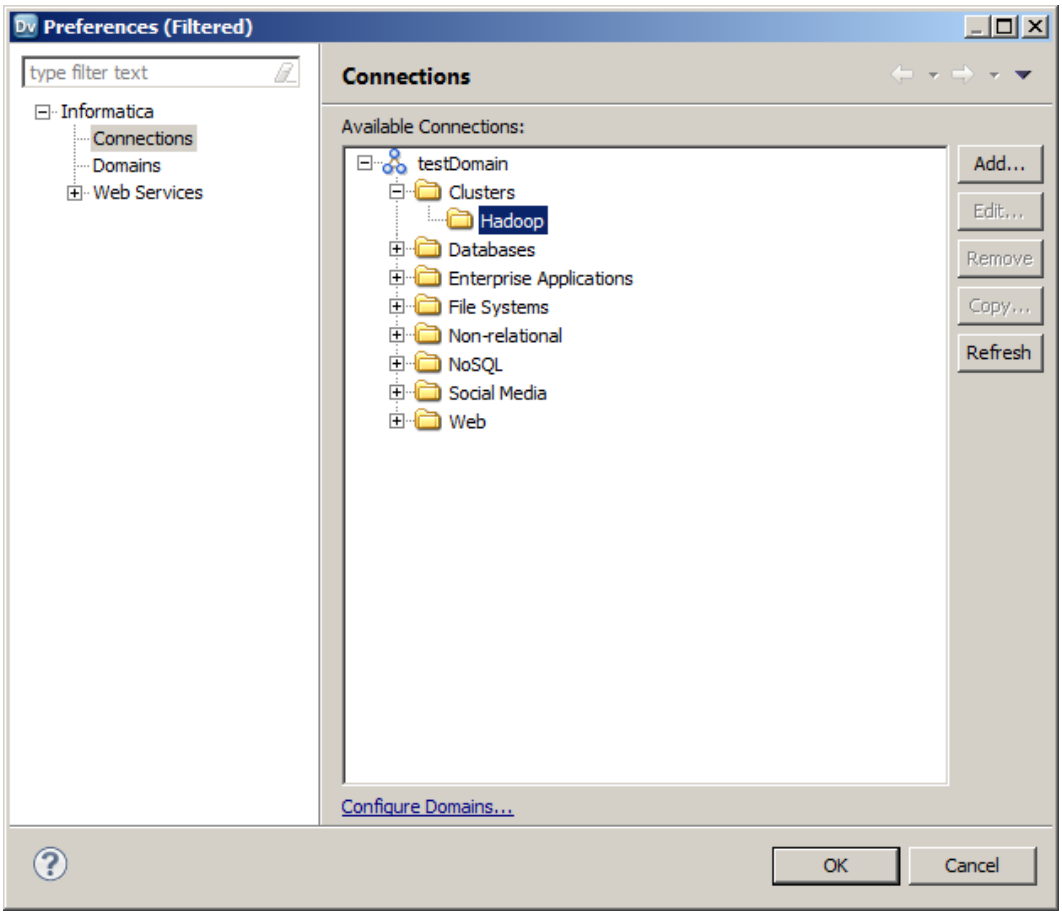
バージョン 10.0 では、Big Data Management 設定ユーティリティを使用して、Big Data Management の環境設定プロセスを部分的に自動化できます。

詳細については、*『Informatica 10.0 Big Data Management インストール & 環境設定ガイド』*を参照してください。

Hadoop 接続

バージョン 10.0 では、Hadoop 環境でマッピングを実行する場合、Hadoop 接続を設定する必要があります。Hadoop 接続を編集して、Hadoop 環境にランタイムプロパティを設定できます。ランタイムプロパティには、Hive エンジンおよび Blaze エンジンのプロパティが含まれます。

次の図は、クラスタタイプの接続として Hadoop 接続を示しています。



詳細については、*『Informatica 10.0 Big Data 管理ユーザーガイド』*の「接続」を参照してください。

Hadoop エコシステム

バージョン 10.0 では、Hadoop エコシステムの次の Big Data 機能と機能拡張がサポートされています。

Amazon EC2 **での** Hadoop **クラスタ**

Amazon EC2 にデプロイされている Hortonworks HDP クラスタに対して、データの読み取りおよび読み書きを行うことができます。

Hadoop **分布**

次の Hadoop 分布を実行する Hadoop クラスタに接続できます。

- Cloudera CDH 5.4
- MapReduce 1 および MapReduce 2 を含む MapR 4.0.2

Hive on Tez

Hortonworks HDP を実行する Hadoop クラスタの実行エンジンとして、Hive on Tez を使用できます。

Kerberos **認証**

Cloudera CDH クラスタおよび Hortonworks HDP Hadoop クラスタの Key Distribution Center として、Microsoft Active Directory を使用できます。

Big Data のパラメータ

バージョン 10.0 では、パラメータを使用して、次に示す Big Data の追加プロパティを指定できます。

- 複合ファイルソースおよびターゲット
- HDFS 上の複合ファイルソースおよびターゲット
- HDFS 上のフラットファイルソースおよびターゲット
- HBase ソースおよびターゲット
- Hive ソース
- Hadoop 環境の Hive ターゲット
- ランタイム環境

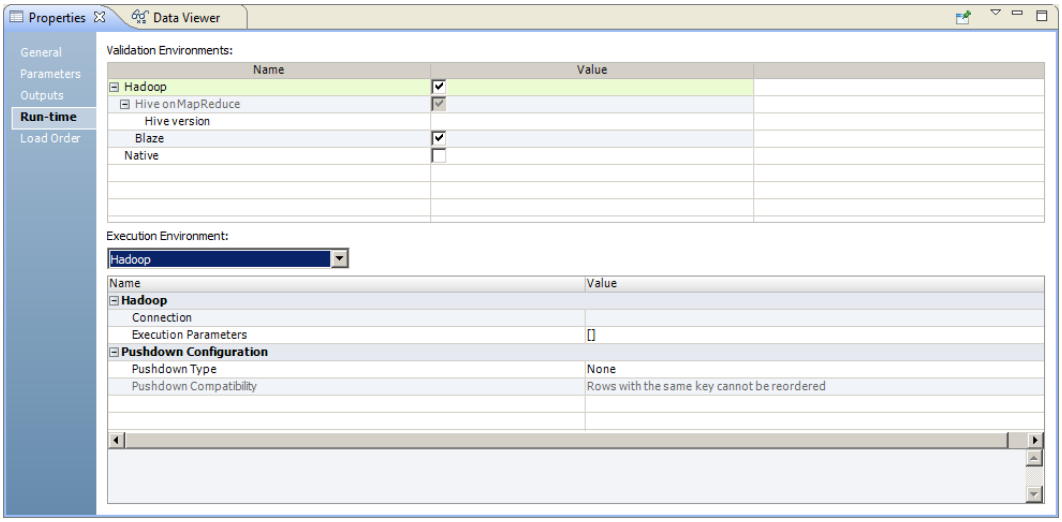
詳細については、『*Informatica 10.0 Big Data 管理ユーザーガイド*』の章「Hadoop 環境でのマッピング」を参照してください。

ランタイムおよび検証環境

バージョン 10.0 では、Hadoop 環境を選択して、Hadoop クラスタでマッピングを実行できます。Hadoop 環境を選択するとき、Hive または Blaze エンジンを選択して、マッピングロジックを Hadoop クラスタにプッシュします。Blaze エンジンは、Hadoop 上の分散処理に用いる、Informatica 独自のエンジンです。

Hadoop 環境でマッピングを実行するとき、マッピングの Hadoop 接続を設定する必要があります。マッピングを検証して、マッピングロジックを Hadoop にプッシュできることを確認します。Hadoop 環境に対するマッピングの検証が終了すると、マッピングを実行できます。

以下の画像は、Hadoop ランタイムおよび検証環境を示しています。



詳細については、『*Informatica 10.0 Big Data 管理ユーザーガイド*』の章「Hadoop 環境でのマッピング」を参照してください。

Business Glossary

ここでは、バージョン 10.0 の新しい Business Glossary 機能について説明します。

承認ワークフロー

バージョン 10.0 では、投票プロセスの後にデータスチュワードが用語集アセットをパブリッシュできます。用語集管理者が用語集の承認ワークフローを設定した後で、データスチュワードは投票プロセスによって、用語集のすべてのアセットをパブリッシュまたは拒否する必要があります。用語集管理者は、2 つのレベルまで承認を設定できます。承認者は、アセットの変更を承認または拒否するか、投票を棄権することができます。データスチュワードは、投票結果に基づいてアセットをパブリッシュまたは拒否します。

承認ワークフローを経てパブリッシュされた用語集アセットには、監査証跡に **[投票履歴]** という新しいタブが追加されます。このタブには、承認ワークフローの詳細が表示されます。

詳細については、『*Informatica 10.0 Business Glossary ガイド*』の「承認ワークフロー」を参照してください。

用語集アセットの添付ファイル

バージョン 10.0 では、用語集アセットに添付ファイルを追加できます。参照ユーザーは、**[用語集]** ワークスペースで用語集アセットを開いたときに、添付ファイルを表示できます。

アセットの添付ファイルの詳細については、『*Informatica 10.0 Business Glossary ガイド*』の「用語集のコンテンツ管理」を参照してください。添付ファイルディレクトリの設定の詳細については、『*Informatica アプリケーションサービス*』の「アナリストサービス」を参照してください。

Long String データ型

バージョン 10.0 では、Long String データ型のカスタムプロパティを作成できます。コンテンツ管理者がフィールドにコンテンツを追加するとき、Long String データ型では文字数に制限がありません。

Long String データ型の詳細については、*『Informatica 10.0 Business Glossary ガイド』*「用語集のコンテンツ管理」を参照してください。

リッチテキストのサポート

バージョン 10.0 では、**説明**、**使用コンテキスト**、および**例**などのデフォルトのアセットプロパティを設定するとき、データスチュワードはリッチテキストのコンテンツに書式を設定できます。Long String データ型を持つカスタムプロパティもリッチテキストをサポートしています。

データスチュワードは以下の方法でテキストの書式を設定できます。

- テキストを太字や斜体にするか、下線を引く。
- フォントおよびフォントの色を変更する。
- 順序付けしたリストまたは順序付けしていないリストを追加する。
- 定義済みスタイルを使用する。
- 内部および外部リンクをテキストに挿入する。

リッチテキストについての詳細は、*『Informatica 10.0 Business Glossary ガイド』*の「用語集のコンテンツ管理」を参照してください。

インポートとエクスポートの機能拡張

バージョン 10.0 では、他の用語集、添付ファイル、監査履歴のリンクされたアセットを含めて/含めずに、ビジネス用語集をインポートまたはエクスポートできます。

必要に応じて、バックグラウンドでインポートタスクを実行できます。Analyst ツールがバックグラウンドで用語集をインポートしている間に、ユーザーは他のタスクを実行できます。インポートが完了すると、Analyst ツールから通知が送信されます。

インポートウィザードの最後のステップで、Analyst ツールには、拡張されたサマリと競合解決のオプションが表示されます。

インポートとエクスポートの機能拡張の詳細については、*『Informatica 10.0 Business Glossary ガイド』*の「用語集の管理」を参照してください。

電子メール通知

バージョン 10.0 では、電子メールでの通知の受信を選択できます。Analyst ツールでも、引き続き通知を受信できます。**[用語集の設定]** ワークスペースで、電子メール通知を設定できます。

電子メール通知の詳細については、*『Informatica 10.0 Business Glossary ガイド』*の「用語集コンテンツの検索」を参照してください。

リレーションビュー図の改良点

バージョン 10.0 では、リレーションビュー図に以下の改良点があります。

完全なアセット名の表示

リレーションビュー図に、完全なアセット名およびリレーション名を表示するオプションが追加されました。デフォルトでは、200 文字を超えるアセット名およびリレーション名は Analyst ツールによって切り詰められます。

アセットの検索

リレーションビュー図に表示されるアセットを検索できます。

ノードの展開と折りたたみ

ノードの展開または折りたたみを行って、ノード内のアセットを表示または非表示できます。

キャンバスのパン

リレーションビューキャンバスをクリック&ドラッグでキャンバス全域にわたってパンし、アセットを表示できます。

詳細については、*『Informatica 10.0 Business Glossary ガイド』*の「用語集コンテンツの検索」を参照してください。

Analyst ツール特権

バージョン 10.0 では、Administrator ツールで、パブリッシュされている用語集アセットの表示特権をユーザーに割り当てることができます。Administrator ツールで**用語集の表示**特権を与えることは、Analyst ツールで**［用語集のセキュリティ］**ワークスペース内にある用語集およびパブリッシュされている用語集アセットの読み取り権限を与えることと同じです。

詳細については、*『Informatica 10.0 セキュリティガイド』*を参照してください。

ビジネス用語のリンク

バージョン 10.0 では、プロファイルをビジネス用語にリンクできます。Analyst ツールに、リンクされているテクニカルアセットおよびデータオブジェクトへのハイパーリンクが表示されます。ハイパーリンクをクリックすると、データオブジェクトがそれぞれのワークスペースで開きます。

詳細については、*『Informatica 10.0 Business Glossary ガイド』*を参照してください。

用語集のセキュリティ

バージョン 10.0 では、Analyst ツールの用語集のセキュリティに次の拡張機能が追加されています。

用語集のセキュリティのユーザーインタフェース

［用語集のセキュリティ］ワークスペースビューに、ロール、ユーザー、およびグループの数が表示されます。

権限と特権ウィザード

［用語集のセキュリティ］ワークスペースで、ウィザードを使用してユーザーに権限または特権を追加するとき、カテゴリまたはタイプに基づいて用語集アセットをソートできます。また、ユーザーのすべてのアセットに対して、読み取りおよび書き込み権限を一括割り当てできるようになりました。

アセットビュー

バージョン 10.0 では、アセットビューに添付ファイルの数およびアセットを含む用語集の名前も表示されます。

詳細については、*『Informatica 10.0 Business Glossary ガイド』*の「Business Glossary について」を参照してください。

デフォルトの承認者

バージョン 10.0 では、サービス管理者は、用語集のデフォルトの承認者を設定できます。サービス管理者が指定するデフォルトの承認者だけが、通常の承認プロセス中に通知を受信したり、進められた承認ワークフロー中にレベル 1 の投票に参加したりできます。

詳細については、*『Informatica 10.0 Business Glossary ガイド』*の「用語集の管理」を参照してください。

コマンドラインプログラム

ここでは、バージョン 10.0 の新規および変更されたコマンドについて説明します。

infacmd bg コマンド

以下の表に、新しい infacmd bg コマンドの説明を示します。

コマンド	説明
upgradeRepository	モデルリポジトリ内の Business Glossary データをアップグレードします。ドメインをアップグレードした後にこのコマンドを実行します。

infacmd dis コマンド

以下の表に、新しい infacmd dis コマンドの説明を示します。

コマンド	説明
addParameterSetEntries	アプリケーションとしてデプロイされたマッピングまたはワークフローのパラメータセットにエントリを追加します。
deleteParameterSetEntries	アプリケーションとしてデプロイされたマッピングまたはワークフローのパラメータセットからエントリを削除します。特定のパラメータセットエントリまたはすべてのパラメータセットエントリを削除することができます。
listApplicationObjects	アプリケーションに含まれるオブジェクトを一覧表示します。
listComputeOptions	計算ロールのあるノードに対するデータ統合サービスのプロパティを一覧表示します。
listParameterSetEntries	パラメータセット内のエントリを一覧表示します。
listParameterSets	アプリケーション内のパラメータセットを一覧表示します。
updateComputeOptions	計算ロールのあるノードに対するデータ統合サービスのプロパティを更新します。特定の計算ノードに対するデータ統合サービスのプロパティをオーバーライドするコマンドを使用してください。
updateParameterSetEntries	アプリケーション内のマッピングまたはワークフローに対するパラメータセットに含まれるエントリを更新します。更新するパラメータの名前と値のペアをスペースで区切って入力します。
stopBlazeService	Blaze エンジンのコンポーネントの作動を停止します。

以下の表に、infacmd dis コマンドオプションの変更内容を示します。

コマンド	説明
UpdateServiceOptions	次のオプションが、メモリ割り当て用に追加されました。 - MappingServiceOptions.MaxMemPerRequest - ProfilingServiceOptions.MaxMemPerRequest - SQLServiceOptions.MaxMemPerRequest - WSServiceOptions.MaxMemPerRequest これらのオプションを使用して、データ統合サービスがマッピング、プロファイル、SQL サービス、または Web サービス要求に割り当てるメモリの最大量をバイト単位で指定します。 次のオプションが、ワークフロー操作用に追加されました。 - Modules.WorkflowOrchestrationService このオプションを使用して、ワークフローを実行するモジュールを有効または無効にします。 - WorkflowOrchestrationServiceOptions.DBName このオプションを使用して、ワークフローのランタイムメタデータを保存するデータベースの接続名を指定します。 ExecutionOptions.OutOfProcessExecution オプションは次の値に設定できます。 - IN_PROCESS。データ統合サービスプロセス内でジョブを実行します。 - OUT_OF_PROCESS。ローカルノードの個別の DTM プロセス内でジョブを実行します。 - OUT_OF_PROCESS_REMOTE。リモートノードの個別の DTM プロセス内でジョブを実行します。 以前は、このオプションを true（IN_PROCESS）または false（OUT_OF_PROCESS）に設定していました。 次のオプションは、UpdateServiceProcessOptions コマンドから UpdateServiceOptions コマンドに移動しました。 - ExecutionOptions.MaxExecutionPoolSize - ExecutionOptions.MaxMemorySize - ExecutionOptions.MaxMappingParallelism - ExecutionOptions.DisHadoopPrincipal - ExecutionOptions.DisHadoopKeytab - ExecutionOptions.TemporaryDirectories - ExecutionOptions.DisHomeDirectory - ExecutionOptions.CacheDirectory - ExecutionOptions.SourceDirectory - ExecutionOptions.TargetDirectory - ExecutionOptions.RejectFilesDirectory - ExecutionOptions.HadoopInfaHomeDir - ExecutionOptions.HadoopDistributionDir - ExecutionOptions.DisHadoopDistributionDir 次の電子メールサーバーオプションは、スコアカード通知に対して isp UpdateSMTPOptions に移動しました。 - EmailServerOptions.SMTPServerHost - EmailServerOptions.SMTPServerPort - EmailServerOptions.SMTPServerUser - EmailServerOptions.SMTPServerPassword - EmailServerOptions.SenderEmailId 次の電子メールサーバーオプションは、スコアカード通知に対して削除されました。 - EmailServerOptions.SMTPSwitchAuthenticationOn - EmailServerOptions.SMTPSwitchTLSOn - EmailServerOptions.SMTPSwitchSSLOn 次の電子メールサーバーオプションは、ワークフロー通知に対して es UpdateSMTPOptions コマンドに移動しました。 - EmailServerOptions.SMTPServerHost

コマンド	説明
	- EmailServerOptions.SMTPServerPort - EmailServerOptions.SMTPServerUser - EmailServerOptions.SMTPServerPassword - EmailServerOptions.SMTPSwitchAuthenticationOn - EmailServerOptions.SenderEmailId - EmailServerOptions.SMTPSwitchTLSOn - EmailServerOptions.SMTPSwitchSSLOn 次の電子メールサーバーオプションは削除されました。 - EmailServerOptions.SMTPServerConnectionTimeout - EmailServerOptions.SMTPServerCommunicationTimeout 次のオプションは、ワークフロー操作に対して削除されました。 - HumanTaskServiceOptions.HTConnectionName - Modules.HumanTaskService - Modules.WorkflowService - WorkflowServiceOptions.HTDataIntegrationServiceName
UpdateServiceProcessOptions	ExecutionOptions.MaxSessionSize オプションは廃止されています。残りの実行オプションは UpdateServiceOptions に移動しました。

infacmd es コマンド

新しい infacmd es プログラムでは電子メールサービスを管理します。

以下の表に、新しい infacmd es コマンドの説明を示します。

コマンド	説明
ListServiceOptions	電子メールサービスに対して設定されたプロパティの一覧を返します。
UpdateServiceOptions	電子メールサービスのプロパティを更新します。
UpdateSMTPOptions	電子メールサービスの電子メールサーバープロパティを更新します。

infacmd hts コマンド

いずれの infacmd hts コマンドも現在は使われていません。

以下の表に、現在使われていない infacmd hts コマンドの説明、およびバージョン 10.0 で同様のアクションを実行するときに使用するコマンドを示します。

コマンド	説明
CreateDB	ヒューマンタスクのランタイムメタデータを保存するデータベーステーブルを作成します。 バージョン 10.0 では、ワークフローに対するすべてのランタイムメタデータが共通のテーブルのセットに保存されます。ワークフローメタデータテーブルを作成するには infacmd wfs CreateTables を使用します。
DropDB	ヒューマンタスクのランタイムメタデータを保存するデータベーステーブルをドロップします。 バージョン 10.0 では、ワークフローに対するすべてのランタイムメタデータが共通のテーブルのセットに保存されます。ワークフローメタデータテーブルをドロップするには infacmd wfs DropTables を使用します。
終了	ヒューマンタスクを停止し、タスクに関連付けられているレコードをワークフローの次のステージに渡します。 ヒューマンタスクを停止し、タスクに関連付けられているレコードをワークフローの次のステージに渡すには infacmd wfs BulkComplete を使用します。

infacmd isp コマンド

以下の表に、新しい infacmd isp コマンドの説明を示します。

コマンド	説明
GetSystemLogDirectory	システムログディレクトリを印刷します。
ListNodeRoles	ドメイン内のノードのすべてのロールを一覧表示します。
UpdateNodeRole	ドメイン内のノードのロールを更新します。ノードのサービスロールまたは計算ロールを有効または無効にすることができます。

以下の表に、infacmd isp コマンドオプションの変更内容を示します。

コマンド	説明
AddDomainNode	次のオプションが追加されました。 - EnableServiceRole - EnableComputeRole これらのオプションを使用して、ノードをドメインに追加したときに、ノード上にあるサービスロールまたは計算ロールを有効にします。
AddNodeResource	次のオプションが追加されました。 - ResourceCategory。このオプションを使用して、リソースが PowerCenter 統合サービス用であることを指定します。 - ResourceValue。このオプションは、将来使用するために予約されています。
CreateConnection	Hadoop 接続の接続オプションが追加されました。

コマンド	説明
DisableNodeResource、EnableNodeResource、ListNodeResources、RemoveNodeResource	ResourceCategory オプションが追加されました。このオプションを使用して、リソースが PowerCenter 統合サービス用であることを指定します。
GetLog	次のサービスタイプが ServiceType オプションに追加されました。 - ES。電子メールサービス - SCH。スケジューラサービス - RMS。リソースマネージャサービス
GetNodeName	Outputfile オプションが追加されました。このオプションをファイル名およびパスと使用して、ノード名をファイルに印刷します。
ListNodes	NodeRole オプションが追加されました。このオプションを使用して、特定のロールが設定されたノードを一覧表示します。
ListServices	次のサービスタイプが ServiceType オプションに追加されました。 - ES。電子メールサービス - SCH。スケジューラサービス - RMS。リソースマネージャサービス
PurgeMonitoring	NumDaysToRetainDetailedStat オプションが追加されました。このオプションを使用して、データ統合サービスが統計をパージするときに、詳細な履歴データがモデルリポジトリ内に保持される日数を設定します。
UpdateMonitoringOptions	DetailedStatisticsExpiryTime オプションが追加されました。このオプションを使用して、データ統合サービスがモデルリポジトリから詳細な統計をいつパージするかを指定します。 valid StatisticsExpiryTime の値が変更されました。最小値は 0 です。最大値は 366 です。デフォルトは 180 です。

infacmd mrs コマンド

以下の表に、新しい infacmd mrs コマンドの説明を示します。

コマンド	説明
CheckInObject	チェックアウトされている 1 つのオブジェクトをチェックインします。オブジェクトがモデルリポジトリにチェックインされます。
CreateFolder	モデルリポジトリでプロジェクト内にフォルダを作成します。
CreateProject	デフォルトのモデルリポジトリにプロジェクトを作成します。
DeleteFolder	モデルリポジトリ内のプロジェクトからフォルダを削除します。
DeleteProject	モデルリポジトリのプロジェクトを削除します。
ListCheckedOutObjects	ユーザーがチェックアウトしたオブジェクトを一覧表示します。
ListFolders	指定したプロジェクトフォルダパス内に含まれている、すべてのフォルダの名前を一覧表示します。
ListLockedObjects	ユーザーがロックしたオブジェクトのリストを表示します。

コマンド	説明
PopulateVCS	モデルリポジトリをバージョン管理システムと同期します。
ReassignCheckedOutObject	チェックアウトされたオブジェクトの所有権を別のユーザーに再割り当てします。
RenameFolder	プロジェクト内のフォルダの名前を変更します。
UndoCheckout	モデルリポジトリオブジェクトのチェックアウトを元に戻します。
UnlockObject	ユーザーがロックしたモデルリポジトリオブジェクトをロック解除します。

以下の表に、infacmd mrs コマンドオプションの変更内容を示します。

コマンド	説明
UpdateServiceOptions	次のオプションが追加されました。 - VCS.Host - VCS.Port - VCS.User - VCS.Password - VCS.Type - VCS.MRSPath これらのオプションを使用して、モデルリポジトリのバージョン管理を設定します。

infacmd ms コマンド

以下の表に、新しい infacmd ms コマンドの説明を示します。

コマンド	説明
GetRequestLog	マッピングログを指定されたファイルに書き込みます。
UpgradeMappingParameterFile	Informatica の以前のバージョンで作成したパラメータファイルを、Informatica バージョン 10.0 で有効なパラメータファイルの形式に変換します。

以下の表に、更新された infacmd ms コマンドオプションの説明を示します。

コマンド	説明
RunMapping	次のオプションが追加されました。 - OptimizationLevel。 データ統合サービスがマッピングに適用する最適化方式を制御します。 - PushdownType。データ統合サービスがマッピングに適用するプッシュダウンタイプを制御します。 - CustomProperties。Informatica グローバルスタマーサポートの要求により、マッピングにカスタムプロパティを定義します。

infacmd rms コマンド

新しい infacmd rms プログラムではリソースマネージャサービスを管理します。

以下の表に、新しい infacmd rms コマンドの説明を示します。

コマンド	説明
ListComputeNodeAttributes	指定されたノードまたはすべてのノードに対する、オーバーライドされた計算ノード属性を一覧表示します。
ListServiceOptions	リソースマネージャサービスのプロパティを一覧表示します。
SetComputeNodeAttributes	指定したノードの計算ノード属性をオーバーライドします。
UpdateServiceOptions	リソースマネージャサービスのプロパティを更新します。

infacmd sch コマンド

新しい infacmd sch プログラムではスケジューラサービスを管理します。

以下の表に、新しい infacmd sch コマンドの説明を示します。

コマンド	説明
CreateSchedule	1 つ以上のデプロイされたマッピングまたはワークフローオブジェクトに対するスケジュールを作成します。
DeleteSchedule	1 つ以上のスケジュールを削除します。
ListSchedule	スケジュールどおりに実行されているジョブのリストを返します。
ListServiceOptions	スケジューラサービスに設定されているプロパティのリストを返します。
ListServiceProcessOptions	スケジューラサービスプロセスに設定されているプロパティのリストを返します。
PauseAll	すべてのスケジュールを一時停止します。
PauseSchedule	1 つのスケジュールを一時停止します。
ResumeAll	すべてのスケジュールを再開します。
ResumeSchedule	スケジュールを再開します。
UpdateSchedule	1 つのスケジュール設定を更新します。
UpdateServiceOptions	スケジューラサービスのプロパティを更新します。
UpdateServiceProcessOptions	スケジューラサービスプロセスのプロパティを更新します。
アップグレード	スケジューラサービス設定をアップグレードします。

infacmd wfs コマンド

以下の表に、新しい infacmd wfs コマンドの説明を示します。

コマンド	説明
BulkComplete	ヒューマンタスクの操作を停止し、タスクに関連付けられているレコードをワークフローの次のステージに渡します。
CreateTables	ワークフローのランタイムメタデータを保存するデータベーステーブルを作成します。
DropTables	ワークフローのランタイムメタデータを保存しているデータベーステーブルをドロップします。
ListMappingPersistedOutputs	コマンドで指定されたマッピングタスクインスタンスについて、保持されている各マッピング出力の状態を一覧表示します。
SetMappingPersistedOutputs	指定したマッピングインスタンスについて、保持されている各マッピング出力を更新するか、保持されているマッピング出力に NULL 値を設定します。
UpgradeParameterFile	パラメータファイルをアップグレードして、ファイル内のパラメータ値が最新リリースで有効であることを確認します。コマンド実行時に、更新するパラメータファイルを特定し、有効なパラメータ値を含むターゲットファイルを指定します。

以下の表に、更新された infacmd wfs コマンドオプションの説明を示します。

コマンド	説明
abortWorkflow	RuntimeInstanceID オプションの名前が InstanceId に変更されました。このオプションは、強制終了するワークフローインスタンスを特定します。 Wait オプションは削除されました。
cancelWorkflow	RuntimeInstanceID オプションの名前が InstanceId に変更されました。このオプションは、キャンセルするワークフローインスタンスを特定します。 Wait オプションは削除されました。
recoverWorkflow	RuntimeInstanceID オプションの名前が InstanceId に変更されました。このオプションはリカバリするワークフローインスタンスを特定します。 Wait オプションは削除されました。
startWorkflow	ParameterSet オプションが追加されました。 このオプションで、ワークフローでランタイムに使用されるパラメータセットの名前を指定します。

infasetup コマンド

以下の表に、新しい SystemLogDirectory オプションの説明を示します。

コマンド	説明
DefineDomain DefineGatewayNode DefineWorkerNode UpdateGatewayNode UpdateWorkerNode	SystemLogDirectory オプションが追加されました。このオプションを使用して、ログのカスタムの場所を指定します。

詳細については、*『Informatica 10.0 コマンドリファレンス』*を参照してください。

pmrep コマンドリファレンス

次の表は、pmrep massupdate コマンドで更新される内容を示しています。

セッションプロパティのタイプ	説明
session_property	サポートされるセッションプロパティまたはセッション設定プロパティがある場合、この massupdate コマンドを実行すると、オーバーライドされるかどうかにかかわらず、そのプロパティの値が更新されます。

接続性

ここでは、バージョン 10.0 の新しい接続機能について説明します。

PowerCenter の接続性

ここでは、バージョン 10.0 の新しい接続機能について説明します。

Microsoft SQL Server へのネイティブ接続

バージョン 10.0 では、Microsoft SQL Server の DataDirect ODBC ドライバを使用して、UNIX マシンからの Microsoft SQL Server データベースへのネイティブ接続を設定できます。

Microsoft SQL Server データベースへの接続に使用する接続プロバイダを選択できます。選択できる接続タイプは、ODBC または OLE DB です。統合サービスを有効にすれば、データソース名（DSN）を使用して接続することもできます。また、NTLM 認証を使用して、Microsoft SQL Server に接続するユーザーを認証することもできます。

ネイティブ接続の設定の詳細については、*『Informatica 10.0 インストール&環境設定ガイド』*の付録「UNIX からのデータベースへの接続」を参照してください。

接続の切り替え

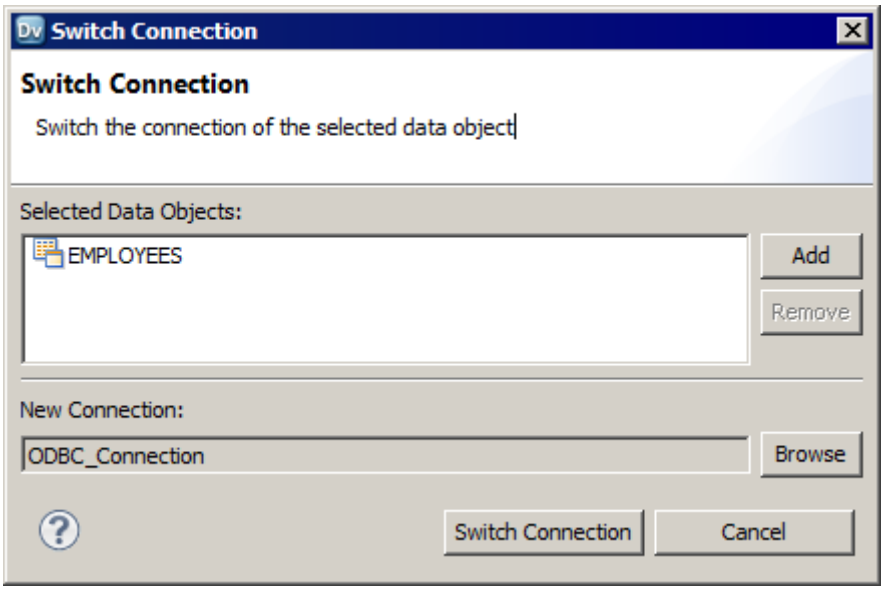
バージョン 10.0 では、Developer tool で、リレーショナルデータオブジェクトまたはカスタマイズデータオブジェクトの接続を切り替えて、別のリレーショナルデータベース接続を使用できます。接続を切り替えると、Developer tool により、データオブジェクトに基づくすべての読み取り、書き込み、およびルックアップトランスフォーメーションで、データオブジェクトの接続の詳細が更新されます。データベースを別のデータベー

スに移行するときに接続を切り替えたり、新しい接続を使用するために既存のマッピングを同時に更新したりできます。

接続は、次の接続タイプのいずれかに切り替えることができます。

- IBM DB2
- Microsoft SQL Server
- ODBC
- Oracle

次の図は、接続の切り替えに使用するダイアログボックスを示しています。



詳細については、*『Informatica 10.0 Developer tool ガイド』*の「接続」を参照してください。

データ型

ここでは、バージョン 10.0 の新しいデータ型機能について説明します。

Informatica のデータ型

ここでは、Developer tool での新しいデータ型について説明します。

Decimal データ型

バージョン 10.0 では、一部のトランスフォーメーションは、最大 38 桁の精度を持つ Decimal データ型をサポートします。Decimal データ型の精度は 1～38 桁で、位取りは 0～38 です。その他のトランスフォーメーションは、最大 28 桁の精度を持つ Decimal データ型をサポートします。

最大 38 桁精度の Decimal データ型をサポートするトランスフォーメーションでは、ターゲットに 38 桁を上回る精度が含まれ、高精度が有効になっている場合、データ統合サービスが結果を倍精度浮動小数点数として保存します。

詳細については、*『Informatica 10.0 Developer tool ガイド』*の付録「データ型リファレンス」を参照してください。

Decimal 38 データ型のマッピング

バージョン 10.0 では、28 桁より大きく 38 桁以下の精度を持つ、高精度モードのフィールドを含むマッピングを実行する場合、データ統合サービスは最大 38 桁の精度を処理します。アップグレード後、精度が 38 桁よりも大きい場合も、動作に変更はありません。

次の表で、適用可能な精度に基づくアップグレード後の動作について説明します。

精度	**旧バージョン**	10.0
28 より大きく 38 以下	Double	Decimal
38 より大きい	Double	Double

例えば、次のようなソースデータがあります。12345678901234567890123456789012345678

旧バージョンでは、ターゲットに次のデータが含まれます。 12345678901234500000000000000000000000

10.0 では、ターゲットに次のデータが含まれます。12345678901234567890123456789012345678

詳細については、*『Informatica 10.0 Developer tool ガイド』*の付録「データ型リファレンス」を参照してください。

Timestamp with Time Zone

バージョン 10.0 では、ほとんどのトランスフォーメーションが Timestamp with Time Zone データ型をサポートします。Timestamp with Time Zone は、タイムゾーンのオフセットまたはタイムゾーンのリージョン名が含まれる、Timestamp データ型のバリアントです。

Timestamp with Time Zone データ型を Developer tool にインポートすると、関連付けられたトランスフォーメーションデータ型は timestampWithTZ になります。timestampWithTZ の精度は 36 で、位取りは 9 です。Timestamp with Time Zone の置換値の範囲は、-12:00 < UTC < +14:00 です。

詳細については、*『Informatica 10.0 Developer Tool ガイド』*の付録「データ型リファレンス」を参照してください。

Timestamp with Local Time Zone

バージョン 10.0 では、Timestamp with Local Time Zone データ型は、タイムスタンプデータの別のバリアントです。このデータ型では、タイムゾーンデータがデータベースのタイムゾーンに正規化されます。

Timestamp with Local Time Zone データ型を Developer tool にインポートすると、関連付けられたトランスフォーメーションのデータ型が date/time になります。Timestamp with Local Time Zone データ型は Timestamp に相当するため、このデータ型はほとんどのトランスフォーメーションで暗黙的にサポートされます。

Timestamp (6) with Local Time Zone の精度は 26、位取りは 6 です。これは、date/time (29,9) トランスフォーメーションデータ型にマップされます。

詳細については、*『Informatica 10.0 Developer tool ガイド』*の付録「データ型リファレンス」を参照してください。

マニュアル

ここでは、バージョン 10.0 の Informatica のマニュアルで追加または更新されたガイドについて説明します。

Informatica のマニュアルには次の新しいガイドが付属しています。

Informatica **アクセシビリティガイド**

バージョン 10.0 では、*『Informatica アクセシビリティガイド』*に、Informatica Administrator、Informatica Analyst、Informatica Developer のアクセシビリティ情報とキーボードショートカットが記載されています。*『Informatica アクセシビリティガイド』*は、Administrator ツール、Analyst ツール、および Developer tool のオンラインヘルプに含まれています。

詳細については、*『Informatica 10.0 アクセシビリティガイド』*を参照してください。

Informatica Big Data Management **セキュリティガイド**

バージョン 10.0 では、*『Informatica Big Data Management セキュリティガイド』*に、Big Data Management と Hadoop のセキュリティ情報が記載されています。

以前は、Big Data と Hadoop のセキュリティ情報は、*『Informatica Big Data Edition ユーザーガイド』*に記載されていました。

次のガイドは、PowerCenter のマニュアルから削除されています。

PowerCenter **データプロファイリングガイド**

バージョン 10.0 では、*『PowerCenter データプロファイリングガイド』*は PowerCenter のマニュアルから削除されています。

Informatica におけるプロファイリングと検出の詳細については、*『Informatica 10.0 データ検出ガイド』*を参照してください。

Informatica Big Data Edition **ユーザーガイド**

バージョン 10.0 では、*『Informatica Big Data Edition ユーザーガイド』*は PowerCenter のマニュアルから削除されています。

Informatica における Big Data の詳細については、*『Informatica 10.0 Big Data Management ユーザーガイド』*を参照してください。

Informatica Big Data Edition **インストール＆環境設定ガイド**

バージョン 10.0 では、*『Informatica Big Data Edition インストール＆環境設定ガイド』*は PowerCenter のマニュアルから削除されています。

Informatica における Big Data のインストールと環境設定の詳細については、*『Informatica 10.0 Big Data Management のインストール＆環境設定ガイド』*を参照してください。

次のガイドは、名前が変更されています。

Informatica Data Service **パフォーマンスのチューニングの概要**

バージョン 10.0 では、*『Informatica Data Service パフォーマンスのチューニングの概要』*の名前が*『Informatica パフォーマンスのチューニングの概要』*に変更されています。

Informatica におけるパフォーマンスチューニングの詳細については、*『Informatica 10.0 パフォーマンスのチューニングの概要』*を参照してください。

ドメイン

ここでは、バージョン 10.0 の新しいドメイン機能について説明します。

ノード

バージョン 10.0 では、各ノードに、ノードの目的を定義するロールがあります。

ノードは次のロールを持つことができます。

サービスロール

サービスロールが指定されたノードは、アプリケーションサービスを実行できます。ノードでサービスロールを有効にすると、サービスマネージャはそのノードで実行されるように設定されたアプリケーションサービスをサポートします。

計算ロール

計算ロールが指定されたノードは、リモートアプリケーションサービスが要求する計算を実行できます。ノードで計算ロールを有効にすると、サービスマネージャはそのノードでコンテナを管理します。コンテナとは、メモリリソースと CPU リソースの割り当てのことです。アプリケーションサービスは、コンテナを使用して、ノード上でリモートで計算を実行します。例えば、データ統合サービスグリッドに、サービスロールが指定されたノード 1 と計算ロールが指定されたノード 2 が含まれているとします。ノード 1 で実行されるデータ統合サービスプロセスは、ノード 2 上のコンテナ内でマッピングを実行します。

サービスロールと計算ロール

両方のロールが指定されたノードは、アプリケーションサービスを実行できるほか、それらのサービスの計算をローカルに実行できます。

デフォルトでは、各ゲートウェイと作業ノードはサービスロールと計算ロールの両方が有効になります。ジョブを計算ロールが指定されたリモートノードで実行するように設定されているデータ統合サービスグリッドにノードが割り当てられている場合は、ノードロールを更新できます。ノードをデータ統合サービスプロセスの実行専用にするには、サービスロールだけを有効にします。ノードをデータ統合サービスマッピングの実行専用にするには、計算ロールだけを有効にします。

ノードロールの詳細については、『*Informatica 10.0 Administrator ガイド*』の章「ノード」を参照してください。

Informatica Administrator

ここでは、バージョン 10.0 の新しい Administrator 機能について説明します。

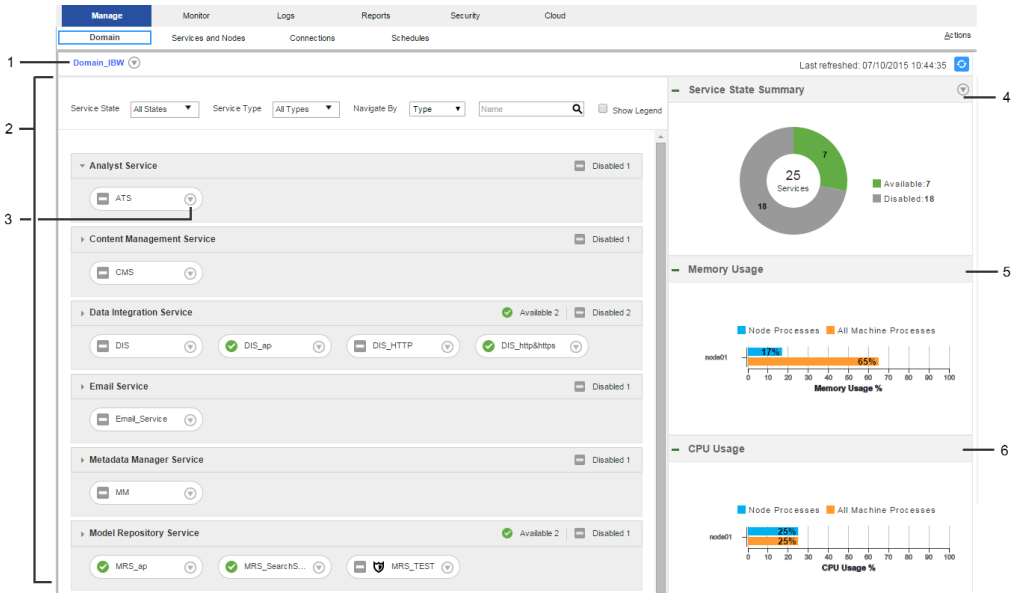
[管理] タブ

バージョン 10.0 では、**[管理]** タブに次の新機能が含まれます。

[ドメイン] ビュー

[ドメイン] ビューには、ドメインのステータスの概要が示されます。ドメインに関する情報の表示、ドメインに関する履歴情報の表示、一般的なアクションの実行ができます。

次の図は［**管理**］タブ上の［**ドメイン**］ビューを示しています。



1. ［ドメインアクション］メニュー
2. ［コンテンツ］パネル
3. ［オブジェクトアクション］メニュー
4. サービスの状態の概要
5. メモリ使用状況インジケータ
6. CPU 使用量インジケータ

［**ドメイン**］ビューには、次の情報が含まれます。

- ドメイン。ドメインのプロパティ、ログ、および過去のイベントを表示できます。ドメインをシャットダウンすることもできます。
- ［コンテンツ］パネル。ドメイン内のサービス、ノード、およびグリッドを表示します。オブジェクトのプロパティ、イベント、ログ、および依存性を表示できます。サービスの有効化、無効化、およびリサイクル、ならびにノードのシャットダウンもできます。
- フィルタ。ドメインのコンテンツを状態またはサービスタイプでフィルタリングできます。ドメインオブジェクトを検索したり、タイプ、グリッド、またはフォルダ別にドメインオブジェクトを参照することもできます。
- サービスの状態の概要。ドメイン内のサービスの数と状態を表示するドーナツグラフ。
- リソース使用状況パネル。ドメイン内のオブジェクトのメモリおよび CPU の使用量を、マシン上のすべてのプロセスのメモリおよび CPU の使用量と比較する棒グラフ。
- コマンド履歴。Administrator ツールから送信されたサービスライフサイクルコマンドが表示されます。ライフサイクルコマンドには、有効化、無効化、およびリサイクルなどがあります。
- ［履歴］ビュー。選択した時間範囲における履歴ステータス、リソースの使用状況、およびドメイン内のイベントを表示します。
- ［イベント］パネル。ドメイン内のサービスおよびノードのイベントを表示します。

ナビゲータ

ドメインナビゲータの［**サービスとノード**］ビューで、ノード、アプリケーションサービス、およびグリッドの検索とフィルタリングができます。オブジェクトを名前で検索できます。また、ナビゲータに表示するオブジェクトのリストをオブジェクトタイプでフィルタリングすることもできます。

［スケジュール］ビュー

スケジュールの表示および管理は［**スケジュール**］ビューで実行できます。

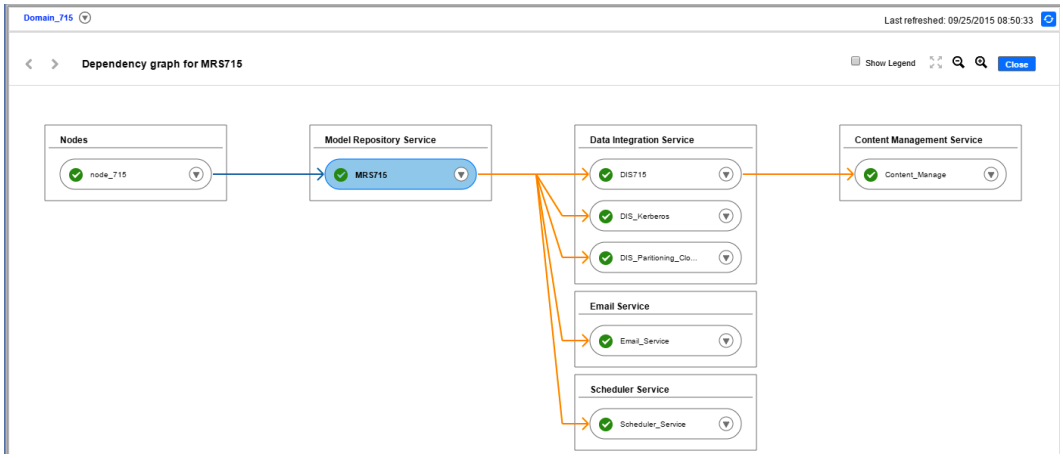
詳細については、*『Informatica 10.0 管理者ガイド』*を参照してください。

依存関係グラフ

バージョン 10.0 では、**依存関係**グラフには、**［管理］**タブの**［ドメイン］**ビューからアクセスします。以前は、**依存関係**グラフには、**［ドメイン］**タブの**［サービスとノード］**ビューからアクセスしていました。

依存関係グラフには、新しいユーザーインタフェースと追加機能があります。

次の図は、新しい**依存関係**グラフを示しています。



依存関係グラフでは、次のタスクを実行できます。

- サービス、ノード、またはグリッドのプロパティを表示する。
- サービスのログを表示する。
- ノードをシャットダウンする。
- サービスを有効化または無効化する。
- サービスをリサイクルする。
- サービスのダウンストリーム依存性を無効化する。サービスに依存する 1 つ以上のサービスを無効化できます。ダウンストリームプロセスが強制終了モードで無効化されます。
- サービスのダウンストリーム依存性をリサイクルする。サービスに依存する 1 つ以上のサービスをリサイクルできます。ダウンストリームプロセスが強制終了モードでリサイクルされます。

詳細については、*『Informatica 10.0 管理者ガイド』*を参照してください。

監視

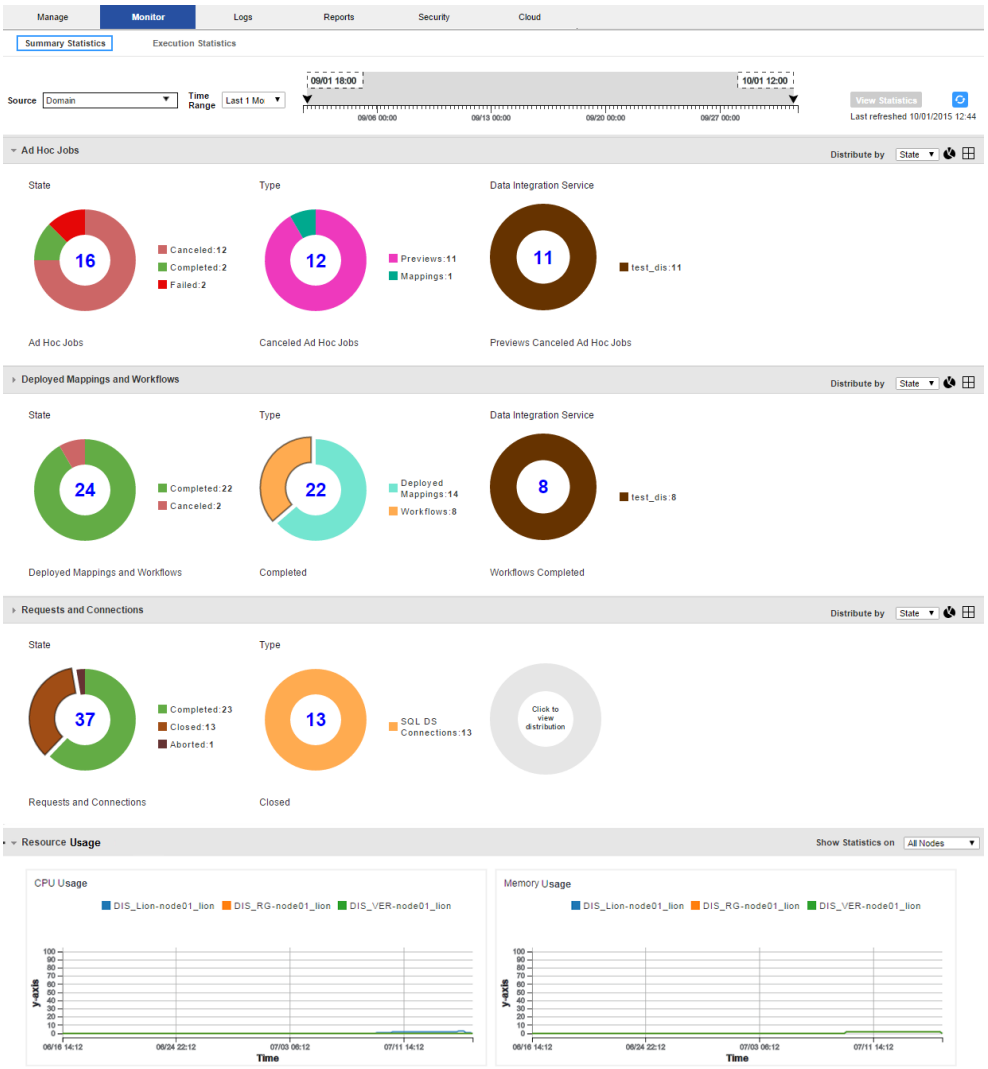
バージョン 10.0 では、Administrator ツールの**［監視］**タブが**［モニタ］**タブという名前に変更されました。

［モニタ］タブには、次の新機能があります。

[モニタ] タブのビュー

[モニタ] タブには、次のビューが含まれています。

- **[サマリ統計]** ビュー。選択した時間範囲のリソースの使用状況、オブジェクトの配布、およびオブジェクトの状態が表示されます。
  次の図は、**[サマリ統計]** ビューを示しています。



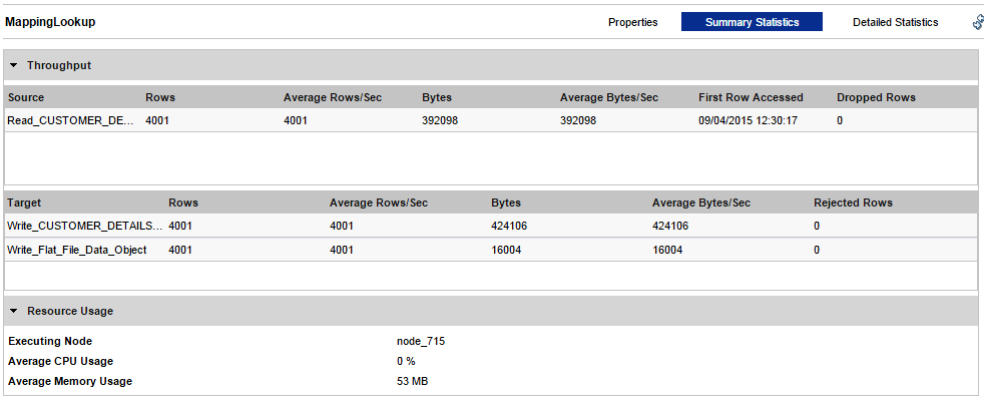
- **[実行統計]** ビュー。以前のバージョンの **[監視]** タブにあったナビゲータとビューが含まれています。

[実行統計] ビューのビュー

ワークフローのアドホックマッピングジョブ、デプロイ済みのマッピングジョブ、およびマッピングオブジェクトに関する統計を表示できます。

［コンテンツ］パネルでこれらのオブジェクトのいずれかを選択すると、［詳細］パネルに次の新しいビューが表示されます。

- **［サマリ統計］**ビュー。ソースおよびターゲットのスループットとリソースの使用状況に関する情報が表示されます。
  次の図は、マッピングジョブの**［サマリ統計］**ビューを示しています。



- **［詳細統計］**ビュー。個別のローカルプロセスで実行されるジョブのうち、その実行期間が 1 分を超えるものについて表示されます。ソースおよびターゲットのスループットとリソースの使用状況のグラフが表示されます。
  次の図は、ワークフローのマッピングジョブの**［詳細統計］**ビューを示しています。

設定

［監視設定］（旧称: ［グローバル設定］）には、［詳細履歴データの保持］という新しいオプションがあります。このオプションは、分単位の統計が期限切れになった場合、その統計をいつモデルリポジトリからパージするのかを設定するために使用します。デフォルトは 14 です。最小値は 1 です。最大値は 14 です。

詳細については、*『Informatica 10.0 管理者ガイド』*の「監視」を参照してください。

Informatica Analyst

ここでは、バージョン 10.0 の新しい Analyst ツール機能について説明します。

アセットのバージョン管理

バージョン 10.0 では、モデルリポジトリがバージョン管理システムと統合されていると、バージョン管理システムによって、開発チームの他のメンバによる上書きからアセットが保護されます。アセットのチェックアウトとチェックイン、アセットのチェックアウトの取り消しなどを実行できます。

詳細については、*『Informatica 10.0 Analyst ツールガイド』*の「モデルリポジトリ」を参照してください。

プロファイル

ここでは、Analyst ツールのプロファイルおよびプロファイル結果の新機能について説明します。

カラムプロファイル

バージョン 10.0 では、［ライブラリ］ワークスペースのデータオブジェクトを右クリックして、カラムプロファイルを作成できます。データオブジェクトおよびフォルダオプションは、プロファイルウィザードで自動的に更新されます。

カラムプロファイルの詳細については、*『Informatica 10.0 データ検出ガイド』*の「Informatica Analyst のカラムプロファイル」の章を参照してください。

カラムプロファイル結果

バージョン 10.0 では、カラムプロファイル結果に次の新しい機能と拡張機能が含まれます。

- サマリビューと詳細ビューにプロファイル結果が表示される。サマリビューでは、プロファイル結果の概要がグリッド形式で表示されます。詳細ビューでは、カラム固有の詳細情報が表示されます。
- サマリビューと詳細ビューにプロファイル結果の異常値が表示される。異常値とは、特定のカラムで、期待される値の範囲に収まらないパターン、値、頻度のことです。
- 最新のプロファイル実行、履歴プロファイル実行、統合済みプロファイル実行のプロファイル結果が表示される。任意の履歴プロファイル実行のプロファイル結果を表示できます。統合済みプロファイル実行を実行すると、プロファイルの各カラムについて最新の結果を表示できます。
- 2 つのプロファイル実行のプロファイル結果を比較し、サマリビューおよび詳細ビューに結果を表示する。
- JSON または XML データソースでプロファイルのプロファイル結果を表示する。
- ビジネス用語、タグ、およびコメントがプロファイルおよびプロファイルのカラムに追加される。

カラムプロファイル結果の詳細については、*『Informatica 10.0 データ検出ガイド』*の「Informatica Analyst のカラムプロファイル結果」の章を参照してください。

Decimal データ型

バージョン 10.0 では、最大 38 桁の精度を持つ Decimal データ型のカラムのあるプロファイルを作成できます。

詳細については、*『Informatica 10.0 データ検出ガイド』*を参照してください。

JDBC の接続

バージョン 10.0 では、IBM DB2 UDB、Microsoft SQL Server、および Oracle データ型に対するプロファイリングウェアハウス接続として JDBC 接続を指定できます。JDBC 接続をプロファイリングウェアハウス接続として使用して、カラムプロファイル、ルールプロファイル、ドメイン検出、およびスコアカードを作成できます。

詳細については、*『Informatica 10.0 インストール & 環境設定ガイド』*を参照してください。

オブジェクトのバージョン管理

バージョン 10.0 では、モデルリポジトリをバージョン管理システムに統合すると、開発チームの他のメンバがオブジェクトを上書きすることを防止できます。プロファイルのチェックアウトおよびチェックイン、プロファイルのチェックアウトの取り消し、プロファイルの履歴バージョンの表示およびリストアを行うことができます。

オブジェクトのバージョン管理の詳細については、*『Informatica 10.0 データ検出ガイド』*の「Informatica Analyst のカラムプロファイル」の章を参照してください。

ルールとフィルタ

バージョン 10.0 では、カラムプロファイルの作成時に、ルールとフィルタを追加または編集できます。

詳細については、*『Informatica 10.0 データ検出ガイド』*を参照してください。

スコアカードフィルタ

バージョン 10.0 では、スコアカードのメトリックに対してフィルタを作成および適用できます。

スコアカードフィルタの詳細については、*『Informatica 10.0 データ検出ガイド』*の「Informatica Analyst のスコアカード」の章を参照してください。

Informatica Developer

ここでは、バージョン 10.0 の新しい Informatica Developer 機能について説明します。

DDL の生成と実行

Informatica 10.0 では、DDL スクリプトを生成、実行して、データベース内にテーブルを作成できます。Developer tool を使用すると、モデルリポジトリ内の 1 つ以上のリレーショナルデータオブジェクトに対して DDL スクリプトを生成し、その DDL スクリプトを実行して、ターゲットデータベースでテーブルを作成または置換できます。データベースにターゲットがすでに存在する場合は、そのターゲットを削除して再作成できます。

詳細については、*『Informatica Developer tool ガイド』*の「物理データオブジェクト」を参照してください。

実行時のリレーショナルメタデータおよびフラットファイルメタデータの生成

バージョン 10.0 では、データソースに対するメタデータ変更を許可する、動的なソースとターゲットを含むマッピングを作成できます。ソースまたはターゲットが動的になるように設定すると、データ統合サービスは、リレーショナルデータソースおよびフラットファイルデータソースに対するメタデータ変更を実行時に解釈できます。

データ統合サービスは、次の機能を実行できます。

- カラムの順序が物理データオブジェクトのカラムの順序とは異なるソースから、データを読み取ります。
- 物理データオブジェクトに存在しないソース内の追加カラムからデータを読み取ります。
- ソースには存在しないが物理データオブジェクトには存在するカラムのデータを無視します。

リレーショナルデータソースの場合、データ統合サービスはデータベーススキーマから直接メタデータ変更を取得します。

フラットファイルデータソースの場合、データ統合サービスが、データファイルヘッダ、コントロールファイルからメタデータ変更を取得するように、またはデータソース内のカラムからメタデータ変更を自動的に取得するように、フラットファイルデータオブジェクトを設定する必要があります。フラットファイルデータオブジェクトの **[詳細]** タブで、**[ランタイムカラム名の生成]** プロパティを設定します。

マッピングを開発するときは、実行時にデータソースから直接データオブジェクトカラムを取得するように、読み取りおよび書き込みトランスフォーメーションを設定します。ルックアップソースから直接データオブジェクトカラムを取得するように、ルックアップトランスフォーメーションを設定することもできます。トランスフォーメーションの **[データオブジェクト]** タブで、**[実行時に、データソースからデータオブジェクトのカラムを取得します]** を選択します。

詳細については、*『Informatica 10.0 Developer マッピングガイド』* の「動的マッピング」を参照してください。

PowerCenter からのインポート

バージョン 10.0 では、次の PowerCenter トランスフォーメーションを Developer tool にインポートできます。

- ノーマライザトランスフォーメーション
- シーケンスジェネレータトランスフォーメーション
- アップデートストラテジトランスフォーメーション

詳細については、*『Informatica 10.0 Developer マッピングガイド』* を参照してください。

Monitoring ツール

バージョン 10.0 では、Monitoring ツールに次の新機能があります。

[実行統計] ビュー

バージョン 9.6.1 の Monitoring ツールにあったナビゲータとビューが含まれています。

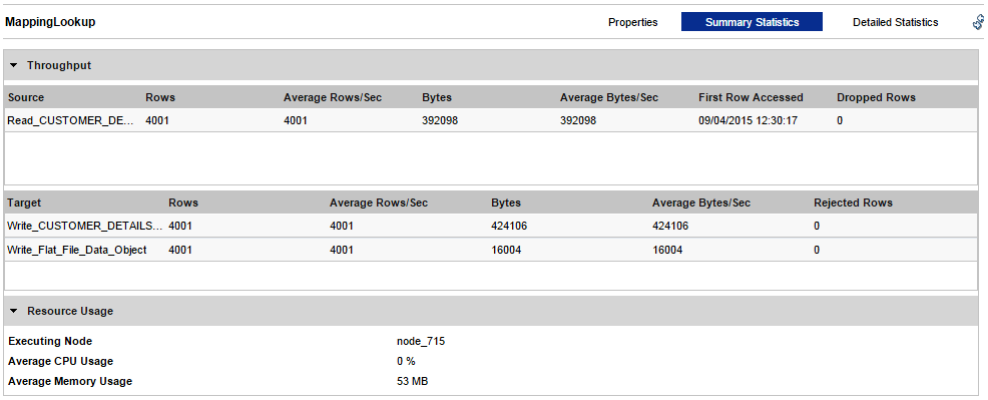
[サマリ統計] ビュー

選択した時間範囲のリソースの使用状況、オブジェクトの配布、およびオブジェクトの状態が表示されます。

［実行統計］ビューのビュー

［実行統計］ビューでは、ワークフローのアドホックマッピングジョブ、デプロイ済みのマッピングジョブ、およびマッピングオブジェクトに関する詳細な情報を確認できます。［コンテンツ］パネルでこれらのオブジェクトのいずれかを選択すると、［詳細］パネルに次の新しいビューが表示されます。

- **［サマリ統計］**ビュー。ソースおよびターゲットのスループットとリソースの使用状況に関する情報が表示されます。
  次の図は、マッピングジョブの**［サマリ統計］**ビューを示しています。



- **［詳細統計］**ビュー。ソースおよびターゲットのスループットとリソースの使用状況のグラフが表示されます。個別のローカルプロセスで実行されるジョブのうち、その実行期間が 1 分を超えるものについて表示されます。
  次の図は、ワークフローのマッピングジョブの**［詳細統計］**ビューを示しています。

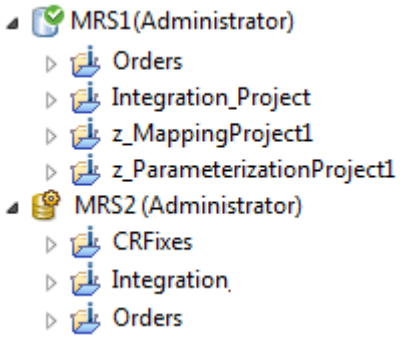
詳細については、『*Informatica 10.0 Developer tool ガイド*』の章「データの表示」を参照してください。

オブジェクトのバージョン管理

バージョン 10.0 では、モデルリポジトリをバージョン管理システムに統合すると、開発チームの他のメンバがオブジェクトを上書きすることを防止できます。オブジェクトのチェックアウトとチェックイン、オブジェクトのチェックアウトの取り消し、およびオブジェクトの履歴バージョンの表示とリストアが可能です。

Developer tool では、バージョン管理されたモデルリポジトリは、緑色のチェックマークがついた白色のアイコンで示されます。

次の図は、バージョン管理システムと統合された MRS1 と、統合されていない MRS2 の、2 つの接続されたリポジトリを示しています。



詳細については、『*Informatica 10.0 Developer tool ガイド*』の章「モデルリポジトリ」を参照してください。

アプリケーションの物理データオブジェクト

バージョン 10.0 では、アプリケーションに物理データオブジェクトを追加できます。

詳細については、『*Informatica 10.0 Developer tool ガイド*』の章「アプリケーションデプロイメント」を参照してください。

プロファイル

ここでは、Developer tool のプロファイルおよびプロファイル結果の新機能について説明します。

JSON および XML データソースを使用したカラムプロファイル

バージョン 10.0 では、次の方法で、JSON および XML データソースを使用したカラムプロファイルを作成できます。

- フラットファイル。 この方法では、テキストファイルを作成して、JSON または XML ファイルソースの場所をファイルに追加する必要があります。テキストファイルを使用して、フラットファイルデータオブジェクトを作成します。フラットファイルデータオブジェクトでカラムプロファイルを作成します。
- 複合ファイルリーダー。この方法では、JSON または XML ソースファイルで複合ファイルデータオブジェクトを作成して、複合ファイルデータオブジェクトでカラムプロファイルを作成します。
- HDFS の JSON または XML ファイル。この方法では、HDFS との接続を作成して、HDFS の JSON または XML ファイルで複合ファイルデータオブジェクトを作成する必要があります。複合ファイルデータオブジェクトを使用してカラムプロファイルを作成できます。
- フォルダの JSON または XML ファイル。この方法では、すべての JSON または XML ファイルを 1 つのフォルダに統合する必要があります。HDFS との接続を作成して、フォルダで複合ファイルデータオブジェクトを作成します。複合ファイルデータオブジェクトでカラムプロファイルを作成できます。

JSON または XML データソースを使用したカラムプロファイルの詳細については、『*Informatica 10.0 データ検出ガイド*』の「データオブジェクトプロファイル」の章を参照してください。

Decimal データ型

バージョン 10.0 では、最大 38 桁の精度を持つ Decimal データ型のカラムのあるプロファイルを作成できます。

詳細については、『*Informatica 10.0 データ検出ガイド*』を参照してください。

外部キーのキュレーション

バージョン 10.0 では、推測されたカラムリレーションを拒否すると、関連するすべてのリレーションも拒否されます。

キュレーションの詳細については、*『Informatica 10.0 データ検出ガイド』*の「エンタープライズ検出結果」を参照してください。

JDBC の接続

バージョン 10.0 では、IBM DB2 UDB、Microsoft SQL Server、および Oracle データ型に対するプロファイリングウェアハウス接続として JDBC 接続を指定できます。JDBC 接続を使用して、カラムプロファイル、ルールプロファイル、ドメイン検出、およびスコアカードを作成できます。

詳細については、*『Informatica 10.0 インストール & 環境設定ガイド』*を参照してください。

オブジェクトのバージョン管理

バージョン 10.0 では、モデルリポジトリをバージョン管理システムに統合すると、開発チームの他のメンバがオブジェクトを上書きすることを防止できます。プロファイルのチェックアウトおよびチェックイン、プロファイルのチェックアウトの取り消し、プロファイルの履歴バージョンの表示およびリストアを行うことができます。

オブジェクトのバージョン管理の詳細については、*『Informatica 10.0 データ検出ガイド』*の「Informatica Developer のプロファイル」の章を参照してください。

Informatica Development Platform

ここでは、Informatica Development Platform の新機能および機能拡張について説明します。

Informatica コネクタツールキット

バージョン 10.0 では、Informatica コネクタツールキットで次の機能を使用できます。

Java **データ型**

ネイティブデータ型を Java データ型にマップできます。ネイティブデータ型をマップするとき、データソースからの読み取りに最適な Java データ型を選択し、ターゲットデータベースまたはアプリケーションへの書き込みに最適なネイティブデータ型を選択してください。

複数のネイティブメタデータオブジェクト

1 つのアダプタに、複数のネイティブメタデータ定義を定義できます。例えば、リレーショナルデータソース内のテーブル、ビュー、およびシノニムに対して、さまざまなネイティブメタデータオブジェクトを作成できます。

ソートおよび選択

データソースから特定の順序でデータを取得するために、アダプタに対して Sort 文のサポートを定義できます。データソースからの読み取り時に、アダプタが Select 文をサポートするかどうかも定義できます。Informatica コネクタツールキットを使用して、アダプタに対して次の Select 文を定義できます。

- すべて選択
- 任意選択
- 個別選択
- 最初の行の選択
- 最後の行の選択

パーティション

パーティションタイプを指定して、アダプタがデータの読み書きを行うときに使用するパーティションロジックを実装できます。

アダプタに対して、次のいずれかまたはすべてのパーティションタイプを指定できます。

- 動的。 データ統合サービスは、データソースからのパーティション情報に基づいて、実行時にパーティション数を決定します。
- 静的。データ統合サービスは、ユーザーが指定したパーティション情報（パーティション数、キー範囲パーティション化など）に基づいて、パーティション化ロジックを決定します。

パラメータ化

ネイティブメタデータオブジェクトの読み取りおよび書き込み機能の属性でサポートされるのは、「すべてパラメータ化」なのか「部分的にパラメータ化」なのかを指定できます。ネイティブメタデータオブジェクトの読み取りおよび書き込み機能の属性には、実行時に、値またはパラメータを割り当てることができます。

データ操作の前/後

読み取り/書き込み操作の前または後に実行できる、実行前タスクおよび実行後タスクを実装できます。例えば、書き込み操作の前にターゲットテーブルを切り詰める機能を実装できます。

メッセージ

アダプタの設計時または実行時に発生する例外を処理するメッセージを作成できます。メッセージウィザードを使用して、メッセージを追加、編集、または削除できます。必要に応じて、メッセージファイルをローカライズできます。

C 実行時

アダプタのランタイム動作を C で実装できます。データソースに対してアダプタが読み書きを実行する方法を定義するコードを C で記述できます。

拒否ファイル

ターゲットによって拒否されたデータを処理するために、拒否ファイルのサポートを実装できます。

詳細については、*『Informatica Development Platform 10.0 Informatica コネクタツールキット Developer ガイド』*を参照してください。

マッピング

ここでは、バージョン 10.0 の新しいマッピング機能について説明します。

Informatica マッピング

ここでは、バージョン 10.0 の新しいマッピング機能について説明します。

動的マッピング

バージョン 10.0 では、ソース、ターゲット、トランスフォーメーションロジックを、定義したパラメータおよびルールに基づいて実行時に変更するように、動的マッピングを設定できます。トランスフォーメーションが受信するポート、トランスフォーメーションロジックで使用するポート、トランスフォーメーショングループ間で確立するリンクを設定できます。動的マッピングにより、データソースに対する頻繁なメタデータの変更を管理したり、スキーマが異なる各データソースのマッピングロジックを再利用したりすることができます。

動的マッピングには、設定可能な次の機能が含まれています。

- 動的ソースを使用すると、実行時にフラットファイルおよびリレーショナルソース内のメタデータを変更できます。フラットファイルまたはリレーショナルソース内のメタデータが変更されると、読み取りおよびルックアップトランスフォーメーションは、実行時に、データオブジェクトのカラムを動的ソースから直接取得できます。
- トランスフォーメーションには、定義したルールに基づいて変更可能なカラムを受信する動的ポートを含めることができます。動的ポートで、カラムを含めるルールまたは除外するルールを定義できます。
  次のトランスフォーメーションには動的ポートを含めることができます。
  - アグリゲータ
  - 式
  - フィルタ
  - ジョイナ
  - ルックアップ
  - ランク
  - ルータ
  - シーケンスジェネレータ
  - ソータ
  - アップデートストラテジ
- ジョイナトランスフォーメーション、ルックアップトランスフォーメーション、および式トランスフォーメーションでポートセレクタを定義できます。ポートセレクタは、トランスフォーメーションロジックで参照できる、ポートの順序リストです。トランスフォーメーションに移動するポートをフィルタリングして、結合条件、ルックアップ条件、または動的式でポートを参照するように、ポートセレクタを設定します。
- 動的式は、式トランスフォーメーションで定義できます。動的式は、結果を動的出力ポートに返します。動的式で、ポートセレクタまたは動的ポートを参照できます。動的ポートまたはポートセレクタを参照すると、動的ポートまたはポートセレクタの各ポートで 1 回、動的式が実行されます。式トランスフォーメーションは、式インスタンスごとに個別の出力ポートを生成します。
- 動的ターゲットを使用すると、実行時に、フラットファイルおよびリレーショナルターゲットのカラムを定義できます。書き込みトランスフォーメーションは、関連付けられたデータオブジェクトまたはマッピングフローに基づいて、実行時にターゲットのカラムを生成できます。リレーショナルターゲットである書き込みトランスフォーメーションは、実行時にテーブルの作成や置換を行うこともできます。
- トランスフォーメーションは、実行時に接続するポートをポリシーまたはパラメータに基づいて決定する、グループ間のリンクを持つことができます。
- ソースとターゲット、ポートのルール、およびトランスフォーメーションプロパティは、パラメータに基づいて実行時に変更できます。

動的マッピングの詳細については、*『Informatica 10.0 Developer マッピングガイド』*の「動的マッピング」を参照してください。

マッピング出力

バージョン 10.0 では、マッピングの実行から集計値を返すマッピング出力を作成できます。マッピング出力は、マッピングで処理される各行のフィールド値または式の集計結果です。

例えば、トランスフォーメーションが受け取るソース行から注文フィールドの合計金額を集計するマッピング出力を設定できます。マッピング出力の値をリポジトリで保持することができます。保持されているマッピング出力の値は、マッピングタスクの入力パラメータに割り当てることができます。また、マッピング出力をワークフロー変数に割り当てることもできます。

マッピング出力はマッピングの［**出力**］ビューで作成します。マッピングの式トランスフォーメーションで集計の式を定義します。

詳細については、*『Informatica 10.0 Developer マッピングガイド』*を参照してください。

マッピングタスクの入力

バージョン 10.0 では、保持されているマッピング出力を、同じマッピングタスクの入力パラメータに割り当てることができます。保持されているマッピング出力とは、データ統合サービスが前のワークフロー実行からリポジトリに保存した値です。例えば、前のワークフロー実行から最後の注文の日付を保持することができます。マッピングタスクの［**入力**］ビューでは、保持されている値を入力パラメータに割り当てることができます。入力パラメータをフィルタ式に含めると、最後の日付以前の行がスキップされます。

詳細については、*『Informatica 10.0 Developer ワークフローガイド』*の *「マッピングタスク」*を参照してください。

マッピングタスクの出力

バージョン 10.0 では、マッピング出力をワークフロー変数に割り当てることができます。現在のユーザー定義のマッピング出力およびユーザー定義の永続的なマッピング出力をワークフロー変数に割り当てます。現在の値は、実行中のワークフローでマッピングタスクによって生成された値です。保持されているマッピング出力は、前の実行からリポジトリに保持された値です。また、システム定義のマッピング出力をワークフロー変数に割り当てることも可能です。マッピングタスクの［**出力**］ビューでマッピング出力をワークフロー変数に割り当てます。

詳細については、*『Informatica 10.0 Developer ワークフローガイド』*の *「マッピングタスク」*を参照してください。

最適化方式

Informatica バージョン 10.0 では、最適化方式に関して次の新機能が利用できます。

グローバル述部最適化方式

データ統合サービスでは、グローバル述部最適化方式を適用できます。グローバル述部最適化方式を適用する場合、データ統合サービスは、マッピングのフィルタを分割、移動、削除、または簡素化します。データ統合サービスにより、パイプライン内のソースに可能な限り近くなるようにデータがフィルタリングされます。また、マッピングで生成される述部式の推論も行います。

詳細については、*『Informatica 10.0 パフォーマンス調整ガイド』*の章「マッピングの最適化」を参照してください。

プッシュダウンの最適化方式

ソースデータベースにトランスフォーメーションロジックをプッシュするには、プッシュダウンタイプを選択する必要があります。ソースデータベースに対して、トランスフォーメーションロジックをプッシュダウンしない、その一部をプッシュダウンする、またはそのすべてをプッシュダウンすることを選択できます。プッシュダウンタイプのマッピング最適化プランを確認することもできます。

マッピングに更新方式トランスフォーメーションが含まれている場合は、プッシュダウンの最適化を設定する前に、マッピングのプッシュダウン互換性を確認する必要があります。

詳細については、*『Informatica 10.0 開発者マッピングガイド』*の章「プッシュダウンの最適化」を参照してください。

データシップ結合最適化方式

異なるデータベース内にある 2 つの異なるサイズのテーブルのデータをマッピングで結合する必要がある場合、データ統合サービスはデータシップ結合最適化方式を適用できます。

詳細については、『*Informatica 10.0 パフォーマンス調整ガイド*』の章「マッピングの最適化」を参照してください。

マッピング最適化プラン

マッピング最適化プランでは、最適化方式がマッピングのパフォーマンスに与える影響を確認できます。

詳細については、『*Informatica 10.0 パフォーマンス調整ガイド*』の「マッピングの最適化」の章を参照してください。

パラメータ

Informatica バージョン 10.0 では、パラメータに関して次の新機能が利用できます。

パラメータの使用

パラメータを使用して、接続、SQL ステートメント、Sort By および Group By ポートリスト、式変数、ランタイム環境などのプロパティを追加で指定できます。

パラメータタイプ

動的マッピングにおいて、式、入力リンクセット、ポート、ポートリスト、リソース、およびソートリストの各パラメータタイプを使用できます。

マッピング、マップレットおよびトランスフォーメーション間でのパラメータのバインド

［パラメータ］タブの**［インスタンス値］**カラムで、マッピングパラメータをマップレットパラメータまたはトランスフォーメーションパラメータにバインドできます。また、マップレットパラメータをトランスフォーメーションパラメータにバインドすることも可能です。

パラメータを別のパラメータにバインドすると、実行時、そのパラメータにより別のパラメーターがオーバーライドされます。既存のパラメータからマッピングまたはマップレットパラメータを作成し、それらのパラメーターをバインドする操作は、1 回の手順で行えます。オーバーライドするパラメータの**［マッピングパラメータとして公開］**オプションまたは**［マップレットパラメータとして公開］**オプションをクリックします。

マッピングからのパラメータを、読み取りまたは書き込み論理データオブジェクトマッピングのパラメータにバインドすることが可能です。

パラメータセット

ワークフローまたはマッピング用のパラメータセットを定義できます。パラメータセットとは、一連のパラメータとその値を含んだモデルリポジトリ内のオブジェクトで、実行時に使用します。パラメータセットは、マッピング、マッピングタスク、またはワークフローで使用します。アプリケーションをデプロイする場合、アプリケーションに 1 つ以上のパラメータセットを追加できます。複数のアプリケーションに 1 つのパラメータセットを追加し、デプロイすることができます。

ランタイム環境パラメータ

パラメータを使用してランタイム環境を設定できます。文字列パラメータをマッピングレベルで設定します。デフォルト値は［ネイティブ］または［Hadoop］に設定します。マッピング用のランタイム環境を選択するときには、**［パラメータの割り当て］**をクリックし、設定したパラメータを選択します。

パラメータの詳細については、『*Informatica 10.0 開発者 マッピングガイド*』の章「*マッピングパラメータ*」を参照してください。

パーティション化されたマッピング

Informatica バージョン 10.0 では、パーティション化されたマッピングに関して、次の新機能が利用できます。

パーティション化されたトランスフォーメーション

追加のトランスフォーメーションでパーティション化がサポートされます。パーティション化に対応したマッピングに次のトランスフォーメーションが含まれている場合、データ統合サービスは、複数のスレッドを使用してデータを変換できます。

- アドレスバリデータ
- 大文字小文字変換プログラム
- 分類子
- 比較
- データマスキング
- データプロセッサ
- ディシジョン
- キージェネレータ
- ラベラ
- 一致（識別子の一致分析に対応するように設定されている場合）
- マージ
- ノーマライザ
- パーサー
- シーケンスジェネレータ
- ソータ
- 標準化
- 加重平均

キャッシュのパーティション化

アグリゲータ、ジョイナ、またはランクトランスフォーメーションの場合、トランスフォーメーションのキャッシュパーティション化中のパフォーマンスが最適化されるように複数のキャッシュディレクトリを設定できます。管理者がデータ統合サービス用に複数のキャッシュディレクトリを設定している場合は、CacheDir システムパラメータのデフォルト値を使用できます。CacheDir システムパラメータのデフォルト値をオーバーライドし、トランスフォーメーションに固有の複数のキャッシュディレクトリを設定することもできます。

ソータートランスフォーメーションの場合、トランスフォーメーションのキャッシュパーティション化中のパフォーマンスが最適化されるように複数の作業ディレクトリを設定できます。管理者がデータ統合サービス用に複数の一時ディレクトリを設定した場合は、TempDir システムパラメータのデフォルト値を使用できます。TempDir システムパラメータのデフォルト値をオーバーライドし、トランスフォーメーションに固有の複数のディレクトリを設定することもできます。

マッピングでのデータのソート

データ統合サービスは、ソート順を設定するマッピング用のパーティションを作成できます。ソート済みフラットファイルソース、ソート済みリレーショナルソース、またはソータートランスフォーメーションを使用したマッピングでのソート順を設定できます。データ統合サービスがマッピングにパーティションポイントを追加すると、データが再配布され、マッピング内ですでに設定されている順序が失われることがあります。パーティション化されたマッピングで順序を保持するには、トランスフォーメーションの詳

細プロパティで、式、Java、シーケンスジェネレータ、SQL、および書き込みトランスフォーメーションが行の順序を保持することを指定する必要があります。

パーティション化されたフラットファイルターゲット

フラットファイルターゲットに複数のスレッドが書き込むときのパフォーマンスを最適化するには、フラットファイルデータオブジェクト用に複数の出力ファイルディレクトリを設定します。管理者がデータ統合サービス用に複数のターゲットディレクトリを設定した場合は、TargetDir システムパラメータのデフォルト値を使用できます。TargetDir システムパラメータのデフォルト値をオーバーライドし、フラットファイルデータオブジェクトに固有の複数の出力ファイルディレクトリを設定することもできます。

トランスフォーメーションの推奨並行処理値

マッピングの最大並行処理値をオーバーライドする場合、特定のトランスフォーメーションの推奨並行処理値を定義できます。データ統合サービスは、トランスフォーメーションをパーティション化できる場合、そのトランスフォーメーションパイプラインステージのスレッド数として、推奨並行処理値を使用します。ユーザーは、マッピングまたはデータ統合サービス用に定義された最大並行処理値より小さい推奨並行処理値を定義できます。多数のポートが含まれるトランスフォーメーションや複雑な計算を実行するトランスフォーメーションでは、パフォーマンスを最適化するために推奨並行処理値を定義することができます。

パーティション化されたマッピングの詳細については、『*Informatica 10.0 開発者マッピングガイド*』の章「パーティション化されたマッピング」を参照してください。

ランタイムプロパティ

バージョン 10.0 では、以下のランタイムプロパティをマッピングに対して設定できます。

エラー時の停止

リーダー、ライタ、またはトランスフォーメーションのスレッドで致命的でないエラーが発生した場合にマッピングを停止します。デフォルトでは無効になっています。

ターゲットコミット間隔

コミットの基本になる行数です。データ統合サービスは、処理するターゲット行の数およびターゲットテーブルの制約に基づいてデータをコミットします。

詳細については、『*Informatica 10.0 Developer マッピングガイド*』を参照してください。

ターゲットロード順序の制約

バージョン 10.0 では、行がロードされてマッピング内のターゲットインスタンス全体にコミットされる順序を制御する制約を設定できます。マッピングの **[プロパティ]** ビューに表示される **[ロード順序]** タブで制約を定義します。各制約は、ロード順序を制限するプライマリターゲット名およびセカンダリターゲット名で構成されています。

詳細については、『*Informatica 10.0 Developer マッピングガイド*』を参照してください。

Metadata Manager

ここでは、バージョン 10.0 の新しい Metadata Manager 機能について説明します。

Tableau リソース

バージョン 10.0 では、Tableau リソースを作成し、Tableau Server からメタデータを抽出するように Tableau リソースを設定できます。

Tableau リソースの作成および設定についての詳細は、*『Informatica 10.0 Metadata Manager 管理者ガイド』*の「Business Intelligence リソース」を参照してください。

サポートされているメタデータソースバージョンの詳細については、次の Informatica Network で「*PCAE Metadata Manager XConnect Support*」という Product Availability Matrix を参照してください。
https://network.informatica.com/community/informatica-network/product-availability-matrices/overview

データリネージュの改良点

バージョン 10.0 では、データリネージュ図に次の改良点が含まれます。

PowerCenter **マッピングのサマリリネージュ**

PowerCenter マッピングが含まれるデータリネージュ図を表示した場合、Metadata Manager はデフォルトでマッピングのサマリビューを表示します。サマリビューには、データリネージュ図内のマッピングの入力と出力が表示されますが、トランスフォーメーションロジックは表示されません。サマリビューでは、データリネージュ図の複雑さが軽減されますまた、Metadata Manager でのデータリネージュ図の生成時間が短縮されます。

マッピング内のすべてのトランスフォーメーションロジックを表示するには、データリネージュ図のツールバーで **[詳細に切り替え]** をクリックします。次の図は、**[詳細に切り替え]** ボタンを示しています。

詳細ビューからサマリビューに戻るには、図を更新します。

オブジェクトのフィルタリング

データリネージュ図に表示するオブジェクトをフィルタリングできます。個々のオブジェクト、または特定のクラスのすべてのオブジェクトをフィルタリングできます。例えば、データリネージュ図からすべてのビジネス用語を除外することができます。適用した任意のフィルタを削除できます。

パフォーマンスの向上

Metadata Manager は、ファイルベースのグラフデータベースを使用して、データリネージュのリンク情報をソートして取得します。結果として、Metadata Manager は以前のバージョンよりも短時間でデータリネージュ図を生成します。

バージョン 10.0 にアップグレードすると、グラフデータベースが作成され、データリネージュのリンク情報が Metadata Manager リポジトリからグラフデータベースにコピーされます。グラフデータベースファイルの格納に使用する場所を設定できます。

図の作成のキャンセル

データリネージュ図の生成に長い時間がかかっている場合、図の作成をキャンセルできます。

データリネージュ図の詳細については、*『Informatica 10.0 Metadata Manager ユーザーガイド』*の「データリネージュに関する作業」を参照してください。Metadata Manager リネージュグラフの位置の設定の詳細については、*『Informatica 10.0 アプリケーションサービスガイド』*の「Metadata Manager サービス」を参照してください。

メタデータカタログビュー

バージョン 10.0 では、メタデータカタログに、メタデータを参照するための 2 つの異なるビュー（リストビューとツリービュー）が含まれます。リストビューを使用して、リソース、論理グループ、メタデータオブジェクトを個別にドリルダウンします。ツリービューを使用して、メタデータオブジェクトを階層的に表示します。

メタデータカタログビューの詳細については、*『Informatica 10.0 Metadata Manager ユーザーガイド』*を参照してください。

Cloudera Navigator リソースの Impala クエリ

バージョン 10.0 では、Metadata Manager は、Cloudera Hadoop クラスタから Impala クエリテンプレートとクエリ実行を抽出できます。

Cloudera Navigator リソースの Impala クエリの詳細については、*『Informatica 10.0 Metadata Manager 管理者ガイド』*の「データベース管理リソース」を参照してください。

Informatica Platform リソースのパラメータ

バージョン 10.0 では、Informatica Platform リソースで、マッピングパラメータを使用するマッピングのメタデータを抽出できます。

Informatica Platform 10.x アプリケーションにパラメータを使用したマッピングが含まれている場合、パラメータセットからのパラメータ値を使用するように Metadata Manager を設定できます。Informatica Platform リソースの作成時に、パラメータセットをマッピングに割り当てます。Metadata Manager は、パラメータ値を使用して、マッピングオブジェクトおよびデータリネージュを表示します。

Informatica Platform リソースの詳細については、*『Informatica 10.0 Metadata Manager 管理者ガイド』*の章「データ統合リソース」を参照してください。

最近の履歴

バージョン 10.0 では、Metadata Manager で、メタデータカタログに表示するオブジェクトの履歴が保持されます。最近の履歴を使用して、以前表示したオブジェクトにすばやく戻ります。ログアウトすると、最近の履歴が消去されます。

詳細については、*『Informatica 10.0 Metadata Manager ユーザーガイド』*の「メタデータの表示」の章を参照してください。

関連するカタログオブジェクトおよび影響のサマリのフィルタおよびソート

バージョン 10.0 では、メタデータオブジェクトまたはビジネス用語の詳細を表示する場合、関連するカタログオブジェクトおよび影響のサマリのフィルタとソートができます。オブジェクトクラス、オブジェクト名、またはパスを使用して、フィルタリングとソートができます。また、メタデータソースタイプを使用して、影響のサマリをフィルタリングできます。

詳細については、*『Informatica 10.0 Metadata Manager ユーザーガイド』*の「メタデータの表示」の章を参照してください。

影響のサマリ内のセッションタスクインスタンス

バージョン 10.0 では、影響のサマリに、PowerCenter セッションタスクインスタンスのリストが表示されます。PowerCenter マッピングに影響を与える、または PowerCenter マッピングの影響を受けるオブジェクトのメタデータの詳細を表示すると、影響のサマリにセッションタスクインスタンスのリストが表示されます。

メタデータオブジェクトをエクスポートし、影響のサマリを含めた場合、エクスポートファイルの影響のサマリセクションに、関連付けられたセッションタスクインスタンスもリストされます。

セッションタスクインスタンスがデータフローに影響する可能性があるため、影響のサマリにセッションタスクインスタンスのリストが表示されます。セッションタスクインスタンスは、ソースまたはターゲットの接続情報をオーバーライドできます。また、ソースからのデータの抽出に使用するデフォルトのクエリを上書きする SQL クエリをセッションタスクインスタンスに含めることもできます。

影響のサマリの詳細については、*『Informatica 10.0 Metadata Manager ユーザーガイド』*の「メタデータの表示」を参照してください。

アプリケーションおよびデータリネージュプロパティ

バージョン 10.0 では、新しいアプリケーションおよびデータリネージュプロパティを Metadata Manager imm.properties ファイルで設定できます。

以下の表に、imm.properties に含まれている新しい Metadata Manager アプリケーションプロパティを示します。

プロパティ	説明
xconnect.custom.failLoadOnErrorCount	カスタムリソースのロード時に Metadata Manager サービスで許容される最大エラー数。この数を超えるエラーが発生すると、リソースのロードに失敗します。
xconnect.io.print.batch.errors	カスタムリソースのロード時に Metadata Manager サービスが 1 回のバッチでメモリキャッシュおよび mm.log ファイルに書き込むエラーの数。

以下の表に、imm.properties に含まれる新しいデータリネージュプロパティを示します。

プロパティ	説明
Lineage.PreCompute.ElementsInSingleTransaction	Metadata Manager サービスがリネージュグラフの作成中に単一トランザクション内で処理できるグラフ要素（辺や頂点など）の最大数。
Lineage.PreCompute.FetchBlockSize	Metadata Manager サービスが、Metadata Manager ウェアハウスからデータリネージュリンク情報を取得してグラフデータベースにデータを追加するときに、1 つのブロックで処理するレコード数。

imm.properties ファイルの詳細については、*『Informatica 10.0 Metadata Manager 管理者ガイド』*の付録「Metadata Manager のプロパティファイル」を参照してください。

PowerCenter

ここでは、バージョン 10.0 の新しい PowerCenter 機能について説明します。

高可用性

バージョン 10.0 では、PowerCenter 統合サービスおよび PowerCenter Client により、可用性の高い NameNode を使用する Hadoop クラスタに対して、読み取りと書き込みが可能です。

詳細については、『*Informatica 10.0 PowerExchange for Hadoop PowerCenter 用ユーザーガイド*』の章「Hadoop 構成での PowerExchange」を参照してください。

PowerExchange アダプタ

ここでは、バージョン 10.0 の新しい PowerExchange アダプタ機能について説明します。

Informatica 用 PowerExchange アダプタ

ここでは、バージョン 10.0 の新しい Informatica アダプタ機能について説明します。

PowerExchange for DataSift

バージョン 10.0 では、DataSift データオブジェクトの読み取り操作プロパティをパラメータ化できます。

詳細については、『*Informatica PowerExchange for DataSift 10.0 ユーザーガイド*』を参照してください。

PowerExchange for Facebook

バージョン 10.0 では、Facebook データオブジェクトの読み取り操作プロパティをパラメータ化できます。

詳細については、『*Informatica PowerExchange for Facebook 10.0 ユーザーガイド*』を参照してください。

PowerExchange for Greenplum

バージョン 10.0 では、PowerExchange for Greenplum で次のタスクを実行できます。

- Greenplum データオブジェクトの動的パーティションを設定できます。データ統合サービスが実行時に作成するパーティションの数を決定できるように、パーティション情報を設定できます。
- Greenplum データオブジェクト操作プロパティをパラメータ化して、実行時に書き込みデータオブジェクト操作プロパティをオーバーライドできます。
- Max_Line_Length の整数を使用して、gpload に渡される XML トランスフォーメーションデータの行の最大長を指定できます。

詳細について『*Informatica PowerExchange for Greenplum 10.0 ユーザーガイド*』を参照してください。

PowerExchange for HBase

バージョン 10.0 では、HBase データオブジェクトの読み取りおよび書き込み操作プロパティをパラメータ化できます。

詳細については、『*Informatica PowerExchange for HBase 10.0 ユーザーガイド*』を参照してください。

PowerExchange for HDFS

バージョン 10.0 では、複合ファイルデータオブジェクトの読み取りおよび書き込み操作プロパティをパラメータ化できます。

詳細については、『*Informatica PowerExchange for HDFS 10.0 ユーザーガイド*』を参照してください。

PowerExchange for LinkedIn

バージョン 10.0 では、LinkedIn データオブジェクトの読み取り操作プロパティをパラメータ化できます。

詳細については、『*Informatica PowerExchange for LinkedIn 10.0 ユーザーガイド*』を参照してください。

PowerExchange for SAP NetWeaver

バージョン 10.0 では、PowerExchange for SAP NetWeaver で次のタスクを実行できます。

- Developer tool を使用して、SAP テーブルデータオブジェクトおよびデータオブジェクト読み取り操作の作成ができます。次に、読み取り操作をマッピングのソースまたはルックアップとして追加してマッピングを実行し、SAP テーブルのデータの読み取りまたは検索を行うことができます。
- SAP テーブルからデータを読み取る場合、キー範囲パーティション化を設定できます。また、パラメータを使用して、実行時に接続およびテーブルデータオブジェクトの読み取り操作プロパティを変更することもできます。
- SAP テーブルデータオブジェクトに対してプロファイルを実行できます。
- SQL データサービスを作成する場合、SAP テーブルデータオブジェクトの読み取り操作を仮想テーブルとして追加できます。
- オープンハブ宛先または InfoSpoke 経由で、SAP BW システムからデータを読み取ることができます。
- SAP BW システムからデータを読み取る場合、動的パーティションまたは固定パーティションを設定できます。また、パラメータを使用して、実行時に接続および BW OHS 抽出データオブジェクトの読み取り操作プロパティを変更することもできます。
- SAP BW システムにデータを書き込むことができます。3.x または 7. x のデータソースを使用して、SAP BW システムにデータを書き込むことができます。
- SAP BW システムにデータを書き込む場合、動的パーティションを設定できます。また、パラメータを使用して、実行時に接続および BW ロードデータオブジェクトの書き込み操作プロパティを変更することもできます。
- Administrator ツールで SAP 接続を作成できます。
- Developer tool を使用して、SAP BW に対してデータの読み取りまたは書き込みを行う場合、Administrator ツールで SAP BW サービスを作成できます。

詳細については、『*Informatica PowerExchange for SAP NetWeaver 10.0 ユーザーガイド*』を参照してください。

PowerExchange for Teradata Parallel Transporter API

バージョン 10.0 では、PowerExchange for Teradata Parallel Transporter API で次のタスクを実行できます。

- PowerExchange for Teradata Parallel Transporter API を使用して、Teradata テーブルから大量のデータを読み取ることができます。
- Update システム演算子を使用して、Teradata データベーステーブルに対して挿入、更新、更新/挿入、および削除操作を実行できます。
- Secure Sockets Layer（SSL）プロトコルを使用して、Developer tool と Teradata データベース間にセキュアな接続を設定できます。
- Teradata Parallel Transporter API データオブジェクトの動的パーティションを設定できます。データ統合サービスが実行時に作成するパーティションの数を決定できるように、パーティション情報を設定できます。
- Teradata データオブジェクト操作プロパティをパラメータ化して、実行時に読み取りおよび書き込みデータオブジェクト操作プロパティをオーバーライドできます。

詳細については、『*Informatica PowerExchange for Teradata Parallel Transporter API 10.0 ユーザーガイド*』を参照してください。

PowerExchange for Twitter

バージョン 10.0 では、Twitter および Twitter ストリーミングデータオブジェクトの読み取り操作プロパティをパラメータ化できます。

詳細については、『*Informatica PowerExchange for Twitter 10.0 ユーザーガイド*』を参照してください。

PowerExchange for Web Content-Kapow Katalyst

バージョン 10.0 では、Web コンテンツ-Kapow Katalyst データオブジェクトの読み取り操作プロパティをパラメータ化できます。

詳細については、『*Informatica PowerExchange for Web Content-Kapow Katalyst 10.0 ユーザーガイド*』を参照してください。

参照データ

ここでは、バージョン 10.0 の新しい参照データ機能について説明します。

分類子モデル

バージョン 10.0 では、Developer tool で、分類子モデルの次のアクションを実行できます。

- 参照データ値とラベル値をデータソースから分類子モデルにインポートする。
- 分類子モデルで、設定可能なオプションをリボンから選択する。例えば、［ラベルの管理］オプションを選択し、分類子モデルでラベル値を追加、削除、または更新するためのオプションにアクセスします。
- 分類子モデルの検索フィルタでワイルドカード文字を使用する。
- 1 行のデータを分類子モデルに追加する。
- 1 回の操作で、複数行の分類子モデルデータにラベル値を適用する。

詳細については、『*Informatica 10.0 参照データガイド*』の「分類子モデル」の章を参照してください。

確率モデル

バージョン 10.0 では、Developer tool で、確率モデルの次のアクションを実行できます。

- 1 回の操作で、複数の参照データ値にラベルを割り当てる。
- ラベル値と参照データ値をデータソースから確率モデルにインポートする。
- 選択したラベルを使用する参照データ値の現在の数を表示する。

バージョン 10.0 では、Developer tool の 1 つ以上のページに確率モデルのデータ行が表示されます。ページには、100 の参照データ行が含まれます。モデル内で前のページまたは次のページに移動できます。また、指定したページ番号に移動できます。

詳細については、『*Informatica 10.0 参照データガイド*』の「確率モデル」の章を参照してください。

ルール仕様

ここでは、バージョン 10.0 のルール仕様に関する新機能について説明します。

リンクされたアセット

バージョン 10.0 では、Analyst ツールの設計ワークスペースには、ルール仕様にリンクしたアセットへのハイパーリンクが表示されます。例えば、ルール仕様内で別のルールアセットを使用した場合、ワークスペースにそのルールアセットへのリンクが表示されます。また、［デザイン］ワークスペースには、ルール仕様から生成したすべてのルールへのハイパーリンクが表示されます。

ルール仕様のプロパティで、［アセット］の下にハイパーリンクが表示されます。

詳細については、*『Informatica 10.0 ルール仕様ガイド』*の「ルール仕様の設定」を参照してください。

マップレットルール

バージョン 10.0 では、マップレットルールを以下の方法で使用できます。

- 指定する期間中に有効なルール仕様を設定できます。この期間の開始と終了を示す日付と時刻を指定します。ルール仕様からコンパイルしたマップレットルールにもこの期間が適用されます。この期間以外でマップレットルールを読み取るマッピングを実行すると、マッピングは失敗します。

  詳細については、*『Informatica 10.0 ルール仕様ガイド』*の「ルール仕様の設定」を参照してください。
- マップレットルールを、ルール文内の条件およびアクションに追加できます。ルール仕様からの入力をマップレットルールの入力ポートに接続します。または、定数値をマップレットルールの入力として使用します。マップレットルールからの出力ポートを、条件またはアクションからの出力として選択します。

  詳細については、*『Informatica 10.0 ルール仕様ガイド』*の「ルール仕様の設定」を参照してください。

ルール文

バージョン 10.0 では、ルール文で次の操作を実行できます。

- ルールセット内でのルール文の移動またはコピー、ルール文の別のルールセットへの移動またはコピー。ルール文を別のルール仕様内のルールセットに移動またはコピーできます。別のルール仕様にルール文を移動またはコピーする場合、ルール文で使用している入力が移動またはコピーされます。また、この操作では、ルール文をテストするために入力および保存されたすべてのテストデータが移動またはコピーされます。
- ルール仕様内の別の場所、および別のルール仕様へのルールセットの移動またはコピー。別のルール仕様にルールセットを移動またはコピーする場合、ルールセットで使用している入力とテストデータが移動またはコピーされます。
- あるルール仕様から別のルール仕様へのテストデータの移動またはコピー。
- ルール文内で条件を設定する場合に、CONTAINS 演算子を選択する。この演算子を使用して、入力カラムのデータ値に関する次の情報を確認します。

  - 入力したデータ値が入力カラムに含まれているかどうかを確認します。

  - 別の入力カラムの同じ行に含まれているデータ値が入力カラムに含まれているかどうかを確認します。
- 入力した値リスト内の入力値を検索するようにルール文を設定する。
- ルールセットには、定義済みルール文が含まれます。これは、前のルール文でデータが生成されなかった場合に実行するアクションを指定するものです。デフォルトでは、ルールセットがアクションを実行しないようにルール文で指定されています。ルール文内のアクションは、更新できます。

詳細については、*『Informatica 10.0 ルール仕様ガイド』*の「ルール文の設定」を参照してください。

ユーザーインタフェースの改良点

バージョン 10.0 では、設計ワークスペースに、ルール仕様のユーザーインタフェースに関する次の改良点が含まれます。

- ルールセットの入力ビューを選択した場合、ルールセットに含まれない入力はワークスペースに表示されなくなります。
- ワークスペースキャンバス内でルール仕様をドラッグできます。
- マウスホイールを使用して、ルール仕様のズームインとズームアウトができます。
- ルール仕様のツリー構造を展開するまたは折りたたむことで、ルール仕様のさまざまな部分を表示したり、非表示にしたりできます。
- テキストの説明を入力に追加できます。
- 子ルールセットの出力を読み取るルールセットでは、入力リストに子ルールセット名が表示されます。
- 無効なルールセットは、有効なルールセットとは異なる色で表示されます。

- 一部の設定可能なオプションに新しい名前が付けられています。

詳細については、*『Informatica 10.0 ルール仕様ガイド』*を参照してください。

バージョン管理

バージョン 10.0 では、バージョン管理されたモデルリポジトリ内でルール仕様を使用できます。バージョン管理を使用するモデルリポジトリからルール仕様を開いた場合、Analyst ツールは、バージョン管理プロパティをルール仕様に適用します。設計ワークスペースの［編集］オプションを使用して、リポジトリからルール仕様をチェックアウトします。設計ワークスペースの［保存して完了］オプションを使用して、ルール仕様をチェックインします。チェックアウト操作を取り消すこともできます。

以前のバージョンのルール仕様を参照し、編集モードおよび読み取り専用モードで前のバージョンに戻すことができます。古いバージョンのルール仕様を読み取り専用モードで参照するとき、最新バージョンにのルール仕様に適用されるすべての読み取り専用操作を実行できます。読み取り専用モードでルール仕様を参照および検証できます。ルール仕様にテストデータが含まれる場合、ルール仕様を読み取り専用モードでテストできます。

詳細については、*『Informatica 10.0 Analyst ガイド』*の「モデルリポジトリ」を参照してください。

セキュリティ

ここでは、バージョン 10.0 の新しいセキュリティ機能について説明します。

グループ

バージョン 10.0 では、Informatica に Operator というデフォルトグループが追加されています。Operator グループを使用して、Operator ロールが割り当てられている複数のユーザーを管理します。

詳細については、*『Informatica 10.0 セキュリティガイド』*を参照してください。

特権

バージョン 10.0 では、次の新しい特権が含まれています。

モデルリポジトリサービス特権

［チームベース開発の管理］特権を使用すると、モデルリポジトリ管理者は、オブジェクトロックの管理とバージョン管理されたオブジェクトの管理に関連するアクションを実行できます。

スケジューラサービス特権

［スケジューラ］特権グループでは、スケジュールとスケジュール済みのジョブに対してユーザーが実行できるアクションを決定します。

詳細については、*『Informatica 10.0 セキュリティガイド』*の付録「コマンドラインの特権および権限」を参照してください。

ロール

バージョン 10.0 では、Informatica にオペレータというカスタムロールが含まれます。オペレータロールには、アプリケーションサービスを管理、スケジュール、および監視する特権が含まれます。

詳細については、*『Informatica 10.0 セキュリティガイド』*を参照してください。

トランスフォーメーション言語関数

ここでは、バージョン 10.0 のトランスフォーメーション言語関数の新機能について説明します。

Informatica 関数

ここでは、バージョン 10.0 における Informatica 関数の新しい機能について説明します。

CaseFlag

バージョン 10.0 では、CaseFlag オプションで、GREATEST、LEAST、IN、および INDEXOF 関数の NULL 値がサポートされていません。

以前は、CaseFlag オプションで NULL 値がサポートされていました。

詳細については、*『Informatica 10.0 Developer トランスフォーメーション言語リファレンス』*の「関数」を参照してください。

TO_DECIMAL38 関数

バージョン 10.0 では、TO_DECIMAL38 関数を使用して、文字列値または数値を 10 進型の値に変換できます。この関数は、0 から 38 の精度と位取りを持つ 10 進型の値を返します。

詳細については、*『Informatica 10.0 トランスフォーメーション言語リファレンス』*を参照してください。

トランスフォーメーション

ここでは、バージョン 10.0 の新しいトランスフォーメーション機能について説明します。

Informatica トランスフォーメーション

ここでは、バージョン 10.0 の Informatica トランスフォーメーションの新しい機能について説明します。

アドレスバリデータトランスフォーメーション

バージョン 10.0 では、次のトランスフォーメーションプロパティを設定するようにパラメータを定義できます。

- Geocode データ型
- グローバル最大フィールド長
- 最大結果カウント
- 最適化レベル
- 無効なアドレスの標準化

詳細については、*『Informatica 10.0 Developer トランスフォーメーションガイド』*の「アドレスバリデータトランスフォーメーション」を参照してください。

不良レコードの例外トランスフォーメーション

バージョン 10.0 では、パラメータを使用して、トランスフォーメーションで不良レコードを特定するために使用する上方しきい値と下方しきい値を指定できます。

詳細については、*『Informatica 10.0 Developer マッピングガイド』*の「マッピングパラメータ」を参照してください。

データプロセッサトランスフォーメーション

ここでは、新しいデータプロセッサトランスフォーメーションの機能について説明します。

Data Transformation ライブラリ

Data Transformation ライブラリには、幅広い業界メッセージング標準に対応する事前定義されたトランスフォーメーションコンポーネントが含まれています。データプロセッサトランスフォーメーションはライブラリオブジェクトを使用して、業界標準のメッセージングタイプを XML 出力ドキュメントなどの別の書式に変換したり、XML 入力を業界メッセージ出力に変換したりします。

ライブラリオブジェクトには、パーサー、シリアライザ、および業界標準の入力および特定のアプリケーションメッセージを XML またはその他の出力に変換するように事前設定された XML スキーマなどの、数多くのオブジェクトやコンポーネントが含まれています。一部のライブラリには、メッセージの検証、承認、および診断表示のための追加オブジェクトが含まれています。ライブラリオブジェクトのプロパティや検証設定はカスタマイズすることもできます。

DTCC-NTCC、EDIFACT、EDI-X12、HIPAA、HL7、および SWIFT の各ライブラリのライブラリオブジェクトを作成できます。

詳細については、*『Informatica Data Transformation 10.0 ユーザーガイド』*および *『Informatica Data Transformation 10.0 ライブラリガイド』*を参照してください。

ストリーマのない複合ファイルリーダー

入力を受信するデータプロセッサトランスフォーメーションで、ストリーマのない複合ファイルリーダーをスタートアップコンポーネントとして使用できます。

詳細については、*『Informatica Data Transformation 10.0 ユーザーガイド』*を参照してください。

カスタムデータ型のパススルーポート

データプロセッサトランスフォーメーションには、カスタムデータ型のパススルーポートを含めることができます。

カスタムデータ型の詳細については、*『Informatica Developer 10.0 ユーザーガイド』*を参照してください。

XMap の RunMapplet 文

データプロセッサトランスフォーメーションの XMap からマップレットを呼び出す、RunMapplet マッピング文を定義できます。RunMapplet 文の下に 1 つ以上の MappletInput 文および MappletOutput 文をネストできます。値は、MappletInput 文に表示されるのと同じ順序でマップレット入力ポートにマップされます。マップレット出力ポート内の値は、マップレットポートに表示されるのと同じ順序で MappletOutput 文にマップされます。

詳細については、*『Informatica Data Transformation 10.0 ユーザーガイド』*を参照してください。

スクリプトモードの編集

外部エディタを使用して、データプロセッサトランスフォーメーションのスクリプトを編集できます。例えば、外部エディタを使用して、グローバルな検索と置換操作を実行できます。

詳細については、*『Informatica Data Transformation 10.0 ユーザーガイド』*を参照してください。

ディシジョントランスフォーメーション

バージョン 10.0 では、パラメータを使用して、ディシジョントランスフォーメーションスクリプトの入力値を指定できます。

詳細については、*『Informatica 10.0 Developer マッピングガイド』*の「マッピングパラメータ」を参照してください。

重複レコードの例外トランスフォーメーション

バージョン 10.0 では、パラメータを使用して、トランスフォーメーションで重複レコードを特定するために使用する上方しきい値と下方しきい値を指定できます。

詳細については、*『Informatica 10.0 Developer マッピングガイド』*の「マッピングパラメータ」を参照してください。

式トランスフォーメーション

ここでは、式トランスフォーメーションの新機能について説明します。

動的式

バージョン 10.0 では、動的出力ポートで式を作成できます。動的ポートで式を作成すると、式は動的式になります。動的式にポートセレクタまたは動的ポートが含まれていると、複数の出力ポートが生成される場合があります。動的式を複数のポートに対して実行すると、ポートごとに出力値が返されます。

動的式の詳細については、*『Informatica 10.0 Developer トランスフォーメーションガイド』の「式トランスフォーメーション」*を参照してください。

マッピング出力

バージョン 10.0 では、マッピング出力を設定できます。マッピング出力は、マッピングで処理する各行のフィールドまたは式を集計した結果である単一値です。例えば、マッピング出力では、トランスフォーメーションが受け取るすべてのソース行から注文フィールドの合計金額を集計することができます。マッピング出力式は、式トランスフォーメーションが受信する行の集計対象のフィールド値または式です。式トランスフォーメーションで対応する式を作成するには、マッピングの**［プロパティ］**ビューでマッピング出力を定義する必要があります。

マッピング出力の詳細については、*『Informatica 10.0 Developer マッピングガイド』の「マッピング出力」*を参照してください。

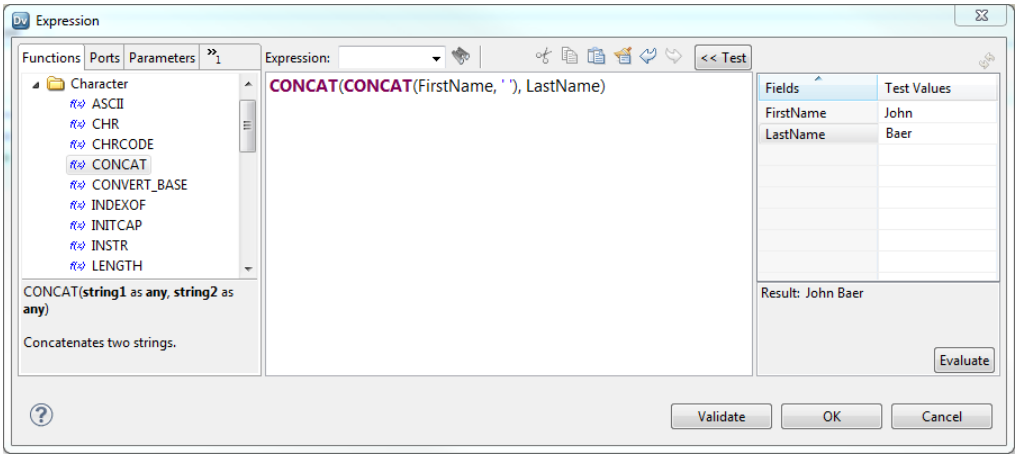
テスト式

バージョン 10.0 では、式エディタで設定した式をテストできます。式をテストするときは、サンプルデータを入力してから式を評価します。

次の方法で式を設定すると、式をテストできます。

- 式トランスフォーメーション内の出力ポートまたは変数ポート内
- トランスフォーメーションをマッピングに追加した後の、式トランスフォーメーションの［マッピング出力］ビュー内

次の図は、サンプルの名と姓を連結する式の結果を示しています。



式のテストの詳細については、*『Informatica 10.0 Developer トランスフォーメーションガイド』*の「式トランスフォーメーション」を参照してください。

階層型からリレーショナルへのトランスフォーメーション

ここでは、Developer tool で作成する階層型からリレーショナルへのトランスフォーメーションについて説明します。

階層型からリレーショナルへのトランスフォーメーションは、バージョン 10.0 で導入された最適化済みのトランスフォーメーションで、階層入力をリレーショナル出力に変換します。

詳細については、*『Informatica 10.0 Developer トランスフォーメーションガイド』*を参照してください。

一致トランスフォーメーション

ID 照合分析の照合タイプオプション

バージョン 10.0 では、ID インデックスデータの永続ストアを読み取るように一致トランスフォーメーションを設定する場合、次のオプションを選択できます。

データベースから ID を削除する

行がシーケンス識別子をマッピングソースデータの行と共有している場合、トランスフォーメーションはその行をインデックステーブルから削除します。このオプションを選択した場合は、トランスフォーメーションは照合分析を実行しません。

データベースの現在の ID を更新する

行がシーケンス識別子を共有するときは、トランスフォーメーションがインデックステーブルの行をマッピングソースデータの行に置換します。トランスフォーメーションは行をインデックスに追加しません。トランスフォーメーションは、照合分析に追加しない行を含めることができます。

詳細については、*『Informatica 10.0 Developer トランスフォーメーションガイド』*の「ID 分析での一致トランスフォーメーション」を参照してください。

ID 照合分析における一致プロセスのオプション

バージョン 10.0 では、ID インデックスデータの永続ストアを更新するようにトランスフォーメーションを設定する場合、照合分析を有効または無効にすることができます。照合分析を有効または無効にするには、**[一致プロセス]** オプションを使用します。

詳細については、*『Informatica 10.0 Developer トランスフォーメーションガイド』*の「ID 分析での一致トランスフォーメーション」を参照してください。

永続インデックスストアでの ID 分析のステータスコード

バージョン 10.0 では、一致トランスフォーメーションで次のステータスコードを生成することで、永続インデックスデータストアの照合分析の結果を示すことができます。

不完全

インデックスデータストアに現在のレコードのデータが含まれていません。

不正

トランスフォーメーションで現在のレコードを分析できません。例えば、[照合タイプ] タブのキーフィールドがレコードデータと互換性がないため、トランスフォーメーションがレコードのインデックスデータを生成できません。

削除済み

トランスフォーメーションが、レコードのインデックスデータをインデックスデータストアから削除します。

更新済み

トランスフォーメーションがトランスフォーメーション入力レコードのインデックスデータに基づいて永続データストアの行を更新します。トランスフォーメーションの入力データと永続インデックスデータは共通のシーケンス識別子を持ちます。

詳細については、*『Informatica 10.0 Developer トランスフォーメーションガイド』*の「一致トランスフォーメーション」を参照してください。

パラメータの使用

バージョン 10.0 では、パラメータを使用して、一致トランスフォーメーションに関する次のオプションを設定できます。

- マッチ率のしきい値。
- トランスフォーメーションが各照合ストラテジからのスコアに適用する相対的なウェイト。
- トランスフォーメーションが ID 照合分析で永続インデックスデータストアに適用する永続方法。

詳細については、*『Informatica 10.0 Developer マッピングガイド』*の「マッピングパラメータ」を参照してください。

シーケンス ID ポート

バージョン 10.0 では、永続インデックスストアを読み取るようにトランスフォーメーションを設定した場合、一致トランスフォーメーションの出力ポートにシーケンス ID ポートが含まれます。トランスフォーメーションは、シーケンス識別子の値を使用して、照合分析の各段階を通じてインデックスデータを追跡します。

詳細については、*『Informatica 10.0 Developer トランスフォーメーションガイド』*の「一致トランスフォーメーション」を参照してください。

SQL トランスフォーメーション

ここでは、SQL トランスフォーメーションの新しい機能について説明します。

バージョン 10.0 では、SQL トランスフォーメーションの接続をパラメータ化できます。パラメータをマッピングで定義します。次に、パラメータを SQL トランスフォーメーションのランタイムプロパティで接続名に割り当てます。

詳細については、*『Informatica 10.0 トランスフォーメーションガイド』の「SQL トランスフォーメーション」*を参照してください。

動的マッピングのトランスフォーメーション

ここでは、動的マッピングのトランスフォーメーションの新しい機能について説明します。

バージョン 10.0 では、動的ポートを追加できるトランスフォーメーションがいくつかあります。アップストリームトランスフォーメーションからのポートにリンクする出力ポートをパラメータ化することもできます。ポートセレクタが、トランスフォーメーションロジックの複数のポートを参照するように設定できます。

トランスフォーメーションの［**プロパティ**］ビューには以下の新しいタブが含まれます。

グループ別

アグリゲータトランスフォーメーション、ランクトランスフォーメーション、およびソータートランスフォーメーションに対してポートグループを設定する必要があります。グループを［**グループ別**］タブで設定できるようになりました。ポートを選択してグループを定義するか、ポートリストを含むパラメータを設定することができます。［**グループ別**］タブでは、生成されたポートを持つトランスフォーメーションを柔軟に設定できます。

ポートセレクタ

トランスフォーメーションロジックで複数のポートを参照できます。ポートの順序付けリストであるポートセレクタを定義します。参照ポートセレクタは、動的式、結合条件、またはルックアップ条件で使用できます。ポートセレクタを定義するとき、ポート名、ポートタイプ、またはテキスト文字のパターンに基づいてトランスフォーメーションポートを含める、または除外することができます。

ランタイムリンク

トランスフォーメーションを動的マッピング内で設定するとき、トランスフォーメーション間でリンクするポートを指定するパラメータまたはリンクポリシーを設定します。動的ポートを静的ポートにリンクするランタイムリンクを設定します。ポートを名前でリンクするリンクポリシーを設定できます。InputLinkSet パラメータを設定して、ランタイムにリンクするポートの名前を指定できます。

詳細については、*『Informatica 10.0 トランスフォーメーションガイド』*を参照してください。

ワークフロー

このセクションでは、バージョン 10.0 の新しいワークフロー機能について説明します。

Informatica ワークフロー

ここでは、バージョン 10.0 の Informatica ワークフローの新しい機能について説明します。

ワークフローのタスクの並行実行

10.0 Update 1 では、データ統合サービスにより、1 つのワークフロー内の複数のシーケンスフローでタスクを並行して実行できるようになりました。並行シーケンスフローを作成するには、Developer tool で包含ゲートウェイをワークフローに追加します。

包含ゲートウェイを使用して、1 つのシーケンスフローを複数のシーケンスフローに分割します。データ統合サービスは、シーケンスフロー条件が true と評価されると、すべてのブランチでオブジェクトを実行します。データ統合サービスは、各ブランチのオブジェクトを同時に実行します。別の包含ゲートウェイを使用して、複数のシーケンスフローを単一のシーケンスフローにマージします。すべてのブランチのオブジェクトが完成すると、データ統合サービスは、2 番目の包含ゲートウェイからワークフローの次のオブジェクトにそのデータを渡します。

2 つの包含ゲートウェイの間のシーケンスフローには、任意のタイプのタスクのインスタンスを 1 つ以上追加することができます。2 つの包含ゲートウェイの間の 1 つのシーケンスフローに、ヒューマンタスクまたは投票タスクを追加することはできません。

詳細については、*『Informatica 10.0 Update 1 Developer ワークフローガイド』*を参照してください。

マッピングタスク

バージョン 10.0 では、マッピングタスクに以下の新しい機能が追加されています。

マッピングタスクログファイルディレクトリ

データ統合サービスがマッピングタスクログを書き込むディレクトリを設定できます。デフォルトでは、データ統合サービスは、システムパラメータである LogDir によって定義されたディレクトリにマッピングタスクログファイルを書き込みます。デフォルトの場所は、disLogs/mappingtask です。マッピングタスクの **[詳細]** プロパティで、マッピングタスクログファイルに別のディレクトリを設定できます。ログファイルディレクトリをパラメータ化できます。

マッピングタスクログファイル名

マッピングタスクログファイルのファイル名を設定できます。データ統合サービスは、ファイル名を［マスキングタスクログファイルディレクトリ］フィールドの情報に追加します。ログファイルの保存に関して選択する方法に応じて、ログファイル名が UID およびタイムスタンプに、またはマッピング実行番号に追加されます。ログファイル名をパラメータ化できます。マッピングタスクの **[詳細]** プロパティでログファイル名を設定します。

マッピングタスクログ保存タイプ

タイムスタンプまたはマッピングタスクの実行数でマッピングタスクログファイルを保存できます。マッピングタスクログファイル名のサフィックスには、選択したオプションが反映されます。保存するログファイルの数を設定できます。

Java **クラスパス**

データ統合サービスがマッピングタスクを実行するときに、システムクラスパスの先頭に追加するクラスパスを入力できます。Java トランスフォーメーションでサードパーティ製の Java パッケージ、ビルトイン Java パッケージ、またはカスタム Java パッケージを使用する場合は、**[詳細]** プロパティに Java クラスパスを入力します。

マッピングタスクのパラメータの使用

バージョン 10.0 では、マッピング内で特定のパラメータを使用するオブジェクトを表示できます。マッピングタスクの **[入力]** タブで **[パラメータの使用]** をクリックします。

カスタムプロパティ

マッピングタスクのカスタムプロパティを定義し、プロパティの値を設定できます。カスタムプロパティをパラメータ化することもできます。

詳細については、*『Informatica 10.0 Developer ワークフローガイド』*を参照してください。

第 15 章

変更内容（10.0）

この章では、以下の項目について説明します。

- インストール, 181 ページ
- アプリケーションサービス, 182 ページ
- Big Data, 188 ページ
- Business Glossary, 188 ページ
- コマンドラインプログラム, 189 ページ
- ドメイン, 190 ページ
- Informatica Administrator, 190 ページ
- Informatica Analyst, 192 ページ
- Informatica Developer, 194 ページ
- マッピング, 196 ページ
- Metadata Manager, 198 ページ
- PowerCenter, 201 ページ
- PowerExchange アダプタ, 202 ページ
- 参照データ, 204 ページ
- ルール仕様, 205 ページ
- セキュリティ, 205 ページ
- ソースおよびターゲット, 206 ページ
- トランスフォーメーション, 206 ページ
- ワークフロー, 209 ページ

インストール

ここでは、バージョン 10.0 の Informatica インストールへの変更内容について説明します。

サポートの変更

バージョン 10.0 では、以下のサポートを変更しており、それらはアップグレードに影響します。

サポートの変更	サポートレベル	コメント
HP-UX	サポートの終了	アップグレードする前に、サポートされているオペレーティングシステムに移行してください。
Windows 32 ビット	アプリケーションサービスと Developer tool のサポートの終了	アップグレードする前に、サポートされているオペレーティングシステムに移行してください。
zLinux	保留サポート	将来のリリースでサポートを再開します。
Solaris	保留サポート	将来のリリースでサポートを再開します。

製品要件およびサポート対象プラットフォームの詳細については、次の Informatica Network で Product Availability Matrix を参照してください。
https://network.informatica.com/community/informatica-network/product-availability-matrices/overview

アプリケーションサービス

ここでは、バージョン 10.0 のアプリケーションサービスの変更内容について説明します。

アナリストサービス

ここでは、バージョン 10.0 のアナリストサービス機能の変更内容について説明します。

STOP モード

バージョン 10.0 では、アナリストサービスに、アナリストサービスを無効にする COMPLETE モード、ABORT モード、STOP モードがあります。STOP モードを選択すると、すべてのジョブが停止してから、アナリストサービスが無効になります。

以前は、サービスを無効にするために使用できるのは、COMPLETE モードと ABORT モードのみでした。

詳細については、*『Informatica 10.0 アプリケーションサービスガイド』*の「アナリストサービス」を参照してください。

データ統合サービス

このセクションでは、バージョン 10.0 におけるデータ統合サービスの変更点について説明します。

電子メールサーバー

バージョン 10.0 では、データ統合サービス用の電子メールサーバーを設定することができなくなりました。データ統合サービス用の電子メールサーバーのプロパティは削除されています。スコアカード通知では、ドメイン用に設定された電子メールサーバーが使用されます。ワークフロー通知では、電子メールサービス用に設定された電子メールサーバーが使用されます。ワークフロー通知には、ワークフローのヒューマンタスクおよび通知タスクから送られる電子メールが含まれます。

これまで、スコアカード通知とワークフロー通知には、データ統合サービス用に設定された電子メールサーバーが使用されていました。

アップグレード後は、次の通知タイプに基づいて使用する電子メールサーバーが決定されます。

スコアカード通知

スコアカード通知では、ドメイン用に設定された電子メールサーバーが使用されます。以前のバージョンでドメインの SMTP を設定しなかった場合、アップグレード後のドメインは、アップグレード中に最初に検出されたデータ統合サービス用に設定された電子メールサーバーを使用します。以前のバージョンでドメインの SMTP を設定していた場合は、アップグレード後のドメインでも引き続きその電子メールサーバーが使用されます。

以前のバージョンでデータ統合サービスに設定できた次の電子メールサーバープロパティは、ドメインでは使用できません。以下のプロパティはスコアカード通知には設定できなくなりました。

- SMTP サーバーの接続タイムアウト
- SMTP サーバーの通信タイムアウト
- SMTP 認証の有効化
- TLS セキュリティの使用
- SSL セキュリティの使用

バージョン 10.0 でスコアカード通知を送信する前に、ドメインに対して SMTP が正しく設定されているかを確認してください。以前のバージョンでデータ統合サービスに設定していた電子メールサーバーを使用するには、アップグレードする前にデータ統合サービスで使用していた値を記録しておいてください。

ワークフロー通知

ワークフロー通知では、電子メールサービス用に設定された電子メールサーバーが使用されます。

以前のバージョンのデータ統合サービスで設定可能だった次の電子メールサーバープロパティは、電子メールサービスでは設定できません。ワークフロー通知では、次のプロパティが設定できなくなりました。

- SMTP サーバーの接続タイムアウト
- SMTP サーバーの通信タイムアウト

バージョン 10.0 でワークフロー通知を送信する前に、電子メールサービス用の電子メールサーバーを設定し、その後で電子メールサービスを有効にしてください。以前のバージョンでデータ統合サービスに設定していた電子メールサーバーを使用するには、アップグレードする前にデータ統合サービスで使用していた値を記録しておいてください。

ドメインに対する SMTP 設定の詳細については、*『Informatica 10.0 管理者ガイド』*の「ドメイン管理」の章を参照してください。

電子メールサービスの詳細については、*『Informatica 10.0 アプリケーションサービスガイド』*の「システムサービス」の章を参照してください。

実行オプション

バージョン 10.0 では、データ統合サービスの［プロパティ］ビューで、次の実行オプションを設定します。

- 最大実行プールサイズ
- 最大メモリサイズ
- 最大並行処理
- Hadoop Kerberos サービスプリンシパル名
- Hadoop Kerberos キータブ
- 一時ディレクトリ

- ホームディレクトリ
- キャッシュディレクトリ
- ソースディレクトリ
- ターゲットディレクトリ
- 拒否されたファイルディレクトリ
- Hadoop 上の Informatica Home ディレクトリ
- Hadoop ディストリビューションディレクトリ
- データ統合サービスの Hadoop ディストリビューションディレクトリ

データ統合サービスがプライマリおよびバックアップノード、またはグリッド上で実行されるように設定されている場合、一部の実行オプションをオーバーライドし、計算ロールが割り当てられた各ノードに別々の値を定義することができます。DTM は、その計算ノードでジョブを実行するときにオーバーライドされた値を使用します。データ統合サービスの［計算］ビューでは、次のオプションをオーバーライドすることができます。

- ホームディレクトリ
- 一時ディレクトリ
- キャッシュディレクトリ
- ソースディレクトリ
- ターゲットディレクトリ
- 拒否されたファイルディレクトリ

実行オプションはこれまでデータ統合サービスの［プロセス］ビューで設定していました。サービスプロセスが実行される各ノードに、異なる実行オプションを設定することができました。

以前のバージョンで各サービスプロセスに異なる実行オプションを設定していた場合、アップグレード後は次に示す状況に応じてバージョン 10.0 の値が決定します。

計算オーバーライドのないオプション

オプションで最大の整数値が定義されている場合は、すべてのプロセスに定義されている値のうち最も大きい値が、［プロパティ］ビューのデータ統合サービスの値として使用されます。オプションで文字列値が定義されている場合は、アップグレード中に最初に検出されたノードに定義されている値が、［プロパティ］ビューのデータ統合サービスの値として使用されます。

計算オーバーライドがあるオプション

あるノードに対して［プロセス］ビューで定義されている値が、同じノードに対する［計算］ビューの計算オーバーライドとして使用されます。アップグレード中に最初に検出されたノードに定義されている値が、［プロパティ］ビューのデータ統合サービスの値として使用されます。

実行オプションの詳細については、*『Informatica 10.0 アプリケーションサービスガイド』*の「データ統合サービス」の章を参照してください。

最大セッションサイズ

バージョン 10.0 では、データ統合サービスプロセスの［最大セッションサイズ］プロパティの名前が［要求ごとの最大メモリ］に変更されました。以下のデータ統合サービスモジュールに対して［要求ごとの最大メモリ］プロパティを設定します。

- マッピングサービスモジュール。デフォルトは 536,870,912 バイトです。
- プロファイリングサービスモジュール。デフォルトは 536,870,912 バイトです。
- SQL サービスモジュール。デフォルトは 50,000,000 バイトです。
- Web サービスモジュール。デフォルトは 50,000,000 バイトです。

以前は、データ統合サービスのそれぞれのプロセスに対して［最大セッションサイズ］を設定していました。データ統合サービスのすべてのモジュールで同じ値を使用しおり、デフォルトは 50,000,000 バイトでした。

アップグレードされたサービスでは、各モジュールにバージョン 10.0 のデフォルト値が使用されます。以前のバージョンで［最大セッションサイズ］のデフォルト値を変更していた場合は、アップグレード後に［要求ごとの最大メモリ］の値を変更する必要があります。

［要求ごとの最大メモリ］の詳細については、*『Informatica 10.0 アプリケーションサービスガイド』*の「データ統合サービス」の章を参照してください。

個別のプロセスでのジョブの実行

バージョン 10.0 では、［個別のプロセスとしてジョブを開始］プロパティは、［ジョブの開始オプション］プロパティという名前に変更されました。［ジョブの開始オプション］プロパティには次のいずれかの値を設定できます。

サービスプロセスで

データ統合サービスプロセス内でジョブを実行します。 単一ノード、または各ノードにサービスロールと計算ロールの両方があるグリッド上で SQL データサービスおよび Web サービスジョブを実行するタイミングを設定します。データ統合サービスがサービスプロセスでジョブを実行する場合、SQL データサービスジョブと Web サービスジョブは通常、良好なパフォーマンスが得られます。

個別のローカルプロセスで

ローカルノードの個別の DTM プロセス内でジョブを実行します。 単一ノード、または各ノードにサービスロールと計算ロールの両方があるグリッド上でマッピング、プロファイル、およびワークフロージョブを実行するタイミングを設定します。データ統合サービスが個別のローカルプロセスでジョブを実行すると、1 つのジョブが予期せずに中断されても、他のすべてのジョブには影響しないため、安定性が増します。

個別のリモートプロセスで

リモートノードの個別の DTM プロセス内でジョブを実行します。 各ノードに異なるロールの組み合わせが設定されたグリッド上でマッピング、プロファイル、およびワークフロージョブを実行するタイミングを設定します。

データ統合サービスが個別のリモートプロセスでジョブを実行すると、1 つのジョブが予期せずに中断されても、他のすべてのジョブには影響しないため、安定性が増します。また、グリッドの各ノードで使用可能なリソースを効率的に活用できます。データ統合サービスグリッドのノードに計算ロールのみがある場合、そのノードはサービスプロセスを実行する必要がなくなります。そのマシンは、使用可能なすべての処理能力をマッピングの実行に使用します。

以前は、データ統合サービスでジョブを実行するには［個別のプロセスとしてジョブを開始］プロパティを有効にし、ローカルノードの個別の DTM プロセス内でジョブを実行するには、このプロパティを無効にしていました。

個別のプロセスでのジョブの実行に関する詳細については、*『Informatica 10.0 アプリケーションサービスガイド』*の「データ統合サービス管理」の章を参照してください。

ワークフローとヒューマンタスクの設定

バージョン 10.0 では、データ統合サービスの次のオプションが変更されました。

ワークフローサービスモジュールから Workflow Orchestration **サービスモジュールに変更**

バージョン 10.0 では、データ統合サービスでワークフローを実行できるようにするには、Workflow Orchestration サービスモジュールを選択します。

以前は、ワークフローサービスモジュールを選択してワークフローを実行していました。

ヒューマンタスクサービスモジュールの廃止

バージョン 10.0 では、Workflow Orchestration サービスモジュールでワークフローのすべてのタスクを実行します。

以前は、ワークフローサービスモジュールでヒューマンタスク以外のすべてのワークフロータスクを実行し、ヒューマンタスクサービスモジュールでワークフロー内のすべてのヒューマンタスクを実行していました。

ワークフローのメタデータ ストアとして、モデルリポジトリとヒューマンタスクデータベースの代わりにワークフローデータベースを使用

バージョン 10.0 では、ヒューマンタスクインスタンスのメタデータを含むすべてのワークフロー用のランタイムメタデータを 1 つのデータベースに格納します。データ統合サービスでワークフローデータベース接続を選択してください。

以前は、データ統合サービスでヒューマンタスクのメタデータを格納するためのデータベースを選択し、ワークフローの他のすべてのランタイムメタデータはモデルリポジトリに格納していました。

ワークフローとヒューマンタスクの設定に関する詳細については、*『Informatica 10.0 アプリケーションサービスガイド』*の「データ統合サービス管理」、および「アナリストサービス」の章を参照してください。

モデルリポジトリサービス

このセクションでは、バージョン 10.0 におけるモデルリポジトリサービス機能の変更点について説明します。

リポジトリオブジェクトのロックとバージョン

バージョン 10.0 では、別のユーザーによってロックされているオブジェクトを編集しようとすると、そのオブジェクトが別のユーザーによってロックされていることを示す通知が表示されます。その場合、オブジェクトを読み取り専用モードで確認するか、または別の名前で保存することができます。

以前は、複数のユーザーがオブジェクトを開いて編集することが許可されていました。オブジェクトを最後に保存しようとしたユーザーのみが、そのオブジェクトが別のユーザーによって変更されたことを示す通知を受け取っていました。

モデルリポジトリがバージョン管理システムと統合されている場合は、編集する前にオブジェクトをチェックアウトする必要があります。

詳細については、*『Informatica 10.0 Developer tool ガイド』*の「モデルリポジトリ」の章を参照してください。

モデルリポジトリのパス

バージョン 10.0 では、モデルリポジトリのパスを指定する際に、スラッシュ（/）を使用します。たとえば、フォルダの指定には次のパスを使用します。

```
ModelRepository_name/Project_name/Folder_name
```

以前は、パスの区切り文字として別の文字を使用できました。たとえば、一部のインスタンスでは、モデルリポジトリ名の後にはコロンを使用していました。

詳細については、*『Informatica 10.0 Developer tool ガイド』*の「モデルリポジトリ」の章を参照してください。

SAP BW サービス

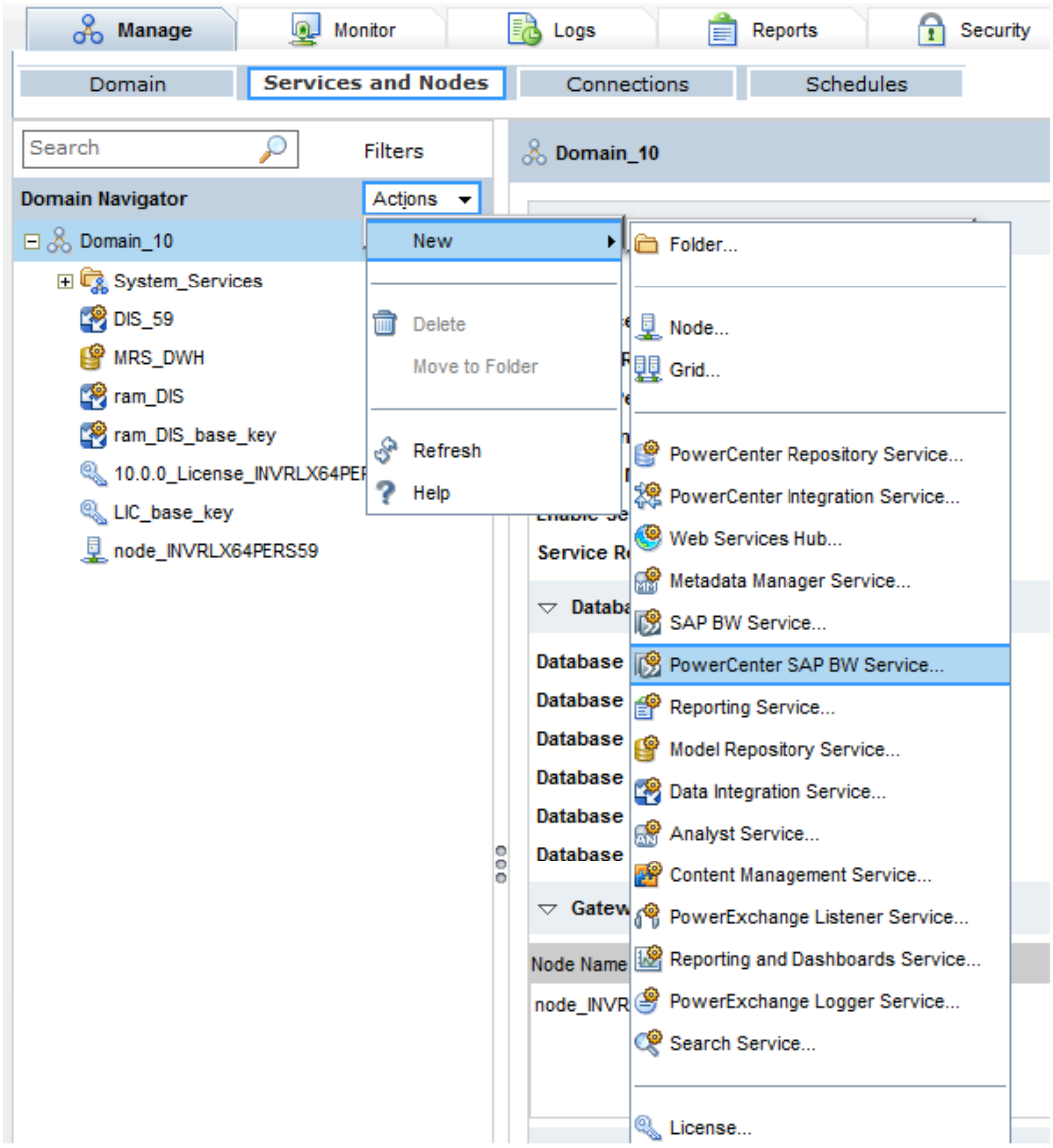
ここでは、バージョン 10.0 における SAP BW サービスの変更内容について説明します。

PowerCenter 用 SAP BW サービス

バージョン 10.0 では、Administrator ツールで PowerCenter 用 SAP BW サービスの作成に使用するユーザーインターフェイスオプションに変更があります。

PowerCenter 用 SAP BW サービスを作成するには、Informatica Administrator にログインします。**ドメインナビゲータ**でドメインを右クリックし、**［アクション］** > **［新規］** > **［PowerCenter SAP BW サービス］**をクリックします。

以下の画像は、Administrator ツールで PowerCenter 用 SAP BW サービスの作成に使用するユーザーインターフェイスのオプションを示しています。



以前のバージョンでは、**［アクション］** > **［新規］** > **［SAP BW サービス］**をクリックして PowerCenter 用 SAP BW サービスを作成していました。

注: バージョン 10.0 では、**［SAP BW サービス］**オプションは Developer tool 用 SAP BW サービスの作成オプションとして確保されています。

詳細については、*『Informatica 10.0 アプリケーションサービスガイド』*の「SAP BW サービス」を参照してください。

Big Data

このセクションでは、Big Data 機能の変更点について説明します。

Hive 環境

バージョン 10.0 では、Developer tool のユーザーインタフェースに、ランタイム環境または検証環境として Hive 環境が表示されなくなりました。Hive 環境は、Hadoop テクノロジーを使用して MapReduce や Tez などのバッチデータを処理する Hive エンジンに変更されました。

詳細については、*『Informatica 10.0 Big Data Edition ユーザーガイド』*を参照してください。

JCE ポリシーファイルのインストール

バージョン 10.0 では、Informatica Big Data Management に JCE ポリシーファイルが付属しています。このファイルは、インストーラを実行するとインストールされます。

以前は、AES 暗号化に対応するには、JCE ポリシーファイルをダウンロードして、手動でインストールする必要がありました。

Kerberos 認証

バージョン 10.0 では、Hadoop クラスタが MIT キー配布センター（KDC）のみを使用した Kerberos 認証ができなくなりました。Microsoft Active Directory KDC、または一方向のクロス realm 認証で Active Directory に接続された MIT KDC を使用できます。

Business Glossary

ここでは、バージョン 10.0 の Business Glossary への変更内容について説明します。

リレーションビュー

バージョン 10.0 では、リレーションビューに次の変更点があります。

アセットの出現の強調表示

アセットをクリックすると、アセットの出現が強調表示されます。以前は、アセットの出現を強調表示するには、アセットを右クリックする必要がありました。

アセットの詳細の表示

アセット名の上にカーソルを置くと、アセットの詳細が表示されます。以前は、アセットの詳細を表示するには、Analyst ツールでアセット名をクリックする必要がありました。

詳細については、*『Informatica 10.0 Business Glossary ガイド』*の「用語集コンテンツの検索」を参照してください。

アセットのフェーズ

バージョン 10.0 では、アセットのフェーズに次の変更が加えられました。

公開保留フェーズ

アセットをエクスポートするときに関連のビジネスイニシアティブがない場合、Analyst ツールはエクスポートファイルでアセットのフェーズを**公開保留**から**公開済み**に変更します。

確認中フェーズ

確認中フェーズのアセットは変更できません。

詳細については、*『Informatica 10.0 Business Glossary ガイド』*を参照してください。

[ライブラリ] ワークスペース

バージョン 10.0 では、**[ライブラリ]** ワークスペース次の変更が加えられました。

アセットのソート

アセットをアセットのタイプ別に表示するとき、**[ライブラリ]** ワークスペースで用語集アセットをステータスおよびフェーズでソートできます。以前のバージョンでは、アセットのステータスおよびフェーズでソートできませんでした。

検索オプション

アセットを用語集でルックアップするときの、フィルタパネルに検索文字列を入力するオプションは使用できなくなりました。以前のバージョンでは、アセットを用語集でルックアップする場合にアセットの検索が可能でした。

デフォルトのアセットリスト

アセットタイプまたは用語集別にアセットを参照するとき、デフォルトで Analyst ツールによってフィルタが適用され、非アクティブまたは拒否済みアセットが非表示になります。以前のバージョンでは、デフォルトで Analyst ツールの非アクティブまたは拒否済みアセットへのフィルタ適用はありませんでした。

詳細については、*『Informatica 10.0 Business Glossary ガイド』*を参照してください。

インポートおよびエクスポート

バージョン 10.0 では、用語集アセットとは無関係に、用語集テンプレートをインポートおよびエクスポートできます。以前は、Analyst ツールには、用語集テンプレートをインポートまたはエクスポートする固有のメニューオプションはありませんでした。

用語集をエクスポートするときは、添付ファイルおよび監査履歴を含めることもできます。用語集アセットとともに監査履歴または添付ファイルをエクスポートするときは、.zip ファイルが生成されます。

詳細については、*『Informatica 10.0 Business Glossary ガイド』*の「用語集の管理」を参照してください。

コマンドラインプログラム

ここでは、バージョン 10.0 のコマンドの変更内容について説明します。

infacmd isp の廃止コマンド

以下の表は、バージョン 10.0 で廃止となったコマンドの一覧です。

コマンド	説明
purgeMonitoringData	モデルリポジトリから監視データをパージします。

ドメイン

ここでは、バージョン 10.0 のドメインへの変更内容について説明します。

ログ

バージョン 10.0 では、システムログのデフォルトの場所が<Informatica インストールディレクトリ>/logs/<ノード名>/に変更されました。

ドメインは、アプリケーションサービスログとシステムログをこのデフォルトの場所に格納します。ログのデフォルトのディレクトリパスは、システムログディレクトリオプションを使用して変更できます。このオプションは、以下に示すコマンドのいずれにも使用できます。

- infasetup DefineDomain
- infasetup DefineGatewayNode
- infasetup DefineWorkerNode
- infasetup UpdateGatewayNode
- infasetup UpdateWorkerNode

以前は、ドメインはアプリケーションサービスログとシステムログを異なる場所に格納していました。システムログのデフォルトのディレクトリは<Informatica インストールディレクトリ>/tomcat/logs/でした。

詳細については、*『Informatica 10.0 管理者ガイド』*の「ログ管理」を参照してください。

ログ形式

バージョン 10.0 では、デフォルトですべてのログに以下の情報が常に含まれます。

- スレッド名。
- タイムスタンプ（ミリ秒単位）。

以前は、この情報はログ内で一貫していませんでした。例えば、タイムスタンプ情報が含まれていないログと含まれているログがあったり、タイムスタンプ形式に一貫性がなかったりということがありました。

詳細については、*『Informatica 10.0 管理者ガイド』*の「ログ管理」を参照してください。

ジョブのログイベント

ワークフロー内のマッピングタスクが DTM インスタンスを開始してマッピングを実行すると、DTM によってマッピングのログイベントが生成されます。DTM は、このログファイルをデータ統合サービスプロセスに対して指定されたログディレクトリの mappingtask という名前のフォルダに格納します。

以前は、DTM はログファイルを builtinhandlers というフォルダに格納していました。

Informatica Administrator

ここでは、バージョン 10.0 の Administrator ツールへの変更内容について説明します。

［ドメイン］タブ

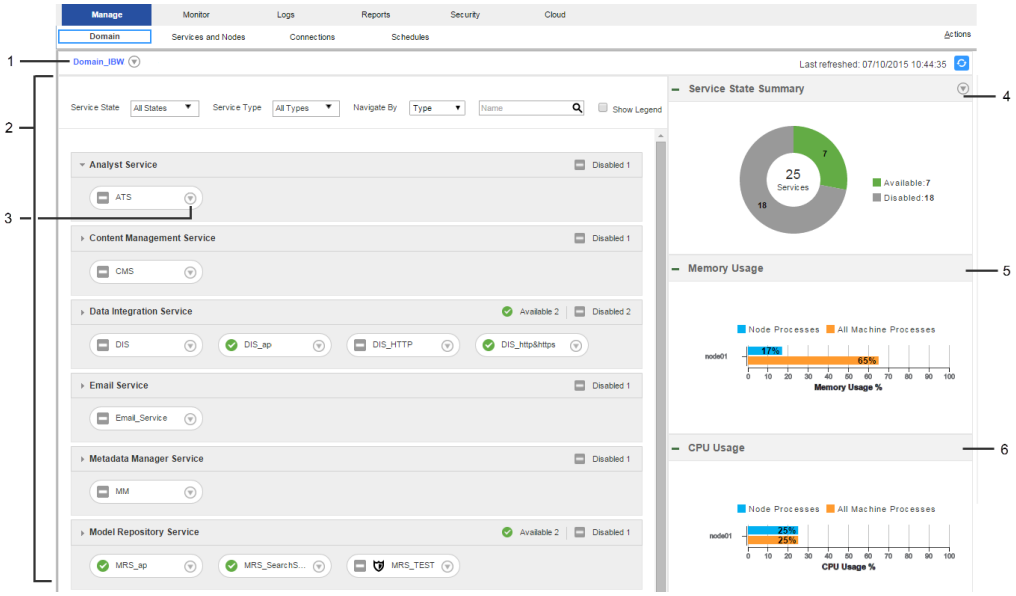
バージョン 10.0 では、**［ドメイン］**タブが**［管理］**タブに名称変更されました。

［管理］タブに次の変更が加えられました。

[管理] タブのビュー

[管理] タブには **[ドメイン]** ビューと **[スケジュール]** ビューが含まれます。**[ドメイン]** ビューを使用して、ドメインのステータスおよびリソース使用状況の表示と管理を行います。[スケジュール] ビューを使用して、デプロイ済みのマッピングおよびワークフロー用の再利用可能なスケジュールを作成して管理します。

次の図は **[管理]** タブ上の **[ドメイン]** ビューを示しています。



1. [ドメインアクション] メニュー
2. [コンテンツ] パネル
3. [オブジェクトアクション] メニュー
4. サービスの状態の概要
5. メモリ使用状況インジケータ
6. CPU 使用量インジケータ

依存関係グラフ

依存関係グラフが **[サービスとノード]** ビューから **[ドメイン]** ビューに移動しました。依存関係グラフにアクセスするには、ドメイン、サービス、またはノードの **[アクション]** メニューをクリックして、**[依存関係の表示]** を選択します。

グローバル設定

グローバル設定が **[モニタ]** タブ（以前の **[モニタリング]** タブ）から **[サービスとノード]** ビューに移動しました。グローバル設定が **[監視設定]** に名前変更され、**[サービスとノード]** ビュー内の 1 つのビューになりました。

[概要] ビュー

[サービスとノード] ビューで、ドメインおよびフォルダの **[概要]** ビューが削除されました。これらは、**[管理]** タブの **[ドメイン]** ビューで置き換えられます。

詳細については、*『Informatica 10.0 管理者ガイド』* を参照してください。

監視

バージョン 10.0 では、Administrator ツールでの監視に次の変更が加えられました。

グローバル設定

グローバル設定には次の変更があります。

- グローバル設定は、**［モニタ］**タブの［アクション］メニューから**［管理］**タブに移動しました。グローバル設定は、**［サービスとノード］**ビューの**［監視設定］**ビューで設定します。
- **［履歴データの保持日数］**オプションの名前は**［サマリ履歴データの保持］**に変更されました。最小値は 0 です。最大値は 366 です。デフォルトは 180 です。
- **［日時フィールド］**オプションの名前は**［日時フィールドにミリ秒を表示］**に変更されました。

Jobs

ユーザーが Developer tool および Analyst ツールからデプロイするジョブはアドホックジョブと呼ばれています。アドホックジョブには、プレビュー、マッピング、参照テーブル、エンタープライズ検出プロファイル、プロファイル、およびスコアカードが含まれます。以前のバージョンでは、アドホックジョブはジョブと呼ばれていました。

ナビゲーション

［監視］タブの名前が**［モニタ］**タブに変更されました。オブジェクトの監視は**［実行統計］**ビューに移動しました。

設定

［モニタ］タブの［アクション］メニューにある**［設定］**の名前が、**［レポート設定と統計設定］**に変更されました。

詳細については、*『Informatica 10.0 管理者ガイド』*の「監視」を参照してください。

Informatica Analyst

ここでは、バージョン 10.0 の Analyst ツールへの変更内容について説明します。

プロファイル

バージョン 10.0 では、Analyst ツールのプロファイルに次の変更点があります。

カラムプロファイル

バージョン 10.0 では、プロファイルウィザードの**［全般プロパティの指定］**、**［ソースの選択］**、**［設定の指定］**、**［ルールとフィルタの指定］**の手順で、カラムプロファイルを作成できます。

以前は、プロファイルウィザードの**［ステップ 1/6］**から**［ステップ 6/6］**の手順で、カラムプロファイルを作成していました。

カラムプロファイルの詳細については、*『Informatica 10.0 データ検出ガイド』*の「Informatica Analyst のカラムプロファイル」の章を参照してください。

カラムプロファイル結果

バージョン 10.0 では、サマリビューでプロファイルのカラムとルールをすべて確認し、詳細ビューでカラムまたはルールの詳細なプロパティを確認できます。

以前は、プロファイル結果は、**［カラムプロファイリング］**ビュー、**［プロパティ］**ビュー、および**［データプレビュー］**ビューに表示されました。

カラムプロファイル結果の詳細については、*『Informatica 10.0 データ検出ガイド』*の「Informatica Analyst のカラムプロファイル結果」の章を参照してください。

カラムプロファイルの編集

バージョン 10.0 では、プロファイルウィザードでカラムプロファイルを編集できます。

以前は、**［アクション］** > **［編集］**をクリックし、オプションの 1 つを選択して編集できました。

カラムプロファイルの詳細については、*『Informatica 10.0 データ検出ガイド』*の「Informatica Analyst のカラムプロファイル」の章を参照してください。

検出ワークスペース

バージョン 10.0 では、**［検出ワークスペース］** > **［プロファイル］**をクリックして、プロファイルウィザードで単一のソースプロファイルまたはエンタープライズ検出プロファイルを作成できます。

以前は、単一のプロファイルを作成する場合は、**［検出ワークスペース］** > **［データオブジェクトプロファイル］**をクリックし、エンタープライズ検出プロファイルを作成する場合は、**［検出ワークスペース］** > **［エンタープライズ検出プロファイル］**をクリックする必要がありました。

カラムプロファイルの詳細については、*『Informatica 10.0 データ検出ガイド』*の「Informatica Analyst のカラムプロファイル」の章を参照してください。

［新規］オプション

バージョン 10.0 では、ヘッダ領域で **［新規］** > **［プロファイル］**をクリックして、プロファイルウィザードで単一のソースプロファイルまたはエンタープライズ検出プロファイルを作成できます。

以前は、単一のプロファイルを作成する場合は、**［新規］** > **［データオブジェクトプロファイル］**をクリックし、エンタープライズ検出プロファイルを作成する場合は、**［新規］** > **［エンタープライズ検出プロファイル］**をクリックする必要がありました。

カラムプロファイルの詳細については、*『Informatica 10.0 データ検出ガイド』*の「Informatica Analyst のカラムプロファイル」の章を参照してください。

ルールの作成

バージョン 10.0 では、プロファイルウィザードでプロファイルのルールを作成、追加、または削除できます。

以前は、プロファイルのルールを追加、削除、または作成するときは、**［アクション］** > **［編集］** > **［カラムプロファイリングルール］**をクリックする必要がありました。

ルールの詳細については、*『Informatica 10.0 データ検出ガイド』*の「Informatica Analyst のルール」の章を参照してください。

［ライブラリ］ワークスペースでのデータオブジェクトに基づくカラムプロファイルの作成

バージョン 10.0 では、**［ライブラリ］**ワークスペースのデータオブジェクトを右クリックして、カラムプロファイルを作成できます。

以前は、このオプションを利用できませんでした。

カラムプロファイルの詳細については、*『Informatica 10.0 データ検出ガイド』*の「Informatica Analyst のカラムプロファイル」の章を参照してください。

フィルタ

バージョン 10.0 では、プロファイル用に作成したすべてのフィルタをプロファイル内のカラムとデータドメインすべてに適用でき、プロファイルで作成したスコアカードで再利用できます。

以前は、プロファイル用のフィルタを作成できました。

フィルタの詳細については、*『Informatica 10.0 データ検出ガイド』*の「Informatica Analyst のフィルタ」の章を参照してください。

サンプリングのオプション

バージョン 10.0 では、サンプリングオプションをカラムプロファイルとデータドメイン検出の両方に適用できます。
以前は、カラムプロファイルとデータドメイン検出に対して別々のサンプリングオプションを選択できました。

フィルタの詳細については、*『Informatica 10.0 データ検出ガイド』*の「Informatica Analyst のフィルタ」の章を参照してください。

スコアカード

ここでは、Analyst ツールのスコアカードの変更内容について説明します。

通知

バージョン 10.0 では、ドメインの SMTP 設定プロパティの電子メールサーバーの設定を使って、スコアカードから通知が送信されます。

以前のバージョンでは、データ統合サービスプロパティの電子メールサーバー設定が使用されていました。

スコアカードの URL

バージョン 10.0 では、スコアカードの URL を外部アプリケーションまたは Web ポータルのソースコードに追加し、URL にアクセスする場合、セキュリティ上の理由から、スコアカードを表示するには Informatica Analyst にログインする必要があります。

以前は、外部アプリケーションでスコアカードの URL を使用する際にログインアクセスを求められませんでした。

Informatica Developer

ここでは、バージョン 10.0 の Developer tool への変更内容について説明します。

アプリケーションデプロイメントの変更内容

ここでは、バージョン 10.0 のアプリケーションデプロイメントの変更内容について説明します。

[状態情報を保持する] チェックボックス

Informatica 10.0 では、アプリケーションを再デプロイするときに、[状態情報を保持する] チェックボックスにより、デプロイされたアプリケーションに属するランタイムオブジェクトの現在の状態を保持するかどうかを選択できます。状態は、マッピングプロパティと、シーケンスジェネレータトランスフォーメーションなどのランタイムオブジェクトのプロパティを参照します。

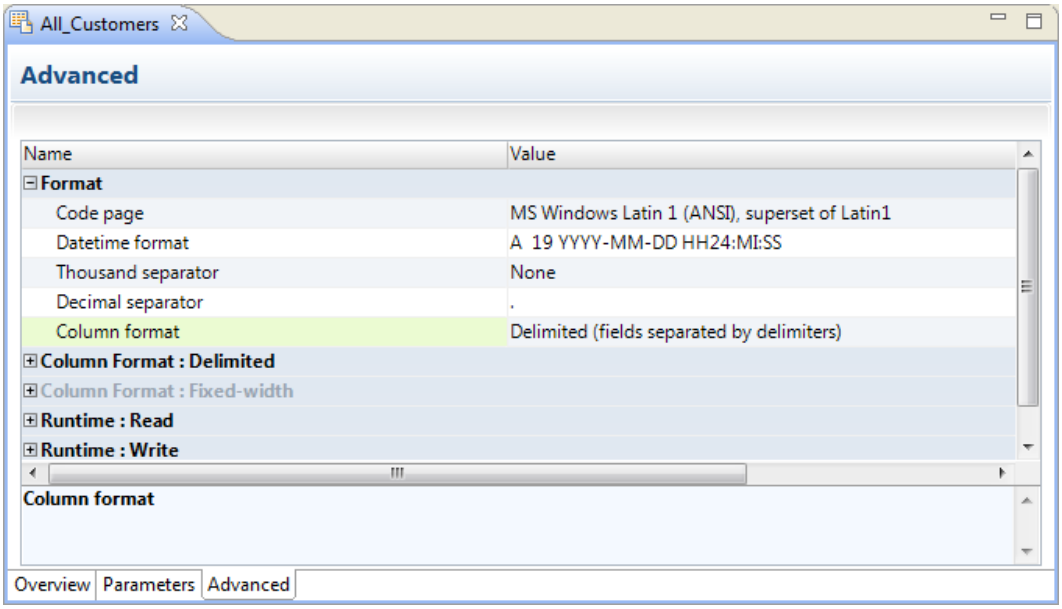
以前は、[デプロイ] ダイアログボックスで、[更新] または [置換] を選択しました。[更新] チェックボックスに代わって [状態情報を保持する] チェックボックスとなり、このチェックボックスがデフォルトで選択されています。

[状態情報を保持する] が選択されると、デプロイしたアプリケーションでランタイム設定とプロパティが保持されます。[状態情報を保持する] が選択解除されると、デプロイしたアプリケーションでこれらの設定およびプロパティの状態が破棄されます。

フラットファイルデータオブジェクト

バージョン 10.0 では、**[詳細]** ビューで、フラットファイルデータオブジェクトの形式およびランタイムのプロパティをすべて設定します。**[詳細]** ビューには、折りたたみと展開が可能なプロパティセクションがあります。表示されるカラム形式セクションは、設定するのが区切りカラム形式か固定幅カラム形式かによって変わります。

次の図は、**[詳細]** ビューのプロパティセクションを示しています。



以前は、**[読み取り]** ビューおよび **[書き込み]** ビューで、フラットファイルデータオブジェクトの形式およびランタイムのプロパティを設定していました。**[読み取り]** ビューでは、ソーストランスフォーメーションを選択して、形式のプロパティを設定していました。ランタイムのプロパティを設定する場合は、出力トランスフォーメーションを選択しました。**[書き込み]** ビューでは、入力トランスフォーメーションを選択して、ランタイムのプロパティを設定していました。形式のプロパティを設定する場合は、ターゲットトランスフォーメーションを選択しました。

Microsoft SQL Server の変更内容

Informatica バージョン 10.0 では、Microsoft SQL Server に次の変更が加えられました。

- ODBC 接続タイプを使用して Microsoft SQL Server に接続できます。
- pmrep および infacmd コマンドを使用して、既存の接続をアップグレードできます。アップグレードコマンドを実行するとき、すべての既存の接続がアップグレードの対象になります。
- 既存の Microsoft SQL Server 接続は廃止され、次のメジャーリリースでサポートを停止する予定です。既存のマッピングは手動で更新せずに実行できます。SSL 接続を使用している場合は、接続でプロバイダタイプを ODBC として選択し、SSL を DSN で設定する必要があります。

論理データオブジェクトの編集

ここでは、バージョン 10.0 の Developer tool で論理データオブジェクトを編集する方法の変更内容について説明します。

論理データオブジェクトおよび論理データオブジェクトモデルエディタ

Informatica 10.0 では、論理データオブジェクトと論理データオブジェクトモデルは異なるエディタで編集します。

以前のバージョンでは、論理データオブジェクトと論理データオブジェクトモデルを同じエディタで編集していました。

詳細については、*『Informatica 10.0 Developer tool ガイド』*の「データの論理ビュー」を参照してください。

論理データオブジェクトマッピング

Informatica 10.0 では、論理データオブジェクトマッピングは論理データオブジェクトエディタから作成します。**[追加]** ボタンをクリックして、論理データオブジェクトの読み取りマッピングまたは書き込みマッピングを追加します。

以前のバージョンでは、**[ファイル]** > **[新規]** をクリックして論理データオブジェクトマッピングを作成していました。

詳細については、*『Informatica 10.0 Developer tool ガイド』*の「データの論理ビュー」を参照してください。

ODBC のソースとターゲットに対するプッシュダウンの最適化

バージョン 10.0 では、「その他」のプロバイダタイプを使用する ODBC のソースとターゲットに対するプッシュダウン最適化のサポートを終了しました。データベース固有のプロバイダタイプを使用する必要があります。

マッピング

ここでは、バージョン 10.0 のマッピングへの変更内容について説明します。

パラメータファイル

バージョン 10.0 では、パラメータファイルの形式が変更されました。パラメータファイルにトランスフォーメーションパラメータが含まれなくなりました。

以前のバージョンのパラメータファイルを使用して、マッピングとワークフローを実行できます。以前のバージョンのパラメータファイルを使用してマッピングまたはワークフローを実行した場合、データ統合サービスは、パラメータファイルを Informatica 10.0 バージョンに変換します。

infacmd listMappingParams コマンドでパラメータファイルを作成すると、データ統合サービスでは、トランスフォーメーションパラメータを含まないマッピングパラメータファイルが作成されます。infacmd listWorkflowParams コマンドでは、トランスフォーメーションパラメータを含まないワークフローパラメータファイルが作成されます。

以前のバージョンでは、パラメータファイルを作成すると、そのパラメータファイルにトランスフォーメーションパラメータが含まれていました。

パラメータファイルの詳細については、『Informatica Developer マッピングガイド』の章「*マッピングパラメータ*」を参照してください。

パーティション化されたマッピング

ここでは、バージョン 10.0 のパーティション化されたマッピングの変更点について説明します。

並行処理値の計算

バージョン 10.0 では、データ統合サービスは、マッピングパイプラインステージごとに異なる数のスレッドを作成できます。このサービスは、各パイプラインステージの最適なスレッド数を判断します。1 つのパイプラインステージに作成されるスレッドの数は、最大並行処理値を超えることはできません。

以前、データ統合サービスは、実際の 1 つの並行処理値を計算し、各マッピングパイプラインステージについて同じ値を使用していました。このサービスでは、最大並行処理値、およびマッピングで準備済みのすべてのフラットファイル、IBM DB2 for LUW、または Oracle の各ソースの最大パーティション数に基づいて実際の並行処理値が計算されていました。

パーティション化されたディシジョンおよび SQL トランスフォーメーション

バージョン 10.0 の場合、ディシジョンまたは SQL トランスフォーメーションのパーティション化を無効にするには、このトランスフォーメーションの**［パーティション化可能］**詳細プロパティをクリアします。データ統合サービスは、1 つのスレッドを使用してトランスフォーメーションを処理します。また、複数のスレッドを使用すると、残りのマッピングパイプラインステージを処理できます。これらのトランスフォーメーションは、複数のスレッドで処理された場合、マッピングを実行するたびに異なる結果を返す場合があります。このため、これらのトランスフォーメーションのパーティション化を無効にする場合があります。

以前は、ディシジョントランスフォーメーションでは、パーティション化がサポートされていませんでした。マッピングにディシジョントランスフォーメーションが含まれる場合、データ統合サービスでは、マッピング全体のパーティションは作成されませんでした。SQL トランスフォーメーションでは、パーティション化がサポートされていました。このトランスフォーメーションを 1 つのスレッドで処理する必要があるときは、マッピング全体のパーティション化を無効にしました。

パーティション化されたターゲット

バージョン 10.0 では、ソート済みリレーショナルソースまたはソータートランスフォーメーションを使用してマッピングで順序を設定した場合、データ統合サービスは、複数のスレッドを使用してマッピングを実行できます。パーティション化されたマッピングの順序を保持するには、書き込みトランスフォーメーションの詳細プロパティで、ターゲットが行順序を保持することを指定する必要があります。行順序を保持するように書き込みトランスフォーメーションを設定すると、データ統合サービスは、1 つのスレッドを使用してターゲットに書き込みます。

以前は、マッピングにソート済みリレーショナルソースが含まれる場合、データ統合サービスは、1 つのスレッドを使用して、各マッピングパイプラインステージを処理しました。マッピングにソータトランスフォーメーションが含まれる場合、データ統合サービスは、1 つのスレッドを使用して、ソータートランスフォーメーションとすべてのダウンストリームマッピングパイプラインステージを処理しました。

以前のバージョンからアップグレードする場合、既存のすべての書き込みトランスフォーメーションは、行順序を保持するように設定されます。データ統合サービスは、1 つのスレッドを使用してターゲットに書き込み、マッピングで設定されたすべての順序が確実に保持されるようにします。アップグレードされたマッピングで順序が設定されない場合、書き込みトランスフォーメーションの詳細プロパティで**［行順序を保持］**プロパティをクリアすれば、データ統合サービスは、複数のスレッドを使用して、ターゲットに書き込むことができます。

パーティション化された Java トランスフォーメーション

バージョン 10.0 の場合、Java トランスフォーメーションのパーティション化を無効にするには、このトランスフォーメーションの**［パーティション化可能］**詳細プロパティをクリアします。データ統合サービスは、1 つのスレッドを使用してトランスフォーメーションを処理します。また、複数のスレッドを使用すると、残りのマッピングパイプラインステージを処理できます。Java コードで Java トランスフォーメーションを 1 つのスレッドで処理する必要がある場合、Java トランスフォーメーションのパーティション化を無効にできます。

入力データの行順序を保持するように Java トランスフォーメーションを設定するには、このトランスフォーメーションの［**ステートレス**］詳細プロパティを選択します。

以前は、Java トランスフォーメーションを 1 つのスレッドで処理する必要があった場合、［ステートレス］プロパティを選択解除しました。ステートレスプロパティが選択解除された場合、データ統合サービスは、マッピング全体のパーティションを作成しませんでした。

パーティション化をサポートしないトランスフォーメーション

バージョン 10.0 では、パーティション化をサポートしないトランスフォーメーションがマッピングに含まれていた場合、データ統合サービスは、1 つのスレッドを使用して、トランスフォーメーションを処理します。このサービスは、複数のスレッドを使用して、残りのマッピングパイプラインステージを処理します。

以前は、パーティション化をサポートしないトランスフォーメーションがマッピングに含まれる場合、データ統合サービスは、マッピング用のパーティションを作成しませんでした。このサービスは、1 つのスレッドを使用して、各マッピングパイプラインステージを処理しました。

パーティション化されたマッピングの詳細については、『*Informatica 10.0 開発者マッピングガイド*』の章「パーティション化されたマッピング」を参照してください。

プッシュダウンの最適化

バージョン 10.0 では、マッピングの最適化レベルからプッシュダウンの最適化が削除されています。プッシュダウンの最適化に対応するようにマッピングを設定するには、マッピングランタイムプロパティでプッシュダウンタイプを選択する必要があります。

以前は、データ統合サービスが、デフォルトで、ノーマル最適化レベルまたは完全最適化レベルを使用して、プッシュダウンの最適化を適用しました。

詳細については、『*Informatica 10.0 Developer トランスフォーメーションガイド*』を参照してください。

ランタイムプロパティ

バージョン 10.0 では、［**ランタイム**］タブで**検証環境**を設定します。マッピングの［**プロパティ**］ビューから［**詳細**］プロパティタブが削除されました。

以前のバージョンでは、［**詳細**］プロパティタブで**検証環境**を設定していました。

詳細については、『*Informatica 10.0 Developer マッピングガイド*』を参照してください。

Metadata Manager

ここでは、バージョン 10.0 の Metadata Manager への変更内容について説明します。

Informix リソースの ODBC 接続

バージョン 10.0 では、ユーザーが Informix リソースをロードするときは、PowerCenter 統合サービスが ODBC を使用して Informix データベースに接続します。したがって、Informix リソースの作成およびロードは、Informatica ドメインの実行環境が Windows と UNIX のどちらであっても行えます。Informix に接続するには、Informix データベースに対する ODBC 接続を設定する必要があります。

以前、PowerCenter 統合サービスは、ネイティブ接続を使用して Informix データベースに接続していました。Informix リソースの作成およびロードは、Informatica ドメインの実行環境が 32 ビット Windows の場合にのみ行うことができました。

Informix リソースの設定の詳細については、『*Informatica 10.0 Metadata Manager 管理者ガイド*』の章「データベース管理リソース」を参照してください。

Microsoft SQL Server リソースの ODBC 接続

バージョン 10.0 では、Microsoft SQL Server リソースをロードするとき、PowerCenter 統合サービスは ODBC を使用してデータベースに接続します。PowerCenter 統合サービスが接続文字列からサーバー名とデータベース名を取り出し、インストール済みの ODBC ドライバを使用してデータソースを作成します。

したがって、Microsoft SQL Server リソースの設定時、次のタスクを実行する必要はなくなりました。

- Windows に Microsoft SQL Server Native Client をインストールする必要はありません。
- UNIX の odbc.ini ファイルで、Microsoft SQL Server データベースのデータソースを作成する必要はありません。

  注: 以前に odbc.ini ファイルでデータソースを作成している場合は、データソース名を接続文字列として入力すれば、そのデータソースを引き続き使用できます。
- Administrator ツールで、Metadata Manager サービスの［**ODBC 接続モード**］プロパティを設定する必要はありません。Microsoft SQL Server の接続モードは常に ODBC であるため、このプロパティは削除されました。

以前、PowerCenter 統合サービスは、Windows の場合はネイティブ接続、UNIX の場合は ODBC 接続を使用していました。

Microsoft SQL Server リソースの設定の詳細については、『*Informatica 10.0 Metadata Manager 管理者ガイド*』の章「データベース管理リソース」を参照してください。

PowerCenter オブジェクトの影響のサマリ

バージョン 10.0 では、PowerCenter オブジェクトのメタデータ詳細を表示すると、影響のサマリにさまざまな情報が表示されます。

影響のサマリでは、次の動作が変更されています。

- セッションタスクインスタンスのメタデータ詳細を表示すると、Metadata Manager は、セッションタスクインスタンスが実行するマッピングを、関連するカタログオブジェクトとして表示しますが、影響のサマリには表示しません。

  以前は、マッピングを関連するカタログオブジェクトとして、アップストリームおよびダウンストリームの影響のサマリに表示しました。
- ソース定義を含むマップレットインスタンスのメタデータ詳細を表示すると、Metadata Manager は影響のサマリに親マッピングを表示しません。

  以前は、ダウンストリームの影響のサマリに親マッピングを表示しました。
- ソースを含まないマップレットインスタンスのメタデータ詳細を表示すると、Metadata Manager は影響のサマリを表示しません。

  以前は、ソースを含まないマップレットインスタンスの影響のサマリを表示しました。
- マップレットの入力または出力トランスフォーメーションインスタンスのメタデータ詳細を表示すると、Metadata Manager は影響のサマリを表示しません。

  以前は、マップレットの入力および出力トランスフォーメーションインスタンスの影響のサマリを表示しました。
- ソース定義を含むマップレットのソース修飾子インスタンスのメタデータ詳細を表示すると、Metadata Manager は影響のサマリに親マッピングを表示しません。

  以前は、影響のサマリに親マッピングを表示しました。

影響のサマリの詳細については、『*Informatica 10.0 Metadata Manager ユーザーガイド*』の「メタデータの表示」を参照してください。

最大同時リソースロード

バージョン 10.0 では、Metadata Manager サービスに対する **[最大同時リソースロード]** プロパティの最大値は 10 です。つまり、最大 10 のリソースを同時にロードできます。

以前のバージョンでは、このプロパティの最大値は 5 でした。

[最大同時リソースロード] プロパティの詳細については、『*Informatica 10.0 アプリケーションサービスガイド*』の「Metadata Manager サービス」を参照してください。

検索

バージョン 10.0 では、Metadata Manager の［参照］タブで一番下に表示される［検索結果］パネルに、詳細検索の条件および検索結果が表示されます。［検索結果］パネルでは、メタデータカタログ、ビジネス用語集、ショートカット、またはデータリネージュの図などを検索実行中に参照できます。［検索結果］パネルは、サイズ変更、最小化、およびリストアできます。

以前のバージョンでは、詳細検索の条件と検索結果は個別のタブに表示されていました。

検索についての詳細は、『*Informatica 10.0 Metadata Manager ユーザーガイド*』の「メタデータの検索」を参照してください。

Metadata Manager ログファイルの変更内容

バージョン 10.0 では、Metadata Manager ログファイルの場所について変更があり、1 つのディレクトリにすべてのログファイルが保存されるようになりました。

以下の Metadata Manager ログファイルは、<Informatica インストールディレクトリ>\logs\<ノード名>\services\MetadataManagerService\<Metadata Manager サービス名>ディレクトリに格納されます。

- Load details log
- mm_agent.log
- mm.log
- resourcemigration.log
- mmrepocmd.log

  注: mmrepocmd.log は、Metadata Manager サービスが mmRepoCmd を呼び出すときに新しいログファイルディレクトリに格納されます。コマンドラインから mmRepoCmd を実行すると、ユーティリティによりログファイルが mmRepoCmd と同じディレクトリに作成されます。

Metadata Manager の以前のバージョンでは、これらのログファイルは別々のディレクトリに配置されていました。Metadata Manager をバージョン 10.0 にアップグレードした後は、既存のログファイルは新しい場所に移動されません。

Metadata Manager ログファイルの詳細については、『*Informatica 10.0 Metadata Manager 管理者ガイド*』を参照してください。

Business Glossary モデル

バージョン 10.0 では、Business Glossary モデルをエクスポートまたはインポートできません。また、属性やリレーションの設定によって Business Glossary モデルをカスタマイズすることもできません。

ビジネス用語集アセットやテンプレートをエクスポートまたはインポートする、あるいはビジネス用語集をカスタマイズするには Analyst ツールを使用します。

プロファイリング

バージョン 10.0 では、Metadata Manager はリレーショナルメタデータソースからプロファイリング情報を抽出しません。

プロファイリングは、Analyst ツールおよび Developer tool で利用できます。

PowerCenter

ここでは、バージョン 10.0 の PowerCenter の変更内容について説明します。

Informix ネイティブ接続

バージョン 10.0 では、Informix ネイティブ接続は廃止されています。Informatica では、Informix ネイティブ接続のサポートは終了しました。

Informix データベースに接続するには ODBC 接続を作成します。

詳細については、*『Informatica 10.0 アプリケーションサービスガイド』*を参照してください。

pmrep の変更

ここでは、pmrep コマンドの変更点について説明します。

PurgeVersion コマンド

- バージョン 10.0 では、`pmrep purgeVersion -c` を使用するときに、-p オプションを指定することも、指定しないことも可能。

  -c オプションとともに-p オプションを指定した場合、出力には、パージされるオブジェクトバージョンと、デプロイメントグループに含まれるオブジェクトバージョンが一覧表示されます。

  -c オプションを指定して-p オプションを指定しない場合、コマンドは、デプロイメントグループに含まれるバージョンをパージしません。

  以前は、-c オプションを指定するときは、-p オプションも指定する必要がありました。

- バージョン 10.0 では、オブジェクトバージョンがデプロイメントグループのメンバである場合、バージョンはパージされない。

  `pmrep purgeVersion` を使用するときに-k オプションを指定した場合、結果には、パージされないすべてのバージョンと、バージョンがパージされない理由が表示されます。

  バージョンがデプロイメントグループに含まれるためパージされない場合、理由には、オブジェクトがパージされない原因である最初のデプロイメントグループのみが一覧表示されます。

  以前は、デプロイメントグループにバージョンが含まれていても、バージョンがパージされるかどうかには影響がありませんでした。

詳細については、『*Informatica 10.0 コマンドリファレンス*』を参照してください。

PowerCenter データプロファイリング

バージョン 10.0 では、PowerCenter データプロファイリングはサポートされなくなりました。

プロファイリングおよび検出を実行するには、Informatica Analyst または Informatica Developer を使用します。

詳細については、『*Informatica 10.0 データ検出ガイド*』を参照してください。

PowerExchange アダプタ

ここでは、バージョン 10.0 の PowerExchange アダプタの変更内容について説明します。

PowerExchange Adapters for Informatica

ここでは、バージョン 10.0 の Informatica アダプタの変更内容について説明します。

PowerExchange for SAP NetWeaver

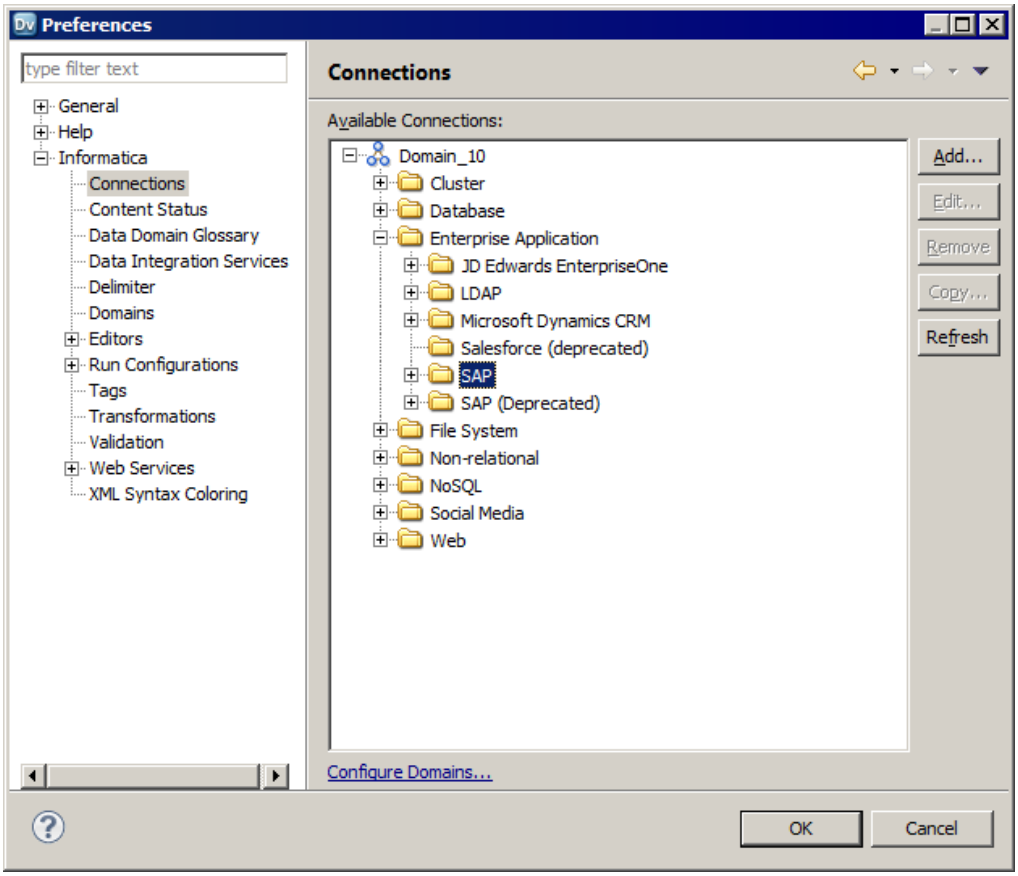
バージョン 10.0 では、PowerExchange for SAP NetWeaver に次の変更点があります。

SAP **接続**

10.0 より前のバージョンで作成された SAP 接続は廃止されます。廃止された接続カテゴリは、**[エンタープライズアプリケーション]** の下に **[SAP（廃止）]** という名前で表示されます。

廃止された接続は、将来のリリースでサポートされなくなります。廃止された接続を使用してマッピングを実行したり、廃止された接続を新しく作成したりすることができます。ただし、**[エンタープライズアプリケーション]** の **[SAP]** カテゴリを使用して、新しい SAP 接続を作成することをお勧めします。

次の図に、廃止された SAP 接続カテゴリと、使用する必要のある新しい SAP 接続カテゴリを示します。

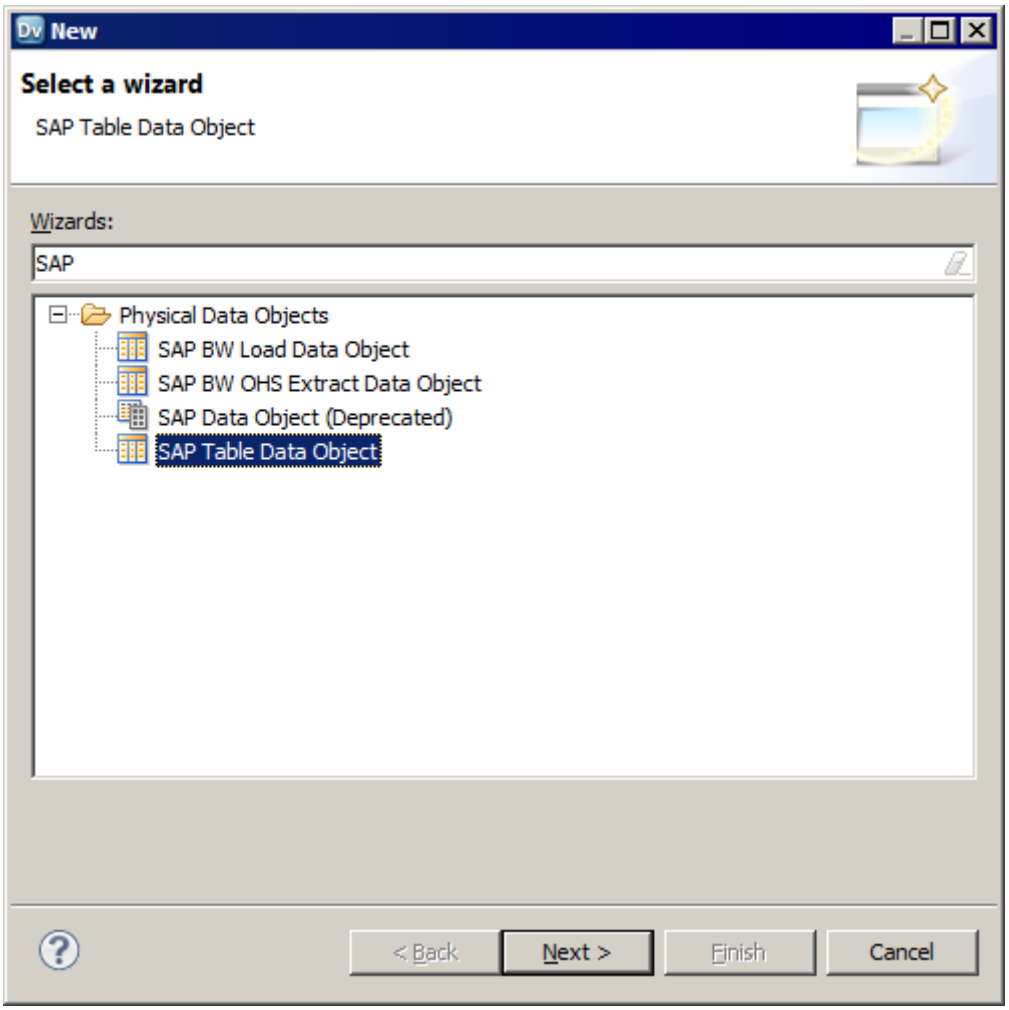


SAP データオブジェクト

10.0 より前のバージョンで作成された SAP データオブジェクトは廃止されます。廃止されたデータオブジェクトタイプは、**[SAP データオブジェクト（廃止）]** という名前で表示されます。

廃止されたデータオブジェクトは、将来のリリースでサポートされなくなります。既存のデータオブジェクトを使用してマッピングを実行したり、廃止されたデータオブジェクトを新しく作成したりすることもできます。ただし、SAP テーブルからデータを読み取るときは、**[SAP テーブルデータオブジェクト]** タイプの新しいデータオブジェクトを作成することをお勧めします。

次の図に、廃止された SAP データオブジェクトと、使用する必要のある新しい SAP テーブルデータオブジェクトを示します。



詳細については、*『Informatica 10.0 PowerExchange for SAP NetWeaver ユーザーガイド』*を参照してください。

参照データ

ここでは、バージョン 10.0 での参照データ操作の変更内容について説明します。

分類子モデル

バージョン 10.0 で有効。Developer tool の単一ビューで、分類子モデルのデータを表示し、管理します。

以前は、分類子モデルのオプションをすべて確認する場合、Developer tool の 2 つのビューを切り替えていました。

詳細については、*『Informatica 10.0 参照データガイド』*の「分類子モデル」の章を参照してください。

確率モデル

バージョン 10.0 では、Informatica は、スタンフォード大学自然言語処理グループの自然言語処理エンジンバージョン 3.4 を使用します。

以前は、バージョン 1.2.6 のエンジンを使用していました。

詳細については、*『Informatica 10.0 参照データガイド』*の「Developer tool の参照データ」の章を参照してください。

ルール仕様

ここでは、バージョン 10.0 のルール仕様に関する変更内容について説明します。

- バージョン 10.0 で有効。**[グローバル入力の管理]** ダイアログボックスで、入力を作成し、入力プロパティを更新します。

  以前は、入力を読み取るルールセット内で入力の作成と更新を行っていました。
- バージョン 10.0 で有効。ルールセットでテキストインジケータを使用してシーケンスを記述すると、データはそのシーケンスに従ってルール文内を移動します。

  以前は、ルールセットで数字を使用してシーケンスを示していました。
- バージョン 10.0 では、Analyst ツールの［デザイン］ワークスペースで、ルール仕様からマップレットルールを作成する操作を「生成」という用語で表現します。

  以前のバージョンでは、この操作を「コンパイル」と呼んでいました。
- バージョン 10.0 で有効。未使用の入力が含まれるルール仕様の検証と生成ができます。

  以前は、未使用の入力が含まれるルール仕様は無効でした。
- バージョン 10.0 で有効。1 回の操作で、ルール仕様を作成し、ルール仕様に基づいて作業を開始できます。

  以前は、別々の操作で、ルール仕様を作成し、開いていました。

詳細については、*『Informatica 10.0 ルール仕様ガイド』*を参照してください。

セキュリティ

ここでは、Informatica バージョン 10.0 のセキュリティの変更内容について説明します。

認証

このセクションでは、Informatica ドメインに対する認証の変更点について説明します。

Informatica 10.0 では、Informatica ドメインに対する Kerberos 認証を使用しないシングルサインオンで、次の点が変更されました。

Developer tool **でのシングルサインオン**

Developer tool から Web アプリケーションクライアントを開く際に、Web アプリケーションにログインする必要があります。

以前は、Web アプリケーションにログイン情報を入力する必要はありませんでした。

Web **アプリケーションクライアントからのログアウト**

Administrator ツールを使用して Web アプリケーションクライアントを開いた場合、それぞれの Web アプリケーションクライアントから個別にログアウトする必要があります。たとえば、Administrator ツールを使用して Analyst ツールを開いた場合、Administrator ツールと Analyst ツールのそれぞれから個別にログアウトする必要があります。

ソースおよびターゲット

ここでは、バージョン 10.0 のソースおよびターゲットの変更内容について説明します。

PowerCenter のソースとターゲット

バージョン 10.0 では、Data Transformation のソースおよびターゲットのサポートは終了しました。Data Transformation のソースとターゲットの代わりに、関連ファイルをポイントするフラットファイルソースとフラットファイルターゲットを使用できます。

詳細については、*『Informatica PowerCenter 10.0 Designer ガイド』*を参照してください。

トランスフォーメーション

ここでは、バージョン 10.0 で変更されたトランスフォーメーションの動作について説明します。

Informatica トランスフォーメーション

ここでは、バージョン 10.0 の Informatica トランスフォーメーションの変更内容について説明します。

アドレスバリデータトランスフォーメーション

Informatica 10.0 では、デフォルトの国の詳細プロパティで国名をパラメータ値として使用することはできません。デフォルトの国を指定するパラメータを定義するには、3 文字の ISO 国名コードをパラメータ値として入力します。

以前のバージョンでは、国名または 3 文字の ISO 国名コードをパラメータ値として入力していました。

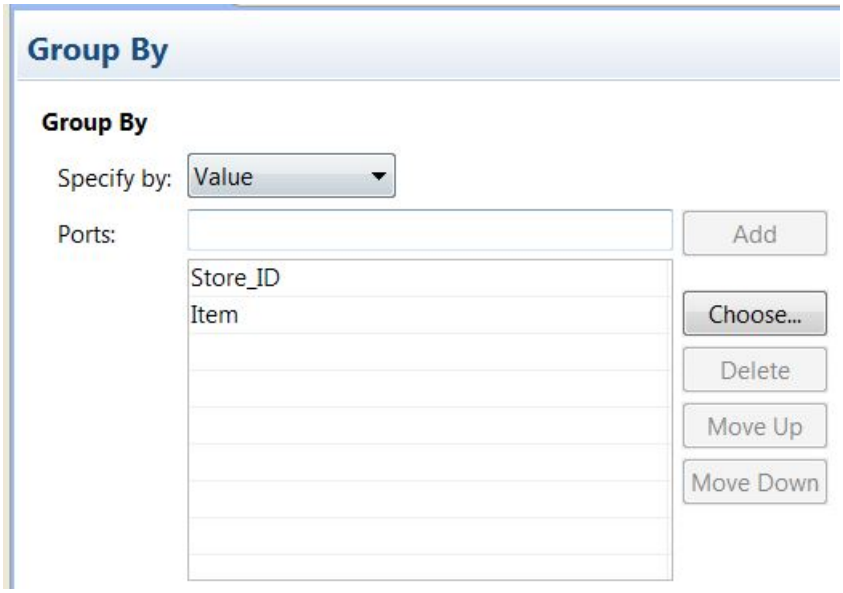
アグリゲータトランスフォーメーション

バージョン 10.0 では、グループ別ポートの定義をアグリゲータトランスフォーメーションの**プロパティ**ビューの［**グループ別**］タブで行います。

アグリゲータのグループに追加するポートをポートリストパラメータでパラメータ化できます。動的ポートをアグリゲータトランスフォーメーションに含めることができます。

以前のバージョンでは、グループ別ポートをトランスフォーメーションの**プロパティ**ビューの［**ポート**］タブで選択していました。

次の図は、アグリゲータトランスフォーメーションの［グループ別］タブを示しています。



アグリゲータトランスフォーメーションの詳細については、*『Informatica 10.0 Developer トランスフォーメーションガイド』*の「アグリゲータトランスフォーメーション」を参照してください。

データプロセッサトランスフォーメーション

ここでは、データプロセッサトランスフォーメーションの変更内容について説明します。

リレーショナルから階層型へのトランスフォーメーション用の追加の出力ポート

バージョン 10.0 では、リレーショナル入力と階層出力のあるデータプロセッサトランスフォーメーションで、追加の出力ポートを使用できます。例えば、トランスフォーメーションで、メイン出力に加えて、検証レポートを生成するサービスを利用できます。以前は、追加の出力ポートは使用できませんでした。

複数の JSON 入力

バージョン 10.0 では、複数の JSON メッセージを含む入力ファイルのある Developer で、ウィザードを使用してデータプロセッサトランスフォーメーションを作成できます。トランスフォーメーションは、最大 1 M の JSON メッセージを処理できます。以前は、トランスフォーメーションで処理できる JSON メッセージは 1 つでした。

リレーショナルから階層型へのトランスフォーメーション用のパススルーポート

バージョン 10.0 では、リレーショナル入力と階層出力のあるデータプロセッサトランスフォーメーションでパススルーポートを使用できます。リレーショナル構造のルートグループにパススルーポートを追加できます。以前は、パススルーポートは使用できませんでした。

一致トランスフォーメーション

バージョン 10.0 では、一致トランスフォーメーションの動作に次の変更が加えられました。

- バージョン 10.0 では、一致トランスフォーメーションは一意のクラスタ ID 値を同一プロセス内のすべてのスレッドに対して生成します。

  以前のバージョンでは、各スレッドで個別にクラスタ ID 値が生成されていました。
- バージョン 10.0 では、以下のオプションを選択して、一致トランスフォーメーションを ID インデックスデータの永続ストアに接続します。

永続的なレコード ID での ID 照合

以前のバージョンでは、**［レコード ID を保持］**オプションを選択していました。

- バージョン 10.0 では、あらゆるタイプの ID 照合分析で**［クラスタ - 最良の一致］**出力オプションを選択できます。

  以前のバージョンでは、単一ソースの ID 照合分析で**［クラスタ - 最良の一致］**オプションを選択していました。

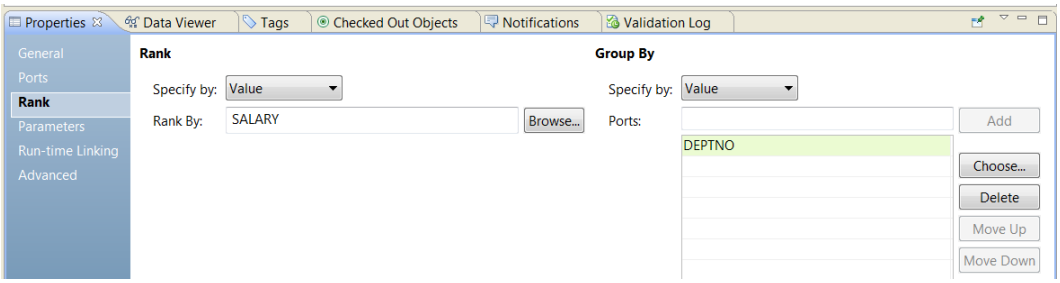
ランクトランスフォーメーション

バージョン 10.0 では、トランスフォーメーションの**［プロパティ］**ビューの**［ランク］**タブで、ランクポートまたはグループ別ポートを定義します。

ポートパラメータを使用して、ランクポートをパラメータ化できます。ポートリストパラメータを使用して、グループ別ポートをパラメータ化できます。動的ポートをランクトランスフォーメーションに含めることができます。

以前は、トランスフォーメーションの**［プロパティ］**ビューの**［ポート］**タブで、ランクポートまたはグループ別ポートを選択しました。

次の図に、［ランク］タブを示します。



ランクトランスフォーメーションの詳細については、*『Informatica 10.0 Developer トランスフォーメーションガイド』*を参照してください。

ソータートランスフォーメーション

ここでは、バージョン 10.0 のソータートランスフォーメーションの変更内容について説明します。

キャッシュサイズ

バージョン 10.0 では、ソータートランスフォーメーションによってディスクにページ分割されるキャッシュファイルの数が少なくなったため、パフォーマンスが向上しています。設定されたキャッシュサイズがソータートランスフォーメーションに対して小さすぎる場合は、データ統合サービスがメモリ内の一部のデータを処理し、オーバーフローデータのみをキャッシュファイルに格納します。

以前のバージョンでは、キャッシュサイズが小さすぎる場合は、データ統合サービスがすべてのキャッシュファイルをディスクにページ分割していました。

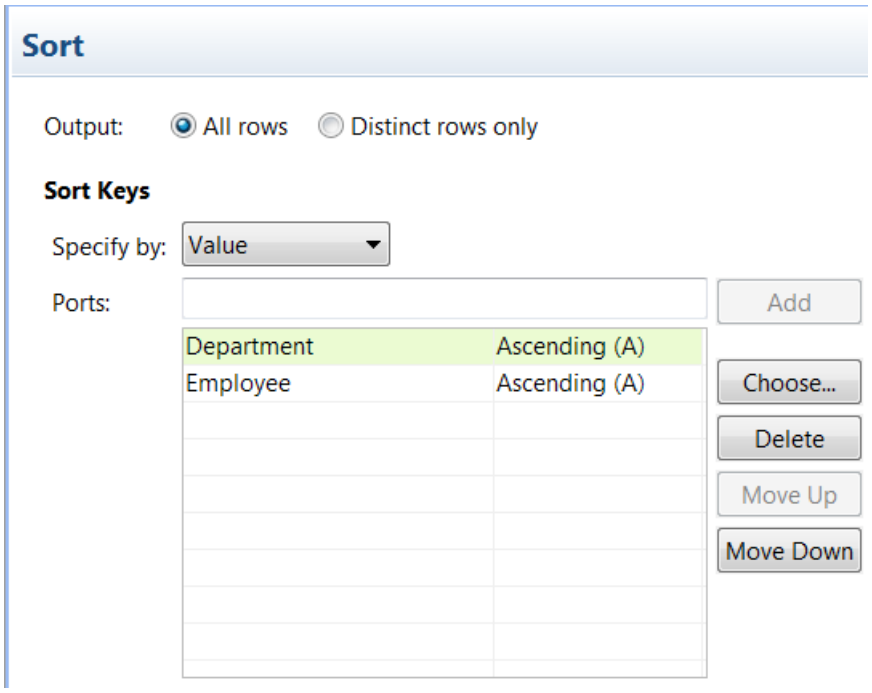
ソートキーおよび重複しない行

バージョン 10.0 では、ソータートランスフォーメーションの**［プロパティ］**ビューに表示される**［ソート］**タブでソートキーを定義します。**［ソート］**タブで重複しない行を作成することもできます。

ソートキーに含めるポートを、ソートリストパラメータでパラメータ化できます。動的ポートをソータートランスフォーメーションに含めることができます。

以前のバージョンでは、トランスフォーメーションの**［プロパティ］**ビューに表示される**［ポート］**タブでソートキーのポートを選択していました。重複しない行の作成は**［詳細］**タブで選択していました。

次の画像は［ソート］タブを示しています。



詳細については、*『Informatica 10.0 Developer トランスフォーメーションガイド』*を参照してください。

ワークフロー

このセクションでは、バージョン 10.0 で変更されたワークフローの動作について説明します。

Informatica ワークフロー

このセクションでは、バージョン 10.0 における Informatica ワークフロー動作の変更点について説明します。

コマンドタスク

バージョン 10.0 では、コマンドタスクを指定する作業ディレクトリが有効ではない場合でも、コマンドタスクは失敗しません。

以前は、作業ディレクトリが有効ではない場合、コマンドタスクが失敗していました。

詳細については、*『Informatica 10.0 Developer ワークフローガイド』*を参照してください。

データ統合サービスのオプション

バージョン 10.0 では、ワークフローを実行するデータ統合サービスを 1 つ設定します。

以前は、ヒューマンタスクの実行とワークフロー内の他のステージの実行に、異なるデータ統合サービスを設定する場合がありました。

バージョン 10.0 では、データ統合サービスの Workflow Orchestration サービスモジュールがワークフロー内のすべてのステージを実行します。

以前は、ワークフローサービスモジュールがワークフロー内のヒューマンタスク以外のすべてのステージを実行し、データ統合サービスのヒューマンタスクサービスモジュールがワークフロー内のヒューマンタスクを実行していました。バージョン 10.0 では、Workflow Orchestration サービスモジュールがワークフローサービスモジュールとヒューマンタスクサービスモジュールを置き換えます。

注: バージョン 10.0 にアップグレードする前に、以前のバージョンの Informatica で実行するすべてのヒューマンタスクを完了してください。

詳細については、*『Informatica 10.0 アプリケーションサービスガイド』*を参照してください。

ヒューマンタスク

バージョン 10.0 では、ヒューマンタスクの exceptionLoadCount の入力値が 1 未満であっても、ワークフローが停止することはなくなりました。exceptionLoadCount の入力値が 1 未満の場合、ヒューマンタスクは完了しますが、Analyst tool ユーザー用のデータは生成されません。

以前は、ヒューマンタスクの exceptionLoadCount の入力値が 1 未満の場合、はワークフローが停止していました。

バージョン 10.0 では、ヒューマンタスクからの電子メール通知は、電子メールサービスプロパティの電子メールサーバー設定を使用して送信されます。

以前は、データ統合サービスプロパティの電子メールサーバー設定が使用されていました。

バージョン 10.0 では、次のシナリオでワークフローをキャンセルした場合、ヒューマンタスクのあるステップから別のステップに移動できません。

- ヒューマンタスクが実行中。
- データ統合サービスが、ヒューマンタスクで指定されているすべてのタスクインスタンスを配布した。

以前は、ワークフローをキャンセルしたときもヒューマンタスクのすべてのステップを完了できました。

詳細については、*『Informatica 10.0 Developer ワークフローガイド』*を参照してください。

マッピングタスク

バージョン 10.0 では、データ統合サービスは、ワークフローインスタンスで実行されるマッピングタスクの各インスタンスに対してログファイルを作成します。ワークフローの実行が中断した後でマッピングタスクが再開した場合、再開したタスクのログファイルが作成されます。

以前は、ワークフローインスタンスで実行されるすべてのマッピングタスクのインスタンスに対して、1 つのファイルにログデータが格納されていました。

詳細については、*『Informatica 10.0 管理者ガイド』*を参照してください。

通知タスク

バージョン 10.0 では、通知タスクからの電子メール通知は、電子メールサービスプロパティの電子メールサーバー設定を使用して送信されます。

以前は、データ統合サービスプロパティの電子メールサーバー設定を使用して送信していました。

詳細については、*『Informatica 10.0 Developer ワークフローガイド』*を参照してください。

ランタイムメタデータ

バージョン 10.0 のデータ統合サービスでは、ワークフローのすべてのランタイムメタデータを 1 つのデータベースの一連のテーブルに格納します。データ統合サービスでデータベース接続を Workflow Orchestration サービスプロパティとして選択します。

以前は、データ統合サービスはワークフロー用のランタイムメタデータをモデルリポジトリに格納し、すべてのヒューマンタスクメタデータをヒューマンタスクデータベースに格納していました。ヒューマンタスクデータベースはバージョン 10.0 で廃止されます。

注: ワークフローを実行する前にワークフローデータベースのコンテンツを作成する必要があります。コンテンツを作成するには、Administrator ツールで、データ統合サービスの［アクション］メニューオプションを使用します。

詳細については、*『Informatica 10.0 アプリケーションサービスガイド』*を参照してください。

ワークフロー監視

バージョン 10.0 では、ワークフローシーケンスでコマンドタスクまたはマッピングタスクが完了しなくても、ワークフローが完了の状態になることができます。

例えば、次のいずれかのシナリオでマッピングタスクが失敗しても、ワークフローは、実行を継続して完了の状態になることができます。

- ワークフローのリカバリを有効にし、リカバリスキップストラテジを使用してマッピングタスクを設定した。
- ワークフローのリカバリを有効にしなかった。

以前は、ワークフローの実行中にコマンドタスクまたはマッピングタスクが失敗すると、ワークフローがエラー状態になりました。

詳細については、*『Informatica 10.0 管理者ガイド』*および *『Informatica 10.0 Developer ワークフローガイド』*を参照してください。

ワークフローオブジェクト名

バージョン 10.0 では、次のオブジェクト名に XML 1.0 仕様に準拠する文字と記号を使用する必要があります。

- ワークフロー名
- タスク名
- ゲートウェイ名
- ワークフローアプリケーション名
- ワークフロー変数名
- ワークフローパラメータ名

XML 1.0 仕様では、いくつかの文字と記号が名前から除外されています。仕様で除外されている文字または記号が名前に含まれていると、ワークフローは実行できません。

以前は、XML 1.0 仕様では、ワークフロー名や関連するオブジェクト名の有効な文字と記号の範囲が定められていませんでした。

バージョン 10.0 以降にアップグレードする場合は、XML 1.0 仕様でサポートされていない文字や記号を含むワークフロー名または関連するオブジェクト名を編集してください。

詳細については、*『Informatica 10.1 バージョン 9.5.1 アップグレードガイド』*および *『Informatica 10.1 バージョン 9.6.1 アップグレードガイド』*を参照してください。

ワークフローリカバリ

バージョン 10.0 のデータ統合サービスでは、ワークフローをリカバリする際の試行回数の制限はなくなりました。Administrator ツールでは、ワークフローのリカバリを試行した回数が表示されません。

以前は、Developer tool でリカバリの最大試行回数を設定していました。Administrator ツールの監視機能では、ワークフローのリカバリを試行した回数が表示されます。

バージョン 10.0 では、中止されたワークフローはリカバリできなくなりました。

以前は、中止されたワークフローはリカバリ可能でした。

バージョン 10.0 では、ワークフローをキャンセルすると、ワークフローが「キャンセル済み」状態になっても、現在実行中のタスクが「実行中」状態のままになります。タスクが終了するように実行されているため、タスクがまだ実行中でもワークフローステータスが「キャンセル済み」に変わることがあります。

以前は、ワークフローをキャンセルすると、現在実行中のタスクが終了したときに、ワークフローが「キャンセル済み」状態に変わっていました。

詳細については、*『Informatica 10.0 管理者ガイド』*および *『Informatica 10.0 Developer ワークフローガイド』*を参照してください。

第 16 章

リリースタスク（10.0）

- マッピング, 213 ページ

マッピング

このセクションでは、バージョン 10.0 のマッピングのリリースタスクについて説明します。

パラメータの精度

バージョン 10.0 では、パラメータのデフォルト値のサイズは、そのパラメータに指定された精度以下にする必要があります。以前のバージョンでは、パラメータのデフォルト値がその精度のサイズより大きい場合は、データ統合サービスがパラメータのデフォルト値を切り詰めることにより、マッピングが正常に実行されました。

10.0 へのアップグレードが完了した後、各パラメータのデフォルト値のサイズが、そのパラメータに指定された精度以下であることを確認する必要があります。パラメータのデフォルト値がその精度より大きい場合は、デフォルト値を更新するか、精度を変更します。その後に、マッピングを再デプロイします。

バージョン 10.0 では、パラメータのデフォルト値のサイズがその精度よりも大きい場合は、マッピングが失敗し、次のエラーが表示されます。

パラメータ[my_parameter]には、この精度以下の長さのデフォルト値が指定されている必要があります。

パート IV: バージョン 9.6.1

この部には、以下の章があります。

- 新機能、変更、リリースタスク（9.6.1 HotFix 4）, 215 ページ
- 新機能、変更、リリースタスク（9.6.1 HotFix 3）, 225 ページ
- 新機能、変更、リリースタスク（9.6.1 HotFix 2）, 234 ページ
- 新機能、変更、およびリリースタスク（9.6.1 HotFix 1）, 251 ページ
- 新機能（9.6.1）, 264 ページ
- 変更内容（9.6.1）, 284 ページ

第 17 章

新機能、変更、リリースタスク（9.6.1 HotFix 4）

この章では、以下の項目について説明します。

- 新機能（9.6.1 HotFix 4）, 215 ページ
- 変更内容（9.6.1 HotFix 4）, 221 ページ
- リリースタスク（9.6.1 HotFix 4）, 223 ページ

新機能（9.6.1 HotFix 4）

ここでは、バージョン 9.6.1 HotFix 4 の新しい機能について説明します。

コマンドラインプログラム

ここでは、バージョン 9.6.1 HotFix 4 の新しいコマンドについて説明します。

infacmd isp コマンド

以下の表に、新しい infacmd isp コマンドの説明を示します。

コマンド	説明
ListDomainCiphers	Informatica ドメインまたはゲートウェイノードで使用される次の 1 つ以上の暗号スイートを表示します。 **ブラックリスト** Informatica ドメインがブロックする暗号スイートのユーザー指定リストです。 **デフォルトリスト** デフォルトでサポートされる暗号スイートのリストです。 **有効リスト** infasetup updateDomainCiphers コマンドで設定した後に Informatica ドメインが使用する暗号スイートのリストです。有効リストでは、デフォルトリストおよびホワイトリストの暗号スイートがサポートされますが、ブラックリストの暗号スイートはブロックされます。 **ホワイトリスト** デフォルトリストの他に Informatica ドメインが使用できる暗号スイートのユーザー指定リストです。 表示するリストを指定できます。

詳細については、*『Informatica 9.6.1 HotFix 4 コマンドリファレンス』*の「infacmd isp コマンドリファレンス」の章を参照してください。

infasetup コマンド

次の表に、新しい infasetup コマンドの説明を示します。

コマンド	説明
ListDomainCiphers	Informatica ドメインまたはゲートウェイノードで使用される次の 1 つ以上の暗号スイートを表示します。 **ブラックリスト** Informatica ドメインがブロックする暗号スイートのユーザー指定リストです。 **デフォルトリスト** デフォルトでサポートされる暗号スイートのリストです。 **有効リスト** infasetup updateDomainCiphers コマンドで設定した後に Informatica ドメインが使用する暗号スイートのリストです。有効リストでは、デフォルトリストおよびホワイトリストの暗号スイートがサポートされますが、ブラックリストの暗号スイートはブロックされます。 **ホワイトリスト** Informatica ドメインが使用できる暗号スイートのユーザー指定リストです。 表示するリストを指定できます。
updateDomainCiphers	Informatica ドメインが新しい有効リストで使用できる暗号スイートを更新します。

次の表に、infasetup コマンドの更新されたオプションの説明を示します。

コマンド	説明
- DefineDomain - DefineGatewayNode - DefineWorkerNode - UpdateGatewayNode - UpdateWorkerNode	これらのコマンドには、次の新しいオプションがあります。 - cipherWhiteList |-cwl - cipherWhiteListFile |-cwlf - cipherBlackList |-cbl - cipherBlackListFile |-cblf これらのオプションを使用して、ドメイン内の安全な通信または Web アプリケーションサービスへの安全な接続を使用する Informatica ドメインの暗号スイートを設定できます。

詳細については、*『Informatica 9.6.1 HotFix 4 コマンドリファレンス』* の「infasetup コマンドリファレンス」の章を参照してください。

接続性

ここでは、バージョン 9.6.1 HotFix 4 の新しい接続機能について説明します。

IBM DB2 接続のスキーマ名

バージョン 9.6.1 HotFix 4 では、IBM DB2 接続を使って Developer tool または Analyst ツールでテーブルをインポートする場合、テーブルのインポート元としてスキーマ名を 1 つ以上指定できます。メタデータ接続文字列の URL に ischemaname 属性を使用してスキーマ名を指定します。スキーマ名が複数の場合はパイプ（|）文字を使用して区切ります。

例えば、メタデータ接続文字列の URL に次の構文を入力します。

```
jdbc:informatica:db2://<host name>:<port>;DatabaseName=<database name>;ischemaname=<schema_name1>|<schema_name2>|<schema_name3>
```

詳細については、『*Informatica 9.6.1 HotFix 4 Developer ツールガイド*』および『*Informatica 9.6.1 HotFix 4 Analyst ツールガイド*』を参照してください。

例外管理

ここでは、バージョン 9.6.1 HotFix 4 の新しい例外管理機能について説明します。

データ型に基づくデータ値の検索および置換

バージョン 9.6.1 HotFix 4 では、例外タスクのオプションを設定し、データ型に基づいてデータ値を検索および置換できます。このオプションを設定して、日付、文字列、または数値データを含むカラムのデータを検索および置換できます。

データ型を指定すると、Analyst ツールにより、そのデータ型を使用するすべてのカラムで入力した値が検索されます。文字列データカラムに含まれる値を検索および置換できます。文字列データでは、大文字と小文字を区別して検索を実行できます。検索値と文字列データカラムのフィールドの内容の間で部分一致または完全一致を検索できます。

詳細については、『*Informatica 9.6.1 HotFix 4 例外管理ガイド*』の「例外レコード」の章を参照してください。

Informatica ドメイン

ここでは、Informatica ドメインの新機能について説明します。

ドメインレポート

バージョン 9.6.1 HotFix 4 では、ライセンス管理レポートに Consumed Cores プロパティが含まれています。このプロパティは、マシン上のコア数を示します。

ライセンス管理レポートの詳細については、『*Informatica 9.6.1 HotFix 4 管理者ガイド*』のドメインレポートに関する章を参照してください。

Informatica トランスフォーメーション

ここでは、バージョン 9.6.1 HotFix 4 の新しい Informatica トランスフォーメーション機能について説明します。

アドレスバリデータトランスフォーメーション

ここでは、アドレスバリデータトランスフォーメーションの新機能について説明します。

アドレスバリデータトランスフォーメーションでは、次の国について住所機能が追加されました。

アイルランド

バージョン 9.6.1 HotFix 4 では、アイルランドの住所の Eircode を返すことができます。Eircode はアイルランドの住所を一意に識別する 7 文字のコードです。アパートの住所、地方の区画地を含め、すべての住居、公共建物、および事業所が Eircode の対象となります。

住所に対応する Eircode を返すには、［郵便番号］ポートまたは［郵便番号の正式表記］ポートを選択します。

フランス

9.6.1 HotFix 4 では、アドレス検証で National Address Management Service の Hexaligne 3 リポジトリを使用してフランスの住所を SNA 基準で認定します。

Hexaligne 3 データセットには、棟の詳細（建物名、住宅名など）を含め、納入場所の住所に関する追加の情報が含まれます。

ドイツ

バージョン 9.6.1 HotFix 4 では、*Frachtleitcode*（輸送コード）の 3 桁の番地コードを、ドイツの有効な住所の補足として取得できます。この番地コードにより住所内の番地が識別されます。

確認したドイツの住所の補足として番地コードを取得するには、［番地コード DE］ポートを選択します。このポートは［DE 補足］ポートグループにあります。

［番地コード DE］ポートはバージョン 9.6.1 HotFix 4 で追加されます。

韓国

9.6.1 HotFix 4 では、地番に基づく韓国の旧住所および 6 桁の旧郵便番号を持つ住所を確認できます。現在の形式、旧型式、および現在の形式と旧型式の組み合わせを確認し、更新できます。韓国の現在の住所形式は道路名に基づいており、5 桁の郵便番号が含まれます。以前の住所形式は地番に基づいており、6 桁の郵便番号が含まれます。

古い形式で韓国の住所を検証して、その情報を別の形式に変更する場合は住所識別子 KR ポートを使用します。住所情報は 2 段階で更新します。まず、バッチモードまたは対話モードでアドレス検証マッピングを実行して［住所識別子 KR］出力ポートを選択します。次に、住所コードルックアップモードでアドレス検証マッピングを実行して［住所識別子 KR］入力ポートを選択します。［住所識別子 KR］入力ポートは［個別］ポートグループにあります。［住所識別子 KR］出力ポートは［KR 補足］ポートグループにあります。

アドレスバリデータトランスフォーメーションで住所データの読み取りおよび書き込みができることを確認するには、トランスフォーメーションに［補足 KR ステータス］ポートを追加します。

［住所識別子 KR］ポート、［補足 KR ステータス］ポート、および［KR 補足］ポートグループは、バージョン 9.6.1 HotFix 4 で追加されます。

バージョン 9.6.1 HotFix 4 では、韓国の住所データをハングル文字とラテン文字で取得できます。

英国

バージョン 9.6.1 HotFix 4 では、英国の住所について、納入場所タイプのデータと組織キーのデータを取得できます。納入場所タイプは、住所が、住居、小規模な組織、大規模な組織のどれを指しているかを示す 1 文字のコードです。組織キーは、Royal Mail が小規模な組織に割り当てる 8 桁のコードです。

英国の住所に納入場所タイプを追加するには、［納入場所タイプ GB］ポートを使用します。英国の住所に組織キーを追加するには、［組織キー GB］ポートを使用します。これらのポートは［UK 補足］ポートグループにあります。アドレスバリデータトランスフォーメーションでデータの読み取りおよび書き込みができることを確認するには、トランスフォーメーションに［補足 UK ステータス］ポートを追加します。

［納入場所タイプ GB］ポートおよび［組織キー GB］ポートは、バージョン 9.6.1 HotFix 4 で追加されます。

詳細については、『*Informatica 9.6.1 HotFix 4 アドレスバリデータポート参照*』を参照してください。

Metadata Manager

ここでは、バージョン 9.6.1 HotFix 4 の新しい Metadata Manager 機能について説明します。

アプリケーションのプロパティ

バージョン 9.6.1 HotFix 4 では、新しいアプリケーションプロパティを Metadata Manager imm.properties ファイルで設定できます。

以下の表に、imm.properties に含まれている新しい Metadata Manager アプリケーションプロパティを示します。

プロパティ	説明
xconnect.custom.failLoadOnErrorCount	カスタムリソースのロード時に Metadata Manager サービスで許容される最大エラー数。この数を超えるエラーが発生すると、リソースのロードに失敗します。
xconnect.io.print.batch.errors	カスタムリソースのロード時に Metadata Manager サービスが 1 回のバッチでメモリキャッシュおよび mm.log ファイルに書き込むエラーの数。

imm.properties ファイルの詳細については、*『Informatica 9.6.1 HotFix 4 Metadata Manager 管理者ガイド』*の付録「Metadata Manager のプロパティファイル」を参照してください。

Business Glossary の監査証跡履歴およびテクニカルメタデータへのリンクの移行

バージョン 9.6.1 HotFix 4 では、ビジネス用語集をエクスポートするときに監査証跡履歴およびテクニカルメタデータへのリンクを移行できます。Analyst ツールで監査証跡およびリンクをインポートできます。

詳細については、*『Informatica 9.6.1 HotFix 4 バージョン 9.5.1 からのアップグレードガイド』*を参照してください。

PowerExchange アダプタ

ここでは、バージョン 9.6.1 HotFix 4 の新しい PowerExchange アダプタ機能について説明します。

PowerExchange Adapters for PowerCenter

ここでは、バージョン 9.6.1 HotFix 4 の新しい PowerCenter アダプタ機能について説明します。

PowerExchange for Greenplum

バージョン 9.6.1 HotFix 4 では、ネイティブ Greenplum 接続に Kerberos 認証を設定できます。

詳細については、*『Informatica 9.6.1 HotFix 4 PowerExchange for Greenplum PowerCenter ユーザーガイド』*の Greenplum セッションとワークフローに関する章を参照してください。

PowerExchange for Teradata Parallel Transporter API

バージョン 9.6.1 HotFix 4 では、ネイティブ Teradata PT 接続に Kerberos 認証を設定できます。

詳細については、*『Informatica 9.6.1 HotFix 4 PowerExchange for Teradata Parallel Transporter API PowerCenter ユーザーガイド』*の Teradata PT API セッションとワークフローに関する章を参照してください。

セキュリティ

ここでは、バージョン 9.6.1 HotFix 4 の新しいセキュリティ機能について説明します。

カスタム暗号スイート

バージョン 9.6.1 HotFix 4 では、ドメイン内の安全な通信および Web アプリケーションサービスへの安全な接続で Informatica ドメインが使用する暗号スイートをカスタマイズできます。ホワイトリストおよびブラックリストを作成して、特定の暗号スイートを有効化またはブロックできます。

Informatica ドメインでは、暗号スイートの有効リストが使用されます。有効リストでは、デフォルトリストおよびホワイトリストの暗号スイートが使用され、ブラックリストの暗号スイートがブロックされます。

詳細については、*『Informatica 9.6.1 HotFix 4 セキュリティガイド』*の「ドメインのセキュリティ」を参照してください。

変更内容（9.6.1 HotFix 4）

ここでは、バージョン 9.6.1 HotFix 4 の変更内容について説明します。

バージョン 9.6.1 HotFix 4 のサポートの変更内容

バージョン 9.6.1 HotFix 4 では、Big Data Edition のサポートは見送られました。将来のリリースではサポートは元に戻される予定です。

アプリケーションサービス

ここでは、バージョン 9.6.1 HotFix 4 のアプリケーションサービスへの変更内容について説明します。

レポートおよびダッシュボードサービス（廃止）

バージョン 9.6.1 HotFix 4 では、レポートおよびダッシュボードサービスが廃止されました。今後のリリースでは、レポートおよびダッシュボードサービスがサポートされなくなります。

バージョン 9.6.1 HotFix 4 にアップグレードしても、レポートおよびダッシュボードサービスは引き続き使用できます。Informatica では、サポートが廃止される前にサードパーティのレポートツールの使用を開始することを推奨しています。推奨されている SQL クエリを使用して、以前の PowerCenter バージョンに付属のすべてのレポートを構築できます。

バージョン 9.6.1 HotFix 4 をインストールする場合、レポートおよびダッシュボードサービスを作成することはできません。PowerCenter および Metadata Manager レポートを実行するには、サードパーティのレポートツールを使用する必要があります。

PowerCenter レポートについては、*『Informatica PowerCenter/PowerCenter レポート使用ガイド』*を参照してください。PowerCenter リポジトリビューについては、*『Informatica PowerCenter リポジトリガイド』*を参照してください。

Informatica ドメイン

ここでは、バージョン 9.6.1 HotFix 4 における Informatica ドメインの変更点について説明します。

ドメインレポート

バージョン 9.6.1 HotFix 4 では、ライセンス管理レポート内の Cores プロパティは Cores Per Socket に名前が変更されました。このプロパティは、マシン上の各ソケットのコア数を示します。

ライセンス管理レポートの詳細については、『*Informatica 9.6.1 HotFix 4 管理者ガイド*』のドメインレポートに関する章を参照してください。

Informatica のインストール

ここでは、バージョン 9.6.1 HotFix 4 の Informatica インストーラの変更内容について説明します。

Java Runtime Environment のインストール

バージョン 9.6.1 HotFix 4 では、Java Development Kit（JDK）ではなく、Java Runtime Environment（JRE）が使用されます。

AIX、HP-UX、または zLinux で Informatica をインストールまたはアップグレードする前に、まず Java Runtime Environment（JRE）をインストールして、INFA_JRE_HOME 環境変数を設定する必要があります。アップグレードする場合は、INFA_JDK_HOME 環境変数を削除します。

詳細については、『*Informatica 9.6.1 HotFix 4 インストール＆環境設定ガイド*』の Java Runtime Environment のインストールに関する章および Informatica のアップグレードガイドを参照してください。

Informatica トランスフォーメーション

このセクションでは、バージョン 9.6.1 HotFix 4 における Informatica トランスフォーメーションの変更点について説明します。

アドレスバリデータトランスフォーメーション

ここでは、アドレスバリデータトランスフォーメーションの変更内容について説明します。

アドレスバリデータトランスフォーメーションには、アドレス機能についての次の更新が含まれます。

アドレス検証エンジンのアップグレード

バージョン 9.6.1 HotFix 4 では、アドレスバリデータトランスフォーメーションでバージョン 5.8.1 の Informatica Address Verification ソフトウェアエンジンが使用されます。このエンジンによって、バージョン 9.6.1 HotFix 4 のアドレスバリデータトランスフォーメーションに追加された機能が有効になります。

以前は、トランスフォーメーションで Informatica AddressDoctor ソフトウェアエンジンのバージョン 5.7.0 が使用されていました。

製品名の変更

Informatica Address Verification は Informatica AddressDoctor の新しい名前です。Informatica AddressDoctor はバージョン 5.8.0 で Informatica Address Verification になりました。

英国の住所のジオコードオプションの変更

バージョン 9.6.1 HotFix 4 では、ジオコードデータプロパティとして［ルーフトップ］を選択し、英国の住所のルーフトップレベルのジオコードを取得できます。

以前は、英国の住所のルーフトップレベルのジオコードを取得するのに［到着点］ジオコードデータプロパティを選択していました。

アドレスバリデータトランスフォーメーションが含まれるリポジトリをアップグレードする場合、[ルーフトップ]ジオコードプロパティを指定するためにトランスフォーメーションを再設定する必要はありません。ルーフトップジオコードを指定しても、アドレスバリデータトランスフォーメーションがその住所のジオコードを返せない場合、トランスフォーメーションからはどのジオコードデータも返されません。

英国の入力データでの UPRN**（地所識別番号）のサポート**

バージョン 9.6.1 HotFix 4 では、アドレスバリデータトランスフォーメーションに UPRN GB 入力ポートと UPRN GB 出力ポートが含まれます。

以前は、トランスフォーメーションに UPRN GB 出力ポートが含まれていました。

入力した UPRN（地所識別番号）に対応する英国の住所を取得するには、UPRN GB 入力ポートを使用します。英国の住所に対応する UPRN（地所識別番号）を取得するには、UPRN GB 出力ポートを使用します。

詳細については、*『Informatica 9.6.1 HotFix 4 アドレスバリデータポート参照』*を参照してください。

Metadata Manager

ここでは、バージョン 9.6.1 HotFix 4 の Metadata Manager の変更内容について説明します。

コマンドラインプログラムの証明書検証

バージョン 9.6.1 HotFix4 では、Metadata Manager Web アプリケーションにセキュアな接続を設定すると、Metadata Manager コマンドラインプログラムはエラーのあるセキュリティ証明書を受け入れません。エラーのあるセキュリティ証明書をコマンドラインプログラムで受け入れるかどうかを制御するプロパティは廃止されました。

以前は、MMCmdConfig.properties ファイルの Security.Authentication.Level プロパティで mmcmd または mmRepoCmd の証明書検証を制御していました。すべての証明書を受け入れるか、またはエラーのない証明書のみを受け入れるようにプロパティを設定できました。

コマンドラインプログラムでエラーのあるセキュリティ証明書が受け入れられなくなったため、Security.Authentication.Level プロパティは廃止されました。mmcmd または mmRepoCmd の MMCmdConfig.properties ファイルにこのプロパティは表示されなくなりました。

mmcmd および mmRepoCmd の証明書検証の詳細については、*『Informatica 9.6.1 HotFix 4 Metadata Manager 管理者ガイド』*の「Metadata Manager コマンドラインプログラム」の章を参照してください。

セキュリティの変更内容

ここでは、バージョン 9.6.1 HotFix 4 のセキュリティの変更内容について説明します。

トランスポートレイヤセキュリティ（TLS）

バージョン 9.6.1 HotFix 4 では、TLS v1.1 および v1.2 を使用してトラフィックが暗号化されます。また、TLS v1.0 以下のサポートは無効になりました。

この変更は、Informatica ドメイン内の安全な通信、Web アプリケーションサービスへの安全な接続、および Informatica ドメインと外部接続先の間の接続に影響します。

リリースタスク（9.6.1 HotFix 4）

ここでは、バージョン 9.6.1 HotFix 4 のリリースタスクについて説明します。

Metadata Manager

ここでは、バージョン 9.6.1 HotFix 4 でリリースされた Metadata Manager のタスクについて説明します。

コマンドラインプログラムのトラストストアファイルの検証

バージョン 9.6.1 HotFix4 では、Metadata Manager Web アプリケーションにセキュアな接続を設定すると、Metadata Manager コマンドラインプログラムはエラーのあるセキュリティ証明書を受け入れません。エラーのあるセキュリティ証明書をコマンドラインプログラムで受け入れるかどうかを制御するプロパティは廃止されました。

MMCmdConfig.properties ファイルの Security.Authentication.Level プロパティで、mmcmd または mmRepoCmd の証明書検証を制御していました。このプロパティを次のいずれかの値に設定できました。

- NO_AUTH。コマンドラインプログラムは、電子証明書にエラーがあっても電子証明書を受け入れます。
- FULL_AUTH。コマンドラインプログラムは、エラーのあるセキュリティ証明書を受け入れません。

NO_AUTH 設定は無効になりました。コマンドラインプログラムは、エラーのないセキュリティ証明書のみを受け入れるようになりました。

Metadata Manager Web アプリケーションにセキュアな接続を設定していて、以前に Security.Authentication.Level プロパティを NO_AUTH に設定していた場合、トラストストアファイルの設定が必要となります。トラストストアファイルを使用するように mmcmd または mmRepoCmd を設定するには、mmcmd または mmRepoCmd に関連付けられている MMCmdConfig.properties ファイルを編集します。TrustStore.Path プロパティにトラストストアファイルのパスとファイル名を設定します。

mmcmd および mmRepoCmd 用の MMCmdConfig.properties ファイルの詳細については、*『Informatica 9.6.1 HotFix 4 Metadata Manager 管理者ガイド』*の「Metadata Manager コマンドラインプログラム」の章を参照してください。

第 18 章

新機能、変更、リリースタスク（9.6.1 HotFix 3）

この章では、以下の項目について説明します。

- 新機能（9.6.1 HotFix 3）, 225 ページ
- 変更内容（9.6.1 HotFix 3）, 229 ページ
- リリースタスク（9.6.1 HotFix 3）, 232 ページ

新機能（9.6.1 HotFix 3）

ここでは、バージョン 9.6.1 HotFix 3 の新しい機能について説明します。

Business Glossary

ここでは、バージョン 9.6.1 HotFix 3 の新しい Business Glossary 機能について説明します。

ドラフトアセットの削除

バージョン 9.6.1 HotFix 3 では、ドラフトアセットを初めて公開する前に削除できます。レビュー中、公開済み、または拒否済みのアセットは削除できません。公開済みまたは拒否済みのアセットを改訂した後にドラフトを削除することはできません。

詳細については、『*Informatica 9.6.1 HotFix 3 Business Glossary ガイド*』を参照してください。

用語集間のリレーション

バージョン 9.6.1 HotFix 3 では、任意の用語集のアセット間のリレーションを作成できます。用語集間でビジネス用語をリンクできます。任意の用語集のポリシーをビジネス用語にリンクできます。リレーションビュー図で複数の用語集のアセットを表示できます。用語集をインポートまたはエクスポートするときに、他の用語集からリンクされたアセットのインポートまたはエクスポートを選択できます。

詳細については、『*Informatica 9.6.1 HotFix 3 Business Glossary ガイド*』を参照してください。

URL からのハイパーリンクの作成

バージョン 9.6.1 HotFix 3 では、ビジネス用語の **[説明]**、**[使用コンテキスト]**、**[例]**、および **[参照テーブル URL]** プロパティに URL を挿入するときに、ハイパーリンクを作成できます。任意の用語集のアセットにリンクできます。

詳細については、『*Informatica 9.6.1 HotFix 3 Business Glossary ガイド*』を参照してください。

Informatica Data Services

ここでは、バージョン 9.6.1 HotFix 3 の新しい Informatica Data Services 機能について説明します。

Microsoft Access の日時データのクエリ

バージョン 9.6.1 HotFix 3 では、Microsoft Access の日時データを含む SQL データサービスをクエリできます。Informatica Data Services ODBC ドライバを設定するときに、**[Informatica Data Services へのデータソースの設定]** ダイアログボックスの **[オプションのパラメータ]** フィールドに次のパラメータを入力します。

```
APPLICATION=ACCESS
```

このパラメータで ODBC を設定すると、データ統合サービスは Microsoft Access の日付データに日付/時刻データ型を使用します。

Informatica トランスフォーメーション

ここでは、バージョン 9.6.1 HotFix 3 の新しい Informatica トランスフォーメーション機能について説明します。

アドレスバリデータトランスフォーメーション

ここでは、新しいアドレスバリデータトランスフォーメーションの機能について説明します。

ベルギーの住所で市区町村および近隣地域 ID コードをサポート

バージョン 9.6.1 HotFix 3 では、ベルギーの住所を含む近隣地域を一意に識別するコードを返すようにアドレスバリデータトランスフォーメーションを設定できます。このコードを返すには、[NIS コード] 出力ポートを選択します。このポートは [BE 補足] ポートグループにあります。

[NIS コード] ポートは、市区町村を識別する 5 桁の NIS コード、および市区町村内の近隣地域を識別する 4 文字のコードを返します。このコードはベルギーの国家統計局により定義されています。

[NIS コード] ポートでデータを返すために、アドレスバリデータトランスフォーメーションはベルギーの補足アドレス参照データを読み込みます。アドレスバリデータトランスフォーメーションが補足データを読み込めることを確認するには、トランスフォーメーションに [補足 BE ステータス] 出力ポートを追加します。[NIS コード] ポート、[補足 BE ステータス] ポート、および [BE 補足] ポートグループはバージョン 9.6.1 HotFix 3 で追加されました。

ロシア連邦の住所を識別する FIAS（Federal Information Addressing System）ID をサポート

バージョン 9.6.1 HotFix 3 では、ロシア連邦の FIAS ID を返すようにアドレスバリデータトランスフォーメーションを設定できます。この ID を返すには、[FIAS ID] 出力ポートを選択します。このポートは [RU 補足] ポートグループにあります。

[FIAS ID] ポートは、最大で 36 文字を返します。この識別子データはロシア連邦の連邦国家統計局により管理されます。

[FIAS ID] ポートでデータを返すために、アドレスバリデータトランスフォーメーションはロシア連邦の補足アドレス参照データを読み込みます。アドレスバリデータトランスフォーメーションが補足データを読み込めることを確認するには、トランスフォーメーションに [補足 RU ステータス] 出力ポートを追加

します。［FIAS ID］ポート、［補足 RU ステータス］ポート、および［RU 補足］ポートグループはバージョン 9.6.1 HotFix 3 で追加されました。

英国の住所の UPRN（Unique Property Reference Number）**をサポート**

バージョン 9.6.1 HotFix 3 では、英国の住所の UPRN を返すようにアドレスバリデータトランスフォーメーションを設定できます。この番号は、英国の住所を含む土地を一意に識別します。UPRN を返すには、［UPRN］出力ポートを選択します。このポートは［UK 補足］ポートグループにあります。

UPRN は 12 桁です。UPRN は英国の陸地測量局により管理されます。

［UPRN］ポートでデータを返すために、アドレスバリデータトランスフォーメーションは英国の補足アドレス参照データを読み込みます。アドレスバリデータトランスフォーメーションが補足データを読み込めることを確認するには、トランスフォーメーションに［補足 UK ステータス］出力ポートを追加します。［UPRN］ポートはバージョン 9.6.1 HotFix 3 で追加されました。

中国と日本の住所から都道府県と市区町村の記述子を削除可能

バージョン 9.6.1 HotFix 3 では、中国と日本の住所から都道府県と市区町村の記述子を削除するようにアドレスバリデータトランスフォーメーションを設定できます。例えば、アドレスバリデータトランスフォーメーションは中国の住所で「朝陽区」の代わりに「朝陽」、「北京市」の代わりに「北京」を返すことができます。

記述子を削除するには、トランスフォーメーションで［優先される言語］プロパティと［優先されるスクリプト］を設定します。

キリル語スクリプトでブルガリアの住所を検証可能

バージョン 9.6.1 HotFix 3 では、キリル語スクリプトでブルガリアの住所を検証できます。デフォルトでは、アドレスバリデータトランスフォーメーションはキリル語スクリプトで結果を返します。

ラテン語スクリプトで結果を受け取るには、トランスフォーメーションで［優先されるスクリプト］プロパティを構成します。

町名の略式表記を含むスロバキアの住所を検証可能

バージョン 9.6.1 HotFix 3 では、主要な町名の略式表記を含むスロバキアの住所を検証できます。

有効な住所出力では、トランスフォーメンションによって略式表記が郵政局指定の名前に置き換えられます。

都道府県の ISO **コードをバッチ、対話型、および高速完了モードで取得可能**

バージョン 9.6.1 HotFix 3 では、アドレスバリデータトランスフォーメーションによる ISO 3166-2 都道府県コードのサポートが以下の国に拡張されます。

- カナダ
- フランス
- 米国

例えば、トランスフォーメーションは次の住所に対してノースカロライナを表す都道府県コード NC を返します。

```
15501 WESTON PKWY STE 150
CARY 27513
USA
```

詳細については、『*Informatica 9.6.1 HotFix 3 アドレスバリデータポートリファレンス*』と『*Informatica 9.6.1 HotFix 3 Developer トランスフォーメーションガイド*』を参照してください。

Metadata Manager

ここでは、バージョン 9.6.1 HotFix 3 の新しい Metadata Manager 機能について説明します。

メタデータソースバージョン

バージョン 9.6.1 HotFix 3 では、一部のメタデータソースに新しいサポート対象バージョンがあります。

以下のメタデータソースに新しいサポート対象バージョンがあります。

- Cloudera Navigator
- ERwin
- Informix

サポートされているメタデータソースバージョンの詳細については、次の Informatica Network で「*PCAE Metadata Manager XConnect Support*」という Product Availability Matrix を参照してください。
https://network.informatica.com/community/informatica-network/product-availability-matrices/overview

Cloudera Navigator リソース

バージョン 9.6.1 HotFix 3 では、増分ロードを有効にして検索クエリを作成し、Metadata Manager による Cloudera Navigator リソースのロード時間を短縮できます。

Cloudera Navigator リソースを作成または編集するときに、以下のプロパティを設定できます。

増分ロードを有効にする

最初のリソースロードが成功した後に、Cloudera Navigator リソースの増分ロードを有効にします。このオプションを有効にすると、Metadata Manager は完全なメタデータをロードする代わりに、メタデータへの最近の変更をロードします。

増分ロード中、Metadata Manager は以下のエンティティのみを抽出します。

- 前回のリソースロード後に作成または変更された HDFS エンティティ
- すべての Hive テーブル、ビュー、およびパーティション
- 前回のリソースロード後に作成された操作実行
- 新しい操作実行に関連するすべてのテンプレート

検索クエリ

Metadata Manager が抽出する HDFS エンティティを制限するクエリ。デフォルトでは、Metadata Manager は、canary ファイル、ログファイル、履歴ファイル、削除されたファイルのみを含むディレクトリからは HDFS エンティティを抽出しません。Metadata Manager がその他の HDFS エンティティを抽出することを防ぐように、デフォルトの検索クエリを更新できます。入力するクエリでは有効な Cloudera Navigator 検索構文を使用する必要があります。

Cloudera Navigator リソースの詳細については、『*Informatica 9.6.1 HotFix 3 Metadata Manager 管理者ガイド*』を参照してください。

Microsoft SQL Server リソース

バージョン 9.6.1 HotFix 3 では、Metadata Manager は Microsoft SQL Server のテーブルおよびビューカラムの MS_Description 拡張プロパティの値を抽出します。

Microsoft SQL Server リソースの拡張プロパティの抽出の詳細については、『*Informatica 9.6.1 HotFix 3 Metadata Manager 管理者ガイド*』を参照してください。

PowerExchange Adapters for PowerCenter

ここでは、バージョン 9.6.1 HotFix 3 の新しい PowerCenter アダプタ機能について説明します。

PowerExchange for SAP Netweaver

バージョン 9.6.1 HotFix 3 では、AddQuotesForCachedLookup カスタムセッションプロパティを Yes に設定できます。これにより、キャッシュを使用するルックアップで特殊文字、記号、または小文字が含まれる HANA テーブルメタデータを使用するときに、セッションが失敗しなくなります。

PowerExchange for Greenplum

バージョン 9.6.1 HotFix 3 では、データをカラムにロードするときに、セッションプロパティで MAX_LINE_LENGTH 属性を設定できます。これにより、104857600 の精度でデータをカラムにロードできます。

変更内容（9.6.1 HotFix 3）

ここでは、バージョン 9.6.1 HotFix 3 の変更内容について説明します。

Business Glossary

ここでは、バージョン 9.6.1 HotFix 3 の Business Glossary の変更内容について説明します。

Business Glossary エクスポートファイル

バージョン 9.6.1 HotFix 3 では、Business Glossary エクスポートファイルのワークシートの順序が変更されました。Microsoft Excel での変更が推奨されないワークシートは非表示になります。最初のワークシートはホームページで、エクスポートファイルのその他のワークシートの簡単が説明が含まれています。

以前は、エクスポートファイルには非表示のワークシートもホームページもありませんでした。

Business Glossary のセキュリティ

バージョン 9.6.1 HotFix 3 では、特定の用語集に対して Analyst ツールで**用語集の管理**特権が割り当てられたユーザーは、その他の用語集のユーザーおよびロール管理を実行できません。

以前は、Analyst ツールで**グロッサリの管理**特権が割り当てられたユーザーは、任意の用語集でユーザーの権限と特権を変更できました。

用語集のインポート

バージョン 9.6.1 HotFix 3 では、Business Glossary に存在しない用語集をインポートすると、Analyst ツールによってインポート中にその用語集が作成されます。用語集をインポートするときに、Analyst ツールによって用語集に存在するカスタムプロパティにエクスポートファイルの値が自動的に取り込まれます。また、インポートプロセスの前にカスタムプロパティがテンプレートに関連付けられていない場合でも、関連テンプレートにカスタムプロパティが関連付けられます。

以前は、Business Glossary に存在しない用語集をインポートする場合は、エクスポートファイルから用語集コンテンツをインポートする前に、Analyst ツールで用語集を作成する必要がありました。Analyst ツールは、カスタムプロパティがテンプレートに関連付けられていない場合は、カスタムプロパティにエクスポートファイルの情報を取り込みませんでした。

シノニム

バージョン 9.6.1 HotFix 3 では、ビジネス用語のシノニムの動作は以下のように変更されています。

- ［シノニム］プロパティで設定した**［リタイア日］**を削除または変更できます。
- **［作成日］**および**［リタイア日］**の設定に日付選択画面を使用する必要はありません。手動で日付を設定できますが、インストールのロケールによって決定される形式である必要があります。
- ビジネス用語を開くときに、シノニムの**［作成日］**が表示されます。

以前は、リタイア日の削除または変更を行うことはできませんでした。日付の設定に使用できるのは日付選択画面のみでした。ビジネス用語の作成日は表示されませんでした。

Informatica トランスフォーメーション

ここでは、バージョン 9.6.1HotFix 3 の Informatica トランスフォーメーションの変更内容について説明します。

アドレスバリデータトランスフォーメーション

ここでは、アドレスバリデータトランスフォーメーションの変更内容について説明します。

- バージョン 9.6.1 HotFix 3 では、アドレスバリデータトランスフォーメーションでバージョン 5.7.0 の Informatica Address Doctor ソフトウェアエンジンを使用します。このエンジンによって、バージョン 9.6.1 HotFix 3 のアドレスバリデータトランスフォーメーションに追加された機能が有効になります。

  以前は、トランスフォーメーションで Informatica Address Doctor ソフトウェアエンジンのバージョン 5.6.0 を使用していました。
- バージョン 9.6.1 HotFix 3 では、フランス語、ドイツ語、またはイタリア語でスイスの住所の市区町村情報を返すようにアドレスバリデータトランスフォーメーションを設定できます。言語を設定するには、［優先される言語］プロパティを使用します。

  以前は、アドレスバリデータトランスフォーメーションはスイスの住所のすべての情報をその住所が属している地域の主要言語で返していました。
- バージョン 9.6.1 HotFix 3 では、アドレスバリデータトランスフォーメーションは住居番号または建物番号を含まない英国の住所のルーフトップレベルのジオコードを返します。

  以前は、トランスフォーメーションは住居番号または建物番号を含む英国の住所のルーフトップレベルのジオコードを返していました。

データプロセッサトランスフォーメーション

ここでは、データプロセッサトランスフォーメーションの変更内容について説明します。

テンプレートを使用した XmlToXlsx

XmlToXlsx ドキュメントプロセッサは、XML ドキュメントを Microsoft Excel .xlsx 形式に変換します。バージョン 9.6.1 HotFix 3 では、**XmlToXlsx** ドキュメントプロセッサで必要に応じて XML ドキュメントに.xlsx テンプレートを使用し、.xlsx ドキュメントを生成できます。

以前は、XML ドキュメントに基づいて.xlsx ドキュメントを生成できました。

Metadata Manager

ここでは、バージョン 9.6.1 HotFix 3 の Metadata Manager の変更内容について説明します。

Business Glossary リソース

バージョン 9.6.1 HotFix3 では、Business Glossary リソースの動作が変更されました。

Business Glossary リソースの以下の動作が変更されました。

Business Glossary **リソースをロードするために必要な特権**

9.6.1 HotFix 3 では、Business Glossary リソースをロードするには、リソースのロード、リソースの管理、およびモデルの表示特権が必要です。

以前は、Business Glossary リソースをロードするには、Metadata Manager サービスのリソースのロードおよびモデルの管理特権が必要でした。

アップグレード後の関連するカタログオブジェクトの移行

バージョン 9.6.1 HotFix 3 では、バージョン 9.5.x からのビジネス用語集のアップグレード後に mmcmd migrateBGLinks コマンドを実行する必要はありません。migrateBGLinks コマンドは、アップグレードしたビジネス用語集の関連するカタログオブジェクトをリストアします。このコマンドは、アップグレード後に初めて Business Glossary リソースをロードするときに自動的に実行されます。

以前は、ビジネス用語集のアップグレードプロセスの最後のステップとして migrateBGLinks コマンドを実行する必要がありました。

カテゴリの関連するカタログオブジェクト

バージョン 9.6.1 HotFix 3 では、カテゴリの関連するカタログオブジェクトは作成できません。ビジネス用語の関連するカタログオブジェクトは引き続き作成できます。

以前は、Metadata Manager でカテゴリを他のカテゴリやビジネス用語集に関連付けることができましたが、カテゴリを他のメタデータオブジェクトに関連付けることはできませんでした。Metadata Manager でカテゴリ対カテゴリまたはカテゴリ対用語集のリレーションを作成した場合、Metadata Manager は Analyst ツールのビジネス用語集でこれらのリレーションを更新しませんでした。

用語対用語、用語対カテゴリ、カテゴリ対用語、またはカテゴリ対カテゴリのリレーションを作成するには、Analyst ツールを使用します。

特殊文字を含むプロパティ名

9.6.1 HotFix 3 では、名前に特殊文字が使用されたカスタムプロパティが含まれる Business Glossary リソースを Metadata Manager でロードできます。ただし、Metadata Manager は名前に特殊文字が使用されたカスタムプロパティを抽出しません。

具体的には、Metadata Manager では名前に次のいずれかの特殊文字が使用されたカスタムプロパティが抽出されません。

~ ' & * ( ) [ ] | \ : ; " ' < > , ? /

以前は、名前にこのいずれかの特殊文字が使用されたカスタムプロパティが含まれる Business Glossary リソースをロードしようとすると、ロードは失敗していました。

Microsoft SQL Server 統合サービスリソース

バージョン 9.6.1 HotFix 3 では、トランスフォーメーションとして使用されるスクリプトコンポーネントのリネージュを Metadata Manager で表示する方法を制御するプロパティ名が、**［トランスフォーメーションスクリプトの非表示］**に変更されました。

以前は、このプロパティ名は**［トランスフォーメーションスクリプト］**でした。

SAP PowerDesigner リソース

バージョン 9.6.1 HotFix 3 では、Sybase PowerDesigner リソースは SAP PowerDesigner リソースと呼ばれます。

権限

バージョン 9.6.1 HotFix 3 では、ユーザーが［**ロード**］タブおよび［**参照**］タブでアクセスできるリソースを権限で制御します。ユーザーがリソースに対してアクションを実行するには、そのリソースに対する適切な特権と権限の両方が必要です。

例えば、ユーザーが［**ロード**］タブでリソースを表示するには、そのリソースに対するリソースの表示特権と読み取り権限が必要です。ユーザーがリソースをロードするには、そのリソースに対するリソースのロード特権と書き込み権限が必要です。ユーザーがリソースを編集するには、そのリソースに対するリソースの管理特権と書き込み権限が必要です。

この変更により、［**ロード**］タブでユーザーに表示されるリソースは［**参照**］タブでユーザーに表示されるリソースと同じになります。ユーザーがすべてのリソースに対して少なくとも読み取り権限を持っている場合にのみ、［**ロード**］タブにすべてのリソースが表示されます。

以前は、［**参照**］タブでユーザーがアクセスできるリソースおよびメタデータオブジェクトは権限によって決定されていましたが、［**ロード**］タブは権限には影響されませんでした。［**参照**］タブに対する権限は変更されていません。

Metadata Manager レポート

バージョン 9.6.1 HotFix 3 では、ドメインを再起動するときに、Metadata Manager サービスを再起動して［**レポートの表示**］ボタンを有効にする必要がなくなりました。ドメインにレポートおよびダッシュボードサービスが含まれている場合、［**レポートの表示**］ボタンは常に有効です。

以前は、ドメインを再起動するときに、Metadata Manager サービスを再起動して［**レポートの表示**］ボタンを有効にする必要がありました。

セキュリティ

ここでは、バージョン 9.6.1 HotFix 3 のセキュリティの変更内容について説明します。

バージョン 9.6.1 HotFix 3 では、RSA 暗号化を使用している場合、512 ビット未満の SSL キーのサポートが廃止されました。この変更は、Informatica ドメイン内の安全な通信、および Web アプリケーションサービスへの安全な接続に影響します。

SSL キーがこの変更の影響を受ける場合は、512 ビット以上の RSA 暗号化ベースの SSL キーを生成するか、別の暗号化アルゴリズムを使用する必要があります。その後、新しいキーを使用して、ドメイン内の安全な通信または Web アプリケーションサービスへの安全な接続に必要なファイルを作成します。Informatica ドメイン内の安全な通信または安全な接続に必要なファイルの詳細については、『*Informatica セキュリティガイド*』を参照してください。

以前は、512 ビット未満を使用する RSA 暗号化ベースの SSL キーがサポートされていました。

リリースタスク（9.6.1 HotFix 3）

ここでは、バージョン 9.6.1 HotFix 3 のリリースタスクについて説明します。

Metadata Manager

ここでは、バージョン 9.6.1 HotFix 3 の Metadata Manager のリリースタスクについて説明します。

ロード特権に関連付けられた権限

バージョン 9.6.1 HotFix 3 では、ユーザーが［**ロード**］タブおよび［**参照**］タブでアクセスできるリソースを権限で制御します。ロード特権グループ内の特権を持つユーザーは、特定のリソースに対してアクションを実行する権限が必要です。例えば、ユーザーがリソースをロードするには、リソースのロード特権とリソースに対する書き込み権限が必要です。

9.6.1 HotFix 3 にアップグレードする場合、または 9.6.1 HotFix 3 を適用する場合には、ロード特権グループ内の特権を持つ各ユーザーの権限を確認する必要があります。リソースに対する適切な権限を持っていないユーザーは、リソースを表示、ロード、または管理できません。

以下の表に、Metadata Manager ウェアハウス内のリソースのインスタンスの管理に必要な特権および権限の一覧を示します。

の特権	含まれる特権	権限	説明
リソースの表示	-	読み取り	ユーザーは、以下のアクションを実行できます。 - Metadata Manager ウェアハウス内のリソースおよびリソースプロパティの表示。 - リソース設定をエクスポートする。 - Metadata Manager エージェントインストーラをダウンロードする。
リソースのロード	リソースの表示	書き込み	ユーザーは、以下のアクションを実行できます。 - Metadata Manager ウェアハウスへのリソースのメタデータのロード。* - データリネージュのために接続されたリソース内のオブジェクト間のリンクの作成。 - リソースに対する検索インデックス処理の設定。 - リソース設定をインポートする。
スケジュールの管理	リソースの表示	書き込み	ユーザーは、以下のアクションを実行できます。 - スケジュールを作成し編集する。 - リソースにスケジュールを追加する。
メタデータのパージ	リソースの表示	書き込み	ユーザーは、Metadata Manager ウェアハウスからリソースのメタデータを削除できます。
リソースの管理	- メタデータのパージ - リソースの表示	書き込み	ユーザーは、リソースを作成、編集、および削除できます。
* Business Glossary リソースのメタデータをロードするには、リソースのロード、リソースの管理、およびモデルの表示特権が必要です。			

Metadata Manager アプリケーションの［**セキュリティ**］タブで権限を設定します。権限の設定の詳細については、『*Informatica 9.6.1 HotFix 3 Metadata Manager 管理者ガイド*』を参照してください。

第 19 章

新機能、変更、リリースタスク（9.6.1 HotFix 2）

この章では、以下の項目について説明します。

- 新機能（9.6.1 HotFix 2）, 234 ページ
- 変更内容（9.6.1 HotFix 2）, 245 ページ
- リリースタスク（9.6.1 HotFix 2）, 250 ページ

新機能（9.6.1 HotFix 2）

ここでは、バージョン 9.6.1 HotFix 2 の新しい機能について説明します。

Big Data

このセクションでは、バージョン 9.6.1 HotFix 2 の新しい Big Data 機能について説明します。

Informatica Analyst

Big Data Edition には次のような Analyst ツールの新機能と拡張機能があります。

Analyst **ツールと** Hadoop **の統合**

バージョン 9.6.1 HotFix 2 より、Analyst ツールを有効にして、特定の Hadoop 配布の Hadoop クラスタと通信できます。アナリストサービスの JVM コマンドラインオプションを構成する必要があります。

詳細については、『*Informatica 9.6.1 HotFix 2 アプリケーションサービスガイド*』を参照してください。

Analyst **ツールの接続**

バージョン 9.6.1 HotFix 2 より、Analyst ツールを使用し、Hive または HDFS のソースとターゲットに接続できます。

詳細については、『*Informatica 9.6.1 HotFix 2 Analyst ユーザーガイド*』をご覧ください。

データウェアハウジング

Big Data Edition にはデータウェアハウジングの新機能と改良点があります。

バイナリデータ型

バージョン 9.6.1 HotFix 2 より、Hive 環境のマッピングでは、バイナリデータを使用する式関数を処理できます。

詳細については、『*Informatica 9.6.1 HotFix 2 Big Data Edition ユーザーガイド*』を参照してください。

タイムスタンプデータ型と日付データ型

バージョン 9.6.1 HotFix 2 より、PowerExchange for Hive はタイムスタンプデータ型と日付データ型をサポートします。

詳細については、『*Informatica 9.6.1 HotFix 2 Big Data Edition ユーザーガイド*』を参照してください。

ファイル形式

バージョン 9.6.1 HotFix 2 より、データプロセッサトランスフォーメーションを使用し、Parquet の入力または出力を読み取ることができます。

Apache Parquet は、Hadoop 環境で処理可能な列型ストレージフォーマットです。Parquet が実装され、複雑な入れ子型のデータ構造にアドレス指定します。Parquet はレコードの分断と組み立てのアルゴリズムを利用します。

詳細については、『*Informatica 9.6.1 HotFix 2 Data Transformation ユーザーガイド*』を参照してください。

データリネージュ

バージョン 9.6.1 HotFix 2 より、Big Data のソースとターゲットでデータリネージ分析を実行できます。Cloudera ナビゲータリソースを作成し、Big Data のソースとターゲットのメタデータを抽出し、そのメタデータでデータリネージュ分析を実行できます。

詳細については、『*Informatica 9.6.1 HotFix 2 Metadata Manager 管理者ガイド*』を参照してください。

Hadoop エコシステム

Big Data Edition には Hadoop エコシステムの新機能と改良点があります。

Hadoop **分布**

バージョン 9.6.1 HotFix 2 より、Big Data Edition では、次の Hadoop ディストリビューションのサポートが追加されました。

- Cloudera CDH 5.2
- Hortonworks HDP 2.2
- IBM BigInsights 3.0.0.0
- Pivotal HD 2.1

Big Data Edition では、次の Hadoop 配布のサポートを廃止しました。

- Cloudera CDH 5.0
- Cloudera CDH 5.1
- Hortonworks HDP 2.1
- Pivotal HD 1.1

詳細については、『*Informatica 9.6.1 HotFix 2 Big Data Edition インストール & 環境設定ガイド*』を参照してください。

バージョン 9.6.1 HotFix 2 より、Big Data Edition は Amazon EC2 の Cloudera CDH クラスタをサポートします。

Kerberos **認証**

バージョン 9.6.1 HotFix 2 より、ネイティブ環境のユーザー偽装を構成できます。ユーザー偽装を構成すると、複数のユーザーがマッピングを実行したり、Kerberos 認証を使用する Big Data のソースとターゲットに接続したりできます。

詳細については、『Informatica *9.6.1 Big Data Edition ユーザーガイド*』を参照してください。

パフォーマンス最適化

Big Data Edition はパフォーマンス最適化に関して次の新機能を備えています。

一時的なステージングテーブルでデータを圧縮する

バージョン 9.6.1 HotFix 2 より、一時的なステージングテーブルでデータ圧縮を有効にして、Hive 環境でマッピングを実行するときのパフォーマンスを最適化できます。一時的なステージングテーブルでデータ圧縮を有効にすると、マッピングパフォーマンスが改善されることがあります。

一時的なステージングテーブルでデータ圧縮を有効にするには、Hadoop クラスタが使用するコーデックスクラス名を使用するように Hive 接続を構成する必要があります。一時的なステージングテーブルでデータ圧縮を有効にするように Hadoop クラスタを構成する必要もあります。

詳細については、『*Informatica 9.6.1 HotFix 2 Big Data Edition ユーザーガイド*』を参照してください。

並列ソート

バージョン 9.6.1 HotFix 2 より、マッピングでソータトランスフォーメーションを使用すると、Hadoop クラスタにマッピングロジックをプッシュするとき、データ統合サービスではデフォルトで並列ソートが有効になります。

詳細については、『*Informatica 9.6.1 HotFix 2 Big Data Edition ユーザーガイド*』を参照してください。

Informatica Analyst の Hadoop ソースでプロファイル実行

バージョン 9.6.1 HotFix 2 より、Analyst ツールで、Hive ソースと HDFS ソースを対象に、カラムプロファイル、ルールプロファイル、データドメイン検出を作成し、実行できます。

詳細については、『*Informatica 9.6.1 HotFix 2 Big Data Edition ユーザーガイド*』を参照してください。

Business Glossary

ここでは、バージョン 9.6.1 HotFix 2 の新しい Business Glossary 機能について説明します。

アセットの更新

バージョン 9.6.1 HotFix 2 より、Glossary ワークスペースのアセットを更新できます。アセットを更新すると、アセットを開いた後にコンテンツマネージャーが行ったプロパティ変更が表示されます。

詳細については、『*Informatica 9.6.1 HotFix 2 Business Glossary ガイド*』を参照してください。

重複するアセット名を警告

バージョン 9.6.1 HotFix 2 より、用語集にすでに存在する名前でアセットを作成しようとすると、Analyst ツールに警告が表示されるようになりました。この警告は無視し、重複する名前でアセットを作成できます。

詳細については、『*Informatica 9.6.1 HotFix 2 Business Glossary ガイド*』を参照してください。

Business Glossary **デスクトップの** LDAP **認証**

バージョン 9.6.1 HotFix 2 より、サーバー設定を構成し、アナリストサービスをホストするマシンでビジネス用語集を参照するように Business Glossary デスクトップを有効にするとき、LDAP 認証を使用できます。

詳細については、『*Informatica 9.6.1 HotFix 2 Business Glossary デスクトップのインストール＆環境設定ガイド*』を参照してください。

コマンドラインプログラム

このセクションでは、バージョン 9.6.1 HotFix 2 の Informatica コマンドラインプログラムの新規および更新されたコマンドとオプションについて説明します。

isp コマンド

次の表はバージョン 9.6.1 HotFix 2 で更新された isp コマンドの説明をまとめたものです。

コマンド	説明
UpdateGrid	以下の新しいオプションが含まれます。 -ul。 オプション。グリッドに前に割り当てられたノードのリストを置換する代わりに、「-nl」オプションの値で現在のノードリストを更新します。「true」の場合、infacmd は、「-nl」オプションで指定されたノードリストと前にグリッドに割り当てられたノードでノードリストを更新します。「false」の場合、infacmd はノードリストを「-nl」オプションで指定されたノードリストで置換します。デフォルトは false です。 以下の更新されたオプションが含まれます。 -nl。 必須。グリッドに割り当てるノードの名前。このノードリストは、定義されている「-nl」オプションに基づいてグリッドに前に割り当てられたノードリストを置換または更新します。 「-ul」オプションを指定した場合、「-nl」は、グリッドに前に割り当てられたノードリストを更新します。「-ul」オプションを指定しない場合、「-nl」は、グリッドに前に割り当てられたノードリストを置換します。

Data Quality アクセラレータ

このセクションでは、バージョン 9.6.1 HotFix 2 の新しいアクセラレータ機能について説明します。

更新された参照データセット

バージョン 9.6.1 HotFix 2 では、データを分析および強化するためにアクセラレータルールで使用される参照データセットが更新されました。

詳細については、『*Informatica Data Quality 9.6.1 HotFix 2 アクセラレータガイド*』を参照してください。

Informatica Developer

ここでは、バージョン 9.6.1 HotFix 2 の新しい Informatica Developer 機能について説明します。

Microsoft SQL Server **日時 2 データ型**

バージョン 9.6.1 HotFix 2 より、Informatica Developer は Microsoft SQL Server 日時 2 データ型をサポートします。日時 2 データ型は「Jan 1, 0001 A.D. 00:00:00～Dec 31, 9999 A.D. 23:59:59.9999999」の範囲の値を格納できます。

Informatica ドメイン

このセクションでは、バージョン 9.6.1 HotFix 2 の新しい Informatica ドメイン機能について説明します。

Amazon EC2 **の** Informatica

バージョン 9.6.1 HotFix 2 より、Informatica サービスを Amazon EC2 の複数のノードで設定し、起動できます。最大 4 つのノードを含む Informatica ドメインを起動できます。

Informatica DiscoveryIQ

バージョン 9.6.1 HotFix 2 より、製品の使用状況を診断するツールである Informatica DiscoveryIQ では、データの使用状況とシステムの統計値に関するレポートを Informatica に定期的に送信できるようになりました。データのコレクションおよびアップロードはデフォルトで有効になっています。使用統計値を Informatica に送信しないことを選択できます。

Informatica トランスフォーメーション

ここでは、バージョン 9.6.1 HotFix 2 の新しい Informatica トランスフォーメーション機能について説明します。

アドレスバリデータトランスフォーメーション

このセクションでは、バージョン 9.6.1 HotFix 2 のアドレスバリデータトランスフォーメーションの新機能について説明します。

繁体北京語で台湾の住所をサポート

バージョン 9.6.1 HotFix 2 より、アドレスバリデータトランスフォーメーションを使用し、繁体北京語の台湾の住所を検証できます。［個別］または［複数行］グループのポートを使用し、入力住所を定義できます。

繁体北京語の住所を 1 行に入力するには、［フォーマットされたアドレス行 1］ポートを使用します。

米国のアドレス検証の拡張機能

バージョン 9.6.1 HotFix 2 より、住所に有効な郵便番号と市区町村が含まれるとき、アドレスバリデータトランスフォーメーションは国名を返します。住所の Ix 一致状況に関係なく、トランスフォーメーションは国名を追加できます。トランスフォーメーションは［都道府県］出力ポートにこの名前を追加します。州の識別子が住所にない場合、トランスフォーメーションは［都道府県］ポートに州の識別子を追加します。

住居番号にハイフンが付く住所を検証するとき、トランスフォーメーションは住居番号の後半を［棟］ポートに移します。

要素記述子の構成可能出力フォーマット

バージョン 9.6.1 HotFix 2 より、アドレスバリデータトランスフォーメーションを構成し、次の要素の出力フォーマットを指定できます。

- オーストラリアとニュージーランドの番地、建物、棟の記述子
- ドイツの住所の番地記述子

デフォルトでは、トランスフォーメーションは、参照データベースが住所に指定する記述子を返します。記述子の出力フォーマットを指定するには、トランスフォーメーションの *［グローバル優先記述子］* プロパティを構成します。

イギリスの住所の住所キーをサポート

バージョン 9.6.1 HotFix 2 より、イギリスの住所の住所キーを返すことができます。住所キーとは、英国王立郵便局の郵便番号ファイルの住所を識別する 8 桁の数値です。住所キーを住所に追加するには、［住所キー］ポートを選択します。住所キーを返すために、トランスフォーメーションはイギリスの補足参照データを読み込みます。

日本の拡張データをサポート

バージョン 9.6.1 HotFix 2 より、アドレスバリデータトランスフォーメーションは、日本の住所で区画情報を意味する *「番」* を検証できます。アドレスバリデータトランスフォーメーションは、番地などの従属データを［町名 2］またはそれに等しいポートに書き込みます。

日本の住所では、住所要素が大きい順に、つまり、最も大きいまたは最も全般的な単位から最も小さいまたは最も限定的な単位の順に表示されます。住所において、*「番」*という要素は *「丁目」*という要素の後に位置し、「番」の次に *「号」*という要素が続きます。

日本のアドレス検証の拡張機能

バージョン 9.6.1 HotFix 2 より、アドレスバリデータトランスフォーメーションを構成し、日本の住所に「街区」コードを追加できます。住所にこのコードを追加するには、［街区コード］ポートを選択します。

現在の「町名字」コードと「街区」コードを 1 つの文字列に結合し、コードが識別する住所を返すことができます。完全な住所を返すには、［日本の町名字と街区コード］ポートを選択し、住所コードのルックアップモードで実行するようにトランスフォーメーションを構成します。

日本の参照データには「街区」コード、現在の「町名字」コード、初期のバージョンの「町名字」コードが住所に含まれます。*［拡張アーカイブのマッチング］*プロパティを *［オン］*に設定した場合、トランスフォーメーションはすべてのコードを出力住所に書き込みます。

イスラエルの 7 桁郵便番号をサポート

バージョン 9.6.1 HotFix 2 より、アドレスバリデータトランスフォーメーションは、イスラエルの住所としてイスラエルの郵政事業が定義する 7 桁の郵便コードをサポートします。この 7 桁の郵便コードは、イスラエルの郵政事業が以前に定義していた 5 桁の郵便コードを置き換えます。たとえば、イスラエルのナザレスの 7 桁郵便コードは 1623726 です。 以前、ナザレスの郵便コードは 16237 でした。

ドイツ、オーストリア、スイスのアドレス検証の拡張機能

バージョン 9.6.1 HotFix 2 より、アドレスバリデータトランスフォーメーションは、ドイツ、オーストリア、スイスの住所にある *Zimmer（部屋）*や *App（アパート）*などのキーワードを認識します。アドレスバリデータトランスフォーメーションは出力住所の［棟］ポートにこのキーワードを書き込みます。

フランスの住所の IRIS コードをサポート

バージョン 9.6.1 HotFix 2 より、アドレスバリデータトランスフォーメーションを構成し、フランスの住所に IRIS コードを追加できます。住所にこのコードを追加するには、［INSEE-9 コード］出力ポートを選択します。

IRIS コードは、フランスのコミューンの統計単位を一意に識別します。このコードは INSEE（フランス国立統計経済研究所コード）により定義されています。フランスには約 16,000 の IRIS 単位があります。

イギリスのルーフトップジオコーディングをサポート

バージョン 9.6.1 HotFix 2 より、アドレスバリデータトランスフォーメーションを構成し、イギリスの住所のルーフトップ（屋根）レベルのジオコードを返すことができます。ルーフトップジオコードは、ある敷地または区画の主要な建物の中心を識別します。

ルーフトップジオコードを生成するには、トランスフォーメーションの *［ジオコードデータ型］*プロパティを *［到着点］*に設定します。イギリスの到着点参照データもインストールする必要があります。

スペインの住所参照データを改善

バージョン 9.6.1 HotFix 2 より、Informatica はスペインの住所参照データを更新しました。アドレスバリデータトランスフォーメーションでは、更新された住所参照データを使用し、スペインの住所の棟レベル情報を検証できます。

トルコのアドレス検証と住所参照を改善

バージョン 9.6.1 HotFix 2 より、Informatica はトルコの住所参照を更新しました。

アドレスバリデータトランスフォーメーションでは、トルコの住所を検証するとき、次の操作も実行できます。

- トランスフォーメーションは［送付先住所 1］ポートの建物名と町名を識別できます。

- トランスフォーメーションは、棟要素が番号のとき、建物要素と棟要素の間にスラッシュ記号（/）を追加します。

ブラジルのアドレス検証を改善

バージョン 9.6.1 HotFix 2 より、Informatica はブラジルの住所のアドレス検証に次の拡張機能を追加しました。

- アドレスバリデータトランスフォーメーションは、［送付先住所］ポートと［フォーマットされたアドレス行］ポートに 3 つ目のレベルの棟情報を追加できます。ブラジルの住所システムには 3 レベルの棟情報が含まれます。
- アドレスバリデータトランスフォーメーションは［町名の追加情報］ポートのキロメートル情報を検証します。

  注: アドレスバリデータトランスフォーメーションでは、ブラジルのキロメートル情報で小数点ではなくコンマが使われます。

詳細については、『*Informatica 9.6.1 HotFix 2 アドレスバリデータポートリファレンス*』と『*Informatica 9.6.1 HotFix 2 Developer トランスフォーメーションガイド*』を参照してください。

データプロセッサトランスフォーメーション

このセクションでは、バージョン 9.6.1 HotFix 2 のデータプロセッサトランスフォーメーションの新機能について説明します。

RunMapplet

RunMapplet アクションを実行すると、データプロセッサトランスフォーメーションの一部としてマップレットが呼び出されて、実行されます。RunMapplet の出力は、RunMapplet アクションで指定されたデータホルダに読み込まれます。 データマスキング、データ品質、データ検索、通常はリレーショナルトランスフォーメーションに関連するその他のアクティビティなどのタスクを実行するには、RunMapplet アクションを使用します。

検証ルールエディタ

検証ルールエディタを使用し、XML データを検証するユーザー定義ルールを作成できます。データがルールに違反すると、XML 検証レポートが生成されます。

Parquet **の入力または出力**

新しいトランスフォーメーションウィザードを使用し、Parquet の入力または出力でデータプロセッサトランスフォーメーションを作成できます。

XMap **ソースまたはターゲットの** XMap **変数の作成**

XMap ソースまたはターゲットとして機能する XMap 変数を作成できます。

詳細については、『*Informatica 9.6.1 HotFix 2 Data Transformation ユーザーガイド*』を参照してください。

Metadata Manager

このセクションでは、バージョン 9.6.1 HotFix 2 の新しい Metadata Manager 機能について説明します。

Cloudera ナビゲータリソース

バージョン 9.6.1 HotFix 2 より、Cloudera ナビゲータリソースを作成し、Cloudera ナビゲータのメタデータコンポーネントからメタデータを抽出するように構成できます。 Cloudera Manager が管理する Hadoop クラスタごとに Cloudera ナビゲータリソースを 1 つ作成できます。

Cloudera ナビゲータリソースの作成と構成に関する詳細については、『*Informatica 9.6.1 HotFix 2 Metadata Manager 管理者ガイド*』を参照してください。

サポートされているメタデータソースバージョンの詳細については、次の Informatica Network で「*PCAE Metadata Manager XConnect Support*」という Product Availability Matrix を参照してください。
https://network.informatica.com/community/informatica-network/product-availability-matrices/overview

Microsoft SQL Server 統合サービス（SSIS）リソース

バージョン 9.6.1 HotFix 2 より、Microsoft SQL Server 統合サービスリソースを作成し、Microsoft SQL Server 統合サービスパッケージからメタデータを抽出するように構成できます。Metadata Manager は Microsoft SQL Server リポジトリのパッケージまたはパッケージ（.dtsx）ファイルのパッケージからメタデータを抽出できます。

Microsoft SQL Server 統合サービスリソースの作成と構成に関する詳細については、『*Informatica 9.6.1 HotFix 2 Metadata Manager 管理者ガイド*』を参照してください。

サポートされているメタデータソースバージョンの詳細については、次の Informatica Network で「*PCAE Metadata Manager XConnect Support*」という Product Availability Matrix を参照してください。
https://network.informatica.com/community/informatica-network/product-availability-matrices/overview

Embarcadero ERStudio リソース

バージョン 9.6.1 HotFix 2 より、Embarcadero ERStudio からの添付ファイルのインポートを Metadata Manager に禁止できます。 添付ファイルは UDP（ユーザー定義プロパティ）とも呼ばれています。Metadata Manager に UDP のインポートを禁止するには、リソースを構成するとき、**[UDP 抽出のスキップ]** プロパティを有効にします。

Embarcadero ERStudio リソースの構成に関する詳細については、『*Informatica 9.6.1 HotFix 2 Metadata Manager 管理者ガイド*』を参照してください。

PowerCenter リソース

バージョン 9.6.1 HotFix 2 より、PowerCenter リポジトリデータベースタイプが IBM DB2 for LUW であり、データベースユーザー名がスキーマ名と異なるとき、PowerCenter リソースを作成し、読み込むことができます。データベースユーザー名と異なるスキーマ名を指定するには、PowerCenter リソースを構成するとき、**[スキーマ名]** プロパティにスキーマ名を入力します。

PowerCenter リソースの構成の詳細については、『*Informatica 9.6.1 HotFix 2 Metadata Manager 管理者ガイド*』を参照してください。

影響のサマリの PowerCenter フラットファイル

バージョン 9.6.1 HotFix 2 より、影響のサマリに PowerCenter リソースで使用されるフラットファイルが一覧表示されるようになりました。

影響のサマリの表示に関する詳細については、『*Informatica 9.6.1 HotFix 2 Metadata Manager ユーザーガイド*』を参照してください。

PowerCenter

ここでは、バージョン 9.6.1 HotFix 2 の新しい PowerCenter 機能について説明します。

PowerCenter アップグレード

PowerCenter をホットフィックスまたは同じバージョンの基本リリースからバージョン 9.6.1 HotFix 2 にアップグレードした場合は、AD50.cfg ファイルが維持されます。このアップグレード処理では、server/bin ディレ

クトリ内の AD50.cfg ファイルは維持され、同じディレクトリ内に AD50.cfg.bak という名前の空の構成ファイルが作成されます。

以前の PowerCenter バージョンからアップグレードした場合は、server/bin ディレクトリに空の AD50.cfg ファイルが書き込まれます。このアップグレード処理では、検出されたすべての AD50.cfg ファイルのバックアップコピーがディレクトリ内に作成されます。

詳細については、『*Informatica 9.6.1 HotFix 2 アップグレードガイド*』を参照してください。

PowerExchange

ここでは、バージョン 9.6.1 HotFix 2 の新しい PowerExchange 機能について説明します。

PowerExchange infacmd pwx コマンド

一部の PowerExchange ロガーサービス infacmd pwx コマンドでは新しいパラメータを利用できます。

infacmd pwx CreateLoggerService コマンドと infacmd pwx UpdateLoggerService コマンドの「-StartParameters」オプションに次の任意の起動パラメータが追加されました。

encryptepwd=*encryption_password*

PowerExchange ロッガーログファイルの暗号化を有効にする暗号化形式のパスワードです。このパスワードが指定されると、PowerExchange ロッガーはロッガーログファイル別に一意の暗号化キーを生成できます。パスワードは CDCT ファイルに暗号化形式で保存されます。このパスワードは CDCT バックアップファイルに格納されず、PowerExchange PWXUCDCT ユーティリティで生成した CDCT レポートに表示されません。この暗号化パスワードを使用するには、「-StartParameters」オプションに「coldstart=Y」を指定する必要もあります。

詳細については、『*Informatica 9.6.1 HotFix 2 コマンドリファレンス*』を参照してください。

PowerExchange ロッガーログファイルの暗号化

PowerExchange ロガーサービスのログファイルを暗号化し、ログファイルに保存されている機密データへの無許可アクセスを防止できるようになりました。

PowerExchange ロガーサービスのログファイル暗号化を有効にするには、PowerExchange ロガーサービスのコールドスタートの起動パラメータで暗号化パスワードを指定します。暗号化パスワードは次のいずれかの方法で入力します。

- infacmd pwx CreateListenerService または infacmd pwx UpdateListenerService コマンドで、「-StartParameters」オプションに「encryptepwd」パスワードを追加します。
- Informatica Administrator で、［PowerExchange ロガーサービス構成］プロパティを編集します。**［開始パラメータ］**プロパティで、「encryptepwd」パスワードを追加します。

注: PowerExchange ロッガーは AES 暗号化アルゴリズムを使用します。PowerExchange ロッガー設定ファイルの ENCRYPTOPT 文に AES アルゴリズムの種類を設定できます。

PowerExchange アダプタ

ここでは、バージョン 9.6.1 HotFix 2 の新しい PowerExchange アダプタ機能について説明します。

PowerExchange Adapters for Informatica

ここでは、バージョン 9.6.1 HotFix 2 の新しい Informatica アダプタ機能について説明します。

PowerExchange for Cassandra

バージョン 9.6.1 HotFix 2 より、Cassandra データベースとの間でデータを読み取ったり書き込んだりするときの一貫性レベルを微調整できます。一貫性レベルにより、すべてのレプリカにおけるデータの同期方法が決定されます。データの正確性や応答時間の要件に基づき、必要な一貫性レベルを設定できます。

詳細については、『*Informatica PowerExchange for Cassandra 9.6.1 HotFix 2 ユーザーガイド*』を参照してください。

PowerExchange for LinkedIn

バージョン 9.6.1 HotFix 2 より、PowerExchange for LinkedIn では、HTTPS URL を利用し、LinkedIn への API 呼び出しがすべて保護されます。

詳細については、『*Informatica PowerExchange for LinkedIn 9.6.1 HotFix 2 ユーザーガイド*』を参照してください。

PowerExchange for DataSift

バージョン 9.6.1 HotFix 2 では、PowerExchange for DataSift に次の新機能および改良点が組み込まれています。

- DataSift バッファからデータを取得できます。
- 履歴クエリを一時停止し、再開できます。
- 接続に失敗した場合に DataSift との接続を再確立する試行回数の最大値を設定できます。

詳細については、『*Informatica PowerExchange for DataSift 9.6.1 HotFix 2 ユーザーガイド*』を参照してください。

PowerExchange for Hive

バージョン 9.6.1 HotFix 2 では、PowerExchange for Hive に次の新機能および改良点が組み込まれています。

- Informatica のユーザー定義関数を利用し、Hive 環境でバイナリデータ型を変換できます。
- PowerExchange for Hive はタイムスタンプデータ型を含むソースおよびターゲットを処理します。タイムスタンプデータ型の形式は「YYYY-MM-DD HH:MM:SS.fffffffff」です。タイムスタンプデータ型の精度は 29 であり、位取りは 9 です。
- PowerExchange for Hive は日付データ型を含むソースおよびターゲットを処理します。日付データ型の範囲は「0000-01-01～9999-12-31」です。 形式は「YYYY-MM-DD」です。 日付データ型の精度は 10 であり、位取りは 0 です。

詳細については、『*Informatica PowerExchange for Hive 9.6.1 HotFix 2 ユーザーガイド*』を参照してください。

PowerExchange for MongoDB

バージョン 9.6.1 HotFix 2 では、MongoDB ODBC ドライバによって、配列およびネストされた配列を含むカラムごとに仮想テーブルが作成されます。MongoDB ODBC ドライバを使用すると、ネストされたカラムの読み取りを 5 段階まで、ネストされたカラムの書き込みを 3 段階まで行うことができます。

詳細については、『*Informatica PowerExchange for MongoDB 9.6.1 HotFix 2 ユーザーガイド*』を参照してください。

PowerExchange for Salesforce

バージョン 9.6.1 HotFix 2 では、PowerExchange for Salesforce に次の新機能および改良点が組み込まれています。

- CreatedDate フィールドと SysModstamp フィールドを含む複製可能な Salesforce オブジェクトから変更されたデータをキャプチャするように、PowerExchange for Salesforce を構成することができます。
- PowerExchange for Salesforce を使用し、Salesforce API の v30 と v31 に接続できます。
- データ統合サービスはフィルタトランスフォーメーションロジックを Salesforce のソースにプッシュできます。

詳細については、『*Informatica PowerExchange for Salesforce 9.6.1 HotFix 2 ユーザーガイド*』を参照してください。

PowerExchange Adapters for PowerCenter

ここでは、バージョン 9.6.1 HotFix 2 の新しい PowerCenter アダプタ機能について説明します。

PowerExchange for Cassandra

バージョン 9.6.1 HotFix 2 より、Cassandra データベースとの間でデータを読み取ったり書き込んだりするときの一貫性レベルを微調整できます。一貫性レベルにより、すべてのレプリカにおけるデータの同期方法が決定されます。データの正確性や応答時間の要件に基づき、必要な一貫性レベルを設定できます。

詳細については、『*Informatica PowerExchange for Cassandra 9.6.1 HotFix 2 PowerCenter 用ユーザーガイド*』を参照してください。

PowerExchange for MongoDB

バージョン 9.6.1 HotFix 2 では、MongoDB ODBC ドライバによって、配列およびネストされた配列を含むカラムごとに仮想テーブルが作成されます。MongoDB ODBC ドライバを使用すると、ネストされたカラムの読み取りを 5 段階まで、ネストされたカラムの書き込みを 3 段階まで行うことができます。

詳細については、『*Informatica PowerExchange for MongoDB 9.6.1 HotFix 2 PowerCenter 用ユーザーガイド*』を参照してください。

PowerExchange for Salesforce Analytics

バージョン 9.6.1 HotFix 2 より、PowerExchange for Salesforce Analytics を使用し、Salesforce Analytics にデータを書き込むことができます。 その後、Salesforce Analytics データベースでクエリを実行し、データを分析できます。

詳細については、『*Informatica PowerExchange for Salesforce Analytics 9.6.1 HotFix 2 PowerCenter 用ユーザーガイド*』を参照してください。

PowerExchange for Vertica

バージョン 9.6.1 HotFix 2 では、PowerExchange for Vertica で次のタスクを実行できます。

- Target Designer で Vertica ターゲットを作成できます。
- リレーショナルモードを使用し、Vertica ソースから大量のデータを読み取ることができます。リレーショナルモードでデータを読み取るには、Vertica リレーショナル接続を作成し、リレーショナルリーダーを使用するセッションを構成する必要があります。
- リレーショナルモードを使用し、Vertica ターゲットのデータを更新または削除できます。リレーショナルモードでデータを書き込むには、Vertica リレーショナル接続を作成し、リレーショナルライターを使用するセッションを構成する必要があります。
- バルクモードを使用して大量のデータを Vertica ターゲットに書き込むとき、ステージングファイルを作成するようにセッションを構成することができます。UNIX オペレーティングシステムで、ファイルステージ

ングを有効にするとき、GZIP 形式でデータを圧縮することもできます。データを圧縮することで、ネットワークで転送するデータのサイズを減らし、セッションのパフォーマンスを上げることができます。

- グリッドでセッションを実行し、セッションパフォーマンスを上げることができます。
- PowerCenter 統合サービスでは、ネイティブドライバを使用する Vertica ソースとターゲットにトランスフォーメーションロジックをプッシュできます。詳細については、『*Informatica PowerCenter 9.6.1 HotFix 2 上級ワークフローガイド*』を参照してください。

詳細については、『*Informatica PowerExchange for Vertica 9.6.1 HotFix 2 PowerCenter 用ユーザーガイド*』を参照してください。

ワークフロー

このセクションでは、バージョン 9.6.1 HotFix 2 の新しいワークフロー機能について説明します。

Amazon Redshift のプッシュダウンの最適化

バージョン 9.6.1 HotFix 2 より、PowerCenter 統合サービスでは、接続タイプが ODBC のとき、Amazon Redshift のソースとターゲットにトランスフォーメーションロジックをプッシュできます。

詳細については、『*Informatica PowerCenter 9.6.1 HotFix 2 上級ワークフローガイド*』を参照してください。

Teradata 配列挿入をサポート

バージョン 9.6.1 HotFix 2 より、ODBC 接続を使用して Teradata ターゲットに接続するとき、行ごとにデータを挿入するのではなく、Teradata ターゲットにデータの配列を挿入できます。データの配列を挿入することで、セッションのパフォーマンスが上がります。

ODBC 接続で Teradata ターゲットにデータの配列を挿入するには、セッションレベルまたは PowerCenter 統合サービスレベルで［OptimizeTeradataWrite］カスタムプロパティを構成し、その値を「1」に設定します。

詳細については、『*Informatica PowerCenter 9.6.1 HotFix 2 ワークフロー基本ガイド*』を参照してください。

変更内容（9.6.1 HotFix 2）

ここでは、バージョン 9.6.1 HotFix 2 の変更内容について説明します。

接続性

このセクションでは、バージョン 9.6.1 HotFix 2 で変更された接続性について説明します。

Sybase IQ 外部ローダーの接続属性

バージョン 9.6.1 HotFix 2 より、PowerCenter はデフォルトで Sybase IQ データベースバージョン 16.0 に接続できます。Informatica は次の Sybase IQ 外部ローダー接続属性のサポートを終了しました。Sybase IQ がバージョン 16.0 からこれらの接続属性を利用していないことによります。

- ブロック要素
- ブロックサイズ

バージョン 9.6.1 HotFix 2 にアップグレードした後、16.0 より前の Sybase IQ データベースバージョンに接続しているときに接続属性の「ブロック要素」と「ブロックサイズ」を利用する場合、［SybaseIQPre16VersionSupport］カスタムプロパティを構成し、その値を［はい］に設定します。

Informatica Analyst

次の変更は Informatica Analyst に適用されます。

- 9.6.1 HotFix 2 より、Analyst ツールは、モデルリポジトリオブジェクトを所有する、または最近更新したユーザーの氏名を表示します。氏名はユーザーを識別する場所に表示されます。たとえば、ライブラリワークスペースのアセット詳細です。

  以前は、Analyst ツールでは、ユーザーのログイン名はライブラリワークスペースとその他の場所に表示されました。

  ユーザーに保存されている氏名、ログイン名、電子メールアドレスを表示するには、氏名にカーソルを合わせます。
- 9.6.1 HotFix 2 より、Analyst ツールのフィルタ操作でユーザーの氏名を選択できます。

  以前は、Analyst ツールのフィルタ操作でユーザーのログイン名を選択しました。

Informatica トランスフォーメーション

このセクションでは、バージョン 9.6.1 HotFix 2 における Informatica トランスフォーメーションの変更点について説明します。

アドレスバリデータトランスフォーメーション

次の変更はアドレスバリデータトランスフォーメーションに適用されます。

- バージョン 9.6.1 HotFix 2 では、アドレスバリデータトランスフォーメーションでバージョン 5.6.0 の Informatica Address Doctor ソフトウェアエンジンを使用します。このエンジンで有効になる新機能は、バージョン 9.6.1 HotFix 2 のアドレスバリデータトランスフォーメーションで使用することができます。

  以前は、トランスフォーメーションで Informatica Address Doctor ソフトウェアエンジンのバージョン 5.5.0 を使用していました。
- バージョン 9.6.1 HotFix 2 より、アドレスバリデータトランスフォーメーションは、提案リストモードで米国の住所データを検証するとき、国情報と棟情報を返すことができます。トランスフォーメーションは［都道府県 2］ポートで国情報を返します。トランスフォーメーションは［棟］ポートで建物以降の情報を返します。

  トランスフォーメーションは、バッチモード、認証モード、対話モードで住所データを検証するとき、引き続き国情報と建物以降の情報を返します。

  以前は、トランスフォーメーションは提案リストモードでは米国住所データの情報を返しませんでした。
- バージョン 9.6.1 HotFix 2 より、*［フランス国立統計経済研究所コード］* ポート名が *INSEE 9-Code* に変わります。［フランス国立統計経済研究所コード］ポートを使用するアドレスバリデータトランスフォーメーションの構成を更新する必要はありません。
- バージョン 9.6.1 HotFix 2 より、すべての［市区町村の正式表記］ポート、［市区町村名］ポート、［市区町村優先名］ポートの精度が 100 になります。

  以前、ポートの精度は 50 でした。

データプロセッサトランスフォーメーション

バージョン 9.6.1 HotFix 2 より、階層入力をリレーショナル出力に変換するデータプロセッサトランスフォーメーションのパフォーマンスが大幅に改善されました。

XML 入力のパフォーマンスをさらに上げるには、XML 入力がすでに正規化されているとき、［設定］タブの［XML 入力の正規化］設定を消去します。

ディシジョントランスフォーメーション

バージョン 9.6.1 HotFix 2 より、ディシジョントランスフォーメーションの REPLACESTR()関数で 1024 の最大精度を設定できます。

以前は、この関数に設定できる最大精度は 512 でした。

Metadata Manager

ここでは、バージョン 9.6.1 HotFix 2 の Metadata Manager への変更内容について説明します。

Business Glossary リソース

バージョン 9.6.1 HotFix 2 より、ビジネス用語集リソースが次の点で変更されました。

- ビジネス用語集リソースを読み込むとき、Metadata Manager は、非公開カテゴリの公開ビジネス用語を抽出します。以前は、Metadata Manager は、用語が属するカテゴリが非公開の場合、公開ビジネス用語を抽出しませんでした。
- Metadata Manager にはビジネス用語とカテゴリの監査証跡情報が表示されなくなりました。ビジネス用語とカテゴリの監査証跡情報を表示するには、Analyst ツールでオブジェクト履歴を表示します。

Metadata Manager コマンドラインプログラム

バージョン 9.6.1 HotFix 2 より、Metadata Manager リポジトリコマンドの動作とオプションが変更されました。また、一部のコマンドが mmcmd コマンドラインプログラムから mmRepoCmd コマンドラインプログラムに移されました。

次の mmRepoCmd コマンドの動作が変更されました。

restoreRepository

Metadata Manager リポジトリコンテンツをバックアップファイルからリストアします。リポジトリコンテンツを空のリポジトリにリストアできます。以前は、このコマンドを実行する前にリポジトリコンテンツを作成する必要がありました。このコマンドのオプションは変更されていません。

次のコマンドは mmcmd から mmRepoCmd に移されました。

createRepository

Metadata Manager ウェアハウステーブルを作成し、メタデータソースのモデルを Metadata Manager リポジトリにインポートします。このコマンドを実行する前に Metadata Manager サービスを有効にする必要があります。

Informatica サービス、Informatica クライアント、Informatica ユーティリティでインストールされた mmRepoCmd インスタンスからこのコマンドを実行できます。以前は、Informatica サービスでインストールされた mmRepoCmd インスタンスからこのコマンドを実行できました。

このコマンドのオプションは変更されました。ドメインユーザーではなく、Metadata Manager ユーザーに対してコマンドオプションを入力します。また、PowerCenter リポジトリにコマンドオプションを入力する必要はなくなりました。Metadata Manager サービスプロセスにより、Metadata Manager サービスを起動すると、PowerCenter リポジトリコンテンツがリストアされます。

以下の表に新しいコマンドのオプションを示します。

オプション	説明
-url	Metadata Manager アプリケーションを実行する Metadata Manager サービスのホスト名とポート番号。
--user	Metadata Manager ユーザ名。
--encryptedPassword	Metadata Manager ユーザーパスワードの暗号化されたパスワードのフラグ
--password	Metadata Manager ユーザのパスワード。
--namespace	Metadata Manager ユーザーが属しているセキュリティドメインの名前。

次の表は、削除されたコマンドオプションをまとめたものです。

オプション	説明
--securityDomain	Informatica ドメインユーザーが属するセキュリティドメインの名前。
--domainUser	Informatica ドメインへの接続に使用するユーザー名。
--domainPassword	Informatica ドメインユーザーのパスワード。
-pcRepositoryName	メタデータを Metadata Manager ウェアハウスにロードする際に使用されるメタデータオブジェクトを含む PowerCenter リポジトリの名前。
-pcRepositoryUser	PowerCenter リポジトリのユーザアカウント。Repository Service 用に設定したリポジトリユーザアカウントを使用します。
-pcRepositoryNamespace	PowerCenter リポジトリユーザーが属しているセキュリティドメインの名前。
-pcRepositoryPassword	PowerCenter リポジトリユーザのパスワード。
-restorePCRepository	PowerCenter リポジトリのリポジトリバックアップファイルをリストアし、PowerCenter リポジトリデータベースで Metadata Manager が使用するオブジェクトを作成します。

以下の表に、変更されたコマンドオプションを示します。

オプション	説明
--keyTab	このオプションは、ドメインユーザーではなく、Metadata Manager ユーザーのキータブファイルのパスとファイル名を指定します。

deleteRepository

すべてのメタデータおよびリポジトリデータベーステーブルを含む Metadata Manager リポジトリコンテンツを削除します。

Informatica サービス、Informatica クライアント、Informatica ユーティリティでインストールされた mmRepoCmd インスタンスからこのコマンドを実行できます。以前は、Informatica サービスでインストールされた mmRepoCmd インスタンスからこのコマンドを実行できました。

このコマンドのオプションは変更されました。ドメインユーザーではなく、Metadata Manager ユーザーに対してコマンドオプションを入力します。

以下の表に新しいコマンドのオプションを示します。

オプション	説明
-url	Metadata Manager アプリケーションを実行する Metadata Manager サービスのホスト名とポート番号。
--user	Metadata Manager ユーザ名。
--encryptedPassword	Metadata Manager ユーザーパスワードの暗号化されたパスワードのフラグ
--password	Metadata Manager ユーザのパスワード。
--namespace	Metadata Manager ユーザーが属しているセキュリティドメインの名前。

次の表は、削除されたコマンドオプションをまとめたものです。

オプション	説明
--securityDomain	Informatica ドメインユーザーが属するセキュリティドメインの名前。
--domainUser	Informatica ドメインへの接続に使用するユーザー名。
--domainPassword	Informatica ドメインユーザーのパスワード。

以下の表に、変更されたコマンドオプションを示します。

オプション	説明
--keyTab	このオプションは、ドメインユーザーではなく、Metadata Manager ユーザーのキータブファイルのパスとファイル名を指定します。

restorePCRepository

Metadata Manager オブジェクトを含む PowerCenter リポジトリバックアップファイルを PowerCenter リポジトリデータベースにリストアします。このコマンドは、Informatica サービスでインストールされた mmRepoCmd インスタンスから実行する必要があります。このコマンドのオプションは変更されていません。

Metadata Manager 特権

バージョン 9.6.1 HotFix 2 より、Metadata Manager リポジトリを作成またはリストアするために必要な特権が変更されました。

Metadata Manager リポジトリを作成またはリストアするには、デフォルトの管理者グループに属する必要があります。以前は、Metadata Manager サービスの権限を持つ Metadata Manager サービス特権が必要でした。

Metadata Manager 製品名

バージョン 9.6.1 HotFix 2 より、Metadata Manager Web アプリケーションに表示される製品名が Metadata Manager に変更されました。 以前は、製品名は「Metadata Manager & Business Glossary」でした。

PowerExchange アダプタ

ここでは、バージョン 9.6.1 HotFix 2 の PowerExchange アダプタの変更内容について説明します。

PowerExchange for Vertica

バージョン 9.6.1 HotFix 2 より、PowerExchange for Vertica によるプッシュダウンの最適化に次の変更が適用されます。

- DATE_DIFF 関数を Vertica にプッシュするとき、Vertica は日付の差異値を最も近い整数に丸めます。ただし、PowerCenter 統合サービスは浮動小数点値を返します。Vertica データベースで日付の差異を浮動小数点値として処理する場合、プッシュダウンの最適化を無効にできます。
- 形式を「Y」として指定し、DATE_DIFF 関数を Vertica にプッシュするとき、Vertica は日数の形式で日付の差異を計算します。ただし、PowerCenter 統合サービスは差異を年数の形式で計算します。差異値を年数の形式で処理する場合、プッシュダウンの最適化を無効にできます。

リリースタスク（9.6.1 HotFix 2）

ここでは、バージョン 9.6.1 HotFix 2 のリリースタスクについて説明します。

Metadata Manager

このセクションでは、バージョン 9.6.1 HotFix 2 の Metadata Manager のリリースタスクについて説明します。

Informatica プラットフォームリソースの HDFS データオブジェクト

バージョン 9.6.1 HotFix 2 より、Metadata Manager は Informatica プラットフォームリソースで HDFS データオブジェクトのクラスを追加します。Metadata Manager には、このクラスのオブジェクトの新しいアイコンが表示されます。この新しいクラスとアイコンにより、HDFS データオブジェクトとフラットファイルデータオブジェクトが区別されます。

新しいクラスとアイコンを表示するには、HDFS データオブジェクトを含む Informatica プラットフォームリソースを再度読み込みます。

第 20 章

新機能、変更、およびリリースタスク（9.6.1 HotFix 1）

この章では、以下の項目について説明します。

- 新機能（9.6.1 HotFix 1）, 251 ページ
- 変更内容（9.6.1 HotFix 1）, 259 ページ
- リリースタスク（9.6.1 HotFix 1）, 262 ページ

新機能（9.6.1 HotFix 1）

ここでは、バージョン 9.6.1 HotFix 1 の新しい機能について説明します。

Big Data

このセクションでは、バージョン 9.6.1 HotFix 1 の新しい Big Data 機能について説明します。

データウェアハウジング

Big Data Edition にはデータウェアハウジングの新機能と改良点があります。

バイナリデータ型

バージョン 9.6.1 HotFix 1 より、Hive 環境でのマッピングでは、マッピングでポートを通過するときにバイナリデータを処理できます。ただし、マッピングではバイナリデータを使用する式関数は処理できません。

詳細については、『*Informatica 9.6.1 HotFix 1 Big Data Edition ユーザーガイド*』を参照してください。

Hive **ターゲットでのパーティションの切り詰め**

バージョン 9.6.1 HotFix 1 より、データ統合サービスは Hive ターゲットのパーティションを切り詰めることができます。Hive ターゲットのパーティションの切り詰めとターゲットテーブルの切り詰めの両方を選択する必要があります。

詳細については、『*Informatica 9.6.1 HotFix 1 Big Data Edition ユーザーガイド*』を参照してください。

Hadoop 分布

バージョン 9.6.1 HotFix 1 より、Big Data Edition では、次の Hadoop ディストリビューションのサポートが追加されました。

- Cloudera CDH 5.1

- Hortonworks HDP 2.1

Big Data Edition では、Hortonworks HDP 2.0 のサポートが廃止されました。

詳細については、『*Informatica 9.6.1 HotFix 1 Big Data Edition インストール & 環境設定ガイド*』を参照してください。

Hadoop エコシステム

Big Data Edition には Hadoop エコシステムの新機能と改良点があります。

Cloudera Manager

バージョン 9.6.1 HotFix 1 より、Cloudera Manager を利用し、Big Data Edition インストールを Cloudera CDH 5.1 の Hadoop クラスターノード全体にパーセルとして配信できます。

詳細については、『*Informatica 9.6.1 HotFix 1 Big Data Edition インストール & 環境設定ガイド*』を参照してください。

高可用性

バージョン 9.6.1 HotFix 1 より、データ統合サービスと Developer ツールの、可用性の高い Hadoop クラスターに対する読み出しおよび書き込みを有効にすることができます。可用性の高い Hadoop クラスターはクラスターの JobTracker、NameNode、ResourceManager に中断のないアクセスを提供できます。Hadoop ディストリビューションの可用性の高い Hadoop クラスターと通信できるように Developer ツールを構成する必要があります。

詳細については、『*Informatica 9.6.1 HotFix 1 Big Data Edition インストール & 環境設定ガイド*』を参照してください。

Kerberos **認証**

バージョン 9.6.1 HotFix 1 より、Kerberos 認証を使用する Informatica ドメインを、同じく Kerberos 認証を使用する Hadoop クラスターでマッピングを実行するように設定できます。Hadoop クラスターが Informatica ドメインと通信できるようにするには、一方向の信頼を領域全体に設定する必要があります。

以前は、Informatica ドメインが Kerberos 認証を使用しない場合、Kerberos 認証を使用する Hadoop クラスターでマッピングを実行できました。

詳細については、『*Informatica 9.6.1 HotFix 1 Big Data Edition ユーザーガイド*』を参照してください。

スケジューラ

バージョン 9.6.1 HotFix 1 より、Hadoop ディストリビューションで次のスケジューラが有効になります。

- キャパシティースケジューラ
- フェアスケジューラ

詳細については、『*Informatica 9.6.1 HotFix 1 Big Data Edition インストール & 環境設定ガイド*』を参照してください。

Business Glossary

ここでは、バージョン 9.6.1 HotFix 1 の新しい Business Glossary 機能について説明します。

リレーションビュー図のエクスポート

バージョン 9.6.1 HotFix 1 では、リレーションビュー図を開いた後でエクスポートできます。Analyst ツールにログインしていない場合、または Business Glossary にアクセスできないユーザーと図を共有するには、図にアクセスするためにリレーションビュー図をエクスポートします。

詳細については、『*Informatica 9.6.1 HotFix 1 Business Glossary ガイド*』を参照してください。

Business Glossary **デスクトップの複数値属性**

バージョン 9.6.1 HotFix 1 では、Business Glossary デスクトップで複数値属性を表示できます。以前は、単一値属性しか表示できませんでした。［含む］および［関連事項］などのプロパティが複数値属性の例です。

コマンドラインプログラム

このセクションでは、バージョン 9.6.1 HotFix 1 の Informatica コマンドラインプログラムの新規および更新されたコマンドとオプションについて説明します。

pmrep コマンド

次の表はバージョン 9.6.1 HotFix 1 で更新された pmrep コマンドの説明をまとめたものです。

コマンド	説明
PurgeVersion	以下の新しいオプションが含まれます。 -k (log objects not purged)。オプション。パージ基準に一致してもパージされないオブジェクト名およびバージョンをすべてリストします。-k オプションでは、オブジェクトバージョンがパージされない理由もリストします。例えば、オブジェクトをパージするために必要な特権がない場合は、オブジェクトバージョンはパージされません。

isp コマンド

次の表はバージョン 9.6.1 HotFix 1 で新しく追加された isp コマンドの説明をまとめたものです。

コマンド	説明
convertUserActivityLog	ユーザーアクティビティログをテキストまたは XML 形式に変換します。
getUserActivityLog	バイナリ、テキストまたは XML 形式のユーザーアクティビティログを取得します。
migrateUsers	ネイティブセキュリティドメインのユーザーのグループ、ロール、特権、および権限を、1 つ以上の LDAP セキュリティドメインのユーザーに移行します。ユーザー移行ファイルが必要です。

接続性

このセクションでは、バージョン 9.6.1 HotFix 1 の新しい機能について説明します。

Netezza の接続

バージョン 9.6.1 HotFix 1 では、ODBC を使用して Netezza データベースとの間でデータの読み取りおよび書き込みを行うことができます。

詳細については、『*Informatica 9.6.1 HotFix 1 Developer ツールガイド*』を参照してください。

Data Quality アクセラレータ

このセクションでは、バージョン 9.6.1 HotFix 1 の新しい Data Quality アクセラレータについて説明します。

データクレンジングルール

バージョン 9.6.1 HotFix 1 より、コアアクセラレータをモデルリポジトリプロジェクトに追加するときに、次のルールを選択できます。

rule_GTIN_Validation

Global Trade Item Number（GTIN）を検証します。このルールでは、8 桁、12 桁、13 桁、および 14 桁の数値を検証します。このルールでは、チェックデジットが数値に対して正しい場合は「Valid」を返し、正しくない場合は「Invalid」を返します。

モデルリポジトリのアクセラレータプロジェクトの General_Data_Cleansing フォルダでルールを検索します。

詳細については、『*Informatica 9.6.1 HotFix 1 アクセラレータガイド*』を参照してください。

マッチングルール

バージョン 9.6.1 HotFix 1 より、一致分析を実行するすべての Data Quality アクセラレータルールには、パススルー入力ポートおよびパススルー出力ポートが含まれます。ポートを使用して、ルールを介して一意の識別子を渡します。

モデルリポジトリのアクセラレータプロジェクトの Matching_Deduplication フォルダでルールを検索します。

詳細については、『*Informatica 9.6.1 HotFix 1 アクセラレータガイド*』を参照してください。

マニュアル

このセクションでは、バージョン 9.6.1 HotFix 1 の Informatica のマニュアルで追加された新しいガイドまたは更新されたガイドについて説明します。

Informatica のマニュアルでは次のガイドが変更されています。

Informatica Business Glossary **バージョン** 2.0 API **リファレンスガイド**

バージョン 9.6.1 HotFix 1 より、新しいバージョンのガイドには、クライアントアプリケーションの開発に使用される Business Glossary REST API の URL とパラメータが含まれています。

Informatica Developer

ここでは、バージョン 9.6.1 HotFix 1 の新しい Informatica Developer 機能について説明します。

カスタマイズデータオブジェクトの書き込みプロパティ

バージョン 9.6.1 HotFix 1 より、[Hive ターゲットパーティションを切り詰めます] プロパティがカスタマイズデータオブジェクトの書き込みプロパティに追加されます。このプロパティはデータが挿入されている Hive ターゲットのパーティションを上書きします。このオプションを有効にするには、ターゲットテーブルを切り詰めるオプションも選択する必要があります。

詳細については、『*Informatica 9.6.1 HotFix 1 Developer ツールガイド*』を参照してください。

Netezza プッシュダウンの最適化

バージョン 9.6.1 HotFix 1 では、データ統合サービスがトランスフォーメーションロジックを、ネイティブドライバを使用する Netezza ソースにプッシュできます。

詳細については、『*Informatica 9.6.1 HotFix 1 マッピングガイド*』を参照してください。

SAP HANA の安全な通信

バージョン 9.6.1 HotFix 1 より、SAP HANA データベースの安全な通信を SSL プロトコルで構成できます。

Informatica ドメイン

このセクションでは、バージョン 9.6.1 HotFix 2 の新しい Informatica ドメイン機能について説明します。

Amazon EC2 の Informatica

バージョン 9.6.1 HotFix 2 より、Informatica サービスを Amazon EC2 の複数のノードで設定し、起動できます。最大 4 つのノードを含む Informatica ドメインを起動できます。

Informatica DiscoveryIQ

バージョン 9.6.1 HotFix 2 より、製品の使用状況を診断するツールである Informatica DiscoveryIQ では、データの使用状況とシステムの統計値に関するレポートを Informatica に定期的に送信できるようになりました。データのコレクションおよびアップロードはデフォルトで有効になっています。使用統計値を Informatica に送信しないことを選択できます。

Informatica トランスフォーメーション

ここでは、バージョン 9.6.1 HotFix 1 の新しい Informatica トランスフォーメーション機能について説明します。

アドレスバリデータトランスフォーメーション

バージョン 9.6.1 HotFix 1 から、アドレスバリデータトランスフォーメーションで次のポートを選択できます。

入力

構造化された XML 形式で入力アドレスレコードのデータ要素を含む出力ポート。

結果

構造化された XML 形式で出力アドレスのデータを表現するデータ要素を含む出力ポート。

トランスフォーメーションの XML ポートグループの［入力データ］ポートおよび［結果］ポートを検索します。

詳細については、『*Informatica9.6.1HotFix 1 アドレスバリデータポート参照*』を参照してください。

マッピング

ここでは、バージョン 9.6.1 HotFix 1 の新しいマッピング機能について説明します。

Informatica マッピング

ブランチの刈り込みの最適化方法

バージョン 9.6.1 HotFix 1 より、データ統合サービスはブランチの刈り込みの最適化方法を適用できます。データ統合サービスがブランチの刈り込みの最適化方法を適用する場合、マッピングで行をターゲットへ渡さないトランスフォーメーションを削除します。

ブランチの刈り込みの最適化方式は、最適化レベルをノーマルまたは完全に設定した場合に Developer ツールでデフォルトで有効になります。パフォーマンスが向上しない場合、最適化レベルを最小またはなしに設定することにより、ブランチの刈り込みを無効にできます。

詳細については、『*Informatica Data Services 9.6.1 HotFix 1 パフォーマンスのチューニングの概要*』を参照してください。

制約

バージョン 9.6.1 HotFix 1 より、データ統合サービスはリレーショナルソース、論理データオブジェクト、物理データオブジェクト、仮想テーブルから制約を読み取れます。制約は、データ行上の値が合致する必要がある条件式です。制約を読み取るときにデータ統合サービスは、適用されている最適化方式に基づき、データ行に関して TRUE に評価されない行を削除することがあります。

詳細については、『*Informatica 9.6.1 HotFix 1 マッピングガイド*』を参照してください。

Metadata Manager

ここでは、バージョン 9.6.1 HotFix 1 の新しい Metadata Manager 機能について説明します。

ブラウザサポート

バージョン 9.6.1 HotFix 1 では、Metadata Manager アプリケーションは次の Web ブラウザで実行できます。

- Internet Explorer 11.0
- Google Chrome 35

製品要件およびサポート対象プラットフォームの詳細については、次の Informatica Network で Product Availability Matrix を参照してください。
https://network.informatica.com/community/informatica-network/product-availability-matrices/overview

Microsoft SQL Server および Oracle Exadata Versions

バージョン 9.6.1 HotFix 1 では、Metadata Manager は以下のデータベースバージョンをサポートします。

- Microsoft SQL Server 2014
- Oracle Exadata 11g

したがって、以下のアクションを実行できます。

- これらのデータベースバージョンからメタデータを抽出する Microsoft SQL Server または Oracle リソースの作成。
- モデルリポジトリまたは PowerCenter リポジトリがこれらのいずれかのデータベースバージョンである場合の、Business Glossary、Informatica Platform、または PowerCenter リソースの作成。
- これらのいずれかのデータベースバージョンの Metadata Manager リポジトリの作成。

リソースの作成の詳細については、『*Informatica 9.6.1 HotFix 1 Metadata Manager 管理者ガイド*』を参照してください。Metadata Manager リポジトリの作成の詳細については、『*Informatica 9.6.1 HotFix 1 インストール & 環境設定ガイド*』を参照してください。

セキュリティの改善点

バージョン 9.6.1 HotFix 1 では、PowerCenter リソースを作成または編集するときに、Metadata Manager により、PowerCenter リポジトリデータベースの JDBC URL の一部であるセキュア JDBC パラメータを表示しないようにすることができます。

詳細については、『*Informatica 9.6.1 HotFix 1 Metadata Manager 管理者ガイド*』を参照してください。

PowerCenter

ここでは、バージョン 9.6.1 HotFix 1 の新しい PowerCenter 機能について説明します。

SAP HANA の安全な通信

バージョン 9.6.1 HotFix 1 より、SAP HANA データベースの安全な通信を SSL プロトコルで構成できます。

PowerExchange アダプタ

ここでは、バージョン 9.6.1 HotFix 1 の新しい PowerExchange アダプタ機能について説明します。

PowerExchange Adapters for Informatica

ここでは、バージョン 9.6.1 HotFix 1 の新しい Informatica アダプタ機能について説明します。

PowerExchange for Cassandra

バージョン 9.6.1 HotFix 1 では、PowerExchange for Cassandra を使用して、Cassandra データベースとの間でデータの読み取りおよび書き込みを行うことができます。Cassandra データオブジェクトをマッピングのソースまたはターゲットとして追加し、マッピングを実行して、データを読み取りまたは書き込むことができます。マッピングの Cassandra コレクションを使用する仮想テーブルを作成できます。

詳細については、『*Informatica PowerExchange for Cassandra 9.6.1 HotFix 1 ユーザーガイド*』を参照してください。

PowerExchange for Greenplum

バージョン 9.6.1 HotFix 1 では、SSL プロトコルを使用して Greenplum データベースへの安全な通信を設定できます。

詳細については、『*Informatica PowerExchange for Greenplum 9.6.1 HotFix 1 ユーザーガイド*』を参照してください。

PowerExchange for HBase

バージョン 9.6.1 HotFix 1 では、PowerExchange for HBase を使用して、Kerberos 認証を使用する HBase データストアに接続できます。Kerberos 認証を有効にし、HBase 接続プロパティが Kerberos 認証を使用する HBase データストアにアクセスできるように設定します。

詳細については、『*Informatica PowerExchange for HBase 9.6.1 HotFix 1 ユーザーガイド*』を参照してください。

PowerExchange for HDFS

バージョン 9.6.1 HotFix 1 では、複雑なファイルを読み取るときに、`com.informatica.adapter.hdfs.hadoop.io.InfaBatchTextInputFormat` 入力形式を使用して、バッチ内のテキストファイルを読み取り、パフォーマンスを向上させることができます。

詳細については、『*Informatica PowerExchange for HDFS 9.6.1 HotFix 1 ユーザーガイド*』を参照してください。

PowerExchange for Hive

バージョン 9.6.1 HotFix 1 では、PowerExchange for Hive は Hive 環境でバイナリデータ型をサポートします。バイナリデータ型の範囲は、1 から 104,857,600 バイトです。

詳細については、『*Informatica PowerExchange for Hive 9.6.1 HotFix 1 ユーザーガイド*』を参照してください。

PowerExchange for Salesforce

バージョン 9.6.1 HotFix 1 では、Cloud 接続カテゴリの下にリストされている PowerExchange for Salesforce 接続を使用して、Salesforce との間でデータの読み取りおよび書き込みを行うことができます。Salesforce データオブジェクトをマッピングのソースまたはターゲットとして追加し、マッピングを実行してデータを読み取りまたは書き込むことができます。

詳細については、『*Informatica PowerExchange for Salesforce 9.6.1 HotFix 1 ユーザーガイド*』を参照してください。

PowerExchange for SAS

バージョン 9.6.1 HotFix 1 では、PowerExchange for SAS を使用して、SAS との間でデータの読み取りおよび書き込みを行うことができます。

詳細については、『*Informatica PowerExchange for SAS 9.6.1 HotFix 1 ユーザーガイド*』を参照してください。

PowerExchange for Tableau

バージョン 9.6.1 HotFix 1 では、PowerExchange for Tableau を使用して、フラットファイルおよび SAP アプリケーションなどの複数のソースからデータを読み取ることにより、Tableau データ抽出ファイルを生成できます。ビジネスユーザーは Tableau デスクトップで抽出ファイルを開き、データを視覚化し、パターンや傾向を識別できます。

詳細については、『*Informatica PowerExchange for Tableau 9.6.1 HotFix 1 ユーザーガイド*』を参照してください。

PowerExchange Adapters for PowerCenter

ここでは、バージョン 9.6.1 HotFix 1 の新しい PowerCenter アダプタ機能について説明します。

PowerExchange for Cassandra

バージョン 9.6.1 HotFix 1 では、PowerExchange for Cassandra を使用して、Cassandra データベースからデータを抽出し、データをロードすることができます。マッピングの Cassandra コレクションを使用する仮想テーブルを作成できます。

詳細については、『*Informatica PowerExchange for Cassandra 9.6.1 HotFix 1 PowerCenter 用ユーザーガイド*』を参照してください。

PowerExchange for Greenplum

バージョン 9.6.1 HotFix 1 では、SSL プロトコルを使用して Greenplum データベースへの安全な通信を設定できます。

詳細については、『*Informatica PowerExchange for Greenplum 9.6.1 HotFix 1 PowerCenter 用ユーザーガイド*』を参照してください。

PowerExchange for Vertica

バージョン 9.6.1 HotFix 1 では、PowerExchange for Vertica を使用して、Vertica データベースに大量のデータを書き込むことができます。

詳細については、『*Informatica PowerExchange for Vertica 9.6.1 HotFix 1 PowerCenter 用ユーザーガイド*』を参照してください。

参照データ

このセクションでは、バージョン 9.6.1 HotFix 1 の新しい参照データ機能について説明します。

確率モデル

バージョン 9.6.1 HotFix 1 より、確率モデルのラベルに割り当てた参照データ値の合計数を表示できます。

ワイルドカード文字を使用して確率モデルのデータ値を検索できます。

詳細については、『*Informatica 9.6.1 HotFix 1 参照データガイド*』を参照してください。

ルール仕様

このセクションでは、バージョン 9.6.1 HotFix 1 の新しいルール仕様について説明します。

日付と時刻の操作

バージョン 9.6.1 HotFix 1 より、以下の日付と時刻データに対する操作を実行するようにルール文を設定できます。

- データ統合サービスがルール文を含むマッピングを実行する日付と時刻を返します。
- データ統合サービスがルール文を含むマッピングを実行する前または後の時点をタイムスタンプが参照するかどうかを決定します。
- 日付と時刻のデータの文字列を日時データ型に変換します。

詳細については、『*Informatica 9.6.1 HotFix 1 ルール仕様ガイド*』を参照してください。

参照テーブル操作

バージョン 9.6.1 HotFix 1 より、入力値が参照テーブル値に一致するとき、指定した値を返すルール文を構成できます。

詳細については、『*Informatica 9.6.1 HotFix 1 ルール仕様ガイド*』を参照してください。

変更内容（9.6.1 HotFix 1）

ここでは、バージョン 9.6.1 HotFix 1 の変更内容について説明します。

アプリケーションサービス

ここでは、バージョン 9.6.1 HotFix 1 のアプリケーションサービスへの変更内容について説明します。

コンテンツ管理サービス

バージョン 9.6.1 HotFix 1 では、コンテンツ管理サービスは次のアドレス検証プロセスのプロパティにデフォルト値を設定します。

- 事前にロードしない国
- 地理的コーディングを事前にロードしない国
- 提案リストを事前にロードしない国
- アドレスコードを事前にロードしない国

コンテンツ管理サービスは各プロパティのデフォルト値に ALL を設定します。

以前は、コンテンツ管理サービスはプロパティのデフォルト値を設定していませんでした。

注: デフォルトプロパティは、以前の製品バージョンで作成したアドレス検証マッピングからのデータ出力に影響を与えません。

Business Glossary

ここでは、バージョン 9.6.1 HotFix 1 の Business Glossary への変更内容について説明します。

Business Glossary API の変更

クライアントアプリケーションの開発に使用する Business Glossary REST API の URL とパラメータが変更されました。

Informatica トランスフォーメーション

ここでは、バージョン 9.6.1 HotFix 1 の Informatica トランスフォーメーションへの変更内容について説明します。

アドレスバリデータトランスフォーメーション

次の変更がバージョン 9.6.1 HotFix 1 でアドレスバリデータトランスフォーメーションに適用されます。

- バージョン 9.6.1 HotFix 1 では、アドレスバリデータトランスフォーメーションにより Software Evaluation and Recognition Program（SERP）レポートの追加フィールドに入力が行われます。SERP レポートには次のフィールドがあります。

  - 処理日

  - CPC アドレスデータファイルの日付

  以前は、トランスフォーメーションによるフィールドへの入力は行われませんでした。
- バージョン 9.6.1 HotFix 1 では、拡張要素のステータスポート名は拡張要素の結果ステータスです。

データプロセッサトランスフォーメーション

バージョン 9.6.1 HotFix 1 では、XMap オブジェクトを持つデータプロセッサトランスフォーメーションをエクスポートし、XMap オブジェクトを持つトランスフォーメーションとして Developer ツールに再度インポートできます。

以前は、XMap オブジェクトを持つデータプロセッサトランスフォーメーションをエクスポートしたときは、スクリプトオブジェクトを持つトランスフォーメーションとして Developer ツールに再度インポートしました。

Metadata Manager

ここでは、バージョン 9.6.1 HotFix 1 の Metadata Manager への変更内容について説明します。

Microsoft Analysis および Reporting Services メタデータソースバージョン

バージョン 9.6.1 HotFix 1 では、Microsoft Analysis および Reporting Services リソースを使用して、Microsoft Analysis および Reporting Services バージョン 10.5（2008 R2）からメタデータを抽出できます。

以前は、Microsoft Analysis および Reporting Services バージョン 9.0（2005）からメタデータを抽出できました。

検索

バージョン 9.6.1 HotFix 1 では、検索で無視される単語のリストのカスタマイズの動作が変更されました。

動作は以下のように変更されました。

- stopwords.txt ファイルを手動で作成する必要がなくなりました。代わりに、Informatica サービスインストーラによりデフォルトの stopwords.txt ファイルが次のディレクトリに作成されます。

  `<Informatica installation directory>\services\shared\jars\pc\classes`
- imm.properties ファイルの UseCustomStopWords プロパティを true に設定する必要があります。

インストーラにより作成される stopwords.txt には、検索で無視される英単語のデフォルトのリストが含まれています。その単語リストをカスタマイズするには、stopwords.txt ファイルを更新し、UseCustomStopWords プロパティを有効にして、Metadata Manager サービスを無効にしてから有効にし、すべてのリソースに対する検索インデックスを手動で更新します。

以前は、単語リストをカスタマイズするには、stopwords.txt ファイルを手動で作成し、Metadata Manager サービスを無効にしてから有効にし、すべてのリソースに対する検索インデックスを手動で更新する必要がありました。

PowerCenter トランスフォーメーション

ここでは、バージョン 9.6.1 HotFix 1 の PowerCenter トランスフォーメーションへの変更内容について説明します。

データマスキングトランスフォーメーション

バージョン 9.6.1 HotFix 1 では、トランザクション環境プロパティに、置換ディクショナリのオーナー名およびストレージのオーナー名を設定します。

以前は、セッションプロパティの［マッピング］タブのトランスフォーメーションビューに、置換ディクショナリのオーナー名およびストレージのオーナー名を設定していました。

PowerExchange

ここでは、バージョン 9.6.1 HotFix 1 の Informatica ドメインの PowerExchange 機能への変更内容について説明します。

infacmd pwx displayStatsListener コマンド

9.6.1 HotFix 1 より、infacmd pwx displayStatsListener コマンドで、Linux、zLinux、UNIX 上の PowerExchange リスナプロセスの監視統計を生成できます。以前は、このコマンドで、Windows 上の PowerExchange リスナプロセスの統計のみが生成されました。

PowerExchange アダプタ

ここでは、バージョン 9.6.1 HotFix 1 の PowerExchange アダプタへの変更内容について説明します。

PowerExchange Adapters for Informatica

このセクションでは、バージョン 9.6.1 HotFix 1 の Informatica アダプタの変更内容について説明します。

PowerExchange for Salesforce

バージョン 9.6.1 HotFix 1 では、Enterprise 接続カテゴリの下にリストされている PowerExchange for Salesforce 接続が非推奨となりました。Informatica は次のメジャーリリースでサポートを停止する予定です。Cloud 接続カテゴリの下にリストされている新しい PowerExchange for Salesforce 接続を使用して、Salesforce に対してデータの読み取りおよび書き込みを行うことをお勧めします。

PowerExchange for Mongo DB

バージョン 9.6.1 HotFix 1 より、Informatica PowerExchange for Mongo DB ODBC ドライバファイルの名前が `libinformaticamongodbodbc64.so` になりました。

以前は、Informatica PowerExchange for Mongo DB ODBC ドライバファイルの名前は `libsimbamongodbodbc64.so` でした。

PowerExchange Adapters for PowerCenter

このセクションでは、バージョン 9.6.1 HotFix 1 の PowerCenter アダプタの変更内容について説明します。

PowerExchange for Mongo DB

バージョン 9.6.1 HotFix 1 より、Informatica PowerExchange for Mongo DB ODBC ドライバファイルの名前が `libinformaticamongodbodbc64.so` になりました。

以前は、Informatica PowerExchange for Mongo DB ODBC ドライバファイルの名前は `libsimbamongodbodbc64.so` でした。

参照データ

ここでは、バージョン 9.6.1 HotFix 1 の参照データ機能への変更内容について説明します。

確率モデル

バージョン 9.6.1 HotFix 1 では、Developer ツールにより、Stanford Named Entity Recognition API のバージョン 3.4 を使用して、確率モデルをコンパイルできます。

以前は、Developer ツールでは、API のバージョン 1.2.6 を使用して確率モデルをコンパイルしていました。

リリースタスク（9.6.1 HotFix 1）

ここでは、バージョン 9.6.1 HotFix 1 のリリースタスクについて説明します。

PowerExchange アダプタ

ここでは、バージョン 9.6.1 HotFix 1 の PowerExchange アダプタのリリースタスクについて説明します。

PowerExchange Adapters for Informatica

このセクションでは、バージョン 9.6.1 HotFix 1 の Informatica アダプタのリリースタスクについて説明します。

PowerExchange for Salesforce

バージョン 9.6.1 HotFix 1 では、Enterprise 接続カテゴリの下にリストされている PowerExchange for Salesforce 接続が非推奨となりました。Informatica は次のメジャーリリースでサポートを停止する予定です。Cloud 接続カテゴリの下にリストされている新しい PowerExchange for Salesforce 接続を使用して、Salesforce に対してデータの読み取りおよび書き込みを行うことをお勧めします。

既存のマッピングを非推奨となった PowerExchange for Salesforce アダプタとともに使用できます。しかし、Cloud 接続カテゴリの下にリストされている PowerExchange for Salesforce 接続を使用するように、既存のマッピングまたは接続を更新することはできません。新しい PowerExchange for Salesforce アダプタを使用する、新しいマッピングおよび接続を作成する必要があります。

詳細については、『*Informatica PowerExchange for Salesforce 9.6.1 HotFix 1 ユーザーガイド*』を参照してください。

PowerExchange for Mongo DB

Informatica 9.6.1 から Informatica 9.6.1 HotFix 1 にアップグレードする前に、odbc.ini ファイルをバックアップする必要があります。

Informatica 9.6.1 HotFix 1 にアップグレードしたら、odbc.ini ファイルを odbc.ini ファイルのバックアップコピーと置換し、odbc.ini ファイルの MongoDB ドライバ名を libinformaticamongodbodbc64.so に変更します。

詳細については、『*Informatica PowerExchange for MongoDB 9.6.1 HotFix 1 ユーザーガイド*』を参照してください。

PowerExchange Adapters for PowerCenter

このセクションでは、バージョン 9.6.1 HotFix 1 の PowerCenter アダプタのリリースタスクについて説明します。

PowerExchange for Mongo DB

Informatica 9.6.1 から Informatica 9.6.1 HotFix 1 にアップグレードする前に、odbc.ini ファイルをバックアップする必要があります。

Informatica 9.6.1 HotFix 1 にアップグレードしたら、odbc.ini ファイルを odbc.ini ファイルのバックアップコピーと置換し、odbc.ini ファイルの MongoDB ドライバ名を libinformaticamongodbodbc64.so に変更します。

詳細については、『*Informatica PowerExchange for MongoDB 9.6.1 HotFix 1 PowerCenter 用ユーザーガイド*』を参照してください。

Informatica Web クライアントアプリケーション

アップグレード後、Informatica Web クライアントアプリケーションにアクセスする前に Web ブラウザのキャッシュを消去する必要があります。

Informatica は Google Chrome ブラウザと Microsoft Internet Explorer ブラウザをサポートします。アップグレード後、Informatica Web クライアントアプリケーションにアクセスするマシンでブラウザキャッシュを消去します。Informatica Web クライアントアプリケーションには、Administrator ツール、Analyst ツール、レポートサービス、レポートおよびダッシュボードサービス、Metadata Manager が含まれています。

第 21 章

新機能（9.6.1）

この章では、以下の項目について説明します。

- アプリケーションサービス, 264 ページ
- Big Data, 265 ページ
- Business Glossary, 266 ページ
- コマンドラインプログラム, 267 ページ
- マニュアル, 270 ページ
- Informatica Administrator, 271 ページ
- Informatica Developer, 272 ページ
- Informatica Development Platform, 272 ページ
- Informatica トランスフォーメーション, 272 ページ
- インストーラ, 275 ページ
- マッピング, 276 ページ
- Metadata Manager, 276 ページ
- PowerExchange, 278 ページ
- PowerExchange アダプタ, 279 ページ
- プロファイルおよびスコアカード, 281 ページ
- 参照データ, 281 ページ
- ルール仕様, 281 ページ
- ソースおよびターゲット, 282 ページ
- トランスフォーメーション言語関数, 282 ページ

アプリケーションサービス

ここでは、バージョン 9.6.1 の新しいアプリケーションサービスについて説明します。

コンテンツ管理サービス

ここでは、バージョン 9.6.1 の新しいコンテンツ管理サービス機能について説明します。

コンテンツ管理サービスは、アドレスコードルックアップ参照データおよび対話型参照データのプリロード動作を決定します。 アドレス検証プロセスのプロパティを使用して、プリロード動作を設定します。

以下の表に、アドレスコードルックアップデータのプリロードプロパティの説明を示します。

プロパティ	説明
アドレスコード全体を事前にロードする国	アドレス検証の開始前にデータ統合サービスがすべての参照データをメモリにロードする国を一覧表示します。
アドレスコードの一部を事前にロードする国	アドレス検証の開始前にデータ統合サービスがすべての参照データをメモリにロードする国を一覧表示します。
アドレスコードを事前にロードしない国	アドレス検証の開始前にデータ統合サービスがアドレス参照データをメモリにロードしない国を一覧表示します。

以下の表に、バッチおよび認証参照データ、さらに対話型参照データのプリロードプロパティの説明を示します。

プロパティ	説明
事前に全体をロードする国	アドレス検証の開始前にデータ統合サービスがすべてのバッチ、認証、および対話型参照データをメモリにロードする国を一覧表示します。
事前に一部をロードする国	アドレス検証の開始前にデータ統合サービスがバッチ、認証、および対話型メタデータおよびインデックス構造をメモリにロードする国を一覧表示します。
事前にロードしない国	アドレス検証の開始前にデータ統合サービスがバッチ、認証、または対話型参照データをメモリにロードしない国を一覧表示します。

詳細については、*『Informatica 9.6.1 アプリケーションサービスガイド』*を参照してください。

Big Data

ここでは、バージョン 9.6.1 の新しい Big Data 機能について説明します。

Hive 環境のデータタイプ

Hive 0.11 以上を使用する Hive 環境に高精度の Decimal データタイプをプッシュすることができます。

高精度のマッピングが無効な場合、データ統合サービスはすべての Decimal 値を Double 値に変換します。

高精度のマッピングが有効な場合、データ統合サービスは精度が 28 を超える Decimal 値を Double 値に変換します。

詳細については、*『Informatica 9.6.1 Big Data Edition ユーザーガイド』*を参照してください。

Hive 接続プロパティ

Hive 接続では次のプロパティを指定します。

- Hive または Hadoop の詳細プロパティを入力して、データ統合サービスが実行されているマシン上の `hive-site.xml` 内にある Hive または Hadoop クラスタプロパティを設定またはオーバーライドする。
- Hadoop クラスタでマッピングを実行するためにデータ統合サービスが偽装するユーザーのユーザー名を入力する。

詳細については、*『Informatica 9.6.1 Big Data Edition ユーザーガイド』*を参照してください。

ユーザー認証

データ統合サービスでは、Kerberos 認証を使用する Hadoop クラスタでマッピングやワークフローのジョブを実行できます。 Hadoop クラスタはデータ統合サービスユーザーアカウントの SPN を認証することにより、Hadoop クラスタでマッピングおよびワークフローのジョブを実行します。 Hadoop クラスタで別のユーザーにジョブの実行を許可するには、別のユーザーアカウントを偽装するようにデータ統合サービスの SPN を設定します。

詳細については、*『Informatica 9.6.1 Big Data Edition ユーザーガイド』*を参照してください。

Hadoop ディストリビューションのマッピング

マッピングは次の Hadoop ディストリビューションで実行することができます。

- Cloudera CDH 5.0
- Hortonworks HDP 2.0
- MapR 3.1
- Pivotal HD 1.1

詳細については、*『Informatica 9.6.1 Big Data Edition インストール & 環境設定ガイド』*を参照してください。

Business Glossary

ここでは、バージョン 9.6.1 の新しい Business Glossary 機能について説明します。

ビジネスイニシアティブ

ビジネスイニシアティブは、ビジネス用語集でまとめて承認および公開する必要がある用語集アセットのコンテナです。 複数のビジネス用語、カテゴリ、およびポリシーを同時に公開するには、ビジネスイニシアティブを使用します。 ビジネスイニシアティブは他のすべての用語集アセットと同じ承認プロセスを経由します。

カテゴリおよびビジネスイニシアティブテンプレートのカスタマイズ

カテゴリおよびビジネスイニシアティブのテンプレートはカスタマイズできます。

カスタムプロパティのデフォルト値

用語集アセットテンプレートをカスタマイズするときに作成するカスタムプロパティのデフォルト値を追加できます。

アセットリレーションの視覚化

ビジネス用語およびポリシーとビジネス用語集内の他のアセットとの間のリレーションを視覚的に表現できます。 このアセットリレーションを視覚化した図は、動的かつ対話的です。 この図のコンテキストを配置し直し、図に表示されるアセットをフィルタして、レベル数を変更することができます。

シノニムの廃止

ビジネス用語集内のシノニムの廃止日を設定できます。 廃止日を過ぎると、シノニムの状態は変更されます。 ビジネス用語集コンシューマはこの状態を確認して、シノニムの有効性を識別します。

詳細については、*『Informatica 9.6.1 Business Glossary ガイド』*を参照してください。

コマンドラインプログラム

ここでは、バージョン 9.6.1 の新しいコマンドについて説明します。

環境変数

以下の表に、コマンドラインプログラムで使用できる新しい環境変数の説明を示します。

環境変数	説明
INFA_DEFAULT_DB_TRUSTSTORE_PASSWORD	infasetup コマンドのデータベーストラストストアパスワードを格納します。
INFA_NODE_KEYSTORE_PASSWORD	infasetup コマンドの infa_keystore.jks ファイルのパスワードを格納します。
INFA_NODE_TRUSTSTORE_PASSWORD	infasetup コマンドの infa_truststore.jks ファイルのパスワードを格納します。

infacmd dis コマンド

以下の表に、新しい infacmd dis コマンドの説明を示します。

コマンド	説明
ListSequenceObjectProperties	シーケンスデータオブジェクトのプロパティを一覧表示します。
ListSequenceObjects	アプリケーションにデプロイされたシーケンスデータオブジェクトを一覧表示します。
SetSequenceState	シーケンスデータオブジェクトの現在の値を更新します。

infacmd isp コマンド

以下の表に、新しい infacmd isp コマンドの説明を示します。

コマンド	説明
printSPNAndKeytabNames	ドメイン内のノードおよびサービスの SPN およびキータブファイルの名前の一覧を生成します。

以下の表に、更新された infacmd isp コマンドの説明を示します。

コマンド	説明
switchToGatewayNode	このコマンドには、データベースのトラストストアファイルのオプション（-dbtl）が含まれています。 セキュアなドメイン環境設定リポジトリデータベースのトラストストアファイルのパスおよびファイル名を入力します。 ドメイン環境設定リポジトリにセキュアデータベースを使用する場合は、このオプションを指定する必要があります。

infacmd mrs コマンド

以下の表に、新しい infacmd mrs コマンドの説明を示します。

コマンド	説明
rebuildDependencyGraph	アップグレード後にオブジェクトの依存関係を確認できるようにオブジェクト依存関係のグラフを再作成します。

infacmd rds コマンド

バージョン 9.6.1 では、infacmd rds コマンドは廃止されました。 infacmd rds コマンドを使用して Reporting and Dashboard Service を管理することはできなくなりました。 Administrator ツールを使用する必要があります。

以下の表に、廃止された infacmd rds コマンドの説明を示します。

コマンド	説明
CreateService	ドメインにレポートおよびダッシュボードサービスを作成します。
ListServiceProcessOptions	レポートおよびダッシュボードサービスのオプションを一覧表示します。

infasetup コマンド

以下の表に、新しい infasetup コマンドの説明を示します。

コマンド	説明
updateKerberosConfig	Informatica ドメインユーザーが属している領域名を変更するか、Informatica ドメインサービスが属しているサービス領域名を変更します。 このコマンドは Kerberos 設定を変更しません。

以下の表に、更新された infasetup コマンドの説明を示します。

コマンド	説明
- BackupDomain - DefineDomain - DefineGatewayNode - DeleteDomain - RestoreDomain - updateGatewayNode - upgradeDomainMetadata	このコマンドには、データベースのトラストストアのオプション（-dbtl）が含まれています。 セキュアなドメインリポジトリデータベースのトラストストアファイルのパスおよびファイル名を入力します。 ドメイン用にセキュアなドメインリポジトリデータベースを設定する場合は、このオプションを指定する必要があります。

mmcmd

バージョン 9.6.1 では、以下の mmcmd コマンドが変更されています。

コマンド	説明
createRepository	--domainPassword オプションが必要なのは、ドメインで Kerberos 認証が使用されていて、ドメインユーザーに--keyTab オプションを指定しない場合のみです。 以前は、このオプションは常に必須でした。
createResource	追加されたオプションは、以下のとおりです。 - --resourcePassword。 リソースでパスワードが使用されていて、リソース構成ファイルにリソースパスワードが含まれていない場合は、このオプションを使用してパスワードを指定します。 - --secureJDBCParameters。 このオプションを使用すると、セキュア JDBC パラメータを指定して JDBC 接続 URL を追加することができます。 Metadata Manager のリソース構成プロパティには、セキュアなパラメータまたはパラメータ値が表示されません。
deleteRepository	--domainPassword オプションが必要なのは、ドメインで Kerberos 認証が使用されていて、ドメインユーザーに--keyTab オプションを指定しない場合のみです。 以前は、このオプションは常に必須でした。
getResource	-includePassword オプションが追加されました。 リソース構成ファイルにリソースパスワードを含めるか除外するかを選択できます。 以前は、このコマンドは常にパスワードを含めていました。
restorePCRepository	--domainPassword オプションが必要なのは、ドメインで Kerberos 認証が使用されていて、ドメインユーザーに--keyTab オプションを指定しない場合のみです。 以前は、このオプションは常に必須でした。
updateResource	追加されたオプションは、以下のとおりです。 - --resourcePassword。 リソースでパスワードが使用されていて、リソース構成ファイルにリソースパスワードが含まれていない場合は、このオプションを使用してパスワードを指定します。 - --secureJDBCParameters。 このオプションを使用すると、セキュア JDBC パラメータを指定して JDBC 接続 URL を追加することができます。 Metadata Manager のリソース構成プロパティには、セキュアなパラメータまたはパラメータ値が表示されません。

mmRepoCmd

バージョン 9.6.1 では、mmRepoCmd コマンドラインプログラムを使用して Metadata Manager リポジトリデータベースコンテンツのバックアップおよびリストアを行います。

mmRepoCmd には次の改良点が含まれています。

- リポジトリコンテンツをリストアする場合、mmRepoCmd はドメイン暗号化キーを使用して Metadata Manager リポジトリ内の機密データを暗号化する。
- mmRepoCmd は Metadata Manager サービスからリポジトリデータベース接続情報を取得する。 コマンドを実行する場合、引数として接続パラメータを指定する必要はない。

mmRepoCmd には次のコマンドが含まれています。

コマンド	説明
backupRepository	Metadata Manager リポジトリをバックアップファイルにバックアップします。
restoreRepository	Metadata Manager リポジトリコンテンツをバックアップファイルからリストアします。

以前は、backupCmdLine コマンドラインプログラムを使用して Metadata Manager リポジトリデータベースコンテンツのバックアップおよびリストアを行っていました。 backupCmdLine は削除されました。

pmprep コマンド

以下の表に、更新された pmrep コマンドの説明を示します。

コマンド	説明
createConnection	このコマンドには kerberized_connection（-K）オプションが含まれています。 接続先のデータベースが Kerberos 認証を使用するネットワーク上で実行されることを指定します。

rcfmu

バージョン 9.6.1 では、rcfmu を使用して Metadata Manager 9.1.0、9.5.x、および 9.6.0 から最新バージョンへリソース構成ファイルを移行できます。 rcfmu には、元のリソース構成ファイルのバージョンを指定する新しいオプション-smv が含まれています。

以前は、rcfmu を使用して Metadata Manager 9.1.0 から 9.5.x または 9.6.0 にリソース構成ファイルを移行していました。

rmu

バージョン 9.6.1 では、rmu を使用して Metadata Manager 9.1.0、9.5.x、および 9.6.0 から最新バージョンへリソースを移行できます。 rmu は元のリソースバージョンを検出します。

以前は、rmu を使用して Metadata Manager 9.1.0 から 9.5.x または 9.6.0 にリソースを移行していました。

マニュアル

ここでは、バージョン 9.6.1 の Informatica のマニュアルに含まれる新しいガイドについて説明します。いくつかの新しいガイドは複数の製品で共有されている機能に基づいて構成されており、以前のガイドに代わるものとなっています。

Informatica のマニュアルには次の新しいガイドが付属しています。

Informatica Big Data Edition **インストール＆環境設定ガイド**

Informatica Big Data Edition のインストール、および複数の Hadoop ディストリビューションで作業するためのマッピングの設定に関する情報が記載されています。以前は、インストール情報は『PowerCenter Big Data Edition ユーザーガイド』に記載されていました。

Informatica **インストール＆環境設定ガイド**

すべての Informatica プラットフォーム製品のドメインの計画、データベースの準備、Informatica のサービスとクライアントのインストール、およびアプリケーションサービスの作成に関する情報が記載され

ています。 以前は、インストール情報は Data Quality、Data Services、および PowerCenter の各製品に固有のガイドに記載されていました。

バージョン 9.6.0 **からの** Informatica **のアップグレード**

バージョン 9.6.0 からバージョン 9.6.1 にすべての Informatica プラットフォーム製品をアップグレードする手順が記載されています。以前は、アップグレード情報は Data Quality、Data Services、および PowerCenter の各製品に固有のガイドに記載されていました。

バージョン 9.5.1 **からの** Informatica **のアップグレード**

バージョン 9.5.1 からバージョン 9.6.1 にすべての Informatica プラットフォーム製品をアップグレードする手順が記載されています。以前は、アップグレード情報は Data Quality、Data Services、および PowerCenter の各製品に固有のガイドに記載されていました。

バージョン 9.5.0 **からの** Informatica **のアップグレード**

バージョン 9.5.0 からバージョン 9.6.1 にすべての Informatica プラットフォーム製品をアップグレードする手順が記載されています。以前は、アップグレード情報は Data Quality、Data Services、および PowerCenter の各製品に固有のガイドに記載されていました。

バージョン 9.1.0 **からの** Informatica **のアップグレード**

バージョン 9.1.0 からバージョン 9.6.1 にすべての Informatica プラットフォーム製品をアップグレードする手順が記載されています。以前は、アップグレード情報は Data Quality、Data Services、および PowerCenter の各製品に固有のガイドに記載されていました。

Informatica PowerExchange Adapters for Informatica **リリースノート**

PowerExchange Adapters for Informatica のインストール、実装された拡張、解消された問題、および既知の制限事項に関する重要情報が記載されています。 以前は、この情報は『Informatica リリースノート』に記載されていました。

Informatica PowerExchange Adapters for PowerCente **リースノート**

PowerExchange Adapters for PowerCenter のインストール、実装された拡張、解消された問題、および既知の制限事項に関する重要情報が記載されています。 以前は、この情報は『Informatica リリースノート』に記載されていました。

Informatica Administrator

ここでは、バージョン 9.6.1 の新しい Informatica Administrator 機能について説明します。

Informatica Cloud の管理

Administrator ツールを使用すると、Informatica Cloud 組織を表示できます。 セキュアエージェントのステータスを監視して、組織で使用されているクラウドの接続を表示することができます。

詳細については、*『Informatica 9.6.1 管理者ガイド』*を参照してください。

Informatica Developer

ここでは、バージョン 9.6.1 の新しい Informatica Developer 機能について説明します。

オブジェクトの依存関係

オブジェクトの変更や削除を行う前に、Developer ツールの［**オブジェクトの依存関係**］ビューでオブジェクトの依存関係を表示して、影響を受けるオブジェクトについて影響分析を実行できます。

詳細については、*『Informatica 9.6.1 Developer ツールガイド』*を参照してください。

Informatica Development Platform

ここでは、バージョン 9.6.1 の新しい Informatica Development Platform 機能について説明します。

Informatica コネクタツールキット

アダプタのランタイムコンポーネントを定義すると、［**テストリード**］および［**テストライト**］ウィザードを使用して、アダプタの読み取り機能と書き込み機能をテストできるようになります。これらのテストウィザードでは、テストの統計、エラーメッセージ、およびログファイルが表示されます。 アダプタを Informatica ドメインにデプロイする前に、問題をデバッグして修正することができます。

詳細については、*『Informatica Development Platform 9.6.1 Informatica コネクタツールキット Developer ガイド』*を参照してください。

Informatica トランスフォーメーション

ここでは、バージョン 9.6.1 の新しいトランスフォーメーション機能について説明します。

アドレスバリデータトランスフォーメーション

ここでは、Developer ツールで作成するアドレスバリデータトランスフォーメーションの新機能について説明します。

モード

次のモードで実行されるようにアドレスバリデータトランスフォーメーションを設定できます。

アドレスコードルックアップモード

アドレスコードルックアップモードを選択すると、データ統合サービスは識別コードを読み取り、参照データから対応するアドレス要素を返します。識別コードは市区町村、番地、またはメールボックスを表すことがあります。 例えば、日本の住所の町名字コードを入力し、出力として完全な住所を取得することができます。

対話モード

対話モードを選択すると、アドレス検証によって部分的なアドレスが読み取られ、参照データから入力要素と一致する住所がすべて返されます。 不完全な住所にデータを追加する場合は、対話モードを選択します。 部分的なアドレスは単一入力ポートで入力できます。

提案リストモードで実行されるようにトランスフォーメーションを設定する場合、単一入力ポートで部分的なアドレスを入力することもできます。

ポート

アドレスバリデータトランスフォーメーションでは、以下のポートを選択できます。

カウント

入力アドレス内のデータと一致するアドレス参照データセット内のアドレス数を示す出力ポート。

カウントオーバーフロー

参照データ内にアドレス検証がトランスフォーメーションに返さないアドレスが含まれているかどうかを示す出力ポート。

Gmin **コード** PL

ポーランドの住所が属する地方自治体またはコミューンの識別コードを返す出力ポート。

地理統計院コード

ブラジルの住所が属する都市や州を示す 7 桁の識別コードを含む出力ポート。

市区町村の識別子 DE

ドイツの市区町村の識別コードを含む入力および出力ポート。

全国住所データベース識別子 ZA

南アフリカの住所の番地を示す 7 桁の識別コードを含む入力および出力ポート。

フランス国立統計経済研究所コード

フランスの住所が属する行政区を識別する入力および出力ポート。 フランス国立統計経済研究所コードは INSEE（National Institute of Statistics and Economic Studies）コードともいいます。

新町名字コード JP

日本のメールボックスを示す一意の配布ポイントコードを返す出力ポート。

市区町村の公的なキー DE

ドイツの地方自治体の識別コードを含む入力および出力ポート。

郵便アドレスコード AT

オーストリアの住所における建物レベルの郵便番号データを含む出力ポート。

郵便アドレスコード RS

セルビアの住所における番地レベルの郵便番号を返す出力ポート。

郵便番号拡張

スイスの住所の郵便番号の 2 桁のサフィックスを含む出力ポート。

番地の識別子 DE

ドイツの住所の番地レベルの識別コードを含む入力および出力ポート。

補足ステータスポート

アドレス検証が住所の補足データを返すことができるかどうかを示す出力ポート。

トランスフォーメーションにはオーストリア、ブラジル、フランス、ドイツ、ポーランド、南アフリカ、およびスイスの補足ステータスポートが含まれます。

TERYT **市区町村の識別子** PL

ポーランドの住所が属する市区町村の識別コードを含む出力ポート。

TERYT **番地の識別子** PL

ポーランドの住所の番地を示す識別コードを含む出力ポート。

一意の配布ポイント参照番号 GB

英国のメールボックスを示す一意の配布ポイントコードを返す出力ポート。

詳細については、*『Informatica 9.6.1 アドレスバリデータポートリファレンス』*および *『Informatica 9.6.1 Developer トランスフォーメーションガイド』*を参照してください。

プロパティ

アドレスバリデータトランスフォーメーションでは、以下の詳細なプロパティを設定できます。

エイリアスの市区町村

このプロパティは、アドレス検証が有効な場所のエイリアスを公式な場所名に置き換えるかどうかを決定します。

拡張アーカイブのマッチング

このプロパティは、アドレス検証が古い日本の住所に対応する一意の配布ポイントコードを返すかどうかを決定します。

データプロセッサトランスフォーメーション

ここでは、Developer ツールで作成するデータプロセッサトランスフォーメーションの新機能について説明します。

ストリーマのファイル入力

データプロセッサトランスフォーメーションストリーマは、ファイルを入力として使用できます。 以前は、バッファのみが入力としてストリーマによって使用されていました。

詳細については、*『Informatica Data Transformation 9.6.1 ユーザーガイド』*を参照してください。

AVRO または XML による Data Transformation の生成

新しいトランスフォーメーションウィザードでは、AVRO 入力と任意の形式の出力、または AVRO 出力と任意の形式の入力を使用して、データプロセッサトランスフォーメーションを自動生成できます。 Avro スキーマファイルまたはサンプルファイルを使用して、AVRO ファイル仕様を定義します。 Avro 入力形式と出力型式を両方使用してトランスフォーメーションを生成することもできます。 この場合、Avro スキーマファイルまたはサンプルファイルを個別に使用して、入力と出力を両方定義します。

Avro 入力を読み込むデータプロセッサトランスフォーメーションをマッピングに追加した場合は、Avro 入力を渡す複合ファイルリーダーもトランスフォーメーションに追加します。Avro 出力を生成するデータプロセッサトランスフォーメーションがマッピングに含まれる場合は、出力を複合ファイルライターに渡します。

新しいトランスフォーメーションウィザードでは、XML 入力、出力、または両方を使用してデータプロセッサトランスフォーメーションを自動生成することもできます。 .xsd スキーマファイルまたはサンプルファイルを使用して、予測される XML 階層を定義します。

詳細については、*『Informatica Data Transformation 9.6.1 ユーザーガイド』*を参照してください。

サンプルファイルからのスキーマの生成

新しいトランスフォーメーションウィザードまたはスキーマウィザードで階層を定義するためのサンプルファイルを追加すると、階層を定義するための.xsd スキーマファイルが作成されます。 ウィザードにより、モデルリポジトリにスキーマが作成されます。 このスキーマは他のトランスフォーメーションで使用できます。

詳細については、*『Informatica Data Transformation 9.6.1 ユーザーガイド』*を参照してください。

リレーショナルマッピングキー

リレーショナルマッピング内のキーには、xs:string および xs:integer 型を指定できます。

詳細については、*『Informatica Data Transformation 9.6.1 ユーザーガイド』*を参照してください。

読み取られていない XMap 要素

出力要素にマッピングしない XMap 入力要素を追跡するように選択できます。 トランスフォーメーションはマッピングされていない要素を、**XMap_Unread_Input_Values** というデフォルトハンドラ出力ポートに報告します。

詳細については、*『Informatica Data Transformation 9.6.1 ユーザーガイド』*を参照してください。

一致トランスフォーメーション

ここでは、Developer ツールで作成する一致トランスフォーメーションの新機能について説明します。

トランスフォーメーションがマッピングデータソース内のインデックスデータを使用して現在の ID インデックスデータストアを更新するかどうかを指定できます。 ［持続メソッド］オプションを使用して更新ポリシーを設定します。 データストアに含まれていないデータソース内のインデックスデータを使用してデータストアを更新するようにポリシーを設定します。 あるいは、インデックスデータを使用してデータストアを更新しないポリシーを設定します。 デフォルトでは、トランスフォーメーションはデータストアを更新します。

詳細については、*『Informatica 9.6.1 Developer トランスフォーメーションガイド』*を参照してください。

SQL トランスフォーメーション

ここでは、Developer ツールで作成する SQL トランスフォーメーションの新機能について説明します。

SQL トランスフォーメーションを使用すると、Sybase データベースからストアドプロシージャを起動できます。

詳細については、*『Informatica 9.6.1 Developer トランスフォーメーションガイド』*を参照してください。

インストーラ

ここでは、バージョン 9.6.1 の新しい Informatica プラットフォームインストーラ機能について説明します。

Informatica Kerberos の SPN フォーマットジェネレータ

Informatica インストーラに関係なく、Informatica Kerberos の SPN フォーマットジェネレータを実行できます。 このユーティリティはコマンドラインから、あるいは Informatica インストーラから起動できます。 Informatica Kerberos の SPN フォーマットジェネレータは Informatica サービスと一緒にインストールされます。インストール後は、Informatica ディレクトリからユーティリティを起動できます。

詳細については、*『Informatica 9.6.1 インストール＆環境設定ガイド』*を参照してください。

サービスプリンシパルレベル

Kerberos 認証を使用して Informatica サービスをインストールした場合は、サービスプリンシパルレベルオプションを設定して、ノードとサービスでサービスプリンシパル名およびキータブファイルを共有できるかどうかを指定することができます。 ドメインに高度なセキュリティが不要な場合は、ノード、およびそのノード上のすべてのサービスプロセスで 1 つの SPN およびキータブファイルを使用できます。 ドメインに高度なセキュリティが必要な場合は、ノードごと、およびノード上のプロセスごとに、一意の SPN およびキータブファイルを作成します。

詳細については、*『Informatica 9.6.1 インストール & 環境設定ガイド』*を参照してください。

マッピング

ここでは、バージョン 9.6.1 の新しいマッピング機能について説明します。

Informatica マッピング

ここでは、Developer ツールで作成するマッピングの新機能について説明します。

IBM DB2 のパーティション化

データ統合サービスでは、IBM DB2 ターゲットに書き込む際に複数のパーティションを使用できます。

詳細については、*『Informatica 9.6.1 Big Data Edition ユーザーガイド』*を参照してください。

Metadata Manager

ここでは、バージョン 9.6.1 の新しい Metadata Manager 機能について説明します。

用語解説ビュー

[用語解説] ビューでカテゴリまたはビジネス用語を表示する場合は、**[Informatica Analyst のビュー]** ツールバーアイコンをクリックして、Analyst ツールでカテゴリまたは用語を開くことができます。

詳細については、*『Informatica 9.6.1 Metadata Manager ユーザーガイド』*を参照してください。

リソースのプロパティ

バージョン 9.6.1 では、データベース管理、JDBC、および Microstrategy リソースに新しいリソース構成プロパティが含まれています。

データベース管理リソース

以下の表に、データベース管理リソースの新しいリソース構成プロパティの説明を示します。

プロパティ	説明
セキュア JDBC パラメータ	JDBC 接続 URL に追加できるセキュア JDBC パラメータ。

JDBC **リソース**

以下の表に、JDBC 管理リソースの新しいリソース構成プロパティの説明を示します。

プロパティ	説明
大文字小文字の区別	メタデータソースデータベースの大文字小文字の区別に関する設定を指定します。 デフォルトでは、Metadata Manager エージェントは JDBC ドライバを使用して、データベースが大文字と小文字を区別するかどうかを判別します。

Microstrategy のリソース

以下の表に、Microstrategy 7.0～9.x リソースの新しいリソース構成プロパティの説明を示します。

プロパティ	説明
スキーマのみインポート	選択したプロジェクトのスキーマを、レポートとドキュメントを含めないでインポートします。 デフォルトでは、Metadata Manager はスキーマ、レポート、およびドキュメントをインポートします。

詳細については、*『Informatica 9.6.1 Metadata Manager 管理者ガイド』*を参照してください。

リソースのバージョン

次のバージョンのリソースを作成できます。

- Business Objects 14.1（XI 4.1 SP2）。 以前は、バージョン 14（XI R4）SP6 までの Business Objects リソースを作成できました。
- Microstrategy 9.4.1。以前は、バージョン 9.3.1 までの Microstrategy リソースを作成できました。
- Oracle 12c。以前は、バージョン 11g リリース 2 までの Oracle リソースを作成できました。

リソースの作成について詳しくは、*『Informatica 9.6.1 Metadata Manager 管理者ガイド』*を参照してください。

検索

キーワードおよび詳細検索で無視する単語や句のカスタムリストを作成できます。

詳細については、*『Informatica 9.6.1 Metadata Manager 管理者ガイド』*を参照してください。

セキュリティ

Metadata Manager には次のセキュリティに関する改善点があります。

暗号化キーのサポート

Metadata Manager は Informatica ドメインの暗号化キーを使用して、Metadata Manager リポジトリ内のパスワードなどの機密データを暗号化します。

Informatica ドメインの暗号化キーの詳細については、*『Informatica 9.6.1 セキュリティガイド』*を参照してください。

セキュア JDBC パラメータ

Administrator ツールに、Metadata Manager リポジトリデータベースの URL に含まれるセキュア JDBC パラメータが表示されないようにすることができます。 Metadata Manager でも、一部のデータベース管理リソースのデータベース接続 URL に含まれるセキュア JDBC パラメータが表示されないようにすることができます。

Metadata Manager にセキュア JDBC パラメータが表示されないようにすることができるのは、次のデータベース管理リソースです。

- IBM DB2 for LUW
- IBM Informix
- Microsoft SQL Server
- Netezza
- Oracle
- Sybase ASE

- Teradata

Metadata Manager リポジトリデータベース URL におけるセキュア JDBC パラメータの指定の詳細については、*『Informatica 9.6.1 アプリケーションサービスガイド』*を参照してください。 データベース管理リソースのデータベース接続 URL におけるセキュア JDBC パラメータの指定の詳細については、*『Informatica 9.6.1 Metadata Manager 管理者ガイド』*を参照してください。

Custom Metadata Configurator

PowerCenter リポジトリのセキュリティを強化するために、Custom Metadata Configurator では、カスタムメタデータファイルからメタデータを抽出するマッピングを生成する場合、PowerCenter リポジトリのユーザー名およびパスワードを入力するよう要求します。

詳細については、*『Informatica 9.6.1 Metadata Manager カスタムメタデータ統合ガイド』*を参照してください。

PowerExchange

ここでは、バージョン 9.6.1 の新しい PowerExchange 機能について説明します。

リスナサービス

Kerberos 認証を使用するようにドメインを設定した場合は、ドメイン内の PowerExchange リスナサービスを特定するように Informatica クライアント、データ統合サービス、および PowerCenter 統合サービスを設定できます。

そのためには、クライアント、データ統合サービス、または PowerCenter 統合サービスマシンにある DBMOVER 構成ファイルの NODE 文にオプションの *service_name* パラメータを含めます。

詳細については、*『Informatica 9.6.1 アプリケーションサービスガイド』*を参照してください。

リスナサービス

ここでは、バージョン 9.6.1 の新しいリスナサービス機能について説明します。

Kerberos 認証を使用するようにドメインを設定した場合は、ドメイン内の PowerExchange リスナサービスを特定するように Informatica クライアント、データ統合サービス、および PowerCenter 統合サービスを設定できます。

そのためには、クライアント、データ統合サービス、または PowerCenter 統合サービスマシンにある DBMOVER 構成ファイルの NODE 文にオプションの *service_name* パラメータを含めます。

詳細については、*『Informatica 9.6.1 アプリケーションサービスガイド』*を参照してください。

infacmd pwx コマンド

以下の表に、新しい infacmd pwx コマンドの説明を示します。

コマンド	説明
displayStatsListener	Windows または z/OS での PowerExchange リスナの監視統計を表示します。

PowerExchange アダプタ

ここでは、バージョン 9.6.1 の新しい PowerExchange アダプタ機能について説明します。

Informatica アダプタ

ここでは、新しい Informatica アダプタ機能について説明します。

PowerExchange for DataSift

DataSift から履歴データを抽出して Twitter のソースに使用することができます。

詳細については、*『Informatica PowerExchange for DataSift 9.6.1 ユーザーガイド』*を参照してください。

PowerExchange for Greenplum

- PowerExchange for Greenplum を使用すると、大量のデータを Greenplum テーブルにロードできます。 Developer ツールで開発されたマッピングを実行できます。このマッピングはネイティブまたは Hive ランタイム環境で実行できます。
- PowerExchange for Greenplum を使用すると、データを HAWQ データベースに一括でロードできます。

詳細について *『Informatica PowerExchange for Greenplum 9.6.1 ユーザーガイド』*を参照してください。

PowerExchange for LinkedIn

LinkedIn からグループの情報、グループの投稿に関する情報、グループ投稿に関するコメント、特定の投稿に関するコメントを抽出できます。 LinkedIn からユーザーに推奨されているグループのリストや、ユーザーが属しているグループのリストも抽出できます。

詳細については、*『Informatica PowerExchange for LinkedIn 9.6.1 ユーザーガイド』*を参照してください。

PowerExchange for HBase

PowerExchange for HBase を使用すると、HBase からデータを並列に読み取ることができます。 データ統合サービスは複数のマップジョブを作成して、データを並列に読み取ります。

詳細については、*『Informatica PowerExchange for HBase 9.6.1 ユーザーガイド』*を参照してください。

PowerExchange for Hive

HiveServer または HiveServer2 に接続する Hive 接続を作成できます。 以前は、HiveServer に接続する Hive 接続を作成できました。 HiveServer2 は Kerberos 認証および同時接続をサポートしています。

詳細については、*『Informatica PowerExchange for Hive 9.6.1 ユーザーガイド』*を参照してください。

PowerExchange for MongoDB

スキーマエディタを使用すると、MongoDB コレクションのスキーマを変更できます。また、ネストされたカラムを持つ MongoDB コレクションの仮想テーブルを使用することもできます。

詳細については、*『Informatica PowerExchange for MongoDB 9.6.1 ユーザーガイド』*を参照してください。

PowerExchange for Teradata Parallel Transporter API

Hive ランタイム環境で Teradata テーブルにデータをロードする場合は、Teradata Connector for Hadoop（TDCH）を使用してパフォーマンスを高めることができます。 TDCH を使用してデータをロードするには、データ統合サービスレベルで EnableTdch カスタムプロパティを追加し、値を true に設定します。

詳細については、『*Informatica PowerExchange for Teradata Parallel Transporter API 9.6.1 ユーザーガイド*』を参照してください。

PowerCenter アダプタ

ここでは、新しい PowerCenter アダプタ機能について説明します。

PowerExchange for LDAP

セッションのプロパティでは、LDAP エントリのクエリを行うためのフィルタ条件を複数含むファイルのパスおよび名前を指定できます。

詳細については、 『*Informatica PowerExchange for LDAP 9.6.1 PowerCenter 用ユーザーガイド*』を参照してください。

PowerExchange for MongoDB

スキーマエディタを使用すると、MongoDB コレクションのスキーマを変更できます。また、ネストされたカラムを持つ MongoDB コレクションの仮想テーブルを使用することもできます。

詳細については、『*Informatica PowerExchange for MongoDB 9.6.1 PowerCenter 用ユーザーガイド*』を参照してください。

PowerExchange for Netezza

- バルクモードを使用して Netezza に対してデータを読み書きする場合は、セッションプロパティのテーブル名およびスキーマ名をオーバーライドできます。
- Netezza ターゲットにデータを読み込むためのセッションを設定するときに、テーブル名のプレフィックスを指定できます。テーブル名のプレフィックスは、Netezza テーブルのスキーマをオーバーライドします。

詳細については、『*Informatica PowerExchange for Netezza 9.6.1 PowerCenter 用ユーザーガイド*』を参照してください。

PowerExchange for Salesforce

- Salesforce Bulk API を使用して Salesforce ソースからデータを一括で読み取るようにセッションを設定できます。
- カスタムの子オブジェクトを標準の親オブジェクトから分離できます。

詳細については、『*Informatica PowerExchange for Salesforce 9.6.1.0.1 PowerCenter 用ユーザーガイド*』を参照してください。

PowerExchange for SAP NetWeaver

- ABAP を通じて SAP からデータを読み取るようにファイルモードセッションを実行する場合は、FileCompressEnable カスタムプロパティを設定して圧縮データ転送を有効にすることができます。データを圧縮すると、セッションのパフォーマンスを向上させ、一時ファイルが必要とするディスクストレージを減らすことができます。
- Informatica から出荷された BCI リスナマッピング内の Source_For_BCI リレーショナルターゲットには、DataSourceName という新しいカラムが含まれています。 このフィールドを使用して、Source_For_BCI リレーショナルターゲットが SAP から受け取るデータをパーティション化することができます。
- `BCI_Mappings.xml` ファイルには、アクティベーションマッピングが付属しています。 このアクティベーションマッピングを使用すると、SAP 内で複数の DataSources を同時にアクティブにできます。
- 数値の差分ポインタを使用してビジネスコンテンツデータを抽出する場合は、データ全体を完全に転送せずに、変更されたデータのみを抽出できます。

詳細については、『*Informatica PowerExchange for SAP NetWeaver 9.6.1 PowerCenter 用ユーザーガイド*』を参照してください。

プロファイルおよびスコアカード

ここでは、バージョン 9.6.1 の新しいプロファイルおよびスコアカード機能について説明します。

カラムプロファイル結果

Analyst ツールでカラムプロファイルを実行する場合は、カラムプロファイル結果で次の視覚的なグラフを表示できます。

- カラムの値の頻度およびカラムパターンを表す円グラフ。
- カラム内における NULL 値、一意の値、および一意でない値を含む行の割合を表す棒グラフ。

ドリルダウンフィルタ

Analyst ツールでは、ドリルダウン結果内のカラム値を右クリックして、フィルタ条件としてカラム値を追加できます。

データ品質の値

Analyst ツールのスコアカードを使用してデータ品質の値を測定できます。 スコアカードメトリックのコスト単位を定義し、可変または固定コストを割り当てて、スコアの傾向グラフと共にコストの傾向グラフを表示することができます。 さらに、選択したデータの値をメトリックやスコアカードのレベルで監視できます。

詳細については、*『Informatica 9.6.1 プロファイルガイド』*を参照してください。

参照データ

ここでは、バージョン 9.6.1 の新しい参照データ機能について説明します。

確率モデル

Developer ツールで確率モデルを作成または編集する場合は、次のタスクを実行できます。

- 確率モデルに追加する各ラベルに色を割り当てる。
- 行のデータ値に割り当てるラベルの総数を表示する。
- 確率モデルがラベルに関連付けるデータ値の総数を表示する。

詳細については、*『Informatica 9.6.1 参照データガイド』*を参照してください。

ルール仕様

ここでは、バージョン 9.6.1 の新しいルール仕様機能について説明します。

Analyst ツールでルール仕様を操作する場合は、次のタスクを実行できます。

- ルールセット内のルール文の順序を変更する。
- 単一ルールセットの動作をテストする。
- ルールセットまたはルール仕様のテストに使用するデータを保存したり、データを削除したりする。
- 条件内で NULL 値を指定する、またはルール文でアクションを指定する。
- Microsoft Excel からコピーしたデータを使用して、ルールセットまたはルール仕様をテストする。

詳細については、*『Informatica 9.6.1 ルール仕様ガイド』*を参照してください。

ソースおよびターゲット

ここでは、バージョン 9.6.1 の新しいソースおよびターゲット機能について説明します。

Informatica ソースおよびターゲット

ここでは、Informatica のソースおよびターゲットの新しい機能について説明します。

HAWQ 接続

ODBC を使用すると、HAWQ データベースに対してデータを読み書きできます。

詳細については、*『Informatica 9.6.1 Developer ツールガイド』*を参照してください。

データタイプ

Microsoft SQL Server Uniqueidentifier **データタイプ**

Informatica Developer は Microsoft SQL Server uniqueidentifier データタイプをサポートします。 uniqueidentifier データタイプの精度は 38 で、位取りは 0 です。

詳細については、*『Informatica 9.6.1 Developer ツールガイド』*を参照してください。

Oracle float **データタイプ**

Informatica Developer は Oracle float データタイプをサポートします。 float データタイプの精度は 1～15 で、位取りは 0 です。

詳細については、*『Informatica 9.6.1 Developer ツールガイド』*を参照してください。

PowerCenter のソースとターゲット

ここでは、PowerCenter のソースおよびターゲットの新しい機能について説明します。

Oracle ソースおよびターゲット

基本圧縮および OLTP 圧縮を使用する Oracle ソースおよびターゲットをインポートできます。 また、基本圧縮および OLTP 圧縮を使用する Oracle テーブルのソースおよびターゲット定義を手動で作成することもできます。

詳細については、『PowerCenter 9.6.1 デザイナガイド』を参照してください。

トランスフォーメーション言語関数

ここでは、バージョン 9.6.1 のトランスフォーメーション言語関数の新機能について説明します。

Informatica 関数

ここでは、Informatica 関数の新しい機能について説明します。

ANY 関数

ANY 関数を使用すると、選択したポート内の任意の行を返すことができます。

詳細については、*『Informatica 9.6.1 トランスフォーメーション言語リファレンス』*を参照してください。

第 22 章

変更内容（9.6.1）

この章では、以下の項目について説明します。

- Big Data, 284 ページ
- ドメイン, 284 ページ
- Informatica トランスフォーメーション, 285 ページ
- マッピング, 286 ページ
- Metadata Manager, 286 ページ
- PowerCenter トランスフォーメーション, 287 ページ
- PowerExchange アダプタ, 288 ページ
- プロファイルおよびスコアカード, 289 ページ
- ルール仕様, 289 ページ
- セキュリティ, 289 ページ

Big Data

ここでは、バージョン 9.6.1 の Big Data への変更内容について説明します。

バージョン 9.6.1 では、Hive 環境で実行されるようにマッピングを設定した場合、検証環境で Hive バージョンを指定する必要はありません。

データ統合サービスは Hadoop クラスタに対して有効な Hive バージョンを評価し、マッピングを検証します。

以前は、検証環境での Hive バージョンを指定する必要がありました。

ドメイン

ここでは、バージョン 9.6.1 の Informatica ドメインへの変更内容について説明します。

バージョン 9.6.1 では、SUSE Linux Enterprise Server 10 のサポートは廃止されました。 ドメイン内のいずれかのノードが SUSE Linux Enterprise Server 10 上にある場合は、そのノードをサポート対象のオペレーティングシステムに移行してから、ノードを 9.6.1 にアップグレードする必要があります。詳細については、『Informatica アップグレードガイド』を参照してください。

Informatica トランスフォーメーション

ここでは、バージョン 9.6.1 の Informatica トランスフォーメーションへの変更内容について説明します。

アドレスバリデータトランスフォーメーション

ここでは、Developer ツールで作成するアドレスバリデータトランスフォーメーションへの変更内容について説明します。

バージョン 9.6.1 では、アドレスバリデータトランスフォーメーションで、バージョン 5.5.0 の Address Doctor ソフトウェアエンジンを使用します。

以前は、トランスフォーメーションで Address Doctor ソフトウェアエンジンのバージョン 5.4.1 を使用していました。

バージョン 9.6.1 では、トランスフォーメーションによって以下のポート名に 2 文字の国コードが追加されます。

- 町名字コード JP

  以前は、ポート名は町名字コードでした。
- 新町名字コード JP

  以前は、ポート名は新町名字コードでした。
- 郵便アドレスコード RS

  以前は、ポート名は郵便アドレスコードでした。
- 一意の配布ポイント参照番号 GB

  以前は、ポート名は一意の配布ポイント参照番号でした。

バージョン 9.6.1 では、トランスフォーメーションの［エイリアス番地］プロパティを無効にできました。 このプロパティは、アドレス検証が通りのエイリアスを通りの公式名に置き換えるかどうかを決定します。

以前は、すべての通りのエイリアスを置き換えるか、有効な通りのエイリアス以外の用語をすべて置き換えるようにプロパティを設定していました。

データマスキングトランスフォーメーション

ここでは、Developer ツールで作成するデータマスキングトランスフォーメーションへの変更内容について説明します。

キーマスキング方法

バージョン 9.6.1 では、キーマスキングアルゴリズムが変更されました。 9.6.1 にアップグレードすると、キーマスキング方法を使用する以前のバージョンで作成されたマッピングによって、異なるマスク済み出力が作成されることがあります。

以前は、アップグレード後も、キーマスキング方法を使用していたマッピングで同じマスク済み出力が作成されていました。

データプロセッサトランスフォーメーション

ここでは、Developer ツールで作成するデータプロセッサトランスフォーメーションへの変更内容について説明します。

バージョン 9.6.1 では、パススルーポートまたはリレーショナルから階層への変換を使用して、データプロセッサトランスフォーメーションを PowerCenter にエクスポートできます。 以前は、データプロセッサトラン

スフォーメーションがリレーショナル入力または出力でない場合のみ、PowerCenter にエクスポートできました。

マッピング

ここでは、バージョン 9.6.1 のマッピングへの変更内容について説明します。

Informatica マッピング

ここでは、Developer ツールで作成するマッピングへの変更内容について説明します。

ネイティブ環境でのパーティションマッピング

バージョン 9.6.1 では、ネイティブ環境内のパーティション化されたマッピングに以下の変更点があります。

IBM DB2 for LUW **のリレーショナルターゲット**

データ統合サービスでは、データベースパーティションの数が並行処理値よりも多い DB2 for LUW ターゲットをマッピングするときに、マッピング用のパーティションを作成できます。 DB2 for LUW ターゲットのデータベースパーティション数が並行処理値よりも多い場合、データ統合サービスは並行処理値によって定義されたすべての writer スレッドを使用します。 データ統合サービスは複数のデータベースパーティションを一部の writer スレッドに分散します。

以前は、DB2 for LUW ターゲットのデータベースパーティション数が並行処理値より多い場合、データ統合サービスはマッピング全体に対してパーティションを作成しませんでした。 データ統合サービスは 1 スレッドを使用して各マッピングパイプラインステージを処理していました。

マッピングの最大並行処理

マッピングの最大並行処理が自動になっている場合、実際の並行処理値は次の値の中で最小のものと同じです。

- データ統合サービスプロセスに設定された最大並行処理値
- マッピング内のすべてのフラットファイル、IBM DB2 for LUW、および Oracle ソースの最大パーティション数 データ統合サービスは、ソースタイプに基づいてパーティションの数を決定します。 フラットファイルソースのパーティション数は、データ統合サービスプロセスに設定された最大並行処理値と同じです。 DB2 for LUW または Oracle リレーショナルソースのパーティション数は、リレーショナルソース内のデータベースパーティション数と同じです。

以前は、マッピングの最大並行処理が自動になっていた場合、実際の並行処理値はデータ統合サービスプロセスに設定された最大並行処理値と同じでした。

Metadata Manager

ここでは、バージョン 9.6.1 の Metadata Manager への変更内容について説明します。

リソース構成のインポートおよびエクスポート

バージョン 9.6.1 より、リソース構成のインポートとエクスポートに関連付けられている動作が変更されました。

パスワードのインポートおよびエクスポート

バージョン 9.6.1 では、Metadata Manager または mmcmd を使用してリソース構成をエクスポートする場合、リソース構成ファイルに暗号化されたリソースパスワードを含めるか除外するかを選択できます。リソースでパスワードが使用されるのに、パスワードを除外した場合は、リソース構成をインポートするときにパスワードを入力する必要があります。

以前は、Metadata Manager では常にリソース構成ファイルに暗号化されたリソースパスワードを含めていました。

特権の変更

バージョン 9.6.1 では、リソースの表示特権を持っているユーザーはリソース構成をエクスポートできます。 リソースのロード特権を持つユーザーはリソース構成をインポートできます。

以前は、リソース構成をエクスポートするには、リソースのロード特権が必要でした。

リソースプロパティの変更

バージョン 9.6.1 では、Microstrategy 7.0～9.x のリソースのリソースプロパティが変更されています。

以下の表に、Microstrategy 7.0～9.x リソースから削除されたリソース構成プロパティの説明を示します。

プロパティ	説明
データモデルのリバースエンジニアリング結合	必要に応じて、モデルの SQL 結合を外部キーリレーションに変換します。
次元モデルのリバースエンジニアリング	次元オブジェクトとリレーショナルオブジェクトの間に直接一致が存在する場合は、必要に応じて次の次元オブジェクトをリレーショナルオブジェクトにリバースエンジニアリングします。 - 次元の名前、説明、およびロールを基本テーブルへ - 属性名または測定名、説明、およびデータ型を基本カラムへ

PowerCenter トランスフォーメーション

ここでは、バージョン 9.6.1 の PowerCenter トランスフォーメーションへの変更内容について説明します。

データマスキングトランスフォーメーション

ここでは、PowerCenter Client で作成するデータマスキングトランスフォーメーションへの変更内容について説明します。

キーマスキング方法

バージョン 9.6.1 では、キーマスキングアルゴリズムが変更されました。 9.6.1 にアップグレードすると、キーマスキング方法を使用する以前のバージョンで作成されたマッピングによって、異なるマスク済み出力が作成されることがあります。

以前は、アップグレード後も、キーマスキング方法を使用していたマッピングで同じマスク済み出力が作成されていました。

PowerExchange アダプタ

ここでは、バージョン 9.6.1 の PowerExchange アダプタの変更内容について説明します。

PowerExchange Adapters for PowerCenter

ここでは、バージョン 9.6.1 の PowerCenter アダプタへの変更内容について説明します。

PowerExchange for Salesforce

バージョン 9.6.1.0.1 では、PowerExchange for Salesforce に以下の変更があります。

Salesforce API バージョンのサポート終了

PowerExchange for Salesforce では、以下の Salesforce API バージョンをサポートしていません。

- 7.0
- 8.0
- 16.0

以前は、PowerExchange for Salesforce はこれらの Salesforce API バージョンをサポートしていました。

エラーのロギング

PowerCenter 統合サービスはセッションのエラーログにエラーメッセージを書き込みます。

以前は、PowerCenter 統合サービスはエラーメッセージをエラーログとセッションログの両方に書き込みました。

一括 API ターゲットセッションの Java 要件

一括 API ターゲットセッションの場合は、PowerCenter 統合サービスマシンの Java 一時ディレクトリ用に少なくとも 10～50 MB の領域を設定します。

以前は、一括 API では Java 一時ディレクトリを使用せずに Salesforce ターゲットへの書き込みを行っていました。

インポートに使用できなくなった関連オブジェクトフィールド

以下の Salesforce オブジェクトに関連するオブジェクトからフィールドをインポートできなくなりました。

- ActivityHistory
- EmailStatus
- Name
- OpenActivity
- OwnedContentDocument

以前は、これらのオブジェクトに関連するオブジェクトからフィールドをインポートできました。

Salesforce API のバージョン

PowerExchange for Salesforce はバージョン 31.0 の Salesforce API を使用します。

Salesforce への接続を設定するには、Salesforce のサービス URL を使用してください。最新バージョンの Salesforce API を使用するには、アプリケーション接続を作成するか、または既存のアプリケーション接続内のサービス URL を更新します。

以下のバージョンの Salesforce サービスの URL を使用します。

```
https://www.salesforce.com/services/Soap/u/31.0
```

Salesforce の新しいバージョンのオブジェクトと、以前のバージョンのオブジェクトとの構造が異なる場合は、Salesforce オブジェクトを再インポートします。Salesforce オブジェクトを再インポートした後、関連するマッピングを分析して、マッピングを更新する必要があるかどうかを判断します。

以前は、PowerExchange for Salesforce はバージョン 27.0 の Salesforce API を使用していました。

SOAP リクエストのロギング

標準 API を使用して Salesforce から読み取るセッションの場合、PowerCenter 統合サービスはセッションログに SOAP リクエストを含めなくなりました。

以前は、詳細トレースのセッションを設定するときにセッションログ内の SOAP リクエストを表示できました。

プロファイルおよびスコアカード

ここでは、バージョン 9.6.1 のプロファイルおよびスコアカードへの変更内容について説明します。

バージョン 9.6.1 では、カラムプロファイル結果内の一意の値の総数に NULL のカラム値は含まれません。

以前は、一意の値の総数に NULL のカラム値が含まれていました。

ルール仕様

ここでは、バージョン 9.6.1 のルール仕様への変更内容について説明します。

バージョン 9.6.1 では、ルール文オプションを使用して、条件またはアクションにデータ値または NULL 値を指定できます。

以前は、ルール文内で構成ダイアログボックスを開き、データ値または NULL 値を指定していました。

バージョン 9.6.1 では、以下の操作を実行するのに、Informatica ドメインのアクセス権限は必要ありません。

- ルールセットまたはルール仕様のテスト。
- ルール仕様のコンパイル。

以前は、ルールセットまたはルール仕様のテスト、およびルール仕様のコンパイルに Informatica ドメインのアクセス権限が必要でした。

セキュリティ

ここでは、バージョン 9.6.1 のセキュリティへの変更内容について説明します。

暗号化キーディレクトリ

バージョン 9.6.1 では、ドメイン暗号化キーを格納するディレクトリが変更されました。 暗号化キーの新しいディレクトリは<INFA_HOME>/isp/config/keys です。

以前は、暗号化キーのディレクトリは<INFA_HOME>/isp/config/secret でした。

Kerberos 認証のサービスプリンシパル要件

9.6.1 では、Kerberos 認証を使用するようにドメインを設定した場合、ノードおよびサービスでサービスプリンシパル名（SPN）とキータブファイルを共有するかどうかを指定できました。

次のサービスプリンシパルレベルの中から 1 つを選択できます。

ノードレベル

ドメインがテストまたは開発に使用されていて、高度なセキュリティが不要な場合は、サービスプリンシパルをノードレベルで設定できます。 ノードとそのノードのすべてのサービスプロセスで 1 つの SPN とキータブファイルを使用できます。ノード上に追加サービスを作成する場合、追加のキータブフェアを作成する必要はありません。

プロセスレベル

ドメインが本番環境で使用されていて、高度なセキュリティが必要な場合は、サービスプリンシパルをプロセスレベルで設定できます。 ノードごとに、およびノードのプロセスごとに、一意の SPN およびキータブファイルを作成します。 ノードごとに必要になる SPN とキータブファイルの数は、ノードで実行されるサービスプロセスの数により変わります。

以前は、Informatica ドメイン内のノードごとに、およびノードのプロセスごとに、一意の SPN およびキータブファイルが必要でした。

パート V: バージョン 9.6.0

この部には、以下の章があります。

- 新機能と改良点（9.6.0）, 292 ページ
- Informatica Data Explorer（9.6.0）の変更内容, 319 ページ
- Informatica Data Quality （9.6.0）の変更内容, 321 ページ
- Informatica Data Services（9.6.0）の変更内容, 325 ページ
- Informatica Data Transformation（9.6.0）の変更内容, 327 ページ
- Informatica ドメイン（9.6.0）の変更内容, 328 ページ
- PowerCenter（9.6.0）の変更内容, 332 ページ
- PowerCenter Big Data Edition（9.6.0）の変更内容, 334 ページ
- Metadata Manager（9.6.0）の変更内容, 335 ページ
- Adapters for PowerCenter（9.6.0）の変更内容, 339 ページ
- Adapters for Informatica（9.6.0）の変更内容, 343 ページ

第 23 章

新機能と改良点（9.6.0）

- バージョン 9.6.0, 292 ページ

バージョン 9.6.0

ここでは、バージョン 9.6.0 の新機能および改良点について説明します。

Informatica Analyst

ここでは、Informatica Analyst の新機能および改良点について説明します。

Informatica Analyst インタフェース

Analyst ツールのインタフェースには新しいヘッダとワークスペースがあります。ワークスペースは、ライセンス供与された機能に基づくタスクを実行するための Web ページで、これらのタスクは Analyst ツールの各タブからアクセスします。

Analyst ツールには以下のワークスペースがあります。

- 起動ワークスペース上のアクセスパネルを使用して、アクセスするライセンスがある他のワークスペースにアクセスします。例外管理を実行するライセンスがある場合には、このワークスペースにタスクが表示されます。
- 用語集。組織にとって重要なビジネスコンセプトを定義して説明します。
- 検出。ソースシステムのデータとメタデータの品質を分析します。
- 設計。アナリストと開発者の連携を支援するビジネスロジックを設計します。
- スコアカード。プロファイル結果から作成したスコアカードを開き、編集して実行します。
- ライブラリ。モデルリポジトリ内のアセットを検索します。［ライブラリ］ワークスペース内のメタデータを表示することもできます。
- 例外。タスクの例外レコードデータの表示と管理を行います。処理中のタスクのタイプに基づいて、重複レコードクラスタまたは例外レコードを表示します。 タスクでレコードに加える変更の監査証跡を表示します。
- 接続。リレーショナルデータオブジェクトのインポート、データのプレビュー、プロファイルの実行、マッピング仕様の実行などのために、接続を作成して管理します。
- データドメイン。データドメインとデータドメイングループの作成、管理、削除を行います。
- ジョブステータス。すべてのオブジェクトのデータプレビューやプロファイルに対するドリルダウン操作などの Analyst ツールジョブのステータスを監視します。

- プロジェクト。フォルダーとプロジェクトの作成と管理や、プロジェクトに対する権限の割り当てなどを行います。
- 用語集のセキュリティ。権限、特権、ビジネス用語集ユーザーのロールなどを管理します。

Informatica Analyst のタスク

Analyst ツールは複数の Informatica 製品で使用でき、ビジネスユーザーが社内のプロジェクトで連携するために使用されています。

Analyst ツールで実施できるタスクは、Informatica 製品のライセンスとタスクを実行するための特権によって異なります。組織が所有しているライセンスに基づき、Analyst ツールを使用して以下のタスクを実行できます。

- ビジネス用語集、用語、ポリシーを定義することにより、組織内のデータアセットを標準化して保持する。
- データ検出を実施することで、コンテンツ、品質、データソース構造などを確認するとともにデータ品質傾向を監視する。
- データ統合ロジックを定義してプロジェクトを共同で進めることにより、プロジェクトの納入を早める。
- ルールを定義して管理することにより、データがビジネスポリシーに従っていることを確認する。
- データ品質問題を確認して解決することにより、組織内のデータ品質問題を見つけて解決する。

フラットファイルの区切り文字

区切られたフラットファイルをインポートする場合は、次の印字されないマルチバイト文字を区切り文字として入力できます。/01、/01、および/001。

詳細については、*『Informatica 9.6.0 Analyst ツールガイド』*を参照してください。

Informatica インストーラ

ここでは、Informatica プラットフォームインストーラの新機能および改良点について説明します。

アクセシビリティと第 508 条への準拠

Informatica プラットフォームインストーラはリハビリテーション法第 508 条に準拠しており、障害を持つ方でも利用可能です。

認証

Kerberos 認証を利用するように Informatica ドメインを設定できます。 Informatica サービスをインストールするとドメインの Kerberos 認証を有効にすることができます。 **「ドメイン - ネットワーク認証プロトコル」**というタイトルのページが Informatica サービスインストーラに表示されます。 Kerberos 認証のドメインをインストールするには、Kerberos 認証を有効にするオプションを選択し、必要なパラメータを入力します。

暗号化キー

Informatica はデータをドメインに保存するときにパスワードなどの機密データを暗号化します。 Informatica は、ドメインに格納された機密データの暗号化に使用する一意の暗号化キーを生成するために、キーワードを使用しています。

「ドメイン - 暗号化キー」というタイトルのページが Informatica サービスインストーラに表示されます。 インストール中にノードとドメインを作成する場合は、Informatica がノードとドメインの一意の暗号化キーを生成する際に使用するキーワードを指定する必要があります。 ノードを作成してドメインに参加する場合、Informatica は新しいノードに対して同じ暗号化キーを使用します。

安全な通信

SSL 証明書を提供することにより、またはデフォルトの Informatica SSL 証明書を使用することによりドメイン内のサービス間で通信を安全に保つことができます。 SSL 証明書を使用するには、インストール時にキーストアおよびトラストストアファイル、ならびにパスワードを指定します。

詳細については、*『Informatica 9.6.0 インストール&アップグレードガイド』*を参照してください。

Informatica Data Explorer

ここでは、Informatica Data Explorer の新機能および改良点について説明します。

カラムプロファイル結果

カラムプロファイル結果には数値データ型のカラム内にあるすべての値の合計が含まれます。

詳細については、*『Informatica Data Explorer 9.6.0 データ検出ガイド』*を参照してください。

次のリレーショナルデータベースビューの TOTAL_SUM カラムを使用して、数値カラムの値の合計に関する情報のプロファイリングウェアハウスにアクセスします。

- IDPV_COL_PROFILE_RESULTS
- IDPV_PROFILE_RESULTS_TRENDING

詳細については、*『Informatica 9.6.0 データベースビューリファレンス』*を参照してください。

キュレーション

Analyst ツールおよび Developer ツールのどちらでも推測されたプロファイル結果をキュレーションできます。 キュレーションとは、データソースで検出されたメタデータを検証し管理することで、使用とレポートに適したメタデータにするプロセスです。 データ型を承認、却下、およびリストアすることができます。 また、データドメイン、プライマリキー、および外部キーを承認、却下、およびリストアすることができます。 却下されたデータ型またはデータドメインを含む行を表示または非表示にすることができます。 プロファイルを再度実行するときに、カラムプロファイル推測およびデータドメイン検出推測から承認されたデータ型、データドメイン、およびプライマリキーを除外することができます。

詳細については、*『Informatica Data Explorer 9.6.0 データ検出ガイド』*を参照してください。

次のリレーショナルデータベースビューを使用して、キュレーションされたプロファイル結果に関する情報のプロファイリングウェアハウスにアクセスします。

- IDPV_CURATED_DATATYPES
- IDPV_CURATED_DATADOMAINS
- IDPV_CURATED_PRIMARYKEYS
- IDPV_CURATED_FOREIGNKEYS

詳細については、*『Informatica 9.6.0 データベースビューリファレンス』*を参照してください。

データドメイン検出

ソースデータのすべての行に対してデータドメイン検出を実行し、複数のカラムの推測結果を同時に確認することができます。

詳細については、*『Informatica Data Explorer 9.6.0 データ検出ガイド』*を参照してください。

データ型の推測

カラムプロファイルを実行するときに推測条件に一致する複数のデータ型を推測することができます。 カラムプロファイル結果のカラムデータ型に基づいてドリルダウンすることができます。

詳細については、*『Informatica Data Explorer 9.6.0 データ検出ガイド』*を参照してください。

次のリレーショナルデータベースビューを使用して、推測されたデータ型に関する情報のプロファイリングウェアハウスにアクセスします。

- IDPV_DATATYPES_INF_RESULTS

- IDPV_DATATYPE_FREQ_TRENDING

詳細については、*『Informatica 9.6.0 データベースビューリファレンス』*を参照してください。

検出検索

検出検索はアセットを検索し、エンタープライズ内のデータベースおよびスキーマにある他のアセットとのリレーションを識別します。 検出検索を使用してエンタープライズ内のどこにデータおよびメタデータが存在するのかを探すことができます。 物理データソースおよびデータオブジェクトリレーションを検索する、または文書化されたデータオブジェクトリレーションの欠落を識別することができます。 検出検索の結果から直接一致、間接一致、および関連するアセットを表示することができます。

グローバル検索を実行すると、Analyst ツールはデータオブジェクト、データ型、およびフォルダーに対してテキストベースの検索を行います。 テキスト照合に加えて検出検索を実行すると、検索結果には検索条件に一致するオブジェクトへのリレーションを持つオブジェクトが含まれます。

詳細については、*『Informatica Data Explorer 9.6.0 データ検出ガイド』*を参照してください。

エンタープライズ検出

Informatica Analyst ではエンタープライズ検出を実行することができます。 エンタープライズ検出にはカラムプロファイルとデータドメイン検出が含まれます。

詳細については、*『Informatica Data Explorer 9.6.0 データ検出ガイド』*を参照してください。

プロファイル結果の確認

Depeloper ツールでは、1 つのデータオブジェクトの複数の推測プライマリキーと機能依存性の結果を確認できます。 プロファイルの結果を検証すると、ソースデータのすべての行に対してプロファイルが実行されます。 また、エンタープライズ検出結果で、複数のデータオブジェクトのリレーションとデータドメインも確認できます。

詳細については、*『Informatica Data Explorer 9.6.0 データ検出ガイド』*を参照してください。

スコアカード

スコアカードの結果は Microsoft Excel ファイルにエクスポートできます。 エクスポートされたファイルにはスコアカードのサマリ、傾向グラフ、無効な行、およびスコアカードのプロパティが含まれます。

詳細については、*『Informatica Data Explorer 9.6.0 データ検出ガイド』*を参照してください。

bigint データタイプのサポート

何十億行のように、大量の行を持つデータソースに対してプロファイルを実行することができます。 プロファイリングウェアハウスは大量のソースデータを扱う際に bigint カラムを使用します。

詳細については、*『Informatica Data Explorer 9.6.0 データ検出ガイド』*を参照してください。

Informatica Data Quality

ここでは、Informatica Data Quality の新機能および改良点について説明します。

アクセラレータ

Informatica アクセラレータのセットに次が追加されました。

- スペイン向け Informatica Data Quality アクセラレータ スペインのデータにおける一般的なデータ品質の問題を解決するためのルール、参照テーブル、デモンストレーション用マッピング、およびデモンストレーション用データオブジェクトが含まれます。
- データ検出向け Informatica Data Quality アクセラレータ。データ検出操作を実行するのに使用できるルール、参照テーブル、デモンストレーション用マッピング、およびデモンストレーション用データオブジェクトが含まれます。

詳細については、*『Informatica Data Quality 9.6.0 アクセラレータガイド』*を参照してください。

アドレス検証

アドレスバリデータトランスフォーメーションでは、以下の詳細なプロパティを設定できます。

住所重複時の優先順位

検証するアドレスの種類を決定します。入力アドレスレコードに複数の種類の有効なアドレスデータが含まれるときにこのプロパティを設定します。

フレキシブル範囲拡大

1 つの通りに複数の有効な住所がある場合にトランスフォーメーションが返す住所の数に実際的な制限を与えます。 このプロパティは［拡大する範囲］プロパティを設定するときに設定します。

Geocode **データ型**

トランスフォーメーションが住所のジオコードデータを計算する方法を決定します。 ジオコードは緯度と経度の座標です。 次のタイプのジオコードデータを返すようにプロパティを設定します。

- 建物または区画の入り口の緯度と経度の座標。
- 区画の地理的中心の緯度と経度の座標。

また、トランスフォーメーションは特定の住所の緯度座標と経度座標を推定することもできます。 推定されたジオコードは挿入ジオコードと呼ばれます。

グローバル最大フィールド長

アドレスの行の最大文字数を決定します。このプロパティを設定して住所の行の長さが地元の郵便事業者の定める最大文字数を超えていないか確認します。

拡大する範囲

住居番号が指定されていない番地に対してトランスフォーメーションがどのように提案住所を返すかを決定します。 このプロパティを設定して通りに対する提案住所の範囲を増減します。

無効なアドレスの標準化

トランスフォーメーションで配送不可能な住所のデータ値を標準化するかどうかを決定します。 このプロパティを設定してアドレスレコードの用語を簡単にし、後続の処理がより効率的に実行できるようにします。

次のアドレス検証プロセスプロパティを Administrator ツールで設定できます。

SendRight **レポートの場所**

アドレス検証によって SendRight レポートとレポートの作成に関連するログファイルが書き込まれる場所。 SendRight レポートを生成して、一連のニュージーランドのアドレスレコードがニュージーランド郵政公社の認証基準を満たすことを確認します。

注: SendRight レポートファイルを作成するようアドレスバリデータトランスフォーメーションを設定できます。

詳細については、*『Informatica 9.6.0 Developer トランスフォーメーションガイド』*を参照してください。

自動ワークフローリカバリ

データ統合サービスプロセスが予期せずにシャットダウンしたために強制終了されたワークフローインスタンスの自動リカバリを設定することができます。 自動リカバリを設定すると、データ統合サービスプロセスでは、サービスプロセスの再開時に、サービスプロセスのシャットダウンにより強制終了されたワークフローインスタンスがリカバリされます。

詳細については、 *『Informatica 9.6.0 Developer ワークフローガイド』*を参照してください。

Business Glossary

Business Glossary は、ビジネス用語のオンライン用語集および組織内の重要な概念を定義するポリシーで構成されます。 データスチュワードは、説明、他の用語との関係、関連カテゴリなどの情報を含む用語を作成および公開します。 用語集は、エンドユーザーが検索しやすいように、一元的な場所に保存されます。

Business Glossary は、用語集、ビジネス用語、ポリシー、およびカテゴリで構成されます。 用語集は、他の用語集のコンテンツを格納する上位コンテナです。 ビジネス用語は、組織にとって重要な概念を定義し、ポリシーは、用語に関連付けられたビジネスプロセスを決定するビジネス目的を定義します。 ビジネス用語とポリシーは、わかりやすい分類であるカテゴリに関連付けることができます。 Business Glossary には、Informatica Analyst（Analyst ツール）からアクセスできます。

詳細については、*『Informatica 9.6.0 Business Glossary ガイド』*を参照してください。

カラムプロファイル結果

カラムプロファイル結果には数値データ型のカラム内にあるすべての値の合計が含まれます。

詳細については、*『Informatica Data Explorer 9.6.0 データ検出ガイド』*を参照してください。

次のリレーショナルデータベースビューの TOTAL_SUM カラムを使用して、数値カラムの値の合計に関する情報のプロファイリングウェアハウスにアクセスします。

- IDPV_COL_PROFILE_RESULTS
- IDPV_PROFILE_RESULTS_TRENDING

詳細については、*『Informatica 9.6.0 データベースビューリファレンス』*を参照してください。

キュレーション

Analyst ツールおよび Developer ツールのどちらでも推測されたプロファイル結果をキュレーションできます。 キュレーションとは、データソースで検出されたメタデータを検証し管理することで、使用とレポートに適したメタデータにするプロセスです。 データ型を承認、却下、およびリストアすることができます。 また、データドメイン、プライマリキー、および外部キーを承認、却下、およびリストアすることができます。 却下されたデータ型またはデータドメインを含む行を表示または非表示にすることができます。 プロファイルを再度実行するときに、カラムプロファイル推測およびデータドメイン検出推測から承認されたデータ型、データドメイン、およびプライマリキーを除外することができます。

詳細については、*『Informatica Data Explorer 9.6.0 データ検出ガイド』*を参照してください。

次のリレーショナルデータベースビューを使用して、キュレーションされたプロファイル結果に関する情報のプロファイリングウェアハウスにアクセスします。

- IDPV_CURATED_DATATYPES
- IDPV_CURATED_DATADOMAINS
- IDPV_CURATED_PRIMARYKEYS
- IDPV_CURATED_FOREIGNKEYS

詳細については、*『Informatica 9.6.0 データベースビューリファレンス』*を参照してください。

データ型の推測

カラムプロファイルを実行するときに推測条件に一致する複数のデータ型を推測することができます。 カラムプロファイル結果のカラムデータ型に基づいてドリルダウンすることができます。

詳細については、*『Informatica Data Explorer 9.6.0 データ検出ガイド』*を参照してください。

次のリレーショナルデータベースビューを使用して、推測されたデータ型に関する情報のプロファイリングウェアハウスにアクセスします。

- IDPV_DATATYPES_INF_RESULTS
- IDPV_DATATYPE_FREQ_TRENDING

詳細については、*『Informatica 9.6.0 データベースビューリファレンス』*を参照してください。

ID インデックスデータの維持

データソースに対する ID インデックスデータをデータベーステーブルに書き込むよう一致トランスフォーメーションを設定することができます。 データソースをデータベーステーブル内の ID インデックスデータと比較するよう一致トランスフォーメーションを設定することができます。 2 つあるデータソースのうちの 1 つに対するインデックスデータが保存されているということは、ID 照合マッピングがより短い時間で実行できることを意味します。

インデックステーブルを読み込むよう一致トランスフォーメーションを設定する場合は、トランスフォーメーションが分析するレコードの種類およびトランスフォーメーションが生成する出力の種類を設定します。 データソース内のすべてのレコードを分析するように、またはレコードのサブセットの 1 つを分析するようにトランスフォーメーションを設定できます。 出力としてすべてのレコードを書き込むように、またはレコードのサブセットの 1 つを書き込むようにトランスフォーメーションを設定できます。

詳細については、*『Informatica 9.6.0 Developer トランスフォーメーションガイド』*を参照してください。

Java トランスフォーメーション

Java トランスフォーメーションでは、入力ポートをパーティションキーおよびソートキーとして設定し、ソート方向を割り当てることができます。 パーティションキーおよびソートキーは、Hive 環境で実行されるマッピングにおいてトランスフォーメーションを処理するときに有効になります。

詳細については、*『Informatica 9.6.0 Developer トランスフォーメーションガイド』*を参照してください。

ルックアップトランスフォーメーション

ルックアップトランスフォーメーションのルックアップソースをキャッシュする場合は、動的キャッシュを使用して、ターゲットへの変更に応じてルックアップキャッシュを更新できます。 データ統合サービスは各行をターゲットに渡す前にキャッシュを更新します。

詳細については、*『Informatica 9.6.0 Developer トランスフォーメーションガイド』*を参照してください。

ノーマライザトランスフォーメーション

ノーマライザトランスフォーメーションは 1 つのソース行を複数の出力行に変換するアクティブなトランスフォーメーションです。 ノーマライザトランスフォーメーションは、反復したフィールドを含む行を受け取ると、反復したデータのインスタンスごとに出力行を生成します。

データをターゲットにロードする前にリレーショナルまたはフラットファイルソースの反復したデータを整理する場合にノーマライザトランスフォーメーションを使用します。

詳細については、*『Informatica 9.6.0 Developer トランスフォーメーションガイド』*を参照してください。

パフォーマンス

Developer ツールでは、次の最適化を実行するマッピングを有効にできます。

- 共有体トランスフォーメーションをリレーショナルデータオブジェクトにプッシュします。
- フィルタ、式、ソータ、アグリゲータの各トランスフォーメーションを Hive リレーショナルオブジェクトにプッシュします。

詳細については、*『Informatica 9.6.0 マッピングガイド』*を参照してください。

プロファイル結果の確認

Depeloper ツールでは、1 つのデータオブジェクトの複数の推測プライマリキーと機能依存性の結果を確認できます。 プロファイルの結果を検証すると、ソースデータのすべての行に対してプロファイルが実行されます。 また、エンタープライズ検出結果で、複数のデータオブジェクトのリレーションとデータドメインも確認できます。

詳細については、*『Informatica Data Explorer 9.6.0 データ検出ガイド』*を参照してください。

プッシュダウンの最適化

接続タイプが ODBC である場合、データ統合サービスは、式、アグリゲータ、演算子、共有体、ソータ、およびフィルタの機能を Greenplum ソースにプッシュできます。

詳細については、*『Informatica 9.6.0 マッピングガイド』*を参照してください。

ルールビルダ

ルールビルダは、ビジネスルールの要件をトランスフォーメーションロジックに変換する Informatica Analyst の機能です。ビジネスルールの要件は、ルール仕様に保存します。ルール仕様をコンパイルする際、Analyst ツールは定義した要件に従ってビジネスデータを分析できるトランスフォーメーションを作成します。Analyst ツールで、モデルリポジトリの 1 つ以上のマップレットへのトランスフォーメーションを保存します。

ルール仕様には、1 つ以上の IF-THEN ステートメントが含まれます。IF-THEN ステートメントは論理演算子を使用して、入力データが指定した条件を満たすかどうかを判断します。AND 演算子を使用して IF ステートメントをリンクし、データ値が複数の条件を同時に満たしていることを検証できます。さまざまな入力からのデータを比較し、さまざまな数学的条件下で入力をテストするステートメントを定義できます。ステートメントをリンクして、1 つのステートメントの出力が他への入力になるようにすることもできます。

ルールビルダはビジネスユーザーと Informatica 開発環境の接点です。 ビジネスユーザーは Analyst ツールにログインしてマップレットを作成できます。 Developer ツールユーザーはマップレットをマッピングに追加し、ビジネスデータがビジネスルールと一致することを確認します。

詳細については、*『Informatica 9.6.0 ルールビルダガイド』*を参照してください。

スコアカード

スコアカードの結果は Microsoft Excel ファイルにエクスポートできます。 エクスポートされたファイルにはスコアカードのサマリ、傾向グラフ、無効な行、およびスコアカードのプロパティが含まれます。

詳細については、*『Informatica Data Explorer 9.6.0 データ検出ガイド』*を参照してください。

Sequence Generator トランスフォーメーション

9.6.0 では、Sequence Generator トランスフォーメーションを使用して連続する値をマッピングに追加することができます。

詳細については、*『Informatica 9.6.0 Developer トランスフォーメーションガイド』*を参照してください。

Informatica Data Services

ここでは、Informatica Data Services の新機能および改良点について説明します。

カラムプロファイル結果

カラムプロファイル結果には数値データ型のカラム内にあるすべての値の合計が含まれます。

詳細については、*『Informatica Data Explorer 9.6.0 データ検出ガイド』*を参照してください。

次のリレーショナルデータベースビューの TOTAL_SUM カラムを使用して、数値カラムの値の合計に関する情報のプロファイリングウェアハウスにアクセスします。

- IDPV_COL_PROFILE_RESULTS
- IDPV_PROFILE_RESULTS_TRENDING

詳細については、*『Informatica 9.6.0 データベースビューリファレンス』*を参照してください。

キュレーション

Analyst ツールおよび Developer tool のどちらでも推測されたプロファイル結果をキュレーションできます。キュレーションとは、データソースで検出されたメタデータを検証し管理することで、使用とレポートに適したメタデータにするプロセスです。データ型を承認、拒否、およびリストアすることができます。また、データドメイン、プライマリキー、および外部キーを承認、拒否、およびリストアすることができます。却下されたデータ型またはデータドメインを含む行を表示または非表示にすることができます。プロファイルを再度実行するときに、カラムプロファイル推測およびデータドメイン検出推測から承認されたデータ型、データドメイン、およびプライマリキーを除外することができます。

詳細については、*『Informatica Data Explorer 9.6.0 データ検出ガイド』*を参照してください。

次のリレーショナルデータベースビューを使用して、キュレーションされたプロファイル結果に関する情報のプロファイリングウェアハウスにアクセスします。

- IDPV_CURATED_DATATYPES
- IDPV_CURATED_DATADOMAINS
- IDPV_CURATED_PRIMARYKEYS
- IDPV_CURATED_FOREIGNKEYS

詳細については、*『Informatica 9.6.0 データベースビューリファレンス』*を参照してください。

データ型の推測

カラムプロファイルを実行するときに推測条件に一致する複数のデータ型を推測することができます。カラムプロファイル結果のカラムデータ型に基づいてドリルダウンすることができます。

詳細については、*『Informatica Data Explorer 9.6.0 データ検出ガイド』*を参照してください。

次のリレーショナルデータベースビューを使用して、推測されたデータ型に関する情報のプロファイリングウェアハウスにアクセスします。

- IDPV_DATATYPES_INF_RESULTS
- IDPV_DATATYPE_FREQ_TRENDING

詳細については、*『Informatica 9.6.0 データベースビューリファレンス』*を参照してください。

データマスキングトランスフォーメーション

このリリースではデータマスキングトランスフォーメーションに次の新機能が追加されました。

- データマスキングトランスフォーメーションは Hadoop クラスタでサポートされています。トランスフォーメーションを Hive 環境で実行できます。
- トークン化とは、文字列データをマスキングする独自のアルゴリズムまたはロジックを JAR ファイルに含めることができるマスキング方法です。
- Phone マスキング方法を使用して整数値および bigint データ型数値を含むフィールドをマスクすることができます。

詳細については、*『Informatica 9.6.0 Developer トランスフォーメーションガイド』*を参照してください。

Java トランスフォーメーション

Java トランスフォーメーションでは、入力ポートをパーティションキーおよびソートキーとして設定し、ソート方向を割り当てることができます。パーティションキーおよびソートキーは、Hive 環境で実行されるマッピングにおいてトランスフォーメーションを処理するときに有効になります。

詳細については、*『Informatica 9.6.0 Developer トランスフォーメーションガイド』*を参照してください。

ノーマライザトランスフォーメーション

ノーマライザトランスフォーメーションは 1 つのソース行を複数の出力行に変換するアクティブなトランスフォーメーションです。ノーマライザトランスフォーメーションは、反復したフィールドを含む行を受け取ると、反復したデータのインスタンスごとに出力行を生成します。

データをターゲットにロードする前にリレーショナルまたはフラットファイルソースの反復したデータを整理する場合にノーマライザトランスフォーメーションを使用します。

詳細については、*『Informatica 9.6.0 Developer トランスフォーメーションガイド』*を参照してください。

パフォーマンス

Developer tool では、次の最適化を実行するマッピングを有効にできます。

- カスタム SQL クエリをリレーショナルデータオブジェクトにプッシュします。
- Union、Union All、Intersect、Intersect All、Minus、Minus All、および Distinct などの操作をリレーショナルデータオブジェクトにプッシュします。
- 初期選択を実行し、SQL キーワード「LIMIT」を含むクエリをリレーショナルデータオブジェクトにプッシュします。
- 共有体トランスフォーメーションをリレーショナルデータオブジェクトにプッシュします。
- フィルタ、式、ソータ、アグリゲータの各トランスフォーメーションを Hive リレーショナルオブジェクトにプッシュします。

詳細については、*『Informatica 9.6.0 Developer ユーザーガイド』*、*『Informatica 9.6.0 SQL データサービスガイド』*、*および『Informatica 9.6.0 マッピングガイド』*を参照してください。

プロファイル結果の確認

Depeloper ツールでは、1 つのデータオブジェクトの複数の推測プライマリキーと機能依存性の結果を確認できます。プロファイルの結果を検証すると、ソースデータのすべての行に対してプロファイルが実行されます。また、エンタープライズ検出結果で、複数のデータオブジェクトのリレーションとデータドメインも確認できます。

詳細については、*『Informatica Data Explorer 9.6.0 データ検出ガイド』*を参照してください。

Greenplum のプッシュダウンの最適化

接続タイプが ODBC である場合、データ統合サービスは、式、アグリゲータ、演算子、共有体、ソータ、およびフィルタの機能を Greenplum ソースにプッシュできます。

詳細については、*『Informatica 9.6.0 マッピングガイド』*を参照してください。

SAP HANA に対するプッシュダウンの最適化

データ統合サービスは接続タイプが ODBC の時、SAP HANA ソースにトランスフォーメーションロジックをプッシュすることができます。

詳細については、*『Informatica 9.6.0 マッピングガイド』*を参照してください。

Teradata のプッシュダウンの最適化

データ統合サービスは接続タイプが ODBC の時、Teradata ソースにトランスフォーメーションロジックをプッシュすることができます。

詳細については、*『Informatica 9.6.0 マッピングガイド』*を参照してください。

REST Web サービスコンシューマトランスフォーメーション

REST Web サービスコンシューマトランスフォーメーションは、マッピングで REST Web サービスを消費します。 トランスフォーメーションでは、GET、PUT、POST、および DELETE HTTP の操作を使用できます。

REST Web サービスコンシューマトランスフォーメーションをスキーマオブジェクトから作成するか、空のトランスフォーメーションに要素を追加できます。

詳細については、*『Informatica 9.6.0 Developer トランスフォーメーションガイド』*を参照してください。

スコアカード

スコアカードの結果は Microsoft Excel ファイルにエクスポートできます。エクスポートされたファイルにはスコアカードのサマリ、傾向グラフ、無効な行、およびスコアカードのプロパティが含まれます。

詳細については、*『Informatica Data Explorer 9.6.0 データ検出ガイド』*を参照してください。

シーケンスジェネレータトランスフォーメーション

今後は Sequence Generator トランスフォーメーションを使用して連続する値をマッピングに追加することができます。

詳細については、*『Informatica 9.6.0 Developer トランスフォーメーションガイド』*を参照してください。

ストアドプロシージャ

SQL トランスフォーメーションを使用すると、リレーショナルデータベースからストアドプロシージャを起動できます。ストアードプロシージャをインポートすることにより Developer tool で SQL トランスフォーメーションを作成できます。Developer tool はポートおよびストアドプロシージャの呼び出しを追加します。SQL トランスフォーメーションに手動でストアドプロシージャの呼び出しをさらに追加することができます。ストアドプロシージャから 0 行、1 行、または一連の結果を返します。

詳細については、*『Informatica 9.6.0 Developer トランスフォーメーションガイド』*を参照してください。

Tableau

Informatica Data Services ODBC ドライバを介して Tableau でデプロイ済みの SQL データサービスをクエリできます。

詳細については、*『Informatica 9.6.0 Data Services ガイド』*を参照してください。

Web サービスコンシューマトランスフォーメーション

このリリースの Web サービスコンシューマトランスフォーメーションには以下の新機能があります。

- 外部 Web サービスプロバイダは、NTLMv2 を使用して統合サービスを認証できます。
- Web サービスコンシューマトランスフォーメーションでは、一方向メッセージパターンの WSDL を使用できます。
  詳細については、*『Informatica 9.6.0 Developer トランスフォーメーションガイド』*を参照してください。

Informatica Data Transformation

ここでは、Informatica Data Transformation の新機能および改良点について説明します。

データプロセッサトランスフォーメーションウィザード

COBOL、ASN.1、リレーショナル、JSON 入力または出力のある Developer でこのウィザードを使用してデータプロセッサトランスフォーメーションを作成できます。

このウィザードの詳細については、*『Informatica 9.6.0 Data Transformation ユーザーガイド』*を参照してください。

リレーショナル入力

データプリプロセッサトランスフォーメーションでリレーショナル入力を階層出力に変換することができます。

リレーショナル入力の詳細については、*『Informatica 9.6.0 Data Transformation ユーザーガイド』*を参照してください。

XMap と JSON

JSON に対して直接読み取りまたは書き込みを行う XMap を作成できます。

XMap または JSON の詳細については、*『Informatica 9.6.0 Data Transformation ユーザーガイド』*を参照してください。

XMap とトランスフォーマ

XMap のマッピング文では、dp:transform 関数を使用してユーザー定義のトランスフォーマを含めることができます。XPath エディタを使用して、入力、出力または条件フィールドに dp:transform 関数を追加します。

XPath および XPath エディタの詳細については、*『Informatica 9.6.0 Data Transformation ユーザーガイド』*を参照してください。

Informatica Developer

ここでは、Informatica Developer の新機能および改良点について説明します。

アラート

Developer tool の［**アラート**］ビューで、接続ステータスのアラートを表示できます。

詳細については、*『Informatica 9.6.0 Developer tool ガイド』*を参照してください。

関数

Developer tool では、トランスフォーメーション言語で次の関数を使用できます。

- UUID4()。ランダムに生成された 16 バイトのバイナリ値を返します。
- UUID_UNPARSE(バイナリ)。 16 バイトのバイナリ引数を取り込んで、36 字の文字列を返します。

詳細については、*『Informatica 9.6.0 Developer トランスフォーメーション言語リファレンス』*を参照してください。

JDBC の接続

データ統合サービスを使用すると、JDBC を介してリレーショナルデータベースソースから読み取りを行って、リレーショナルデータベースターゲットに書き込むことが可能になります。 JDBC ドライバは、Informatica サービスおよび Informatica クライアントと共にインストールされます。 また、サードパーティベンダーの Web サイトから、JDBC 3.0 準拠の JDBC ドライバをダウンロードすることもできます。JDBC ドライバを使用すると、ビューやテーブルなどのデータベースオブジェクトをインポートしたり、トランスフォーメーションのデータをプレビューしたり、マッピングを実行したりすることができます。

詳細については、*『Informatica 9.6.0 Developer tool ガイド』*を参照してください。

キーボードアクセシビリティ

Developer tool では、キーボードショートカットを使用してエディタ内のオブジェクトやポートで作業ができます。また、［**トランスフォーメーション**］パレットとワークベンチに移動することもできます。

詳細については、*『Informatica 9.6.0 Developer tool ガイド』*を参照してください。

モデルリポジトリサービスの更新

Developer tool では、モデルリポジトリサービスを更新して、新しいオブジェクトと更新済みオブジェクトをモデルリポジトリ内で表示できます。

詳細については、*『Informatica 9.6.0 Developer tool ガイド』*を参照してください。

パスフレーズ

次の接続タイプの場合、Developer tool ではパスワードの代わりにパスフレーズを入力できます。

- Adabas
- DB2 for i5/OS
- DB2 for z/OS
- IMS
- シーケンシャル
- VSAM

z/OS 上のデータベースやデータセットへのアクセスに使用する有効なパスフレーズの文字は、最長 128 文字まで設定できます。i5/OS へのアクセスに使用する有効なパスフレーズの文字は、最長 31 文字です。パスフレーズには次の文字を使用できます。

- 英字（大文字と小文字）
- 数字（0～9）
- スペース
- 次に示す特殊文字。

  ' - ; # \ , . / ! % & * ( ) _ + { } : @ | < > ?

  注: 先頭に書かれている特殊文字はアポストロフィです。

詳細については、*『Informatica 9.6.0 Developer tool ガイド』*を参照してください。

Informatica Development Platform

ここでは、Informatica Development Platform の新機能および改良点について説明します。

デザイン API

バージョン 9.6.0 ではデザイン API に次の改良点が加えられています。

- デザイン API を使用して PowerCenter リポジトリから XML ソースまたは XML ターゲットを取得することができます。
- デザイン API を使用して PowerExchange を経由し、階層 VSAM データソースまたはターゲットに接続することができます。
- デザイン API を使用して Kerberos 認証を使用するドメインでリポジトリ関数を実行することができます。Kerberos 認証は pcconfig.properties ファイルを通して有効にする、またはリポジトリオブジェクトを作成するときに有効化することができます。

詳細については、*『Informatica Development Platform 9.6.0 Developer ガイド』*を参照してください。

Informatica コネクタツールキット

Informatica コネクタツールキットを使用してデータソースと Informatica プラットフォーム間の接続を提供するアダプタを構築することができます。 Informatica コネクタツールキットはライブラリ、プラグイン、および Eclipse 環境でアダプタを開発するためのサンプルコードで構成されています。

詳細については、*『Informatica Development Platform 9.6.0 Informatica コネクタツールキット Developer ガイド』*を参照してください。

Informatica ドメイン

ここでは、Informatica ドメインの新機能および改良点について説明します。

アナリストサービス

バージョン 9.6.0 では、アナリストサービスに次の拡張機能が追加されています。

- ヒューマンタスクを実行するように設定されたデータ統合サービスを選択できます。アナリストサービスに関連付けられたデータ統合サービスがヒューマンタスクを実行するように設定されていない場合は、別のデータ統合サービスを選択します。
- 検索サービスを選択すると、Analyst ツールで検索を有効にできます。
- ビジネス用語集をエクスポートするためのエクスポートファイルディレクトリの場所を設定できます。

詳細については、*『Informatica 9.6.0 アプリケーションサービスガイド』*を参照してください。

コンテンツ管理サービス

コンテンツ管理サービス上に SendRight レポートファイルの場所を設定できます。ニュージーランドの住所レコードに対してアドレス検証マッピングを認証モードで実行するときに、SendRight レポートを生成します。レポートによって、住所レコードがニュージーランド郵便公社の認証基準を満たしていることが検証されます。

詳細については、*『Informatica 9.6.0 アプリケーションサービスガイド』*を参照してください。

コンテンツ管理サービスはルール仕様をマップレットにコンパイルする作業を管理します。 ルール仕様を Analyst ツールにコンパイルする場合、アナリストサービスはマップレットを生成するコンテンツ管理サービスを選択します。 Analyst ツールはモデルリポジトリサービス構成を使用して、コンテンツ管理サービスを選択します。

詳細については、*『Informatica 9.6.1 アプリケーションサービスガイド』*を参照してください。

高可用性

バージョン 9.6.0 では、サービスの高可用性に次の拡張機能が追加されています。

- モデルリポジトリサービスが利用できなくなると、サービスマネージャによって、同じノードまたはバックアップノード上のサービスが再起動されます。1 つ以上のバックアップノードで実行するようにモデルリポジトリサービスを設定できます。
- データ統合サービスが利用できなくなると、サービスマネージャによって、同じノードまたはバックアップノード上のサービスが再起動されます。データ統合サービスを 1 つ以上のバックアップノードで実行するように設定することができます。
- データ統合サービスが予期せずフェイルオーバーするか再起動した場合は、強制終了したワークフローの自動リカバリを有効にできます。
- PowerCenter 統合サービスを有効にすると、高可用性維持の情報をデータベーステーブル内に保存できます。PowerCenter 統合サービスは、関連付けられたリポジトリデータベース内にこの情報を保存します。

詳細については、*『Informatica 9.6.0 管理者ガイド』*を参照してください。

ログ管理

Administrator ツールでのシナリオに応じて、ログをドメインレベルまたはサービスでベルで集計できます。集計するログファイルを圧縮してディスク容量を節約することもできます。

詳細については、*『Informatica 9.6.0 管理者ガイド』*を参照してください。

パスフレーズ

次の場所では、パスワードの代わりにパスフレーズを入力できます。

- ADABAS、DB2I、DB2Z、IMS、SEQ、または VSAM の各接続に対する infacmd isp CreateConnection コマンドと UpdateConnection コマンドの-ConnectionPassword オプション内。

- IMS、SEQ、および VSAM の各データソースに対する infacmd pwx createdatamaps コマンドの-pwxPassword オプション内。
- DB2 for i5/OS 接続と DB2 for z/OS 接続に対する Administrator ツール内。

z/OS 上のデータベースやデータセットへのアクセスに使用する有効なパスフレーズの文字は、最長 128 文字まで設定できます。i5/OS へのアクセスに使用する有効なパスフレーズの文字は、最長 31 文字です。パスフレーズには次の文字を含めることができます。

- 大文字および小文字
- 0～9 の数字
- スペース
- 次に示す特殊文字。

  ' - ; # \ , . / ! % & * ( ) _ + { } : @ | < > ?

  注: 最初の文字はアポストロフィです。

詳細については、*『Informatica 9.6.0 管理者ガイド』*と *Informatica 9.6.0 コマンドリファレンス』*を参照してください。

検索サービス

検索サービスを作成することで、Analyst ツールと Business Glossary Desktop での検索を有効にします。

詳細については、*『Informatica 9.6.0 アプリケーションサービスガイド』*を参照してください。

ワークフローのグラフ

Administrator ツールで実行するワークフローをグラフィカルに表示できます。ワークフローおよび障害ポイント内のタスクの詳細を表示できます。

詳細については、*『Informatica 9.6.0 管理者ガイド』*を参照してください。

Informatica ドメインのセキュリティ

ここでは、Informatica ドメインのセキュリティの改良点について説明します。

認証

Informatica を Kerberos 認証および Microsoft Active Directory（AD）ディレクトリサービスを使用して実行することができます。 Kerberos 認証はシングルサインオン機能を Informatica ドメインクライアントアプリケーションに提供します。 Informatica ドメインは Active Directory 2008 R2 をサポートします。

2 要素認証

Informatica クライアントを 2 要素認証を使用する Windows ネットワーク上で実行することができます。

暗号化キー

ドメインに保存されたパスワードなどの機密データを暗号化するのに使用する一意の暗号化キーを生成するためのキーワードを指定することができます。

ワークフローのセキュリティ

PowerCenter ワークフローを安全に実行できるよう PowerCenter 統合サービスを設定することができます。**[データの暗号化を有効にする]** オプションは PowerCenter 統合サービスと Data Transformation マネージャ（DTM）プロセス間および DTM の処理間の安全な通信を有効にします。

管理者グループ

Informatica ドメインにはデフォルト管理者特権を持つ管理者グループが含まれています。 管理者グループに対してユーザーを追加または削除できます。 管理者グループは削除できません。

管理者アカウントロックアウト

Administrator ツールでアカウントロックアウトを設定すると、管理者ユーザーアカウントに対してアカウントロックアウトを適用することができます。 **［管理者アカウントロックアウト］**オプションは管理者ユーザーアカウントに対するロックアウトを有効にします。 **［アカウントロックアウト］**オプションを有効にすると、**［管理者アカウントロックアウト］**も有効にすることができます。

安全なリレーショナルデータベースへの接続

Informatica リレーショナルデータベースドライバを使用して安全な Oracle、Microsoft SQL Server、または IBM DB2 データベースに接続することができます。 SSL 証明書で保護されたデータベースにリポジトリ、ソース、およびターゲットを作成することができます。

監査レポート

Administrator ツールでは、監査レポートを生成して Informatica ドメインのユーザーおよびグループに関する情報を得ることができます。 たとえば、ユーザーに割り当てられた特権および権限、およびユーザーと関連付けられたグループなどのユーザーアカウントについての情報を得ることができます。

アナリストサービスの特権

以下の表に、アナリストサービスの新しい特権を示します。

特権	説明
グロッサリの管理	ユーザーはビジネス用語集を管理できます。
ワークスペースアクセス	ユーザーは Analyst ツールの次のワークスペースにアクセスできます。 - **設計**ワークスペース。 - **検出**ワークスペース。 - **用語集**ワークスペース。 - **スコアカード**ワークスペース。
設計ワークスペース	ユーザーは**設計**ワークスペースにアクセスできます。
検出ワークスペース	ユーザーは**検出**ワークスペースにアクセスできます。
用語集ワークスペース	ユーザーは**用語集**ワークスペースにアクセスできます。
スコアカードワークスペース	ユーザーは**スコアカード**ワークスペースにアクセスできます。

モデルリポジトリサービス特権

以下の表に、モデルリポジトリサービスの新しい特権を示します。

特権	説明
Analyst アクセス	ユーザーは、Analyst ツールからモデルリポジトリにアクセスできます。
Developer アクセス	ユーザーは、Developer ツールからモデルリポジトリにアクセスできます。

詳細については、*『Informatica 9.6.0 セキュリティガイド』*を参照してください。

コマンドラインプログラム

ここでは、Informatica コマンドラインプログラムの新規および更新されたコマンドとオプションについて説明します。

infacmd as コマンド

以下の表に、更新された infacmd as コマンドの説明を示します。

コマンド	説明
CreateService	以下の新しいオプションが含まれます。 - -HumanTaskDataIntegrationService(-htds)。オプション。ヒューマンタスクを実行するデータ統合サービスの名前。 - -BusinessGlossaryExportFileDirectory(-bgefd)。オプション。ビジネス用語集ファイルをエクスポートするディレクトリの場所。 以下の廃止されたオプションが含まれます。 - -StagingDatabase(-sd)。必須。ステージングデータベース用のデータベース接続名

UpdateServiceOptions	アナリストサービスオプションを更新します。 バージョン 9.6.0 では、このコマンドを実行して、ヒューマンタスクを実行するためのデータ統合サービスを指定できます。
	例えば、次のコマンドを実行すると、アナリストサービスは、データ統合サービス名として DIS_ID_100 を指定するよう設定されます。
	`infacmd as UpdateServiceOptions`
	`-dn InfaDomain -sn AS_ID_100`
	`-un Username -pd Password`
	`HumanTaskDataIntegrationService.humanTaskDsServiceName=DS_ID_100`

以下の表に、廃止された infacmd as コマンドの説明を示します。

コマンド	説明
CreateAuditTables	ステージングデータベースの不良レコードテーブルおよび重複テーブルの監査証跡ログイベントを含む監査テーブルを作成します。 infacmd as CreateAuditTables を使用するスクリプトを更新します。
DeleteAuditTables	ステージングデータベースの不良レコードテーブルおよび重複テーブルの監査証跡ログイベントを含む監査テーブルを作成します。 infacmd as DeleteAuditTables を使用するスクリプトを更新します。

infacmd dis コマンド

以下の表に、更新された infacmd dis コマンドの説明を示します。

コマンド	説明
CreateService	以下の新しいオプションが含まれます。 - -BackupNodes(-bn)。オプション。バックアップノードの名前。
UpdateService	以下の新しいオプションが含まれます。 - -BackupNodes(-bn)。オプション。バックアップノードの名前。

infacmd idd コマンド

infacmd idd コマンドは廃止されました。 infacmd idd コマンドを参照するスクリプトを更新します。

以下の表に、廃止された infacmd idd コマンドの説明を示します。

コマンド	説明
CreateService	データディレクタサービスを作成します。
ListServiceOptions	データディレクタサービスオプションの一覧を表示します。
ListServiceProcessOptions	データディレクタサービスオプションプロセスの一覧を表示します。
RemoveService	データディレクタサービスを削除します。
UpdateServiceOptions	データディレクタサービスオプションを更新します。
UpdateServiceProcessOptions	データディレクタサービスプロセスのオプションを更新します。

infacmd isp コマンド

以下の表に、更新された infacmd isp コマンドの説明を示します。

コマンド	説明
AssignISToMMService	以下の新しいオプションが含まれます。 - -RepositoryUserSecurityDomain(-rsdn)。オプション。PowerCenter リポジトリユーザーが属しているセキュリティドメインの名前。
createconnection	以下の更新されたオプションが含まれます。 - -ConnectionPassword。ADABAS、DB2I、DB2Z、IMS、SEQ、または VSAM 接続のパスフレーズを入力できます。 パスフレーズは、z/OS 接続では 128 文字まで、DB2 for i5/OS 接続では 31 文字まで設定できます。パスフレーズには英字、数字、スペース、およびいくつかの特殊文字を含めることができます。
CreateIntegrationService	以下のサービスのオプション(-so)が含まれます。 - StoreHAPersistenceInDB。オプション。処理状態の情報を、関連する PowerCenter リポジトリデータベースの中の高可用性永続テーブル内に保存します。デフォルトは［いいえ］です。
EnableService	検索サービスを有効化できます。
GetLog	ServiceType オプションの引数 SEARCH が含まれます。この引数を使用すると、検索サービスのログイベントを取得できます。
ListServices	ServiceType オプションの引数 SEARCH が含まれます。この引数を使用すると、ドメインで実行中のすべての検索サービスのリストを取得できます。
updateConnection	以下の更新されたオプションが含まれます。 - -ConnectionPassword。ADABAS、DB2I、DB2Z、IMS、SEQ、または VSAM 接続のパスフレーズを入力できます。 パスフレーズは、z/OS 接続では 128 文字まで、DB2 for i5/OS 接続では 31 文字まで設定できます。パスフレーズには英字、数字、スペース、およびいくつかの特殊文字を含めることができます。

コマンド	説明
UpdateDomainOptions	以下のドメインオプション（-do）が含まれます。 - ServiceResilTimeout。サービスが別のサービスへの接続の確立または再確立を試行する時間（秒）。
UpdateGatewayInfo	以下の新しいオプションが含まれます。 - -Force(-f)。オプション。ドメインへの接続に失敗した場合でも、domains.infa ファイルが更新または作成されます。ドメインへの接続に失敗すると、-Force オプションによって、Kerberos と TLS が有効なオプションは false に設定されます。-Force オプションを指定しない場合、ドメインへの接続に失敗したときに、domains.infa ファイルは更新されません。以前は、指定した接続情報でゲートウェイノードを更新したときに、エラーメッセージがないかコマンドで確認できませんでした。
UpdateIntegrationService	以下のサービスのオプション(-so)が含まれます。 - StoreHAPersistenceInDB。オプション。処理状態の情報を、関連する PowerCenter リポジトリデータベースの中の高可用性永続テーブル内に保存します。デフォルトは［いいえ］です。

infacmd mrs コマンド

以下の表に、更新された infacmd mrs コマンドの説明を示します。

コマンド	説明
CreateService	以下の新しいオプションが含まれます。 - -BackupNodes(-bn)。オプション。バックアップノードの名前。
UpdateService	以下の新しいオプションが含まれます。 - -PrimaryNode(-nn)。オプション。プライマリノードの名前です。 - -BackupNodes(-bn)。オプション。バックアップノードの名前。

infacmd ps コマンド

以下の表に、新しい infacmd ps コマンドの説明を示します。

コマンド	説明
migrateProfileResults	カラムプロファイルの結果とデータドメイン検出の結果をバージョン 9.1.0、9.5.0、または 9.5.1 から移行します。
synchronizeProfile	特定のプロジェクト内のすべてのプロファイルにおける文書化されたキー、ユーザー定義のキー、コミットされたキー、プライマリキー、および外部キーをバージョン 9.1.0、9.5.0、または 9.5.1 から移行します。

infacmd pwx コマンド

以下の表に、新しい infacmd pwx コマンドの説明を示します。

コマンド	説明
createdatamaps	バルクデータ移動のために、IMS、SEQ、または VSAM データソースの PowerExchange データマップを作成します。

infacmd search コマンド

以下の表に、新しい infacmd search コマンドの説明を示します。

コマンド	説明
createService	検索サービスを作成します。
listServiceOptions	検索サービスのプロパティを一覧表示します。
listServiceProcessOptions	検索サービスプロセスのプロパティを一覧表示します。
updateServiceOptions	検索サービスのプロパティを設定します。
updateServiceProcessOptions	検索サービスプロセスのプロパティを設定します。

詳細については、*『Informatica 9.6.0 コマンドリファレンス』*を参照してください。

PowerCenter

ここでは、PowerCenter の新機能および改良点について説明します。

SAP HANA に対するプッシュダウンの最適化

PowerCenter 統合サービスは接続タイプが ODBC の時、SAP HANA ソースおよびターゲットにトランスフォーメーションロジックをプッシュすることができます。

詳細については、*『Informatica PowerCenter 9.6.0 上級ワークフローガイド』*を参照してください。

データベースでの高可用性維持

PowerCenter 統合サービスを有効にすると、高可用性維持の情報をデータベーステーブル内に保存できます。PowerCenter 統合サービスは、関連付けられたリポジトリデータベース内にこの情報を保存します。

詳細については、*『Informatica 9.6.0 管理者ガイド』*を参照してください。

トランスフォーメーション

パラメータファイルを使用すると、次のトランスフォーメーションでキャッシュサイズ値を指定できます。

- アグリゲータ
- ジョイナ
- ランク
- ソータ

詳細については、*『Informatica PowerCenter 9.6.1 トランスフォーメーションガイド』*を参照してください。

PowerCenter Big Data Edition

ここでは、PowerCenter Big Data Edition の新機能および改良点について説明します。

自動ワークフローリカバリ

データ統合サービスプロセスが予期せずにシャットダウンしたために強制終了されたワークフローインスタンスの自動リカバリを設定することができます。 自動リカバリを設定すると、データ統合サービスプロセスでは、サービスプロセスの再開時に、サービスプロセスのシャットダウンにより強制終了されたワークフローインスタンスがリカバリされます。

詳細については、 *『Informatica 9.6.0 Developer ワークフローガイド』*を参照してください。

Hive 環境でのマッピング

- Cloudera 4.2、Hortonworks 1.3.2、MapR 2.1.3、および MapR 3.0.1 ディストリビューションでマッピングを実行できます。
- マッピングの検証環境として Hive を選択する場合に Hive のバージョンを選択できるようになりました。
- Hive バージョン 0.9 以降では Hive ターゲットテーブルに追加することができます。
- Java トランスフォーメーションでは、入力ポートをパーティションキーおよびソートキーとして設定し、ソート方向を割り当て、ソートされた出力データを取得することができます。
- Hadoop データノードおよびデータ統合サービスノードの Hadoop ディストリビューションディレクトリを変更するには、Hadoop リソースディスクリプタ設定ファイル hadoopRes.properties を使用します。

詳細については、*『Informatica PowerCenter Big Data Edition 9.6.0 ユーザーガイド』*を参照してください。

ネイティブ環境でのパーティションマッピング

パーティション化オプションがある場合は、データ統合サービスプロセスを有効にして、ネイティブ環境におけるマッピング実行時の並列処理を最大化することができます。 データ統合サービスプロセスはマルチ CPU のノードで実行する必要があります。 並列処理を最大化すると、データ統合サービスによって基になるデータが動的にパーティションに分割され、すべてのパーティションが同時に処理されます。 データ統合サービスでパーティションが追加されると、処理スレッド数が増加し、これによりマッピングのパフォーマンスを高めることができます。

詳細については、*『Informatica 9.6.0 マッピングガイド』*を参照してください。

PowerCenter Advanced Edition

ここでは、PowerCenter Advanced Edition の新機能および改良点について説明します。

Business Glossary

Business Glossary は、ビジネス用語のオンライン用語集および組織内の重要な概念を定義するポリシーで構成されます。データスチュワードは、説明、他の用語との関係、関連カテゴリなどの情報を含む用語を作成および公開します。用語集は、エンドユーザーが検索しやすいように、一元的な場所に保存されます。

Business Glossary は、用語集、ビジネス用語、ポリシー、およびカテゴリで構成されます。 用語集は、他の用語集のコンテンツを格納する上位コンテナです。 ビジネス用語は、組織にとって重要な概念を定義し、ポリシーは、用語に関連付けられたビジネスプロセスを決定するビジネス目的を定義します。ビジネス用語とポリシーは、わかりやすい分類であるカテゴリに関連付けることができます。Business Glossary には、Informatica Analyst（Analyst ツール）からアクセスできます。

詳細については、*『Informatica 9.6.0 Business Glossary ガイド』*を参照してください。

Metadata Manager

ここでは、Metadata Manager の新機能および改良点について説明します。

セキュリティの改善点

Metadata Manager には次のセキュリティに関する改善点があります。

安全なリレーショナルデータベースへの接続

Metadata Manager は安全な IBM DB2、Microsoft SQL Server、および Oracle データベースと通信することができます。 Metadata Manager は、これらが Metadata Manager リポジトリに使用されているとき、PowerCenter リポジトリに使用されているとき、またはメタデータソースとして使用されているときにこれらのデータベースと通信することができます。

詳細については、*『Informatica PowerCenter 9.6.0 Metadata Manager 管理者ガイド』*を参照してください。

Kerberos **認証**

Metadata Manager は Kerberos 認証が設定されたドメインで実行できます。

ドメインで Kerberos 認証を使用するように設定する方法の詳細については、*『Informatica 9.6.0 セキュリティガイド』*を参照してください。 ドメインが Kerberos 認証を使用しているときの Metadata Manager および mmcmd の実行について詳しくは *『Informatica PowerCenter 9.6.0Metadata Manager 管理者ガイド』*を参照してください。

2 **要素認証**

Metadata Manager を 2 要素認証を使用する Windows ネットワーク上で実行することができます。

詳細については、*『Informatica 9.6.0 セキュリティガイド』*を参照してください。

Business Glossary リソース

Informatica Analyst ビジネス用語集に基づいた Business Glossary リソースを作成できます。 Business Glossary リソースを作成して Informatica Analyst ビジネス用語集からメタデータを抽出します。

リソースの作成について詳しくは、*『Informatica PowerCenter 9.6.0 Metadata Manager 管理者ガイド』*を参照してください。 リソースの表示について詳しくは、*『Informatica PowerCenter 9.6.0 Metadata Manager ユーザーガイド』*を参照してください。

リソースのバージョン

次のバージョンのリソースを作成できます。

- Microstrategy 9.3.1 および 9.4.1。以前は、バージョン 9.2.1 までの Microstrategy リソースを作成できました。
- Netezza 7.0。以前は、バージョン 6.0 までの Netezza リソースを作成できました。

リソースの作成について詳しくは、*『Informatica PowerCenter 9.6.0 Metadata Manager 管理者ガイド』*を参照してください。

ブラウザサポート

Google Chrome ウェブブラウザで Metadata Manager アプリケーションを実行することができます。

PowerCenter 用 PowerExchange アダプタ

ここでは、PowerCenter 用 PowerExchange アダプタの新機能および改良点について説明します。

PowerExchange for Greenplum

Greenplum 接続オブジェクトで指定されているスキーマをオーバライドするようにセッションを設定することができます。

詳細については、*『Informatica PowerExchange for Greenplum 9.6.0 PowerCenter 用ユーザーガイド』*を参照してください。

PowerExchange for Hadoop

PowerExchange for Hadoop は、Hadoop のソースとターゲットへのアクセスに関して、次の更新されたバージョンの Hadoop ディストリビューションをサポートします。

- Cloudera CDH 4.2
- Hortonworks 1.3.2
- MapR 2.1.3 および 3.0.1

- Pivotal HD 1.1
- IBM BigInsights-2.1

詳細については、*『Informatica PowerExchange for Hadoop 9.6.0 PowerCenter 用ユーザーガイド』*を参照してください。

PowerExchange for Microsoft Dynamics CRM

- オンラインデプロイメントに Microsoft Dynamics CRM Online バージョン 2013 を使用することができます。
- Microsoft Dynamics CRM から取得する行数を設定できます。
- 1 対多または多対 1 のリレーションを持つ 2 つの関連するエンティティに参加することができます。
- Microsoft Dynamics CRM がインストールされている Internet Information Services (IIS)で HTTP 圧縮が有効になっている場合に、PowerExchange for Microsoft Dynamics CRM は HTTP 圧縮を使用してデータを抽出します。
- バルクモードでレコードを書き込むように PowerCenter 統合サービスを設定することができます。
- ランタイム時に krb5.conf ファイルおよび login.conf ファイルの場所を変更することができます。

詳細については、*『Informatica PowerExchange for Microsoft Dynamics CRM 9.6.0 PowerCenter 用ユーザーガイド』*を参照してください。

PowerExchange for SAP NetWeaver

- PowerExchange for SAP NetWeaver では、SAP NetWeaver RFC SDK 7.20 ライブラリを使用します。
- 7.x DataSource にデータをロードする SAP BW セッションのパーティショニングを有効にできます。パーティショニングを有効にすると、PowerCenter 統合サービスは各パーティションの抽出、変換、ロードを並列実行します。
- リモート関数コール通信プロトコルを使用し ABAP ストリームモードセッションを実行することができます。
- 安全なトランスポートをインストールして、ABAP を使用して SAP からデータを読み取るときにセキュリティ認証を適用することができます。
- SAP Business Suite アプリケーションからビジネスコンテンツデータを抽出する場合は、カスタム名前空間に属するデータソースを使用できます。
- タイムスタンプベースの差分ポインタを使用してビジネスコンテンツデータを抽出する場合は、データ全体を完全に転送せずに、変更されたデータのみを抽出できます。

詳細については、*『Informatica PowerExchange for SAP PowerCenter 用ユーザーガイド』*を参照してください。

PowerExchange for SAS

SAS データファイルからデータを直接読み取ることができます。

詳細については、*『Informatica PowerExchange for SAS 9.6.0 PowerCenter 用ユーザーガイド』*を参照してください。

PowerExchange for Siebel

Siebel ビジネスコンポーネントをインポートする時、複数の Siebel リポジトリが利用可能な場合に Siebel リポジトリの名前を指定することができます。 `connection.properties` ファイルを作成して設定することにより **［リポジトリ名］**フィールドを PowerExchange for Siebel の **［Siebel メタデータのインポート］**ウィザードに追加することができます。

詳細については、*『Informatica PowerExchange for Siebel 9.6.0 PowerCenter 用ユーザーガイド』*を参照してください。

PowerExchange for Teradata Parallel Transporter API

- Teradata PT API がいずれかのスプールモードを使用して Teradata からデータを抽出するようにセッションを設定できます。
- データをターゲットにロードするときに非対応の Teradata Unicode 文字の代わりに特定の文字を使用するようにセッションを設定できます。

詳細については、*『Informatica PowerExchange for Teradata Parallel Transporter API 9.6.0 PowerCenter 用ユーザーガイド』*を参照してください。

PowerExchange for Web Services

- PowerCenter 統合サービスでは、RPC/Encoded およびドキュメント/リテラルのエンコーディングスタイルを使用する SOAP 1.2 メッセージを処理できます。 各 Web サービスには SOAP 1.2 バインディングを使用する操作を設定できます。 Web サービスコンシューマトランスフォーメーションは SOAP 1.2 バインディングで作成できます。
- PowerExchange for Web Services をウェブサービスプロバイダとして SharePoint 2010 および 2013 とともに使用することができます。

詳細については、*『Informatica PowerExchange for Web Services 9.6.0 PowerCenter 用ユーザーガイド』*を参照してください。

Informatica 用 PowerExchange アダプタ

ここでは、Informatica 用 PowerExchange アダプタの新機能および改良点について説明します。

PowerExchange for HBase

PowerExchange for HBase は HBase データストアへの接続を提供します。 PowerExchange for HBase を使用して HBase カラムファミリからデータを読み取り、HBase テーブルのカラムファミリにデータを書き込みます。 カラムファミリまたは 1 つのバイナリカラムに対してデータを読み書きできます。

HBase データオブジェクト操作をソースとして、またはターゲットとしてマッピングに追加することができ、そのマッピングをネイティブまたは Hive 環境で実行することができます。

詳細については、*『PowerExchange for HBase 9.6.0 ユーザーガイド』*を参照してください。

PowerExchange for DataSift

設計時に HTTP プロキシサーバー認証設定を設定することができます。

詳細については、*『Informatica PowerExchange for DataSift 9.6.0 ユーザーガイド』*を参照してください。

PowerExchange for Facebook

- Facebook のグループ、グループのニュースフィード、グループのメンバー一覧、ページの基本情報、ページのニュースフィードを抽出することができます。
- 設計時に HTTP プロキシサーバー認証設定を設定することができます。

詳細については、*『Informatica PowerExchange for Facebook 9.6.0 ユーザーガイド』*を参照してください。

PowerExchange for HDFS

- PowerExchange for HDFS は、HDFS のソースとターゲットへのアクセスに関して、次の Hadoop ディストリビューションをサポートします。
  - CDH Version 4 Update 2
  - HortonWorks 1.3.2

- MapR 2.1.3
- MapR 3.0.1

- 複合型ファイルデータオブジェクトを持つ HDFS へ、テキストファイルおよびシーケンスファイルのようなバイナリファイル形式を書き込むことができます。
- 圧縮した複合ファイルの書き込み、圧縮形式の指定、ファイルの解凍ができます。
- データ統合サービスはパーティションを作成してシーケンスファイルからデータを読み込み、分割可能なカスタム入力フォーマットファイルを作成します。

詳細については、*『Informatica PowerExchange for HDFS 9.6.0 ユーザーガイド』*を参照してください。

PowerExchange for Hive

- PowerExchange for Hive は、Hive のソースとターゲットへのアクセスに関して、次の Hive ディストリビューションをサポートします。
  - Cloudera CDH Version 4 Update 2
  - HortonWorks 1.3.2
  - MapR 2.1.3
  - MapR 3.0.1
- Hive 環境でマッピングを実行するときに Hive パーティション化されたテーブルに書き込むことができます。

PowerExchange for LinkedIn

- LinkedIn で会社情報をルックアップするときに人物のフルネームを指定することができます。
- 設計時に HTTP プロキシサーバー認証設定を設定することができます。

詳細については、*『Informatica PowerExchange for LinkedIn 9.6.0 ユーザーガイド』*を参照してください。

PowerExchange for Salesforce

- Salesforce データオブジェクト読み込み操作のクエリプロパティのフィルタを使用することにより、Salesforce から特定のレコードを選択することができます。
- Salesforce データオブジェクト読み込み操作を使用して Salesforce オブジェクト内のデータをルックアップできます。
- 設計時に HTTP プロキシサーバー認証設定を設定することができます。

詳細については、*『Informatica PowerExchange for Salesforce 9.6.0 ユーザーガイド』*を参照してください。

PowerExchange for SAP NetWeaver

- PowerExchange for SAP NetWeaver では、SAP NetWeaver RFC SDK 7.20 ライブラリを使用します。
- 安全なトランスポートをインストールして、ABAP を使用して SAP からデータを読み取るときにセキュリティ認証を適用することができます。

詳細については、*『Informatica PowerExchange for SAP 9.6.0 ユーザーガイド』*を参照してください。

PowerExchange for Twitter

- ユーザー ID またはスクリーンネームの一覧を.txt または.csv 形式で指定して、ユーザーのプロファイルを抽出することができます。 有効なユーザー ID またはスクリーンネームを指定してユーザーのプロファイルを抽出できます。
- 設計時に HTTP プロキシサーバー認証設定を設定することができます。

詳細については、*『Informatica PowerExchange for Twitter 9.6.0 ユーザーガイド』*を参照してください。

PowerExchange for Web Content-Kapow Katalyst

設計時に HTTP プロキシサーバー認証設定を設定することができます。

詳細については、*『Informatica PowerExchange for LinkedIn 9.6.0 ユーザーガイド』*を参照してください。

Informatica のマニュアル

ここでは、Informatica のマニュアルに含まれる新しいガイドについて説明します。いくつかの新しいガイドは複数の製品で共有されている機能に基づいて構成されており、以前のガイドに代わるものとなっています。

Informatica のマニュアルには次の新しいガイドが付属しています。

Informatica Analyst **ツールガイド**

Informatica Analyst（Analyst ツール）に関する全般的な情報が記載されています。Analyst ツールの情報は以前まで、*『Informatica Data Integration Analyst ユーザーガイド』*内に記載されていました。

Informatica **アプリケーションサービスガイド**

アプリケーションサービスに関する情報が記載されています。アプリケーションサービスの情報は以前まで、*『Informatica Administrator ガイド』*内に記載されていました。

Informatica **コネクタツールキット** Developer **ガイド**

Informatica コネクタツールキットに関する情報と Informatica プラットフォーム用アダプタの開発方法が記載されています。接続属性、タイプシステム、メタデータオブジェクト、ランタイムの動作など、アダプタを開発するときに定義するコンポーネントに関する情報を確認できます。

Informatica **コネクタツールキット入門ガイド**

Informatica コネクタツールキットを使用することで、Informatica プラットフォーム用の MySQL アダプタのサンプルを開発するためのチュートリアルを紹介しています。Informatica コネクタツールキットのインストール方法、Informatica コネクタツールキットで MySQL アダプタのサンプルを作成して公開する方法に関する情報があります。

Informatica Data Explorer **データ検出ガイド**

コンテンツと構造を含んだソースシステムのメタデータの検出に関する情報が記載されています。 カラムプロファイル、データドメインの検出、プライマリキーおよび外部キーの検出、機能依存性の検出、結合分析、およびエンタープライズの検出に関する情報を確認できます。データ検出の情報は以前まで、*『Informatica Data Explorer ユーザーガイド』*内に記載されていました。

Informatica Business Glossary **ガイド**

Business Glossary に関する情報が記載されています。Analyst ツールで用語集のコンテンツを管理し、参照する方法についての情報があります。用語集のコンテンツには、用語、ポリシー、およびカテゴリが含まれています。Metadata Manager ビジネス用語集の情報は以前まで、*『Informatica PowerCenter Metadata Manager ビジネス用語集ガイド』*内に記載されていました。

Informatica Data Quality **例外管理ガイド**

Data Quality の例外管理に関する情報が記載されています。Analyst ツールで例外レコードタスクを管理する方法についての情報を確認できます。例外管理の情報は以前まで、*『Informatica Data Director for Data Quality ガイド』*、*『Data Quality ユーザーガイド』*、および *『Data Services ユーザーガイド』*内に記載されていました。

Informatica **データベースビューリファレンス**

モデルリポジトリビュー、プロファイルウェアハウスビュー、および Business Glossary ビューに関する情報が記載されています。このマニュアルは以前まで *『Informatica Data Services モデルリポジトリビュー』*というタイトルで、プロファイルのビューに関する情報は H2L の記事に記載されていました。Business Glossary ビューは、このマニュアルに新たに追加された内容です。

Informatica Developer **ツールガイド**

Informatica Developer に関する情報が記載されています。Developer ツールの一般的な機能に関する情報を確認できます。Developer ツールの情報は以前まで、*『Informatica Developer ユーザーガイド』*内に記載されていました。

Informatica **マッピングガイド**

モデルリポジトリマッピングの設定に関する情報が記載されています。Developer ツールの情報は以前まで、*『Informatica Developer ユーザーガイド』*内に記載されていました。

Informatica **マッピング仕様入門ガイド**

マッピング仕様に関する入門情報が記載されています。

Informatica **マッピング仕様ガイド**

マッピング仕様に関する情報が記載されています。マッピング仕様の情報は以前まで、*『Informatica Data Integration Analyst ユーザーガイド』*内に記載されていました。

Informatica **プロファイルガイド**

プロファイルに関する情報が記載されています。このガイドには、カラムプロファイルの実行、ルールの作成、およびスコアカードの作成に関する基本情報が記載されています。プロファイリングの情報は以前まで、*『Data Quality ユーザーガイド』*と*『Informatica Data Explorer ユーザーガイド』*に記載されていました。

Informatica **参照データガイド**

参照データオブジェクトに関する情報が記載されています。参照データオブジェクトには、ソースデータで検索操作を実行するのに使用できる一連のデータ値が含まれます。 Developer ツールおよび Analyst ツールで参照データオブジェクトを作成できます。また、参照データオブジェクトをモデルリポジトリにインポートできます。参照データオブジェクトの情報は以前まで、*『Informatica Data Quality ユーザーガイド』*に記載されていました。

Informatica **ルールビルダガイド**

Analyst ツールのルールビルダ機能に関する情報が記載されています。ルールビルダを使用して、一連の論理文としてビジネスルールの要件を記述します。論理文はルール仕様にコンパイルします。Analyst ツールによって、ルール仕様のコピーがマップレットとしてモデルリポジトリ内に保存されます。

Informatica **セキュリティガイド**

Informatica ドメインのセキュリティに関する情報が記載されています。Informatica セキュリティの情報は以前まで、*『Informatica Administrator ガイド』*内に記載されていました。

Informatica SQL **データサービスガイド**

このマニュアルには、サードパーティ製ツールによる SQL データサービスの作成、仮想データの入力、および SQL データサービスへの接続に関する情報が記載されています。 このマニュアルは以前まで、*『Informatica Data Services ユーザーガイド』*というタイトルでした。

第 24 章

Informatica Data Explorer（9.6.0）の変更内容

この章では、以下の項目について説明します。

- エンタープライズ検出, 319 ページ
- プロファイル結果の確認, 319 ページ
- ルール, 320 ページ
- スコアカード, 320 ページ

エンタープライズ検出

バージョン 9.6.0 では、エンタープライズ検出に以下の変更点があります。

- モデルリポジトリサービスを更新して外部接続のデータソースに対するエンタープライズ検出結果を表示できます。
  以前は、エンタープライズ検出プロファイルを実行した後でモデルリポジトリサービスに再接続する必要がありました。
- プロファイルウィザードの［**プロファイルモデル**］オプション（プロファイルウィザードは［**ファイル**］>［**新規**］>［**プロファイル**］と選択して開く）は［**エンタープライズ検出プロファイル**］に改名されました。
- エンタープライズ検出結果のグラフィカルビューには、グラフィカルビューに含めるために選択したデータドメインの重複が表示されます。

プロファイル結果の確認

バージョン 9.6.0 では、Developer ツールで複数のカラムに関するデータドメイン検出結果を確認できます。プロファイル結果を確認する際、Developer ツールによってデータソースのすべての行に対してプロファイルが実行されます。

以前は、1 つのカラムのデータドメイン検出結果を確認していました。

ルール

バージョン 9.6.0 では、Informatica Analyst でルールをプロファイルに適用するときに、複数の入力カラムを選択できます。

以前は、ルールを適用するときに 1 つの入力カラムを選択していました。

スコアカード

バージョン 9.6.0 では、スコアカードに以下の変更点があります。

- メトリックの有効な値を選択すると、選択した有効な値の割合と有効な値の合計カウントを表示できます。
  以前は、カラムの有効な値の合計カウントを表示できました。
- メトリックのソースデータを表示すると、**[ドリルダウン]** セクションに無効なソースデータの行がデフォルトで表示されます。
  以前は、デフォルトにより、有効な行が表示されていました。
- スコアカード結果では、スコアを選択し、傾向グラフの矢印をクリックして傾向グラフを表示できます。
  以前は、スコアを右クリックして、**[傾向グラフの表示]** オプションを選択していました。

第 25 章

Informatica Data Quality（9.6.0）の変更内容

この章では、以下の項目について説明します。

- アドレスバリデータトランスフォーメーション, 321 ページ
- 例外レコード管理, 321 ページ
- Informatica Data Director for Data Quality, 322 ページ
- Java トランスフォーメーション, 322 ページ
- マッピングパラメータ, 322 ページ
- 一致トランスフォーメーション, 323 ページ
- Microsoft SQL Server へのネイティブ接続, 323 ページ
- ポート対ポートのデータ変換, 323 ページ
- プロファイル結果の確認, 323 ページ
- 参照テーブル, 324 ページ
- ルール, 324 ページ
- スコアカード, 324 ページ

アドレスバリデータトランスフォーメーション

バージョン 9.6.0 では、アドレスバリデータトランスフォーメーションで、バージョン 5.4.1 の Address Doctor ソフトウェアエンジンを使用します。

以前は、トランスフォーメーションで Address Doctor ソフトウェアエンジンのバージョン 5.3.1 を使用していました。

例外レコード管理

バージョン 9.6.0 において、Analyst ツールはヒューマンタスクが識別するデータベーステーブルから例外レコードを読み込みます。

以前は、Analyst ツールはアナリストサービスが識別したステージングデータベースから例外レコードを読み込んでいました。

アップグレード後もステージングデータベースのレコードを分析するには次の手順に従います:

1. ステージングデータベーステーブルを読み込むマッピングを作成します。
   例外トランスフォーメーションを使用して例外レコードを識別します。
2. マッピングタスクとヒューマンタスクを使ったワークフローを設定します。
   例外マッピングを実行するようにマッピングタスクを設定します。 マッピングタスクの出力を読み込むようにヒューマンタスクを設定します。
3. ワークフローを実行します。
4. Analyst ツールにログインして例外レコードを確認し、更新します。

Informatica Data Director for Data Quality

バージョン 9.6.0 では、Informatica Data Director for Data Quality Web アプリケーションが廃止されました。 バージョン 9.6.0 でヒューマンタスクデータを確認し、更新するには Analyst ツールにログインします。

以前は、ヒューマンタスクによって指定されたレコードを確認し、更新するために Informatica Data Director for Data Quality にログインしていました。

Java トランスフォーメーション

バージョン 9.6.0 では、Java トランスフォーメーションの**ステートレス**詳細プロパティはネイティブ環境および Hive 環境のどちらにおいても有効です。 ネイティブ環境では、データ統合サービスが複数のパーティションを使用してマッピングを処理できるように、Java トランスフォーメーションの**ステートレス**プロパティが有効になっている必要があります。

以前は、**ステートレス**プロパティは、Hive 環境のみで有効でした。 ネイティブ環境でマッピングが実行されたとき、データ統合サービスはステートレスプロパティを無視していました。

マッピングパラメータ

バージョン 9.6.0 では、長い値を表すユーザー定義のパラメータは Bigint に改名されました。 以前は、このユーザー定義のパラメータは Long と呼ばれていました。

バージョン 9.6.0 では、再利用可能なトランスフォーメーション、リレーショナル、PowerExchange およびフラットファイルデータオブジェクトで定義されたパラメータ名およびドル記号（$）で始まるパラメータ名はモデルリポジトリの一意の名前に変更されました。 しかし、パラメータファイルのパラメータ名は変更されていません。 以前は、マッピングパラメータ名の最初の文字にドル記号（$）を使用することができました。

一致トランスフォーメーション

バージョン 9.6.0 では、ID 照合分析を行う一致トランスフォーメーションは NULL データ値と空のデータフィールドを個別に扱います。 バージョン 9.6.0 では、ID 照合分析およびフィールド一致解析で NULL データ値と空のデータフィールドを同様に扱います。

以前は、一致トランスフォーメーションで ID 照合分析における NULL データ値と空のデータフィールドを同一のデータ要素として扱っていました。

Microsoft SQL Server へのネイティブ接続

バージョン 9.6.0 では、Microsoft SQL Server データベースへの Windows マシンからのネイティブ接続を設定するために、Microsoft SQL Server 2012 Native Client をインストールする必要があります。

以前は、Informatica ではネイティブ接続に Microsoft OLE DB Provider を使用していたため、SQL クライアントをインストールする必要はありませんでした。

以前のバージョンからアップグレードする場合、既存のマッピングが機能するためには Microsoft SQL Server 2012 Native Client をインストールする必要があります。

ポート対ポートのデータ変換

バージョン 9.6.0 では、データ統合サービスはトランスフォーメーション間のポート対ポート変換を実行するため、トランスフォーメーション言語の変換機能を使用します。 データ統合サービスはデータタイプの異なるポート間でデータを転送するときにポート対ポート変換を実行します。 転送するデータが変換データタイプに対して有効でない場合、トランスフォーメーション行エラーが発生します。

以前は、データ統合サービスはポート対ポート変換にトランスフォーメーション機能を使用していませんでした。 データ統合サービスは個別のアルゴリズムを使用していました。 変換データタイプに対して有効でないデータを含むデータを転送した場合、データ統合サービスはその値を削除し、代替値を使用していました。

ポート対ポート変換を使用するアップグレードされたマッピングでは、異なる出力データが生成される場合があります。 例えば、以前のバージョンのマッピングでは次の出力が生成されました:

```
"0.377777","0.527777","0.000000","0.250000","0.000000","0.377777","0.250000"
```

アップグレード後、一部のマッピングでは次の出力が生成される場合があります:

```
"0.377777","0.527777","0","0.25","0","0.377777","0.25"
```

プロファイル結果の確認

バージョン 9.6.0 では、Developer ツールで複数のカラムに関するデータドメイン検出結果を確認できます。 プロファイル結果を確認する際、Developer ツールによってデータソースのすべての行に対してプロファイルが実行されます。

以前は、1 つのカラムのデータドメイン検出結果を確認していました。

参照テーブル

以下の変更がバージョン 9.6.0 の参照テーブルに適用されます。

- バージョン 9.6.0 では、Developer ツールで参照テーブルの中からデータ値を検索するときにワイルドカードを使用することができます。 参照テーブルの中からデータ値を検索するとき、Developer ツールでは大文字小文字の区別はありません。

  以前は、Analyst ツールでワイルドカード検索および大文字小文字の区別のない検索を行っていました。
- バージョン 9.6.0 では、1 つのプロセス内の複数のマッピングが参照テーブルを読み込むときに、データ統合サービスは 1 つの参照テーブルインスタンスをメモリに保存します。

  以前は、データ統合サービスはマッピングごとに参照テーブルのインスタンスを保存していました。

ルール

バージョン 9.6.0 では、Informatica Analyst でルールをプロファイルに適用するときに、複数の入力カラムを選択できます。

以前は、ルールを適用するときに 1 つの入力カラムを選択していました。

スコアカード

バージョン 9.6.0 では、スコアカードに以下の変更点があります。

- メトリックの有効な値を選択すると、選択した有効な値の割合と有効な値の合計カウントを表示できます。
  以前は、カラムの有効な値の合計カウントを表示できました。
- メトリックのソースデータを表示すると、**[ドリルダウン]** セクションに無効なソースデータの行がデフォルトで表示されます。
  以前は、デフォルトにより、有効な行が表示されていました。
- スコアカード結果では、スコアを選択し、傾向グラフの矢印をクリックして傾向グラフを表示できます。
  以前は、スコアを右クリックして、**[傾向グラフの表示]** オプションを選択していました。

第 26 章

Informatica Data Services（9.6.0）の変更内容

この章では、以下の項目について説明します。

- Java トランスフォーメーション, 325 ページ
- Microsoft SQL Server へのネイティブ接続, 325 ページ
- ポート対ポートのデータ変換, 326 ページ
- プロファイル結果の確認, 326 ページ
- ルール, 326 ページ
- スコアカード, 326 ページ

Java トランスフォーメーション

バージョン 9.6.0 では、Java トランスフォーメーションの**ステートレス**詳細プロパティはネイティブ環境および Hive 環境のどちらにおいても有効です。 ネイティブ環境では、データ統合サービスが複数のパーティションを使用してマッピングを処理できるように、Java トランスフォーメーションの**ステートレス**プロパティが有効になっている必要があります。

以前は、**ステートレス**プロパティは、Hive 環境のみで有効でした。 ネイティブ環境でマッピングが実行されたとき、データ統合サービスはステートレスプロパティを無視していました。

Microsoft SQL Server へのネイティブ接続

バージョン 9.6.0 では、Microsoft SQL Server データベースへの Windows マシンからのネイティブ接続を設定するために、Microsoft SQL Server 2012 Native Client をインストールする必要があります。

以前は、Informatica ではネイティブ接続に Microsoft OLE DB Provider を使用していたため、SQL クライアントをインストールする必要はありませんでした。

以前のバージョンからアップグレードする場合、既存のマッピングが機能するためには Microsoft SQL Server 2012 Native Client をインストールする必要があります。

ポート対ポートのデータ変換

バージョン 9.6.0 では、データ統合サービスはトランスフォーメーション間のポート対ポート変換を実行するため、トランスフォーメーション言語の変換機能を使用します。 データ統合サービスはデータタイプの異なるポート間でデータを転送するときにポート対ポート変換を実行します。 転送するデータが変換データタイプに対して有効でない場合、トランスフォーメーション行エラーが発生します。

以前は、データ統合サービスはポート対ポート変換にトランスフォーメーション機能を使用していませんでした。 データ統合サービスは個別のアルゴリズムを使用していました。 変換データタイプに対して有効でないデータを含むデータを転送した場合、データ統合サービスはその値を削除し、代替値を使用していました。

ポート対ポート変換を使用するアップグレードされたマッピングでは、異なる出力データが生成される場合があります。 例えば、以前のバージョンのマッピングでは次の出力が生成されました:

"0.377777","0.527777","0.000000","0.250000","0.000000","0.377777","0.250000"

アップグレード後、一部のマッピングでは次の出力が生成される場合があります:

"0.377777","0.527777","0","0.25","0","0.377777","0.25"

プロファイル結果の確認

バージョン 9.6.0 では、Developer ツールで複数のカラムに関するデータドメイン検出結果を確認できます。プロファイル結果を確認する際、Developer ツールによってデータソースのすべての行に対してプロファイルが実行されます。

以前は、1 つのカラムのデータドメイン検出結果を確認していました。

ルール

バージョン 9.6.0 では、Informatica Analyst でルールをプロファイルに適用するときに、複数の入力カラムを選択できます。

以前は、ルールを適用するときに 1 つの入力カラムを選択していました。

スコアカード

バージョン 9.6.0 では、スコアカードに以下の変更点があります。

- メトリックの有効な値を選択すると、選択した有効な値の割合と有効な値の合計カウントを表示できます。
  以前は、カラムの有効な値の合計カウントを表示できました。
- メトリックのソースデータを表示すると、**[ドリルダウン]** セクションに無効なソースデータの行がデフォルトで表示されます。
  以前は、デフォルトにより、有効な行が表示されていました。
- スコアカード結果では、スコアを選択し、傾向グラフの矢印をクリックして傾向グラフを表示できます。
  以前は、スコアを右クリックして、**[傾向グラフの表示]** オプションを選択していました。

第 27 章

Informatica Data Transformation（9.6.0）の変更内容

この章では、以下の項目について説明します。

- PowerCenter へのマッピングのエクスポート, 327 ページ
- 無効な CMConfig ファイル, 327 ページ

PowerCenter へのマッピングのエクスポート

データプロセッサトランスフォーメーションでマッピングを PowerCenter にエクスポートできます。

無効な CMConfig ファイル

バージョン 9.6.0 では、`CMConfig.xml` ファイルが無効な XML ファイルであるときにデータプロセッサトランスフォーメーションを実行することはできません。

第 28 章

Informatica ドメイン（9.6.0）の変更内容

この章では、以下の項目について説明します。

- Informatica サービス, 328 ページ
- アナリストサービス, 329 ページ
- コンテンツ管理サービス, 329 ページ
- データ統合サービス, 329 ページ
- データディレクタサービス, 329 ページ
- Test Data Manager サービス, 330 ページ
- モデルリポジトリサービス特権, 330 ページ
- ドメインセキュリティ , 330 ページ
- サポートされているプラットフォームに変更, 331 ページ

Informatica サービス

バージョン 9.6.0 では、Informatica サービスに以下の変更点があります。

- Windows の場合、コマンド `infaservice.bat startup` を実行して Informatica サービスを起動すると、**ISP** コンソールウィンドウがバックグラウンドで実行されます。

  以前は、`infaservice.bat startup` を実行して Informatica サービスを起動すると、ウィンドウはフォアグラウンドで表示されていました。また、サービスマネージャの起動中にエラーメッセージが表示されると、エラーメッセージはインストーラによって `catalina.out` ログファイルと `node.log` ログファイルに保存されます。

- Windows の場合、コマンドラインおよび Windows スタートメニューから Informatica サービスを起動するには、管理者権限を持つユーザーである必要があります。

  以前は、Informatica サービスの起動に管理者権限は不要でした。

アナリストサービス

バージョン 9.6.0 のアナリストサービスには、以下の変更が適用されます。

- バージョン 9.6.0 では、アナリストサービスがヒューマンタスクを実行するデータ統合サービスを識別します。

  以前は、データディレクタサービスがヒューマンタスクを実行するデータ統合サービスを識別していました。
- バージョン 9.6.0 では、ステージングデータベースプロパティは削除されました。

  以前は、アナリストサービスはステージングデータベースプロパティを使用して例外レコードテーブルを含むデータベースを識別していました。

コンテンツ管理サービス

バージョン 9.6.0 では、コンテンツ管理サービスおよびアドレスバリデータトランスフォーメーションの最大結果カウントプロパティを設定できるようになりました。 このプロパティは 1 つのアドレスに対してアドレスバリデータトランスフォーメーションが生成する提案アドレスの最大数を決定します。

以前のバージョンでは、アドレスバリデータトランスフォーメーションの最大結果カウントを設定していました。

データ統合サービス

バージョン 9.6.0 では、データ統合サービスジョブを別のオペレーティングシステムプロセスで実行する場合、データ統合サービスは再利用可能な DTM プロセスのプールを維持します。 各ジョブはプールから選択された DTM プロセスで実行されます。 1 つの DTM プロセスで関連ジョブの複数の DTM インスタンスを実行できます。 接続プールを設定すると、各 DTM プロセスは同じ DTM プロセスで実行されている関連ジョブに再利用できる独自の接続プールライブラリを維持します。

これまでは、データ統合サービスジョブを別のオペレーティングシステムプロセスで実行する場合、各ジョブは個別の DTM プロセスで実行されていました。 1 つの DTM プロセスで 1 つの DTM インスタンスを実行していました。 ジョブを別のオペレーティングシステムプロセスで実行する場合、データ統合サービスは接続プールプロパティを無視していました。

データディレクタサービス

バージョン 9.6.0 では、データディレクタサービスは削除されました。

以前は、ヒューマンタスクを実行するデータ統合サービスを識別するためにデータディレクタサービスを設定していました。 バージョン 9.6.0 でヒューマンタスクを実行するデータ統合サービスを識別するには、アナリストサービスのヒューマンタスクプロパティを設定します。

Informatica 9.6.0 アップグレードプロセスによりデータディレクタサービスがアナリストサービスに移行されます。 データディレクタサービスおよびアナリストサービスを含む Informatica ドメインをアップグレードする場合、アップグレードプロセスはそれぞれのサービスに対して個別のアナリストサービスを作成します。 ア

ップグレード後はドメインのアナリストサービスを保持することができます。 また、必要に応じてサービスをマージすることもできます。

Test Data Manager サービス

バージョン 9.6.0 では、Test Data Management（TDM）が Informatica ドメインのサービスとして使用できるようになりました。 Administrator ツールで Informatica ドメインに Test Data Manager サービス（TDM サービス）を作成し、設定することができます。 ロールと特権を定義して、Test Data Management タスクを TDM サービスのカスタムロールとして実行します。 Test Data Management の Web ベースのユーザーインターフェースでは、TDM サービスに関連付けられたリポジトリのデータベースコンテンツが使用されます。 TDM サービスを作成するには TDM がインストールされている必要があります。 また、TDM サービスのセキュリティ設定も Administrator ツールから定義します。

以前は、TDM は Informatica ドメインから独立しており、ドメインのサービスではありませんでした。

モデルリポジトリサービス特権

バージョン 9.6.0 では、モデルリポジトリサービスのプロジェクト作成特権が、プロジェクトの作成、編集、削除特権に改名されました。 Analyst ツールおよび Developer ツールで次のタスクを完了するにはプロジェクトの作成、編集、削除特権が必要です。

- プロジェクトの作成。
- プロジェクトの編集。 また、プロジェクトに対する書き込み権限も必要です。
- ユーザーが作成したプロジェクトの削除。 また、プロジェクトに対する書き込み権限も必要です。

以前は、モデルリポジトリサービスに対するプロジェクト作成特権がある場合にプロジェクトを作成することができました。 プロジェクトに対する書き込み権限がある場合にプロジェクトを編集および削除することができました。

ドメインセキュリティ

バージョン 9.6.0 では、Administrator ツールの **［ドメインの Transport Layer Security（TLS）の有効化］** オプションが **［安全な通信を有効にする］** に改名されました。 **［安全な通信を有効にする］** オプションはサービスマネージャと Informatica ドメインのすべてのサービス間の通信を安全なものとします。 SSL 証明書のキーストアおよびトラストストアファイルを指定することができます。

以前は、Administrator ツールの **［ドメインの Transport Layer Security（TLS）の有効化］** オプションは PowerCenter サービスに対する安全な通信を有効化していませんでした。 このオプションではデフォルトの Informatica SSL 証明書を使用していました。

サポートされているプラットフォームに変更

バージョン 9.6.0 では、32 ビット Linux および x64 の Solaris に対する Informatica のサポートがなくなりました。サポートされた 64 ビットサーバー上で Informatica 9.6.0 にアップグレードする前に、インストールをバックアップしてその 64 ビットサーバーにリストアします。Informatica 製品のアップグレードを選択する場合は、リストアされたインストールへのパスを入力します。詳細については、『Informatica アップグレードガイド』を参照してください。

第 29 章

PowerCenter（9.6.0）の変更内容

この章では、以下の項目について説明します。

- Microsoft SQL Server へのネイティブ接続, 332 ページ
- ODBC のソースとターゲットに対するプッシュダウンの最適化, 332 ページ
- リポジトリ接続ファイルのデフォルトの場所, 332 ページ
- リポジトリ接続ファイル, 333 ページ
- オペレーティングシステムのプロファイル用の umask の設定, 333 ページ

Microsoft SQL Server へのネイティブ接続

バージョン 9.6.0 では、Microsoft SQL Server データベースへの Windows マシンからのネイティブ接続を設定するために、Microsoft SQL Server 2012 Native Client をインストールする必要があります。

以前は、Informatica ではネイティブ接続に Microsoft OLE DB Provider を使用していたため、SQL クライアントをインストールする必要はありませんでした。

以前のバージョンからアップグレードする場合、既存のマッピングが機能するためには Microsoft SQL Server 2012 Native Client をインストールする必要があります。

ODBC のソースとターゲットに対するプッシュダウンの最適化

バージョン 9.6.0 では、ODBC のソースとターゲットに対するプッシュダウンの最適化はサポートされません。

リポジトリ接続ファイルのデフォルトの場所

バージョン 9.6.0 では、*pmrep* は接続情報をデフォルトでホームディレクトリの pmrep.cnx に保存します。INFA_REPCNX_INFO 環境変数を設定すれば、接続情報を別のディレクトリに保存できます。

以前は、*pmrep* は接続情報を *pmrep* が開始されたディレクトリの pmrep.cnx に保存していました。

リポジトリ接続ファイル

バージョン 9.6.0 では、*pmrep connect* を実行するごとに、コマンドにより pmrep.cnx ファイルが削除されます。 pmrep 接続コマンドが成功すると、コマンドは pmrep.cnx ファイルをリポジトリ接続情報で置き換えます。

以前は、pmrep 接続コマンドは *pmrep connect* を実行するごとに pmrep.cnx ファイルを削除していませんでした。

オペレーティングシステムのプロファイル用の umask の設定

バージョン 9.6.0 では、オペレーティングシステムのプロファイルの設定時に、umask を 000 に設定する必要はありません。

以前は、DTM によって書き込まれるファイルにアクセスするには、umask を 000 に設定してオペレーティングシステムのプロファイルを有効にする必要がありました。

以前のバージョンからアップグレードする場合には、umask の設定は変更されません。umask の設定はアップグレードの前または後に変更できます。例えば、umask を 077 に変更するとセキュリティを最大化できます。アップグレード後に umask の設定を変更する場合、Informatica サービスを再起動する必要があります。

第 30 章

PowerCenter Big Data Edition（9.6.0）の変更内容

この章では、以下の項目について説明します。

- Hadoop 環境プロパティファイル, 334 ページ
- ネイティブ環境でのマッピング, 334 ページ

Hadoop 環境プロパティファイル

バージョン 9.6.0 では、Hadoop 環境プロパティファイル hadoopEnv.properties は次のパスにあります。
<InformaticaInstallationDir>/services/shared/hadoop/<Hadoop_distribution_name>/infaConf

ネイティブ環境でのマッピング

バージョン 9.6.0 では、データ統合サービスを有効にして、ネイティブ環境でマッピング実行時の並列処理を最大化することができます。 並列処理を最大化すると、データ統合サービスは複数のパーティションを使用してマッピングを処理できます。 デフォルトでは、各マッピングの最大並列処理値は Auto になっています。 そのため、各マッピングはデータ統合サービスプロセスに設定された最大並列処理値を使用します。

以前は、データ統合サービスを有効にして、ネイティブ環境で複数のパーティションを使用してマッピングを処理することはできませんでした。 デフォルトでは、アップグレードされた各マッピングの最大並列処理値は 1 になっています。 そのため、アップグレードされたマッピングのパーティショニングは無効になっています。

第 31 章

Metadata Manager（9.6.0）の変更内容

この章では、以下の項目について説明します。

- ブラウザサポート, 335 ページ
- Metadata Manager Agent, 335 ページ
- Metadata Manager ビジネス用語集, 336 ページ
- Metadata Manager ドキュメント, 336 ページ
- mmcmd の変更内容, 336 ページ
- Microsoft SQL Server へのネイティブ接続, 337 ページ
- リソースのパスワード変更, 338 ページ

ブラウザサポート

バージョン 9.6.0 では、Metadata Manager アプリケーションは次の Web ブラウザで実行できます。

- Google Chrome
- Microsoft Internet Explorer

以前は、Metadata Manager アプリケーションは次の Web ブラウザで実行できました。

- Microsoft Internet Explorer
- Mozilla Firefox

Metadata Manager Agent

バージョン 9.6.0 では、次のメタデータソースタイプに対して個別に Metadata Manager Agent をインストールする必要がなくなりました。

- Cognos
- Oracle Business Intelligence Enterprise Edition
- Sybase PowerDesigner

以前は、これらのソースからメタデータを抽出するためには Metadata Manager Agent を個別にインストールする必要がありました。

Metadata Manager ビジネス用語集

バージョン 9.6.0 では、Metadata Manager ビジネス用語集は非推奨となり、Informatica Analyst ビジネス用語集に代わりました。

以前のバージョンの Metadata Manager で作成した Metadata Manager ビジネス用語集がある場合は、バージョン 9.6.0 にアップグレードする前に以前のバージョンの Metadata Manager から用語集をエクスポートする必要があります。アップグレードした後、用語集を Informatica Analyst にインポートすることができます。 Informatica Analyst ビジネス用語集を Metadata Manager で見るには、Metadata Manager9.6.0 で Business Glossary リソースを作成します。

Metadata Manager ドキュメント

バージョン 9.6.0 では、『*Informatica PowerCenter Metadata Manager ビジネス用語集ガイド*』は廃止されました。

Metadata Manager で Business Glossary リソースを作成し、設定する方法について詳しくは、『*Informatica PowerCenter 9.6.0 Metadata Manager 管理者ガイド*』を参照してください。 Metadata Manager で Business Glossary リソースを表示する方法について詳しくは、『*Informatica PowerCenter 9.6.0 Metadata Manager ユーザーガイド*』を参照してください。

mmcmd の変更内容

ドメインセキュリティの変更

バージョン 9.6.0 では、mmcmd にドメインセキュリティに関する次の変更が加えられています。

環境変数

mmcmd コマンドを実行するには環境変数を設定しなければならない場合があります。ドメインで Kerberos 認証を使用する場合、システム上または mmcmd バッチファイル内に KRB5_CONFIG 環境変数を設定する必要があります。安全な通信をドメインで有効にしている場合は、INFA_TRUSTSTORE 環境変数と INFA_TRUSTSTORE_PASSWORD 環境変数を mmcmd バッチファイル内に設定する必要があります。

以前は、mmcmd の環境変数を設定する必要はありませんでした。

コマンドのオプション

ドメインで認証するすべての mmcmd コマンドには Kerberos 認証に関するオプションが含まれています。ドメインで Kerberos 認証を使用する場合は、オプションを指定する必要があります。

以下の表に、コマンドのオプションを示します。

オプション	説明
--domainName (-dn)	Kerberos 認証を使用し、--gateway オプションを指定しない場合に必要です。Informatica ドメインの名前。
--gateway (-hp)	Kerberos 認証を使用し、--domainName オプションを指定しない場合に必要です。ドメインのゲートウェイノードのホスト名およびポート番号。
--keyTab (-kt)	Kerberos 認証を使用し、パスワードを指定しない場合に必要です。Metadata Manager ユーザーのキータブファイルのパスとファイル名。
--mmServiceName (-mm)	Kerberos 認証を使用する場合に必要です。Metadata Manager サービスの名前。
--namespace (-n)	ドメインで LDAP 認証または Kerberos 認証を使用する場合に必要です。ドメインでネイティブ認証が使用されている場合は任意です。Metadata Manager ユーザーが属しているセキュリティドメインの名前。
--password (-pw)	Kerberos 認証を使用しない場合に必要です。Kerberos 認証を使用し、--keyTab オプションを指定しない場合にも必要です。Metadata Manager ユーザーのパスワード。
-pcRepositoryNamespace	ドメインで LDAP 認証または Kerberos 認証を使用する場合に必要です。ドメインでネイティブ認証が使用されている場合は任意です。PowerCenter リポジトリユーザーが属しているセキュリティドメインの名前。
--securityDomain (-sdn)	ドメインで LDAP 認証または Kerberos 認証を使用する場合に必要です。ドメインでネイティブ認証が使用されている場合は任意です。Informatica ドメインユーザーが属するセキュリティドメインの名前。

Business Glossary アップグレードの変更

バージョン 9.6.0 では、ビジネス用語集のアップグレードに関連する次のコマンドが mmcmd に含まれています。

コマンド	説明
migrateBGLinks	バージョン 9.5.x からのアップグレード後、ビジネス用語集の関連カタログオブジェクトをリストアします。

Microsoft SQL Server へのネイティブ接続

バージョン 9.6.0 では、Microsoft SQL Server データベースへの Windows マシンからのネイティブ接続を設定するために、Microsoft SQL Server 2012 Native Client をインストールする必要があります。

以前は、Informatica ではネイティブ接続に Microsoft OLE DB Provider を使用していたため、SQL クライアントをインストールする必要はありませんでした。

以前のバージョンからアップグレードする場合、Microsoft SQL Server 2012 Native Client をインストールする必要があります。このクライアントをインストールして、Metadata Manager サービスが Microsoft SQL Server のデータベースに接続できるようにします。

リソースのパスワード変更

バージョン 9.6.0 では、リソースのパスワードを変更するには、リソースを編集し、**［パスワードの変更］**オプションを有効化し、**［パスワード］**フィールドに新しいパスワードを入力します。 この変更によりユーザーがパスワード暴露ツールを使用してパスワードを表示するのを防ぎます。

以前は、リソースを編集し、**［パスワード］**フィールドのドットからなる文字列を選択し、新しいパスワードを入力していました。

第 32 章

Adapters for PowerCenter（9.6.0）の変更内容

この章では、以下の項目について説明します。

- PowerExchange for Facebook , 339 ページ
- PowerExchange for Hadoop, 339 ページ
- PowerExchange for LinkedIn, 340 ページ
- PowerExchange for Microsoft Dynamics CRM, 340 ページ
- PowerExchange for SAP NetWeaver, 340 ページ
- PowerExchange for Twitter, 341 ページ
- PowerExchange for Web Services, 342 ページ

PowerExchange for Facebook

バージョン 9.6.0 では、Informatica は PowerExchange for Facebook for PowerCenter を提供しません。Informatica はバージョン 9.1.0、9.5.0、および 9.5.1 に対するサポートを終了しました。バージョン 9.1.0、9.5.0、9.5.1、および hotfix バージョンからのアップグレードはできません。セッションはバージョン 9.1.0、9.5.0、9.5.1、および hotfix バージョンで失敗します。

Developer ツールにある PowerExchange for Facebook は使用できます。

詳細については、次の場所にある生産/サポート終了（EOL）に関するドキュメントを参照してください: https://mysupport.informatica.com/docs/DOC-10512。

PowerExchange for Hadoop

バージョン 9.6.0 では、NameNode URI プロパティを使用して HDFS 接続を再作成する必要があります。 以前は、HDFS 接続を作成するために HDFS 接続プロパティ Host Name および HDFS ポートが使用されていました。 以前のリリースからアップグレードする場合は、HDFS 接続を再作成する必要があります。

HDFS 接続を設定すると、デフォルトの Hadoop ディストリビューションは Cloudera ディストリビューションとなります。以前のデフォルトは Apache ディストリビューションでした。

PowerExchange for LinkedIn

バージョン 9.6.0 では、Informatica は PowerExchange for LinkedIn for PowerCenter を提供しません。Informatica はバージョン 9.1.0、9.5.0、および 9.5.1 に対するサポートを終了しました。バージョン 9.1.0、9.5.0、9.5.1、および hotfix バージョンからのアップグレードはできません。セッションはバージョン 9.1.0、9.5.0、9.5.1、および hotfix バージョンで失敗します。

Developer ツールにある PowerExchange for LinkedIn は使用できます。

詳細については、次の場所にある生産/サポート終了（EOL）に関するドキュメントを参照してください: https://mysupport.informatica.com/docs/DOC-10512。

PowerExchange for Microsoft Dynamics CRM

バージョン 9.6.0 では、Java Cryptography Extension（JCE）Unlimited Strength Jurisdiction Policy File バージョン 7 をダウンロードして使用します。

以前は、Java Cryptography Extension（JCE）Unlimited Strength Jurisdiction Policy File バージョン 6 をダウンロードして使用する必要がありました。

PowerExchange for SAP NetWeaver

バージョン 9.6.0 では、PowerExchange for SAP NetWeaver に以下の変更があります。

SAP SDK **ライブラリ**

PowerExchange for SAP NetWeaver では、SAP NetWeaver RFC SDK 7.20 ライブラリを使用します。PowerExchange for SAP のセッションを実行するには、SAP NetWeaver RFC SDK 7.20 ライブラリをインストールする必要があります。

以前は、SAP RFC SDK クラシックライブラリをインストールしてセッションを実行していました。

SAP **設定ファイル**

sapnwrfc.ini ファイルを使用して、RFC 固有のパラメータおよび接続情報を設定できます。

以前は、saprfc.ini ファイルを使用して、RFC 固有のパラメータおよび接続情報を設定していました。

以前のバージョンからアップグレードする場合、sapnwrfc.ini ファイルを作成して、PowerCenter と SAP との間の通信を有効にする必要があります。saprfc.ini ファイルを使用して、PowerCenter と SAP との間の通信を有効にすることはできません。

詳細については、*『Informatica PowerExchange for SAP 9.6.0 PowerCenter 用ユーザーガイド』*を参照してください。

SAP **接続タイプパラメータ**

sapnwrfc.ini ファイルで SAP 接続パラメータ TYPE を使用して接続タイプを設定する必要はありません。PowerCenter Client および PowerCenter 統合サービスは、sapnwrfc.ini ファイルで定義する接続パラメータを使用して、接続タイプを推測します。

例えば、ASHOST パラメータを設定する場合、PowerCenter Client および PowerCenter 統合サービスは特定の SAP アプリケーションサーバーへの接続を作成します。MSHOST および GROUP パラメータを設

定する場合、PowerCenter Client および PowerCenter 統合サービスは、SAP 負荷分散の接続を作成します。PROGRAM_ID、GWHOST、および GWSERV パラメータを設定する場合、PowerCenter Client および PowerCenter 統合サービスは、SAP ゲートウェイで登録された RFC サーバープログラムへの接続を作成します。

以前は、接続タイプの設定にパラメータ TYPE を使用していました。例えば、TYPE=A を設定して特定のアプリケーションサーバーへの接続を作成していました。また、TYPE=B を設定して SAP 負荷分散の接続を作成し、TYPE=R を設定して SAP ゲートウェイで登録された RFC サーバープログラムへの接続を作成していました。

以前のバージョンからアップグレードする場合には、新しい sapnwrfc.ini ファイルを作成し、作成する接続のタイプに基づいて接続パラメータを設定します。

詳細については、*『Informatica PowerExchange for SAP 9.6.0 PowerCenter 用ユーザーガイド』*を参照してください。

ABAP **ストリームモードセッション**

PowerExchange for SAP NetWeaver は RFC プロトコルを使用して、ABAP プログラムをストリームモードで生成およびインストールします。

以前まで、PowerExchange for SAP NetWeaver は CPI-C プロトコルを使用して、ABAP プログラムをストリームモードで生成およびインストールしていました。

バージョン 9.6.0 では CPI-C プロトコルが非推奨となりました。Informatica は今後のリリースでサポートを停止する予定です。 CPI-C プロトコルを使用する既存の ABAP プログラムは実行できます。ただし、CPI-C プロトコルを使用する新しい ABAP プログラムを生成およびインストールすることはできません。

CPI-C プロトコルを使用する既存の ABAP プログラムをインストールすると、プログラムを上書きして RFC プロトコルを使用するようにメッセージ表示されます。Informatica では、プログラムを上書きして RFC プロトコルを使用することをお勧めします。

BAPI **マッピングと** IDoc **マッピング**

バージョン 9.6.0 では、8.5 以前のバージョンで作成済みの廃止された BAPI マッピング、および 7.1 以前のバージョンで作成済みの廃止された IDOC マッピングのサポートを終了しました。廃止されたマッピングをバージョン 9.6.0 にアップグレードした場合、セッションは失敗します。

PowerExchange for SAP NetWeaver をアップグレードし、カスタムトランスフォーメーションを使用して BAPI および IDoc マッピングを新規作成します。

PowerExchange for Twitter

バージョン 9.6.0 では、Informatica は PowerExchange for Twitter for PowerCenter を提供しません。Informatica はバージョン 9.1.0、9.5.0、および 9.5.1 に対するサポートを終了しました。バージョン 9.1.0、9.5.0、9.5.1、および hotfix バージョンからのアップグレードはできません。セッションはバージョン 9.1.0、9.5.0、9.5.1、および hotfix バージョンで失敗します。

Developer ツールにある PowerExchange for Twitter は使用できます。

詳細については、次の場所にある生産/サポート終了（EOL）に関するドキュメントを参照してください: https://mysupport.informatica.com/docs/DOC-10512。

PowerExchange for Web Services

SOAP 1.2

バージョン 9.6.0 では、各 Web サービスに SOAP 1.1 バインディングもしくは SOAP 1.2 バインディングのどちらか一方、または SOAP 1.1 と SOAP 1.2 の両方のバインディングを使用する 1 つ以上の操作を組み込むことができます。 Web サービスコンシューマトランスフォーメーションは SOAP 1.1 バインディングおよび SOAP 1.2 バインディングで作成できます。 SOAP リクエストは、SOAP 1.1 または SOAP 1.2 形式にできます。

以前は、SOAP 1.1 バインディングを使用する操作しか作成できませんでした。 Web サービスコンシューマトランスフォーメーションは SOAP 1.1 バインディングでしか作成できませんでした。

NTLMv2

バージョン 9.6.0 では、外部 Web サービスプロバイダが NTLM v1 または NTLM v2 を使用して PowerCenter 統合サービスを認証します。

以前は、外部 Web サービスプロバイダは NTLM v1 のみを使用して PowerCenter 統合サービスを認証していました。

第 33 章

Adapters for Informatica（9.6.0）の変更内容

この章では、以下の項目について説明します。

- PowerExchange for DataSift, 343 ページ
- PowerExchange for Facebook , 343 ページ
- PowerExchange for LinkedIn, 344 ページ
- PowerExchange for Salesforce , 344 ページ
- PowerExchange for SAP NetWeaver, 344 ページ
- PowerExchange for Twitter, 344 ページ
- PowerExchange for Web Content-Kapow Katalyst , 344 ページ

PowerExchange for DataSift

PowerExchange for DataSift のバージョン 9.6.0 は、Informatica 9.6.0 とともにインストールされます。

以前は、PowerExchange for DataSift に別のインストーラが使用されました。

PowerExchange for Facebook

- PowerExchange for Facebook のバージョン 9.6.0 は、Informatica 9.6.0 とともにインストールされます。
  以前は、PowerExchange for Facebook に別のインストーラが使用されました。
- バージョン 9.6.0 では、Self リソースを使用する場合、ユーザー名、およびユーザー ID またはユーザー名のリストを指定してユーザーのプロファイルを抽出することができます。
  以前は、Self リソースを使用する場合、ユーザー ID か Facebook の演算子 `me` を指定して現在のユーザーのプロファイルを抽出することしかできませんでした。
- バージョン 9.6.0 では、Profile Feed リソースを使用する場合、ユーザー名を指定してニュースフィードまたはユーザーの Facebook 投稿を抽出することができます。
  以前は、Profile Feed リソースを使用する場合、ユーザー ID か Facebook の演算子 `me` を指定して現在のユーザーのニュースフィードを抽出することしかできませんでした。

PowerExchange for LinkedIn

PowerExchange for LinkedIn のバージョン 9.6.0 は、Informatica 9.6.0 とともにインストールされます。

以前は、PowerExchange for LinkedIn に別のインストーラが使用されました。

PowerExchange for Salesforce

PowerExchange for Salesforce のバージョン 9.6.0 は、Informatica 9.6.0 とともにインストールされます。

以前は、PowerExchange for Salesforce に別のインストーラが使用されました。

PowerExchange for SAP NetWeaver

バージョン 9.6.0 では、PowerExchange for SAP NetWeaver で SAP NetWeaver RFC SDK 7.20 ライブラリが使用されます。 PowerExchange for SAP のセッションを実行するには、SAP NetWeaver RFC SDK 7.20 ライブラリをインストールする必要があります。

以前は、SAP RFC SDK クラシックライブラリをインストールしてセッションを実行していました。

PowerExchange for Twitter

- バージョン 9.6.0 では、Twitter ストリーミング接続の作成中に基本認証を使用できません。
  以前は、Twitter ストリーミング接続の作成中に基本認証を使用できました。
- PowerExchange for Twitter のバージョン 9.6.0 は、Informatica 9.6.0 とともにインストールされます。
  以前は、PowerExchange for Twitter に別のインストーラが使用されました。

PowerExchange for Web Content-Kapow Katalyst

PowerExchange for Web Content-Kapow Katalyst のバージョン 9.6.0 は、Informatica 9.6.0 とともにインストールされます。

以前は、PowerExchange for Web Content-Kapow Katalyst に別のインストーラが使用されました。